
第五篇

尾崎紅葉著

紅葉全集

十千萬堂藏版



明治三十四年の紅葉山人

紅葉全集 卷之五

目次

目次（二）

目次終



多情多恨

前編

（一）

鷲見柳之助は其妻を亡つてはや二七日になる。去る者は日に疎しであるが、彼は此十四日をば未だ昨日のやうに想つてゐる、時としては、今朝のやうに、唯の今のやうにも想ふ。餘り思ひ窮めては、未だ生きてゐるやうにも想つてゐる。なるほど病の爲に敢無くはなつた、氷のやうに冷えて、美しい目も固く瞑いだ、棺へも歛めたれば、葬送も

出した、谷中の土に埋めて、榡の位牌になつて了つて、現在此に在るからは、假でもなければ、夢でもなく、確に死ぬだに極つてゐる。如何にも其軀は葬られて、其形は滅したに疑ひは無いが、彼の胸の内には、その可愛い可愛い妻の類子は顯然と生きてゐるのである。

柳之助は多く人を好かぬ、代には又多く人に好かれぬ性で、男では朋友の葉山誠哉、女では妻の類子、此二人の外には世界に柳之助の好いたものは無い。彼は多くの人を好く代に、唯此二人を好いたのであるから、その情の篤いことは夥しいもので、實に見苦しいほど其妻には惚れてゐた。

一も妻、二も妻、三も四も五も類で無くては、柳之助の夜は明けなかつた。彼の同僚は（妻が）先生と仇名を付けたほどで、妻は彼の命であつたものを、彼は今その妻に死なれたのである。

然までに可愛がられた、大事がられた彼の妻は、決して然までに夫を思

はなかつた。謂はゞ通一遍であつたけれども、柳之助は少しも不足に思はぬのみか、それが女子の性と信じてゐたのである。

例の同僚は嗤つた、鷲見は全力を擧げて其妻に惚れてゐるのだと。其通り、（全力を擧げて）とは嘲弄でない、適評であつた、適評ではない、事實であつた。

彼は今其妻に死別れた。則ち彼は第二の生命を奪れたのである。一日生家へ行つて見えなくても、直に顏色を惡くして鬱ぐほどの愛著は、一週間經てど、十日經てど、乃至は一月、一箇年、十年が百年經たうとも、到底二度とは其姿を見られぬに極つた失望を忍ぶには餘る。さては是非も前後も、分別も用捨も何も無く、一圖の悲歎に沈むで、泣くと悔むの外は殆ど世をも人をも身をも忘れた。我是ない子供のやうに、（お前は何故死んだ。死ぬことはならん。死ぬといふ法は無い。）と、死顏の被を取つては、棺の前に坐つては、墓標を搖つては、位牌を眺めては、寫眞を

取出しては、聲こそ立てぬが、心の中では悶え〲て絶叫した。悔むで復らぬ事、悲むで復らぬ事ぐらゐは、柳之助も知つてゐる。復らぬ事を復さう爲に泣きも悔みもするのではないが、或點まで泣き且悔むだらば、隨分復る事との信仰を以て、泣きも悔みもするのではあるまいか、と想はるゝほど柳之助は取亂したのである。

その狂哀も漸く失めて、今は眞摯に其死を悲む涙が催して來る。諦められぬ、諦められぬ、諦められぬが、定命と諦めねばならぬ――諦めて見た。諦めては見たものゝ、一旦生死の手を分つたからは、類は二度と再び此世には歸らぬ人、これから長い〲一生涯もう逢はれぬ、となつて見ると、その心細さ、味氣無さは居ても起つても堪へられぬ。此二三日は全く生効の無い體になつて、唯二件の事を思窮めてばかりゐる。

一つは、可愛い可愛い妻の生前の事。二つには、此先何を樂に生きてゐやうと云ふ事、此の二件が渦になつて、間斷無しに柳之助の胸の内を回

轉志てゐる。甚麼に考へたところが、此先の樂は無い、ばかりか、現在今日生きてゐる空も無いのである、と云つて、豈死なれもせぬ、と云つて、憖ひ生殘つて物を思ふも愁い。思ふまいと志ても、忘れやうと志ても、寐れば夢を見る、起きてゐれば、唯其事が紛々と胸に集る。

「吁、酒でも飲まう！」

と柳之助は憤れたさうに目を瞑つて首を掉つたが、直に置火燵から身を伸して、床の間の喚鈴を鳴したまゝ、内向に手枕を志て了ふ。徐に階子を踏むで、物柔さうな四十恰好の婢が昇つて來て、

「御用でございますか。」

と座敷の紙門を啓けると、柳之助は俯いたまゝて、

「酒を一つ買つて來てくれ。」

その力無げに仆れてゐる躰を老婢は怪むで、

「どうぞ爲さいましたか。」

と體を差入れる。

「可いから早く買つて來て。」　と彼はなほ顔を擧げぬ。

「はい、はい。麥酒ならお內にございますが、やつぱり御酒の方が宜うございますか。」

「麥酒でも管はん、早く持つて來てくれ。」

老婢は慌忙しく下りて行く。その跫音と倶に一陣の風は颼と梢を鳴して、吹懸くる時雨に北窓の障子は氣立ましい音をたて倏忽瀼々濡になるのを、柳之助は纔に首を擧げて見たが、又俯いて了ふ。

空は一面に微晦くなつて、雨は一時劇しく降出す。襟元から肅々と惡寒くなるのに、火燵の火さへ消えかゝるので、横になつてもゐられず、物臭さうに起上つて、急に黯くなつた家の內を、何と云ふ事は無しに惘然眗してゐる。爾時老婢は蠟色の圓盆に、鉢に鷄子を三つ容れて、醬油注に小皿、小蓋物に箸箱、コップ等を載せて、片手には櫻田麥酒の栓を拔

いたのを挈げて入つて來る。
「御火燵にお火はございますか。何だか又寒くなつて參りました。」
「あゝ、火を少し貰はうか。」
と其處に置いた盆を引寄せて、コップを把ると、恐多さうに老婢の酌をするのを、何と思つたか一寸見て柳之助は直に横を向く。それを見付けると、老婢は忽ち點々と涙を零した。柳之助は又其を見るとコップを措つたまゝ俯いて、滴々と涙を落す。老婢は壜を下に置くと、袂から鼻紙を出して頻に泣き始めた。
柳之助はコップに半分ばかりを一息に嚼了けて
「元、寂しいな。」　と故と元氣好く言懸ければ、
「御尤でございます。」　と元は益泣く。
此挨拶では不足らしく、
「あゝ、寂しいよ、寂しくて可かん。」

と重ねて訴へたが、急來る涙を防がう爲に、餘れる酒を又一息に叩と飲むで、

「もう一盃。」

此酌に就いて彼は考へたのである。お茶一つ上るのでも、奥樣の御手からでなくば御承知の無かつた旦那樣が、元のお酌で上るのみか、注げと有仰る。嗚呼御傷しい。例ならば(類さん)を呼べと有仰るのであるけれど、その奥樣は御在なさらない。お寂しいとは御尤だ、と老の涙さいとど脆かつたが、やがて忙しく目を拭いて、洟を去むで、もう泣くまいと覺悟したやうに紙を袂に入れて了つて、

「それに今日は姻家の奥樣も御歸になつたものですから、急に猶の事お寂しうございます。」

と、盃の物を安排して、鷄子を割つて其へ出しながら、

「何も御肴がございませんので。本當は御精進なのでございますけれど、

姻家の奥様が其には及ばないと有仰つて、此間から旦那様だけには御魚や肉を差上げて居りますのですから、お鷄子も宜うございませう。」
「あゝ、それぢや何か、姻家の家母様やお前は精進なのか。」
「はい。」　と老婢は又少し萎れる。
「然うか。」　と頭を掻いて、
「些とも氣が着かなんだ。」
「いゝえ、旦那様はお宜うございます。」
「いや、俺も其ぢや精進にしやう。」
「然やうでござりますか。それはまあ何方かと申せば、御精進の方が、」
「佛の爲だな。」
「然やうでございますとも。」
と其可憐さに老婢は又涙を誘はれる。
「唉、もう佛に成つて了つた！」

耐りかねて柳之助は水でも飲むやうに一盃の麦酒を盡して、ほうと息を吐く。老婢は起つて、火を持つて來て見ると、柳之助は目を閉ぢて、壁に靠れて、少しは醉つたやうな、多くは物を思ふやうな態で、耆然としてゐる。

元は火燵の始末をして、盃などを片寄せて、起たうとすると、主は弗と目を開いて、

「何時かな。」

その倚つてゐる壁に時計の掛けてあるのを老婢は見て、

「四時七分前でございます。」

「これから一寸墓詣に行つて來やうかな。」

と柳之助は障子の硝子越に外面を眺める。元は有繫に驚いた。如何な事でも一日に二度も墓詣をするものがあらうか。今日は二七日であるから、朝の内に谷中まで詣つて來たばかりである。それも近い所では無し、ま

して雨は降る、日は暮れる、これから如何なさらうと云ふのか、と其氣色をば窺つたが、隨分出掛もしさうな樣子。

柳之助の身になつたらば、懷しい〳〵遺骸の眠つてゐる所は、目に見えぬ魂魄の猶留る屋棟の下よりは、追慕の渴を醫するに疑無い。彼の墓詣をせうと云ふのは、生きてゐる人を尋ねると同じ意で、戀しさに堪へかねたればこそである。

恁う考へたらば、別に不思議は無い。老婢も然うとは考へたのであるが、極めて不思議に思つた、或は變に思つた、些と氣が如何かしたのではあるまいかと思つた、然う思ふと、何と無く可恐いやうな、心細いやうな、途方に晦れたが、左も右も留めるより外に法は無いと思案して、

「もう今日はお遲うございますから、明朝になさいまし。」

「遲くても可いさ。」

「それでも、今朝もう一度御詣をなすつたのぢやございませんか。那麼

に一時に幾度も行らつしやらなくつても、日に一度づゝで繁々の方が、却つて佛樣は御喜びでございますよ。」

「然うかな。」と柳之助は、稍折れる。

「これから御詣をなさいます代に、御佛前へいらしつて、御線香を多度お供げ遊ばしましな。」

子供が言聞かされたやうに、柳之助は悄々と頷いた。墓詣は思止つた樣子に、老婢は胸を安むじて、

「私も御回向を致しますから、いらつしやいまし。」

日暮に薄る空模樣は雨の爲にいとゞ晦くなつて、製造場の汽笛が曇つた聲で泣くやうに聞える。彼は曳入れられるやうに寂寥を感じて、噫今夜も此寒い、陰氣な二階に燈火と相對で居なければならぬか。居られるものではないと思ふと、柳之助は我知らず衝と起つた。

起つた所で何所へ行くのである？　此が自分の住居であれば、何所へ行

つたとて、(類さん)は居ない。我家であれば、依然此に居るのだ、と座敷中を眗したが、如何しても居る氣が無い。起つて見ると、もう坐る氣も出ぬ。

例ならばランプを持つて昇つて來る時分だ。晩飯の支度をするので、元と呼ぶ聲が聞える時分だ。ランプを持つて來ぬ、元と呼ぶ聲もせぬ、吁寂しい、寂しい。と柳之助は堪へかねて、二間の座敷を往來してゐたが、其でも堪へかねて、竟に階子を下りた。

「元、元！」

と呼びながら玄關の方へ出る。老婢は臺所から駈けて來ると、

「傘を出してくれ。」

と言つたばかりで、焦躁しながら考事をしてゐる眼色。元は前垂で濡手を拭き〳〵、

「何方へ行らつしやいます。」

と其舉動を見てゐる。

「一寸其所まで。」　と極めて胡亂に答へる。

「御出掛でございますか。唯今お線香を供げると有仰いましたのに、急に如何爲すつたのでございます。」

恨めしさうに元に視られて、少し面目無かつたか、

「やつぱり一寸行つて來る、どうも氣が濟まんから。」

「御墓詣でございますか。」

柳之助は唯頷いて座敷の内を例の運動してゐる、心では此墓參を異變なものと思ひながら、氣が濟まぬゆゑに行つても見たいのを、如何したものであらうと分別しかねてゐるらしく。

老婢は彌々氣味惡く思つて、之は飽くまでも出しては好くないと、氣に障らぬやうに種々と留めた。留められて見ると、有繫に其に理があるので、振捥つてまでも出やうとは爲ぬけれども、又滿足して思止ることも

出来ぬので、益烈しく座敷中を往きつ還りつしてゐる。

(二)

此時格子の外に人力車が駐つたので、柳之助は慌てゝ玄關に駈出ると、美しい蠟塗の車は軶を支いて、氣凛と雨具に身を固めた車夫が背面になつて、前桐油を外してゐる。

車の音を聞いた時に、柳之助は不圖類さんが生家から歸つて來たのかと想つた。そこで駈出したのであるが、車を見ると、然で無いのを覺つた。見覺えのある此車は友人の葉山誠哉。

あゝ、葉山が來てくれた、と嬉しいやうな、賴しいやうな、それにも胸が逼つて、又涙が出る。

「おや、葉山樣が入らつしやいました。好い所へまあ。」

と老婢は頻に喜ぶ。

葉山は霜降の厚羅紗の外套を着て、全然と頭巾を被つて、小豆色の爪革

を掛けた新しい足駄て、細骨の蛇の目を挈げながら、
「あゝ酷い降だ。」　と急いで格子の内に入る。
「此御天氣に好くまあ。」
と老婢は急遽起ちかゝつて外套を脱がせる。柳之助は懵然した顏の、氣の無い聲で、
「さあ上りたまへ。」
客と主は連立つて二階へ通る。迹には老婢が車夫に向つて頻に愛相を言ふのが聞えた。
葉山は座敷へ入ると直に、
「おや、麥酒かい、洒落てゐるぢやないか。豪氣だね、火燵は。」
と衝と入つて、
「あゝ寒い、寒い。」　と肩を搖る。
性來の無愛相が、憂に心を奪はれてゐるのであるから、柳之助の樣子と

云ふものは、無い！　可厭な奴が來たと謂はぬばかりである。けれども心の中はなか〳〵嬉しいので、

「此方へ來たまへな。」

と壁際の自分の席を指すと、

「何有、此で可い、其代一盃戴らうか。今日は御見舞に來たのだ、然う然う、持つて來たものがあつた。」

葉山は手を鳴して、

「車の中の包を。」　と老婢に命じた。

元れやがて定紋付の萌黄絹の袱紗包と、重筥らしい包とを持つて來て、葉山の前に差置いて起たうとするのを、

「一寸待つて下さい。」　と袱紗の包を解いて、

「之を御佛前へ。」

西洋林檎を一籠と蒸菓子が一折、鳩居堂の線香を一箱添へて、蒔繪の盆

に載せたまゝ其へ出す。

「おやまあ、御見事な、まあ。」

と元は急に手も出さずに眺めてゐたが、

「旦那様、御覧遊ばせまし。」

と其方へ差向ければ、柳之助は頷いたばかり。物馴れた老婢は主人に成代つて百方禮を述べて、

「どれ、御覧に入れて参りませう。」

と起ちかければ、

「それから未だお重だ。これは御菜です。何か旨い物を持つて來やうと思つたけれど、此際の事だから遠慮をして、椎茸、干瓢の類さ。尤も代物は精進だけれど、少しは陰に如何様がしてあるかも知れませんよ。」

と笑ひながら包ごと元の方に推遣る。

「それは、まあ何から何まで、難有う存じます。お蔭様で私も大助りで

ございます。旦那様、又お重を戴きました。」

「それは難有う。」

と柳之助はやう〳〵禮を言ふ。

葉山は手焙を引寄せて、葉卷の細卷を吃しながら、柳之助の又思出してか、俯いてゐるのをしろ〳〵と視て、何と慰めたものであらうと思案をしてゐると、柳之助は左の袂から手巾を一握出した。而して隅の方へ投遣ると、其が三つになつて轉がる。今度は右から又二つ引張出した。それをも投出して了つて、袖で目を擦る。

葉山は、驚いて見てゐたが、

「何だ、あの手巾は？」

「どうも涙が出て困る。」

「那は悉皆濡れてゐるのかい。なるほど瞼が腫太くなつて、太く目が赤いと思つた。さあ之を貸さう。」　と綾絹の白の手巾を火燵の上に出せ

ば、芬と香水が匂ふ。
「好い香がするね。妻が能く言つたつけ、君が來ると好い香がするつて。」
「否味だと言つたのだらう。」
「君も知つとるけれど、妻は決して惡口を言はんかつたよ。特に君に對しちや、何だ、非常に信用して居つたから。」
生前でさへ妻の事を說く柳之助である、まして今日では、其噂を始めたら底止はあるまい。其は可いが、餘り思はせて泣かせるのは健康の爲に好くない、故に慰藉に來たのと思へば、葉山は故と話頭を轉じて
「時に。」と言出した。
柳之助の胸の內は、はや妻の事に就いて萬感が滿ちてゐるので、何から話出して可いやら、それにのみ氣を奪られて、他の言は耳にも入らぬ。
「實に恁云ふ時に妻が居つたら御馳走をするのだけれど、居らん、妻は居らん。」

と好い香のする手巾を把つて、柳之助はさしぐむ涙を拭ふ。
「然しね。」　と葉山は又言出すと、
「然し、居らんやうな心地はせんよ、死んだとは思はれんよ。」
「それは尤だ。然し………。」
「何故死んだかと思ふと、妻は實際僕を愛して居らんかつたかと思ふよ。」
「那麼無理な事があるものか。」
「あゝ、それは無理かも知れぬ、無理だらう、無理だつた、全く無理だつた。」
彼は最愛の妻の氣に障つた事を不圖言つた。その不機嫌を見て、遽に執成すやうに、詫でもするやうに、頻に斷つた、固より無理などを言ふ意ではなかつた、思餘つて不知口走つたのであるが、無理と尤められて見れば、無理であると心着いたので。すると、(類さん)の艴然とした面影が胸に浮むだのである。最愛の妻の面影は始終眼前には隱顯てゐるが、

それが忽ち不興の眼色を爲て怨めしさうに視たのである。

柳之助は濟まぬと思つた、無理である、と頻に詫びた。けれども心が落着かぬ、即ち幻の面影は其色を釋かぬのである。耐りかねて柳之助は、

「妻はね、妻は……、」

と言出したが、さて何と言つたものやら、有繫に惑つたのである。

「妻は君も能く言つたけれど、非常に客を喜んでね、僕とは違つて愛相が好かつた。」

とは言つたが、是では未だ其不興を釋くには足らぬと思つた。然し早速に言ふべき事が出なかつたので、姑く考へてゐたが、何を思出したか又涙ぐむで了ふ。

「時に、君は學校の方は如何爲た？」

と葉山は持扱つてゐた（時に）をやう／＼用立てる。

「學校？　學校なんぞは管はん、もう否だ。」

苦い顏をして柳之助は頭を掉る。

鷲見柳之助は大學の地質學專科を卒業して、今は東京物理學院の教授を勉めてゐるのであるが、謹勉であり、懇切であり、而も十分に實力のある所から、學院の氣承も生徒の信用も極めて好い、慾には試驗の點が少し辛いと云ふ噂の外に、此人に對する非難の聲は全く無い。學院では實に難有い大事の人になつてゐるのである。

「管はぬたつて、然うは行かないぢやないか、自分の職業ぢやないかこ

餘り長く退いてゐたら、學校の方で差支へるだらう。」

「差支へても管はん。」

「那麼自棄を言つちや困るね。もう少し休むだら出る方が可いよ、獨で引籠つて居るよりは却つて氣が霽れるから。」

「唉もう何を爲るのも否だ、何も出來は爲んよ。實際僕は生きとる樂が無いのだ。生きて居らうとは思はんよ。」

葉山は手酌の麥酒を一口飲むて、
「困つたもんだ。」
と櫓の上へどつさりと靠れる。
「僕は實に寂しくて可かん。君、それは實に寂しいものだよ。それに這麼雨の降る日などは、如何しやうかと思ふやうだ。何所へ行つても家中線香の氣がして、其が實に耐らんね。恁云ふ心地で一月も居つたら僕は屹と病氣をする、病氣をしても看病する者は無し、慰めてくれる者は無し、一日だつて僕は寐てゐられやせん。設然うなつたら如何せうかと思ふと、實に心細い。今でさへ這麼心地なのだから、あゝ否だ、否だ！」
惣毛竪つたやうに柳之助は身顫ひをする。
「那麼事まで考へた日には際限が無い。どうも今更爲方も無い、何も天命と思切るより外は無いのだ。」
「僕は到底思切れんよ。」

「思切れんと云つたつて…………。」
「だつて、思切れんぢやないか、僕の身になつて見給へな。君は殘酷だ。」
「殘酷は過いね。君が何程思切れないと云つた所で、お類さん樣が生返るぢやなからう。」
「ぢや思切つたら生返るか。」
と柳之助は急立つた氣色。
「又那麼無理を言ふよ。君の心は十分察してゐるわね。けれども哀むで傷らずだよ。君は細君の爲に體を毀しても苦しくないのだね。」
返答に窮へてゐる間に葉山はコップの酒を飲盡して、更に一盃を注がうとすると、半分よりは無い。
「麥酒はもう無いかい。」
「無けりや買はう。」
と喚鈴を鳴して元に聞けば、幾許もあると、又一本口を拔いて來る。

「まあ一盃飲むて、もう那麼話は止さうよ。」
と葉山は一つ差した。
「他の話より此話が可いのだから、もつと爲てくれ給へ。」
「可けないよ。始終考へては鬱いでゐる所へ持つて來て、又其話をしたら愈泣かせるのだ。不吉な話は止さう。」
「不吉とは？　君…………。」
柳之助は口へ持つて行つたコップを控へて、屹となる。
「いや、惡かつた。私は今日は君が獨で寂しからうと思つて、見舞に來たのだ。然し一々言ふ事が君の感情を害すやうで、誠に濟まない。御迷惑だらうから私は是で御暇をする。」
身繕をして、葉山は起たうとする、其袖を柳之助は緊と捉へた。
「あゝ、惡かつた、僕が惡かつた。言過ぎたよ、免してくれ給へ。實際不吉に違無いのだ。」

苦に柳之助は詫びる。

「それぢや然云ふ話は止すかい。」

と未だ立膝をして羽織の紐を正してゐる。

「止す、止す。」

と片手に葉山の袂を捉へながら、慌てゝコップを空けて、

「さあ一盃、一盃飲むでくれたまへ。」と突付ける。

此子供らしい所が葉山の柳之助に惚れてゐる所で。彼が他の思はくをも管はず、直に（妻が）と言ふのも、不吉と言はれて、今腹を立つたのも、皆此子供らしさからである。

「那麼話は止すと云ふなら。」

と恩がましくコップを受けて葉山は又火燵に入る。

「まあ居てくれたまへ。君に往かれて了ふと僕は孤獨だ。」

盃を差して置きながら、酌をするのは忘れて、蒲團に顏を抑付けて加之

助は又鬱ぎ出す。
憖ひ合手になつてゐたら、彌々思出させるばかりと、葉山は不如儀弄して了ふ氣で、

「おい御酌は？」

「や、忘れた。」

と慌忙しく壜を取つて注ぐと、たらりと一雫ほど。兩個は思はず顔を見合せる。

「何だな、壜が違つてゐるよ。」

柳之助は濟したもので壜を替へて酌をする。滾々と出る酒を見ながら葉山は少しく笑を帶びて、

「有る酒ならば恁うして出る、ねえ鷲見。」

と泡を噴く酒と柳之助の顔とを等分に見較べる。妙な事を言ふと思つて、柳之助はおのれの手元を見い〳〵葉山の顔を眺める。

「ねえ、無い酒は出ない、君は酒の無い壜で酌をすることは出來ないと云ふ事を知つてゐるぢやないか。」

「それが…………？」

と柳之助は怪訝な顔をする。

「それがさ、無い酒も、亡い人も同じ事だらう。だから、餘り然う怏々思はないが可いと云ふのさ。」と一口附けて、

「肴をくれたまへな、その鷄子を。君が手づから割つてくれるのさ。」

一個取つて皿の緣へ抵てやうとして、柳之助は一寸控へた。

「何を考へてゐるのだ。」

「僕は今日から精進なんだからな。」

「君は精進でも、私が戴くのだから可からう。然し精進は解つたが、今日からとは解せないね、今日からとは如何いふ理だ。」

「もう可いよ、可いよ。」

と一思に劈然と皿の縁へ打着ける。
「然うだ、然うだ。下地を注けて、あつ、那麼に注けて……如何するのだ。さあ〳〵此方へ貸した。鷄子をもう一個……辛さうだから塡めるのさ。それから盃を、後が箸だ。」
葉山は之を櫓の上で好いやうに鹽梅するのを、凝然と視てゐたが、
「君は好いな、一寸那麼事も上手にやる。僕は全く出來んのだ。悉皆妻にゐてもらつとつたのだ。その妻がもう居らんのだ。吁、困つたなあ。」
口頭に出したのは纔に如此耳であるが、胸の中には千萬無量の思が紛亂ゐたので、彼は蒲團に顏を推着け、擦着けて悶えた。
葉山は餘りの樣子に手を着けかねて、姑く默つて視てゐると、柳之助は急に顏を擧得なかつた。いつまでも視てゐれば、いつまでも擧げぬので、
「其話は止すと云つたぢやないか。」
それでも柳之助は仍顏を擧げぬ。

「さあ、もう好加減にしないかよ。」

と肩先を輕く拊けば、やう／＼擧げた顏は、洗つたやうに涙に浸されてゐる。

「如何かならんかな。僕はもう耐らん、不愉快で。這麼不愉快な事は無い。如何しても慰められん不愉快だ。僕は今迄は甚麼不愉快な事があつても、妻の爲に慰められたのだ。僕は其妻を亡つて了つた。今朝墓詣をしたのだ。實に、君、夢だね、赤土の土饅頭に一本の墓標が立つとるばかりで、雨が寂しく降つとるのだ。君、之を見てくれたまへ。」

例の絹の手巾で半面を掩へながら、柳之助は本箱の上にある雲州燒の小さな瓢形の一輪挿を指す。葉山は見た。染垂れた山茶花の半開が一輪横向になつて挿してある。

「君、是だよ。」

と柳之助は火燵から這出て、横向になつてゐるのを正面に正さうとした

が、枝が曲つてゐるので、如何しても外方へ振つて了ふ。花入の方でやうやう鹽梅をして此方を向かせて、

「この山茶花だよ、好いだらう。」

何が好いのだか、葉山には少しも解らぬ。

「君、好いだらう、好いと言つてやつてくれ給へ。」

「又思出したのかい。」

困り果てた所爲事無しに葉山は麥酒を飲む。

「妻は一躰賑かなのが好きだつたに、寂しい森の中で雨に降られて、唯一人埋まつとるぢやないか。僕は實に胸が一杯になつて如何することも出來んかつた。而すると、姻家の母がね、此花を見付けて僕に敎へたのだ。垣の隅を見ると、此花が唯一朶咲いとるのだね、君、其木に唯一朶なのだよ。母が言ふには、是は類の魂だ。類の思が遺つて花になつて咲いたのだ。類の大好の長襦袢には山茶花の模樣が着いとつたから、是は

類の魂に違無い、と言つて泣くのだ。僕も見ると、丁度此方を向いて此花が咲いとるのだ。變な事を言ふやうだけれど、其時は此花が實際類の顏に見えたよ。風が來て動くのだ、類が藥を飲むのは否だと言つてね、首を掉つたやうだつた。僕は其時は妻が復活つたのかと想つた。考へて見れば妻は僕等の脚の下に埋まつとるのだ、是は山茶花なのだ。妻の母は紙を出して、泣きながら此花を拭いとるのだ。何を爲るのかと聞いたら、君、親子だね…………。」

柳之助は咽返つて語が續かぬ。葉山は茫然酒を飲むでゐる。

「母親の言ふには、雨が灑つて冷たさうだから、少し拭いてやる、と君、自分の濡れるのも知らずに熱心に拭いてやつとるぢやないか。而して此花を全然鼻紙で褢むで了つた。那麼事をするものだから僕は猶悲しい、這麼所に獨て置くのは可哀さうだから、内へ持つて行かうと言ふと、それぢや一所に連れて行つてくれつてね、折つて僕に渡したのだ。君、此

花だよ、あゝ、君の方を向いとるよ。」
柳之助は壁に頭を推當てゝ泣出した。餘り愚痴とは思ひながら、浸々哀に搔口說かれて、葉山も誘はれ氣味の稍胸逼る。
「もう言はないが可い、いつまで言つたつて所爲が無い。」
と鼻聲になつて顏を撫廻す。
「言はしてくれたまへ。言はずに思つとるのはなほ不愉快だ。言つとれば多少氣が霽れるから。」
「それぢや此方が窮るよ。」
「君は窮つたつて、僕が窮つとるほど窮りはすまい。」
と柳之助は涙を拂つて問懸ける。
「然うどうも理窟を言はれちや困るね。」
「然し、君は僕が這麼に思つとるのに、少しも僕を可哀だと思つてくれんのだ。君は平氣でをるのだ。妻は君を兄のやうに思つとつたのに、君

は類が亡くなつても、悲しいとも何とも思つてくれんのだ。君は然云ふ不實な人物とは思はんだつた。類の爲に眞實泣くものは、類の母親と僕と二人限だ。君は類の死んだのを悲しいと思つてくれんかね、僕は悲しい、這麼悲しいことは覺えない。」

柳之助は潸々と泣く。其躰は如何にも可哀であるが、葉山は寧ろ首を傾けた。ちと逆上てゐるのではあるまいかと考へると、誘はれた涙は遏つて、葉山は慄然としたのである。

「それぢや如何すれば可いのさ。もう其話は止すと言つたから、私は歸るのを又居たのだ。然すりや又其話を始めて、擧句の果は私を攻撃するのだ。惡いことは言はない、然う思徹めてばかり居ては體が耐らないから、努めて氣の紛れるやうに工夫をしたまへ。第一内にばかり引込むでゐるのが好くない、些と出掛けたまへ。」

「それが既に不實だ。死んだものは爲方が無いから、忘れて了へ、思ふな

と云ふのは、殘酷ぢやないか。僕は死んだから思ふのだ。思つたから如何なる、泣いたから如何なると、那麼卑劣な、目的などを有つとる理のものぢやない。君は僕より年長だし、經驗にも富むどるし、世間にも通じとるから、僕の考へてゐる所は或は僻してをるだらう、君の社會的の目から見たら宛然子供だらう。君の言ふ所は世間の行ふ所なのだらう。君は世間を以て僕を責めるのだ。僕は世間は、知らん、けれども幸ひに僕の心には世間と云ふものに曇らせられん一片の誠がある。其誠がある爲に僕は忘れられんのだ。からして忘れられんのは、決して愧づべき事ではないと思ふ。」

「誰も愧づべき事だとも何とも言ひは爲ないよ。」

「言はんけれど君は愧づる方だらう。」

「え丶、もう、何方でも宜しきやうに願ひませう。」

と言つた限で、其後は柳之助が何と言はうが、見向もせずに、くびりく

びりと獨飮むでゐる。柳之助えはつと思つて、
「君、腹を立つたのか。」
葉山は昂然として、
「あゝ腹を立つたよ。」
「僕は言過ぎたかね。」
「あゝ言過ぎたよ。」
「免してくれ給へ、ねえ。」
彼は無雑作に例の子供のやうに過を悔ゆる。
「宜い、君は僕を不實だと言ひました。」
「だから言過ぎたと言つて謝るのだ、免してくれ給へ。」
「君は成程細君は可愛いけれど、朋友などの事は何とも思はないのだね。
宜い、解つた。」
「那麼事があるものか、那麼事は無い。」

「それなら朋友の言ふ事も用ゐたが可いぢやないか。」
「無論用ゐるさ。」
「用ゐるね。屹度用ゐるね。」
餘り念を推れるので、如何なる事かと柳之助は覺束なく思ひながら、
「用ゐる、用ゐる。」
と言ひは言つたが、さて何を言はれるか、と氣遣はしげに葉山の顏を視てゐる。
「外の事でもないがね、内にばかり引込むでゐるのは好くないから、本當にちと出掛けたまへ。」
「何所へ？」
「まづ學校へ行くのは一番好いが…………。」
「未だ腦が亂れとるから、それは可かんよ。」
「それでは、僕の家へ來たまへ、遊びに來るのだ。御馳走するよ。出掛

けた方が氣が霽れて甚麽に好いか知れやしない。氣も進まなからうけれど、まあ瞞されたと思つて來て見給へよ。屹と來るかい、宜いかい、來るね。」

柳之助は熟と思案してゐる。

「如何したのさ。別に考へるほどの事は無からうぢやないか。内に引込むでゐるよりは氣が霽れるよ。明日は休日で、私も一日内に居るから、朝から來たまへ。何を那麽に考へてゐるのだらう。」

太く考へてゐるのが葉山には解らなかつた。尤も何事にも直に考へるのが此人の癖ではあるが、己の信ずる唯一人の葉山の言ふ事は、常に自分の了簡よりも信ずるほどであるから、葉山が右といへば右、左といへば左、つい應と言はぬことは無いのである。今日に限つて、何故か考へるにも當らぬ事を太く考へる。なるほど葉山には解らなかつた。

けれども、是は仔細も無い事で、例の細君の死を悲む餘、何を爲るのも

氣が無いので、外へも出たくはないのであらう、と恁う判じたから、猶更勸めて、否應無しに引出さうと考へたのである。

利發の葉山も是ばかりは踏違へてゐた。なるほど柳之助は何を爲るのも憂いのである。外へ出る氣も無いのである。然し、彼はその最愛の妻を亡つた、女に於ける唯一人の所好を無くしたのであれば、此上は其心を慰むるには、男に於ける唯一人の所好を恃まねばならぬ、その葉山が深切に云ふ事をば、如何にしても背かう道理が無い。葉山が強ひて言ふならば、隨分學校へも出るのである。掃憂とならば葉山と連立つて何所へでも行くのである。

然し、葉山の家へばかりは、柳之助の思案をする理がある。それは自分と地下の類との外に知るものは無い。さすがの葉山も之を知らぬ。知らぬのではない、知らせぬのである。知らせぬのではない、知らせることが出來ぬのである。知られては一大事なのである。

我家へ來いと切に勸めらるゝのは、恰も此知られては一大事と衝突したので、何事にも直に考へる柳之助には、此際太く考へねばならぬのである。と云ふのは、柳之助は葉山の內眷が大の嫌で、彼は固より多數の人を虫が好かぬその中でも、最も好いてゐる人の妻を最も好かぬのである。其好かぬと云ふに就ては、何等の原因も理由も無い、其所が所謂虫が好かぬので。自分の兄とも賴む人の內眷、其を好かねではならぬ、と柳之助は常に考へる。それで、先方から己を疎みでもするのかと云へば、氣も無い、葉山同樣に實を盡してくれる。其人をば何故に自分は嫌ふのか、と柳之助は始終心に訊ねて見るが、一向理窟は無い。

葉山の內眷と云ふのは、美人ではないが、目鼻立の揃つた、色白の身材の纖削とした、閑雅な、奧樣らしい樣子の人物。若し其短所を擧げたらば、少し寂しくて、無人相で、何を爲るにも極めて不熱心のやうに見える。然かと云つて、萬更義務でしてゐるとも見えぬが、進むで爲てゐる

とは猶のこと見えぬ。萬事が機械的で、韵致といふものが無い。恰も其容貌の整つてゐながら何の趣も無いのと、能く一致してゐる。那云ふ女と能く添つて居られたものだ、と柳之助は常に思ふ。別して、(むづかしや)の葉山が能く彼で滿足をしてゐると、其も亦一件の不審にしてゐる。

凡そ女子と云ふものは、柔に溫であるべきものである、(類さん)は十分柔に溫であつた、と彼は信じてゐる。然るに葉山のお種樣は蠟石細工のやうに、硬くて冷たい。自分の最も好いてゐる者と正反對である爲に、虫が好かぬのであるか、と柳之助は考へもした。

葉山には所謂焦れてゐるほどであるから、毎日でも逢ひたいのである。お種樣を見なければならぬのが否さに、控へに控へて、三度行く所も一度にしてゐる。それでも一週に二度は缺かさず尋ねて行く。其通り隨分足が近いから、氣の着く葉山でも此內秘ばかりは知らずにゐる。

妻には限らず兩箇の居る所に他が來ると、氣先を折られたやうな調子で、柳之助は必ず悄るので、自分と（類さん）との外には打解けたことの無い男であるから、自分の外は內眷にも氣を置くものと葉山は考へて、可成妻をも近けぬやうにしてゐる。

折々お種樣が少し親くしかけると悄る。嫌であるから悄るのであるが、葉山は然うとは知らぬから、此男の癖で、我妻も此人には他人であると諦めて、格別尤めもせぬのであるが、奚んぞ知らむ、多くの他人よりも此お種樣を彼は一倍好かぬのである。

常ならば柳之助も言はるゝまゝに出掛けるのである。今は此悲哀愁歎の心を枉げて、虫の好かぬ人の所へ行かうとは思はなかつた。けれども葉山は常より熱心に誘ふ。因で柳之助は思案に晦れたのである。

段々責められて見ると、如何あつても否むべき理が無いので、進まぬながらも柳之助は承知をした。其を機に葉山は起たうとする、柳之助は如

何しても還さぬ。切つて還ると言へば、泣出しさうな顔をして寂しがる。其をば捨てゝ還るも氣毒さに、出た火燵へ又入る。又有間して、又還ると言へば又引留める。葉山は悖はずに二度まで引留められた。三度四度と大概三十分毎に還らうとすれば、斟酌無しに柳之助は左右放さうとせぬ。到頭九時になる。此分では十時が十一時になつても放すまいと察たので、葉山は、酒がもつと欲いと言出した。柳之助は早速註文通り日本酒を取寄せて出すと、葉山は飲むでは差し、飲むでは差し、無性に差した。

「僕は然うは飲めんよ、迷惑するよ。到底君の敵手は出來んのだから…………。」

と後には柳之助も猪口を取らぬやうにすると、

「敵手が無くちや旨くないね。君も獨は寂しいと云つて、僕を引留めたらう。寂しいのは、君ばかりぢやない、獨酌も寂しい。君が敵手をして

くれなければもう御暇だ。」
葉山は直に起ちかけるので、然うは飲めぬながら、還られるのが否さに、受ける。知らず識らず酔が廻れば、體が怠くなつて、柳之助は其所に横仆になると、忽ち積日の疲勞が發して、前後不覺の高鼾で、ぐつすりと寢入つて了ふ。
葉山も麥酒の下地に二合未滿も入れたから、大分酩酊の狀で、柳之助の寢入るのを呼びもせずに見てゐたが、竟に鼾を搔始めたのを聞いて、面白さうに笑つた。
「やあ、到頭盛潰して遣つた。あゝ、能く寢た。寢るが好い。恁云ふ時は十分に寢て腦を休めるが何よりだ。」
葉山は火燵蒲團を剝いで、柳之助に被けて、
「俺ぢや不足だらう。酔の假寐に何か被けて遣ると云ふのは、朋友の所作ぢやない、俺の爲る事ぢやないが、俺が爲なけりや外に爲るものは無

い、喃、鷲見。
いや、成程瘦せた！　頰が減けて、目も窪むだ。思へば可哀さうなものだ。くの字狀になつて手枕をゑて、座敷の隅に轉つてゐる具合は、如何ゑても獨身者だ。細君が亡なつたら何と無く急に不潔なつたよ。可哀さうに、憂身を窶してゐる。」

這麼事を考へながら、葉山は悄然と火燵櫓に倚懸つてゐた。時雨は蕭々と、黑い風の隙洩るにつれて、身顫の出るほど寂寥は外から逼つて來る。其中で老婢が沈むだ〳〵聲ゑて方便品を讀む。

「元は感心に回向をゑてゐる。あゝ哀だ。旦那殿は高鼾で寐てござる。實に老少不定だなあ！　恁う酒などが出てゐると、細君が居ないとは想はれない。俺でさへ然う思ふのだから、鷲見が寂しがるのも無理は無いか。

細君巧くもないのに料理自慢だつけ。俺の顏さへ見りや、飯を食つて行

け、飯を食つて行けが病だつた。一度御世辭に茄子の鴫燒を賞めたら、それから毎歳茄子が出ると、鴫燒の御招待だつけ。旦那殿が蹤跡御使者に立つて、今日は君種々御馳走が出來るよ、も罪が無くて可笑かつた。もう來年から彼鴫燒も食へないと思ふと、好い心地はしないものだ。いや未だ有つた、細君得意の早吸物――魚煎餅に蕩汁昆布と云ふので、毎毎窘らせたよ。當面今晩あたりは、何もございませんでと云ふので、例の金の網の、青漆の椀が出る所だ。あゝ又かと思ふやうだつたが、其人が居なくなつて見れば、不味い物も懷しい。果然、いや、果然、氣が着かなかつたが、今日は俺の(所好な)猪口が出てゐない。貴方は奇つてゐらつしやるからと云つて、變に歪むだ、蹈潰したやうな、赤樂の氣障さ加減の耐らない猪口を出してくれたつけ、是は貴方のだと云つて弄誑半分に始終出した、彼奴が出てゐない。何だか勝手が違ふと思つた。一寸した事が旣に恁うだ、鷲見の寂しがるのは無理も無い。俺でさへ憶出す

と好い心地はしない。」
葉山はほたりと膝に涙を零した。
「懇意にしたものゝ居なくなるのは心細いものだ。俺も来ちや内のやうに我儘を言つたつけ。昨日まで赤い手絡を掛けて大きな圓髷に結つて嬉しがつてゐた人は、もう佛様になつて了つたのかい。」
彼は目を連瞬いて、洟を啜つた。
「どれ線香でも供げて、御暇としやうか。」
葉山は枕頭に近くあつたラムプを遠く離して、
「あゝ、能く寐てゐる。此窶れた顔を見ると不便でならない。今に目を覚したら、又泣くのだ。おや、もう歸るよ、明朝待つてゐるよ。」
立起らうとすれば、本箱の上の山茶花に目が着く、葉山は悚然として寒くなつた。燈影の微昏い所に赤い花の此方を向いた状は、心ありげに首を延して覗いてゐるやうに見ゆる。葉山は突立つたまゝ其花を睨と視て

ゐたが、白縮緬の衿巻の端を引出して、窃と目を拭いて、其花入を柳之助の枕頭に直して、

「膝枕だ、膝枕だ。それぢや、然やうなら。」

と言つたが、不思議にも其は彼が常にお類に挨拶をする調子であつた。

（三）の一

夜霽の空は殊更朗に、澄徹るばかりで、習々との風も無ければ、暖さも暖い。肘掛窓の障子越に一面の日影を背負つて、葉山は今朝飯が濟むだと云ふ躰で、小楊枝を用ひながら新聞を讀むでゐる。傍には昔噺の赤本やら、錻葉の喇叭やら、首の無い木馬やら、糝粉細工の鼠が轉げて、ビスケットの食餘が放散飛して、はや男の子が一遊志たと見ゆる光景。

徐に襖を啓けて入つて來るものがあるので、葉山は俯いたまゝ、

「おい面白い事があるぜ。難有い、難有い。」

と獨り悦に入つて額を拊くと、

「何だな。」

と皺嗄聲を志て、寄つて來て覗く所を、顏を擧げれば、細君と思ひきや、大達の親人。

「おや、御父様！」　と少しく狼狽る。

「何が那麼に難有い事があるえ。」

と親人は益新聞を覗き込む。

「何有、難有いと思つたら、何でもなかつたのでした。」

「然か、大層おもしろさうだつたから。」

と其なりにして、親人は何を取りに來たのか、持つて行くものを持つて、出て行く。迹に葉山は吃々笑ひながら、

「昨夜は愁歎で、今朝はお茶番だ。今度御父様！と言ふと、嗅左衞門が顯れるのだらう。」

「何を笑つて御在なさる。」

と果してお種が入つて來る。

「それ御覽じろ。」

「何でございます。」　と眞面目で長火鉢の前に坐る。

是が柳之助の虫の好かぬと云ふ人で。年紀は二十五六、髮毛の勝れて濃い、頸の長い、細面の、色白の、人形的の優しげな顏をしてゐる。秩父銘撰の藍ぽい羽織を着て、下は瓦斯絲らしい。今髮結を返したと云ふ、潤澤と水の垂れさうな圓髷の首を据ゑて、火鉢の火をば見に來たのであるが、獨り笑つてゐるのが訝しさに、目も放さず夫の樣子を覗てゐる。

葉山は新聞を投出して、

「種々なものだ、離縁するとつて騷ぐ奴もあれば、鷲見のやうに可愛くて禁らないのもあるし、又乃公のやうに方々で（やいの〳〵）言はれて困るのもあるしよ。茶を一つ淹れてくれ。」

お種は又行らぬことをと云ふ顏をして、茶盆を取出す。葉山は因で拍子拔がして、

「好い天氣になつた。」　と障子の日影を見る。

「夜霽ですよ。」　と急須を取る。

「存じてをります。」　と一番翻弄す。

それでもう細君の方から後は出ぬのである。葉山は自分の肚の中で其後を續けて、獨で可笑がつてゐる。お種は精々と支度をして、やう〳〵湯を注す段になつた。

「御父樣の湯呑は？」　と夫が心着けると、

「今し方髭を剃りに。」

「朝ぱらからお艶飾だな。」

お種は例のもう後は出ずに、濟して茶を注ぐ。葉山は寐轉びながら其湯呑を受取つて、熟と考へてゐる躰であつたが、

「然し、可哀さうな事をしたよ。」

と儚さうに太息を吐く。

「何がです？」　とお種は有繫に訊ねる。

「お類さんよ。鷲見が可哀さうだ、目も當てられない。」　と益昨夜を

思出す。

「鷲見さんぢや然でせう。珍しい實のある方ですねえ。」

「お類樣の事を言出しちや泣くのだらう、氣でも違はなけりや可いと思ふやうさ。那も戀しいものかな。」

「それが本當の夫婦の情合なのでせう。」

此語を聞くと齊しく葉山は翹然と首を擧げた。

「而すると假の夫婦の情合と云ふのがあると見えるな。」

「まあ、有りませう。」

「まあ、有る？」　と葉山は細君の顏を見て、

「乃公なんぞは何方だ。本當の口か、（まあ）の口かな。」

這麼贅辯を吐くのは、細君は煩くてならぬのである。何故に己の夫は堂堂たる男子であり、一家の主人であり、保の父でありながら、恁云ふ愚にも付かぬ事を言つて喜むでゐるのか、と其が始終氣に濟まぬ。

男子はおのれの父親のやうに、飽くまで眞面目に、何十年にも足を一つ投出した事は無く、可恐い顔をして、威嚴を保つべき者と信じてゐる。旣に父親が然である、歿くなつた兄も然であつた、來る客も知る人も皆其通であつた。傍へ寄りでもしたら睨まれはせぬかと想はるゝやうなのが男子、と心に極めてゐたのである。

然るに己の夫は這麽であるのを、常は可慨しく思つてはゐるものゝ、口に出して意見がましい事は出來なかつた。能はざるにあらず爲ざるなりで、自分は母親の父親に對して神に仕へるやうに恭順であるのを見てゐた。人の妻たるものは恁くあれよ、と兩親の語聞かせる所は、恰も母親の行に符合してゐた。其をお種は飽くまで手本にしてゐるから、夫は夫たらずとも、妻は妻たる本分を守らねばならぬ、と了簡してゐるので。然かと云つて、微塵も夫を嫌つてゐるのではない、寧ろ自分の方が夐に惚勝つてゐるので、唯此贅辯と眞面目でないの二件は、牛肉は所好であ

るが膏肉は所惡であると云ふぐらゐの所である。故にお種は務めて此膏肉を避けてゐる。避ける爲に自分は益眞面目になるので、餘り眞面目ゆゑ、夫は些と揉むでやらうで、彌氣輕にする。因で相去ることは益遠くなる。

又出たと思ふと、細君は始の内は好い加減に遇つてゐて、それでも止まぬ時には默つて了ふ。すると葉山も張合が無さに、遂には店を仕舞ふと云ふので、毎も落着する。

もはや奥の手の無挨拶を始めても可いのであるが、如何にも聞きたいのは柳之助の事、彼の平生細君を大事にするのは親しく見聞する所であつた。その人がその人を喪つたのであるから、甚麼に哀悼をしてゐるであらうとは、女の身にしては最も聞きたい所。

「それよりは、鷲見樣は甚麼樣子でした。本當に那麼に泣いて御在でしたか。」

「まあ今に來るから見な、可哀さうに痩殺けて了つた。」

「お痩せなすつて？」　とお種は眉を顰める。

「生きてゐる効が無いなんぞと言つてるのだ。あゝでも窮つて了ふ。」

「生きてゐる効が無い？」　と彌眉を顰める。

お種は例に無く進むで種々の事を訊ねるので、葉山も諒々昨夜の樣子を話して聞かせた。

有繫に親友の哀な物語をするのであるから、洒落も贅辯も餘り出なかつた。或條は涙をさへ帶びて語つたから、お種も身に浸みて聽いたのである。一々聞いて見れば、なるほど氣でも違はねば可いが、と氣遣はしいどてある。けれども其は話で、例の夫の話であつて、實際然したる事ではあるまいと疑つた。疑つたではない、實際那麼事があるものではないと思つたから、

「あなた又妄でせう。」

と唐突に抵つて見ると、不意を撃たれて葉山は唯目を瞬つた。
「眞面目の話に妄なんぞを有仰るものぢやございませんよ。」
「何が妄の事があるものか。」
慍つた程に葉山も眞顏になる。それでもお種は未だ疑が釋ぬか、考へてゐる。
「鷲見はお前不斷から那麼に妻が〳〵と大騷を遣つてゐたのぢやないか。その妻が死んだのだもの、今の話ぐらゐな事は當然さ。お前が死んだつて、乃公なんぞは一滴だつて涙は零しはしない。其處へ行つちや自慢ぢやないが、強いものよ。」
洒落とは思ひながら、洒落にしても憎かつたか、お種は不懌な色をして瞥と夫を見ると、
「その代心で泣いてやる。」
と直に言つて除けて、獨り面白さうに笑ふ。

「泣かない方が本當です。」　とお種は極めて熱心に言ふ。

「然うか。」　と葉山は些と案外であつた。

「泣くなんて………。」　と益熱心に細君は呟く。

是は變だ、と葉山は容喙さずにゐると、

「本當に那麼樣子なのですか。」

心あり氣にお種は念を推した。

「(本當)の好な人だな、本當なら如何するのだ。」

細君は俯いて熟と考へる。

「本當なら考へるのか。」

思案の顏を擧げながら、

「那麼事があるものでせうか。」

と力を入れて訊ねる。

「現在有るぢやないか。」

と言はれて見れば、如何にも現在有るのだが、その現在有るのが不思議でならぬ、と云はぬばかりにお種は考込むでゐたが、

「餘りのやうですねえ。」と言出した。

恁云ふ事は希しいので、此細君が話に身を入れると云ふのは、例が少いのであるのに、今日ばかりは極めて熱心であるのを、葉山は如何にも希有に思つた。何と思つてゐるのか、一番試して見やうと云ふ氣で、漸次水を向ける。

「餘りと云ふのは？　鷲見が細君を戀しがり過ぎると云ふのか。」

「まあ、然でございます。」

「可いぢやないか、結構な事ぢやないか。（女房に惚れて家内安全）と云ふ言がある。」

例の口吻は又贅辯を始めると見て、

「いゝえ、其事ぢやありません。お類さんのお物故なすつたのを、餘り

大騒をなさり過ぎるやうぢやございませんか、私は然う思ひます。男子と云ふものは那麼に女々しいものぢやありますまい。」
「女々しいと云へば女々しいけれど、情合が深いのぢやないか。お類さんの身になつたら甚麼に嬉しいか知れやしない。」
「嬉くはありません、否な事です。」
と横を向いて、鐵瓶の蓋の埃を吹く。
「これは可笑いね、お前が否だつて、お類さんは如何だか解るものか。」
細君は此方を向いて、
「お類さんも始終然言つて御在でしたよ。」
「何と言つてゐた。」と葉山は起直る。
言はなければ可かつた、と心を叱つてゐるやうに、細君は愼重なつて火鉢の縁を拭いてゐる。答が無いので、葉山は又訊ねたが、猶且答は無い。

「お前なんぞは寄ると亭主の讒訴だらう。」
布巾を投げてお種は屹となる。
「那麼事を、あなた。」
「然だよ。お類さんなんぞも大方、内のは煩いとか、那麼にやいやい言はれるのも迷惑だとか、傍にばかり居られるので鬱々するとか、………。」
「那麼事を、あなた。」
「好きな事を言つてゐたのだらう。だから女は罪が深いと云ふのだ。男があれほどに思ふのは大抵の事ぢやありはしないよ。七人の子を成すとも女に心を許すなさ。直に増長る奴だから始末に可けない。白い歯は見せられません。」
「それは女ばかりが悪いのぢやありません。」
「それぢや男が可愛がるのが悪いのか。」
「其も可うございます。可うございますけれど、程度があります。男は

何所までも男らしく、失禮な事を言ふやうですが、鷲見さんのやうぢや……………。」

後は有繫に言ふを憚つたのである。

葉山は冷笑を爲て、

「お前は昔氣質だから那麼事を言つてゐるのだ。此頃は夫婦の情合の深いのと、綾羅紗の合羽が行るのだから爲方が無いよ。」

「昔氣質ですから、私は流行物は嫌ひ。」

「では致方が無い。實は一昨日綾羅紗の變で好いのを見たから、那で合羽を拵へてやらうと思つたが、然うかい、お嫌かい、あゝ殘念な！」

餘り空々しさにお種は苦笑を爲たばかりで、更に對手にならぬ。葉山はごろりと轉側を爲て、天井を仰ぎながら、

「情合が深ければ、深いて增長るし、薄情なら恨むだらうし、浮氣だつたら燒くだらう、亭主となるのも難しいものよ。」

言終つて悵然たりしが、後は嘿となる。

お種は所謂しんねりむつつりであるから、何日にも卻含むことは無い、かはりに、飽倦むだ樣子の見えることも絕えて無い。端然と坐つて、煙草は嫌ひ、茶は嗜まずで、唯閑雅に芝居の御臺所のやうに構へてゐる。言の寡い性であるから、思ふ事は半分も言はぬ、まして之は他の陰言であれば、飽くまで愼むでゐるのであるが、心の中では、鷲見の女々しさを反復々々非難して、見下げ果てた人物だと迄に愛相を盡してゐる。自分が葉山ならば、叱咤けてやるのにと思つた。又其平生から考へたら、叱咤けさうなものを、何故叱りもせぬのであらう。一所になつて、可哀だ、不便だと言ふのは、例の夫には似合はぬ事と思つた。男子たるものが、如何に悲しいと云つて、十日も十五日も經つのに、今でも歿なつたやうに、それも獨隱れてゞも泣くことか、他を捉へて復らぬ事を繰返して泣立てるとは、それでも男子か、意氣地の無い事だ、耻を知らないと

謂ふものだ、とお種は徹頭徹尾不承知である。其に亞いては、夫も同じ意なのが、如何にしても解らなかつた。

内の人は不斷お類さんの事と云ふと譽過つてゐた。自分に對して假意かも知れぬが、左も右も何の彼のと譽めてゐた。お類樣も亦會ふと、自分に向つて、羨ましさうな口吻で内の人を賞揚してゐた。それでお類樣の歿くなつたのを内の人も他人のやうには思はぬであらう、鷲見樣が戀しがつて泣くのを、それほどに言はぬのは、身贔負があるからであらう、と氣を廻して見た。多くの細君は肚に無くても、坐興に一寸口頭で妬くことがある。お種は這麼仂な事を曾て口に出さぬ。ではあるまいかと、唯自分で想ふだけの事であつた。

此(想ふだけ)の容を葉山は默つて見てゐたが、少し寂しくなつたので、

「太く考へ込むでゐるぢやないか。」

挨拶の毎も緩慢としてゐるお種は、言を練つてゞも出すやうに、口を開

からとする時、婢がばた〳〵と駈けて來て、餘り機むで、丁と一つ紙門に抵つて、それに懲りたか、悪く徐に啓けると、旦那に譴責を戴いて、はつと思ふと、駈付けて來たほどの用事を忘れて、顔を發赫にして、やうやう「あの…………。」と言出す途端に、「葉山、葉山。」と二階で聲がする。

「あの鷲見さんが御出になりました。」

と面目を失つた婢は倉皇〳〵に迯げて行く。

「あゝ、鷲見が來たか。でも能く來たな。」

（三）の二

鷲見は二間ある二階の奥の主の居間に、蠟塗の臺子火鉢の火の無いの丶前に、壓潰れたやうに壁に靠れて、窄袴の衣兜に兩手を入れて、毎見ても讀めぬ千蔭の萬葉假名の額を、別に讀まうでもなく憫然として見てゐると、葉山は昇つて來て、

「如何した、昨夜は。好く眠られたらう。」

「大きに失敬した。」

と氣の重い顔をして、猶且潰れたまゝの居住でゐる、黒綾のモオニングに藍氣鼠の綾の窄袴、紺遍縷の外套の下と釣合はぬほど新しいのを着て、埃だらけの黒の帽子を稍後低に冠つたまゝ。

「何だ、學校へ出る裝束ぢやないか。」

「あゝ今朝墓詣に行つて來た。」

「その歸路かね。」
柳之助は頷く。葉山は背後の茶棚から夕顏の烏府を出して、火鉢の灰を平してゐると、婢が臺十能に火を持つて來る。柳之助は外套の衣兜からピンヘッドを取出したが、まづ例の中繪を引拔いて、自分に一寸と見て、
「君、之を見たまへ。」
「何だい？　是が如何したのだ。」
「まあ能く見てくれたまへ。」と推付に手渡す。頼まれた通り葉山は手に取つて能く見たが、別條は無い！　其繪はヒンドスタンの婦女が餅のやうな物を入れた盂を抱へて、其一枚を片手に捧げてゐる立姿である。
「能く見て、如何するのさ。」
「解らんかな、能く見たまへな。」
と其繪を覗込むで、後は葉山の顏を眺める。未だ解らぬか、葉山は繪探でも見るやうに、左さま右さま視てゐるのを、柳之助は堪へかねて、

「背とるぢやないか。」

「誰に？」

「解らんかな、妻にさ、死んだ類にさ。」

と引手繰つて、眤と見る。

「背てゐるものか。」

と慣れた事とて葉山は呆れもせず、

「氣の迷だよ。」と言つて聞かせる。

柳之助は頻に首を掉つて、

「いや、背とるよ。背とるとも。あゝ背とる。餘程背とるぢやないか。」

眤と視てゐながら次第に其繪の中へ曳込まれさうな樣子。

「何が背てゐるものか。日本人とヒンドスタニイほど差ふよ。」

「背てをらぬ？　善。」と言ふと、上衣の內衣兜に手を差入れた。何を出すかと思へば、紙に包むだ角な物を、披けば中は細君の寫眞！　品

田のは見合の時の、束髪と銀杏返と圓髷とので都合四枚。
「見たまへ、肖とるから。」
と其所に並べたのである。
之には葉山も少し驚かされた。何を言ふにも此爲躰であるから、悖はぬが可からうと、故と眞摯に繪と比較べて、
「然云へば肖てゐる。一所にして置きたまへ。」
と寫眞と與に紙に包むで、
「肖てゐる、肖てゐる。」
と匆々に還せば、それなり仕舞ふかと思ふと、
「肖とるね、不思議だ。」
と又披いて有間見較べてゐたが、
「此莨は墓詣に行く途で買つたのだ。」
「然かい。」と葉山は氣の無い挨拶をする。

「然すると之が入つてをつたのだ。僕そはつと思つたね、路上で出會つたやうな心地がして。それから其葭屋へ、五錢の白銅を出して、剩錢は與れて來た。

それから歸途さ、池の端の仲町を來ると、前面から婚禮の荷が來るのだね。那は皆青い風呂敷を被けるだらう。」

「風呂敷ぢやない、油團と云ふのだ。」

「然し、僕の所ぢや風呂敷に用つとるよ。」

葉山は思はず笑出した。

「そりや襤褸布でも西洋紙になるさ。」

「然か、油團と云ふものかね。那には紋が付いとるだらう、その紋が、妻の紋さ。」

「妻君の紋は何だつけね。」

「それ、圈に枇杷の葉が三枚、妻が能く着とつた鼠色の羽織に。」

「枇杷の葉は異しいね。紋には葉も色々あるが、枇杷と云ふのは無い。まあ何でも可い、妻君と同じ紋か。」

「其時は實に僕は悚然としたよ。今憶出しても、あゝ寒くなる。」

柳之助は身顫をして、徐に俯いた。葉山は其氣色を見て、

「もう這樣話は止さうよ。陰氣で可けない、陰氣で。」

柳之助は猶凝然と俯いてゐる。

「これさ、又始めたよ。鷲見、何だな。」

火鉢に張つてゐる臂を葉山は二三度撼せば、漸く顏を擧げたが、はや兩眼の涙は溢るゝばかり。

「困つた人だねえ。」

と葉山はその肩を丁と拊つて、

「おゝ僕の手巾を未だ用つてゐるのかい。否だぜ、否だぜ。」

と話頭を轉しにかゝる。鷲見は其手巾で涙を拭いて、

「少し貸して置いてくれたまへ。僕は手巾が無いのだ。汚れたのは幾多もあるけれど、奇麗にして置いてくれるものは無いのだから。」

何を言つても、其方へ話を引付けて了ふので、葉山は弱り果てゝゐる。

「餘り懐しかつたから、僕は引還して其尾に追いて行つたさ。淺草の方へ行くのだらう、停車場の側を通つて、鐵道馬車の線路の通を何處までも眞直に行つたよ。あゝ氣の毒な、あの人も今に死ぬだらう。彼荷物は何日までも遺つて、其主は直に在なくなつて了ふのだ。考へて見ると、人の命と云ふものは、實に儚い。昨日まで話をして、笑つたり、慍つたりしてゐたものが、今日は忽ち在なくなる。儚いね、吁、儚い！　昨日まで睦しくしてゐたものが、もう土になつて了ふのだ。土になつて了ふのだからね、考へて見給へ、假のやうだ！　妻などを有つものぢやないね、係累を増すのは一つの悲を増すのだ、僕も妻を有たなかつたら這麽思をせずに濟むだのだ。向者のなども僕のやうな悲のあることを知らん

で、結婚をするのだらう。氣の毒な！　彼も今に死ぬのさ。」
葉山は思はず八の字を寄せて、
「可哀さうに這樣不祥を付けるものぢやないよ、これからお目出度いと云ふのに。」
「目出度い事は無い、僕が好い例ぢやないか。」
折から次の間に人音のするのを、柳之助は心も着かず、
「實際然だから爲方が無い。人生朝露の如しだよ、僕だつて恁して君と話をしとるけれど、これで何時死ぬか知れやせんものね。」
と言ふ時紙門が啓く。不圖見向けば、婢とばかり思ひしに、內君であるから、慌てた。
彼は此時も机の横に靠れて、片手を火に翳し、片手は窄袴の衣兜に入れて、窮屈に立膝をしてゐたのであるから、お種が顯れると與に閾越に手を支へて、辭儀をするのが唐突であつた。不意を吃ひながらも、呼吸を

合せなければならぬので。柳之助は周章狼狽して、膝を正すやら、机の角に背を打付けるやら、兩手を支くやら、頭を低げるやら、其邊を犇かして、辛くも挨拶をした。お種は何處までも沈着いて、

「然ぞお寂くてゐらつしやいませう。」

と兩手を膝に端然と其處に坐る。

「はあ。」　と柳之助も割膝に跽つて、屹と相對ふ。

「先日一寸上りました節は、種々御混雜の中で染々御目にも掛りませんで、甚だ失禮を致しました。」

とお種が辭儀をすれば、柳之助も同じやうに頭を低げて、

「はあ。」

「昨晩は又遲くまで御厄介になりまして。」

「はあ。」

「何が御厄介になるものか。」

と葉山は兩箇の照隱に容喙す。
「今日は好く入らつしやいました。」
「はあ。」
酷く柳之助の迷惑してゐるのを、葉山は見るに見かねて、
「あゝ、もう這樣固くるしい挨拶は可止さ。今日は御馳走をする約束なのだから、何か旨い物をね。」
と細君の顏を見ると、心得て頷く。柳之助を見ると、下を向いて、窮屈さうに、手持無沙汰さうに、異見でも聽いてゐるやうな、氣の毒な恰好をして踞つてゐる。
「おい、這樣に改まつて居なくても可いぢやないか。膝を崩さないかい、大事な窄袴が傷むよ。」
「鷲見樣、どうぞお樂に。」
「はあ。」

「遠慮をする事は無いぢやないか。よう、胡坐を搔き給へ。女房の可恐のは、月の末と、內を空けた朝ばかりさ。」
「貴方、どうぞお樂に在しつて下さいまし。」
「はあ。」
と上眼でお種を見て、猶且跽つてゐる。
「それぢやお客樣は私が引承けるから、お前樣は御馳走の方の周旋を、此は宜しい、御隨意に御引取なさい。」
細君は一禮して起つて了ふ。柳之助は跡を見送つて、吻と一息吐いたと云ふ躰で、主の向に向直ると、吃未了の莨を把つて、一口燻らして、墨墨と葉山の顏を視てゐる。
「何を惘然考てゐるのだ。」
「君の所には細君が居る。」
「何を行らない事を……………。」

と言罷して急に笑ひながら

「彼も何せ今に死ぬのさ！」

柳之助は忽ち座敷を眴して、

「君の家は明くて可いな。」

「這麼結構な御住居を譽めるのに、明くて可いとばかりは何事だらう。」

「だつて、明いぢやないか。明いから陽氣だ。僕の所は妻の居つた時分は明かつたけれど、此頃は非常に暗くなつたよ。始終薄暗くてね。」

「お類樣が御天道樣ぢやあるまいし、那樣理窟も無いけれど、陰氣になつたらう。陰氣になつた所へ君が欝ぎ込むでゐるから、いよ〳〵濕勝なのさ。」

「然だ、全く然だ。」

と柳之助は太く思當つたやうに合點する。

「それだから、僕は此頃は内に居るのが否だよ。内が否になつて了つた」

恁やつて餘所に來とるね、然すると他と話をしとる間も、始終內へ歸るといふ樂があつたのだけれど、もう那樣氣は無いな。寧ろ內を忘れて了つとる。些も歸りたくないよ。」

「まあ御寬縱なさいまし。」

と葉山が笑へば、柳之助は太息を吐いて、

「還るに家無しだ？　滿らんなあ。」

どつかりと火鉢の角へ頰杖を支くと、直に火箸を把つて、灰を平し〳〵、結晶の圖を畫散してゐる。お種は又昇つて來て、緣高に菓子を容れたのを、其處に置きながら夫に見せて、

「何か買はせませうか。」

「何だい、有りますものは。粗粉落雁に翁飴、松風が少々、拾聚ものだな。鶯見には這麼物は可けない、餅菓子が可からう。」

「餅菓子は否だ。」と火箸を捨てゝ身を起す。

「それぢや羊羹！　然う、那は丸嚙に限ると云ふ君の所好だつけ。羊羹を二棹切らずに持つて來な。」

「妄だ、妄だ。もう那は行りはせんよ。」

お種の手前少く極の惡い狀で、柳之助は連に頭を掉る。

お種は、是がお類樣を戀しがつて、女々しくも二七日過ぎた今日までも諦めかねて泣く人か、と其樣子をば見て見ぬ風で、なか〳〵注目してゐる。

果然羸れてゐる、色も蒼白めてゐる、延過ぎた髮は亂れて、髭鬚深い顏は汚れ果てゝ、宛然病後の貌。能く視ると、內眥に眵が着いて、外套の襟は雲脂を被つて、耳の根から薄墨を塗つたやうな襟垢、もう蛆が生いてゐるのか、とお種は氣の毒になつて、傍を向いて了ふ。

「ぢや羊羹でもないのか。」

「うむ、何も要らんよ。」

「それぢや是で辛抱するかい。」
と在合ふ菓子を見せれば、
「それも要らんよ。」
と氣の重さうに机に倚掛つて、又頰杖を支く。
「太く振られたね。」
と葉山は松風を撮むで、吃斷きながら、
「ぢや菓子は可いから、御馳走の支度だ。」
其を聞くとお種は起つて、出際に又一目柳之助を見て行く。迹は對座で、
茶を出すと、柳之助は火鉢の彼方に在る菓子を覗いて、
「僕に一箇與れたまへ。」
「おや！」
「一箇！」
「何だ、食べるのかい。」

「食べたくなつた。」
と翁飴を口に入れて、不味さうに咀嚼始める。

（三）の三

春日のやうに煦々と暖いのに、火鉢は在る、日照は好し、頭痛がするので、葉山は西窓の障子を啓けた。

澄徹る空は藍でも滴れさうに、何處に一點の雲も無い、唯巍然と富士の白妙は四邊を拂つて、其裾には、此名山の細工屑を捨てたやうに、鹿子斑の山が起伏くと續く。何處とも無く長閑に人聲がして、此處彼處に鳥が囀る。折々動く風は日影の熱を冷すほどに輕々と面に當る。

「好い景色だ！」

と柳之助は瞬もせず富士の雪に見惚れて、脊を伸しながら、

「富士は名山だね。好い景色だ。」

「譽めてばかり居ずと、お茶代でも置いたら如何だ。」

「始終感心して富士を見とつたら好いだらうな。」

「終極には風を引くわね。」
「好い！　君の家は好いな、僕の家は可かん。恁云ふ所に居たい。」
「居たければ、如何だい、當分來てゐては。」
「此にか！」　と柳之助は目を瞪る。
富士の雪は好い、座敷は奇麗で、陽氣で好いが、唯一つ好くないのは、細君が居る！　その蟲の好かぬお種さんと同じ家に居られやうか、と柳之助は其で目を瞪つたのである。とは知らぬから、葉山は定めて二つ返事の意で、
「然うさ。」　と輕く頷く。
今更否とも言はれず、何と挨拶をしたものか、と柳之助は窮つて忸怩してゐる。
「單身で燻つてゐるよりは可いよ。見たければ毎日富士を見てゐるさ。當分來てゐたら如何だ、それが可いぢやないか。」

柳之助は益窮る。

「元を敵手に所帶を持つてゐた所が、一向冴えない話だ。然かと云つて、今の所ぢや、今後何爲やうと云ふ計畫も未だ無からうけれど、急に後……

……………」

と言未了て、少し塞つたのは、後を娶ふ事情にもゆくまい、と言はむとしたのであるが、其話をしたらば又氣を惡くせうかと、

「急に後が寂しからうから賑なことは私の家だ。賑な方が紛れて可いよ。君の家の暗いと言ふのも、畢竟老者を敵手に、上と下とで一人法師だからさ。まあ洒落に一月でも二月でも來て見たら如何だね。」

實意で說かれるほど柳之助は困却を極めるのである。此場に臨むで無下に斷りもならぬ、然て何と言つて遁げたものであらうか、と度を失つたが、一言でも早く、斷るものなら斷つて了はねば、義理に逼つて出入のならぬ境になると考へたから、妄に急込むで、

「そりや可いけれど、面倒臭いから。」
と不問なことを言出す。
「何為、面倒臭いと云ふのは此方の挨拶だ。君の方に面倒はありはしない。」
之には柳之助の無會釋も返す辭は無い。多少か間の惡さうな顔をして、
「そりや然うだ。然うだけれど、他の家は矢張窮屈だから。」
「餘り窮屈だと云ふ格でも無い癖に。」
理の解らな過るのを傍痛さうに葉山は苦笑をする。柳之助の心の中は隨分切ない。
「君一人限だと可いけれどな。」
「私が一人限なら、早速鷲見樣と夫婦になるよ。」
「實に然うだね、君が女だと可いのだ。」
洒落でも何でも無く、柳之助は眞面目で言つたのである。葉山は手を拍

つて、反身になつて笑ふ。

「此奴が雌だつた日には御荷物だ。床の中から指圖を丟て、亭主に飯を炊かせる玉さ。夕涼よくぞ男に生れたるで、自他の仕合なのだらうよ。」

百方と說いたが、生返事ばかりで、柳之助は決然諾とは言はなかつた。彼此する間に約束の御馳走が列ぶので、葉山も好加減に其話は切擧げて、

「熱い所を一盃。」　と氣を變へる。

有繫御馳走をと云ふだけに、三種も肴核が附いて、中には料理屋から取寄せた物もあつて、未だ後から細君の手料理も出るとは、嬉しかつたが、内君が銚子を控へて侍つてゐるには、柳之助の迷惑は謂ふに謂はれぬ。在なくなつてくれゝば可いに、と其ばかりを念じてゐたけれども、出てゐる方は愛相に出てゐるのであるから、身動もすることではない。餘り言はれるので、前のやうに危坐こそせぬが、胡坐は搔いても、體を硬く丟てゐるので、肩は凝つて來る、氣切なくはある、酒も肴も餘所になつ

て、唯此人が早く起つてくれゝば、其が何よりの饗應に考へてゐた。銚子の替目には起つてあらうから、其迄と、柳之助は目を瞑つて辛抱する覺悟で居ると、平生から調子の冴えぬのが益冴えなくなつて、酒を飲むてゐるのだか、金を借りに來たのだか、判らぬやうに悄返つてゐるので、葉山は全然面白くない。

「又異に鎮つて了つたぢやないか。」

と言はれても、柳之助は怫然として返事もせずに、鉢の物を撈つてゐる。素氣の無い、變な人物だと云ふ態で、お種も横から眤と視てゐる。柳之助は姑く忸怩ついてゐたが、矢庭に盃を空けて、決する所あるが如く、

「一盃あげます。」とお種に差した。

お種は驚いて、急に手が出なかつた。餘り唐突で、葉山にも此盃は何だか些とも解らなかつたが、柳之助の酌を爲るのを見ながら笑ひかけて、

「此人は誠に變人でね、どうも所惡が多くて可けないのだ。」

お種は盃を受けたまゝて、

「ぢや其御肴なんぞは……。」

「えゝ、食物の談ぢやない、人間が嫌なのだ。」

柳之助は聞辛い顔をして控へてゐる。細君はなほ此應答には窮つた躰で、其人の方を見ぬやうにして、爲う事無しに聞いてゐると、

「甚麼好い女でも、甚麼金持が來ても、取合ない人なのだ。難有い事には私さ大相好かれてゐるのさ。お前なんぞは不可方なのだよ。」

是はお種も柳之助も御互に氣の毒で、兩弱に弱つたが、有繫に柳之助は默つてもゐかねて、

「那麼事があるものか、妄です、妄です。」

とお種に向つて慌忙しげに辨る。葉山は圖に乘つて、

「然し、恁やつて兄弟のやうにしてゐるものが、細君に隔てるやうでは面白くない。」

「隔てやせんよ、僕は。」
と柳之助は惴々云てゐる。
「だから、以後は手前同様御懇意に願ふやうに…………。」
柳之助は困じ果てゝ、ぼり〳〵頭を掻くと、紛々雲脂の飛ぶのが、日向で能く見える。お種は其を見付けて、可笑いにも笑はれず、横向に俯いて口を掩へてゐる。

(三)の四

「其を淸く頂戴て、御返盃をするが可いね。何を探すのだ、盃洗？ 盃洗などは水臭い、それで宜しい。肺病さへ無けりや遠慮には及ばない。」
と夫に急付かれて、
「それでは失禮ですが……難有うございました。」
と返盃すれば、柳之助は肩を聳して、
「はあ。」と受ける、葉山が注ぐ、お種が手を鳴す、婢が銚子を持つて來る。柳之助は失望して、いよ〳〵此内君が動かぬと極つたならば、此方から退くより外は無いから、何とか詭へて、早く還らう、と覺悟を爲變へた。
旋て後の肴核を取りに行くとて、お種は起つたので、やれ嬉しや、と縛の細でも解かれた想で、

「僕はどうも窮屈で可かん。困る、僕は困る。」
と柳之助は泣付くやうに言つた。
「何が困るのだ。」
「困るなあ。」　と顔ばかり蹙めて、言兼ねてゐる。
「何がさ。」
「妻君が居つちや困る！」
と一生懸命に思切つて。
「それほど困るなら引退げるけれど、然う君のやうに、人さへ見りや毛嫌をするのも困るぢやないか。何故那様に可厭なのだらう？」
「何故と云つて理由は無いけれど、僕の性質なのだから。」
「性質だつたつて。蛇や蛙ぢやなし、同じ人間を、然う否がるとは何云ふものだらう。他の者とは違つて、私の家内だ、私の家内だけは切て格別の御詮議に預りたいね、然でないと、種々不都合な事があるものね。

ちと所好になる修行を爲てくれたまへ。然う君のやうに一國でも通らないよ。君は不吃不好だから困る、まあ吃つて見てさ、それで可けなかつたら、遠慮無く吐出してもらはうぢやないか。何も内のお種を女房に持つてくれと言ふのぢやなし、高が親交てもらへば可いのだ。可厭にまた所が、苦い丸薬を嚥むやうなものさ。そのくらゐの辛抱の出來ないことはあるまい。」

懲して犇々責付けられるのも辛いが、今にお種が昇つて來はせぬかと、柳之助は氣が氣でない、窄袴の衣兜に手を入れたり、盃を把つたり、手巾を摑むだり、巻莨の箱を潰したりして、急立つ心を萎してゐる。

「然し、如何あつても可厭だと云ふなら、爲方が無い。」

「可厭ぢやない、決して可厭でない！」

「可厭でなければ、御酌ぐらゐに出てゐたつて可さゝうなものぢやないか。」

「けれども實際僕は窮屈でな。」

「その窮屈が解らないよ。」

此時階子を踏む音がする。柳之助は悚然として、又硬くなる。

「妻君の前で今の事を言つちや困るよ。」

と忙しく囁いて、手の遣端が無さに、空の盃を取つたが、口へは持つて行かれず、置所も無し、持餘して葉山へ差す。

お種は手料理の茶椀蒸を能代塗の通盆に載せて、入つて來て、其處に坐るか坐らぬかに、葉山は吃々笑ひながら、

「おい嚔は出なかつたか。」

柳之助は小くなつて膳の上を突々廻してゐたが、之を聞くと齊しく默然と起上る。葉山は益可笑がる。お種は中間に介まつて、何が何だか解らず。

「如何なすつたのです。」

と訊ねると、葉山は未だ笑ひながら、
「譃つたのよ。」
「何を御譃ひなすつて？」
「何有、お前が出てゐると窮屈で困ると言ふから、何故那樣に嫌ふのだ、と怨言を言つて弱らしてゐる所へ、お前が來たのだ。鷲見は何でもお前を引退げてもらひたいのだ、所が、乃公が毎のやうに今日は引退げない、其處へお前が來たらう、さあ極が惡かつたのだ。而して、乃公が又目の前で氣の毒な事を爆然と言ふだらうと思つて、耐らなくなつて逃出したのだ。」
「あゝ然でしたか。それぢや私は下へ行つてゐませう。私が居ると窮屈ですつて？」
「窮屈ださうだ。」と葉山は笑ふ。
「ぢや下へ參りますから………。」

「下へ行つたら鷲見を寄來してくれ。」
「何處へ御出なすつたのです？」
「いづれ御下屋敷だらう。」
お種は下りて茶の間へ入つた。姑く待てど、何處からも出て來ぬ。二階で手が鳴るから、早速行くと、葉山は氣の拔けた顏をして、
「如何した、如何した。」
「未だ出ていらつしやらないのですよ。」
「長いね。」
「お長うございます。」
「長い！　廊下から呼むで見な。」
又下りてお種は廊下から、
「鷲見さん、鷲見さん。」
一向返事がない。お種は考へて、玄關へ行つて見ると、靴が無い！　急

足に二階へ昇つて、

「貴方、御歸去なすつたやうですよ。」

「何歸る奴があるものか。其處に帽子があるだらう。」

果然帽子は在る。

「煙管が在るし、手巾が在る、尤も是は乃公のだけれど。それに彼は茶椀蒸が所好だから、歸りはしない。」

「それでも、貴方、靴が在りませんもの。」

「靴が無い！　靴だから歩いて行つた、と云ふ洒落でもなからう。」

坐を起つて葉山も捜索に下りたが、家の内には何處にも居らぬと極つたので、

「それぢや歸つたかな。兜を委いて遁げるとは卑怯な奴だ。臺所の者に聞いて見な。」

お種は婢に訊ねたが、一向知らぬと言ふ。餘り出意表なので葉山も呆氣

に奪られて、椽側に突立つてゐる。
「貴方、お歸去なすつたのですよ。」
「どうも然だらう。姿が見えなくて靴が無いのだから、まづ確だ。」
「變な方ですね。」
「餘程變さ。」
係る所に、裏口から保といふ男の子を負つて、豐々腴々した十七ばかりの傅が、後手に買物の包を挈げて、小聲で童謠を唱ひながら入つて來るのを、お種は誰かと臺所に出て見ると、
「あの唯今鷲見さんに其處でお目に懸りました。」
「おや、然かい。」
「內へ行つたら宜しくと有仰いました。」
「まあ、然かい。」
之を聞付けて葉山も出て來る。

「何だ、宜しくと言つた？　宜しくも無いものだ。」

傅は捷くも鷲見に就いて事有りげと見て、一廉忠義の気で、

「あの、お帽子も冠らずに躞蹀行らつしやいました。」

(四)の一

お類に死なれてからの所帶は、火の無い火鉢のやうに、柳之助には堪へられぬ侘しいものになつた。おのれの家に居るよりは、外に居る方が、氣が霽々として、幾分か浮世の頼あるやうに覺える。好い朝日和に墓詣をした往復と、葉山の二階座敷で酒を飲むだのとで、其を經驗したに就けて、外は何處も明くて陽氣なのに、內は陰氣で暗いと云ふ事を悟つたのである。

閉籠つて居るよりは、出るが勝だ、と考へた矢先へ、學校から人が來て、出勤を促されたので、出て見やうと云ふ氣になつて、明日からでも、と受けて還したのは、葉山の座敷を逃出した翌日の午後である。

其日になつて見ると、鼻の頭が捥るやうな風が颼々吹いて、衣類を着更へるのも可厭な、洋服は格別寒い日和であるので、忽ち氣が挫けて、九時

頭まで炬燵に入つて、遅々と竦むでゐたのである。

毎ならば、お類が早速昇つて來て、「さあ、貴方」と慣れたさうな聲をして、窄袴を持つて傍から逐立てるやうに爲るのだと考へると、「さあ、貴方」と云ふ聲が遽に耳に附いて、蓐に就く前に珍しく、所惡であつた圓髷に結つて、却つて可愛らしく若復つた笑顔が、隱顯と目に見える。那麼顏であつた、這麼風をしたと憶出すほど、憶出す事が多くなつて、彌懷慕が胸一杯になる。幾許懷しくても、もう逢はれぬ、逢はれぬほど彌懷しい。實に此懷慕は柳之助の身にも世にも換へられぬのである。彼は月給を當の其月暮で、十圓の餘裕も無い、が、若金力で自由になるものならば、如何なる艱難をしてなりとも、それだけの金額を積むで、再びお類を此世に活したいと念ふ。吁、死は君王の貴さにさへ諂はぬ！　定業は終に移すべからず。人の死んだのは紙のめら〱と焚えて了つたのと同じ事て、呀といふ間にもう回復がならぬ。お類は赤土に埋まつて、

活してゐる間に漸々朽つてゆくのであると思へば、情無さも情無し、氣も亂れるばかりに失望が劇くなる。

這麼可厭な、寒い日に學校へ出て、五時間も勤めて、それで何になるのだ。類さんが生きるではなし、何を思出に働くのだ！

「吁、詰らん、詰らん！」

と張合が抜けて、そのまゝ委靡と仆れて了ふ。

仆れて仰向になつて、大きな目を開いて、考へるのは、お類の事ばかり。旋ては悲くなつて、胸が逼つて、涙が流れて、拭かずにゐれば氣味惡く冷々と頰を傳はる、拭けば後から〳〵出る。氣が閉ぢて、謂ふに謂はれぬ苦惱を覺えるので、其の凌に無理酒を引被つて、睡る。

睡飽きれば、座敷を運動して、其も直に飽きれば、椽に出て、空を眺めて、太息を吐く。是が柳之助の日課であつて、其次日も、又次の日も、此爲躰で過したのである。

酒の無理と、炬燵を離れぬのと、寐てばかりゐるのとで、胃と腸とを害して、追懐の悲哀の外に柳之助は一種の氣鬱を發して、益おもしろく無い心地になつて、病衰けた顏をして悒々としてゐるので、老婢は一方ならず心配した。何とか氣の引立つやうに、と始終念ひながら、其間に主從の隔と云ふものがあるので、左右に思ふやうに行かぬ。せめて自分が女でゞもあるなら、那も恁も言ひたい、爲せたい事はあるが、傭人の身であつて見れば、立入り過ぎた事もならず、鬱勃思ふばかりで、從來染染話などを爲たこともないのに、急に傍へ行つて心易く世話をするのも異なもの、と差控へ勝にしてゐる。柳之助も話などを爲るのは疎しさうに、顏を合せれば、

「寂しいなあ、元。」

とは能く言ふが、其外には何も言はぬ。他を見ると、沈思の邪魔になると云ふやうな樣子をして、如何にも取付端が無いから、元も用が有つて

二階に昇つても、其が濟みさへすれば直に下りて了ふ。後は上に一人、下に一人、折々がたりみしりと云ふ音が二階で爲れば、下では偶に咳嗽をする聲の外に、人氣は無くて、外には毎日元氣好く風が吹く。

儚い〳〵と悶えながらも、過せば過される日で、明れば三七日の朝、柳之助は餘所行のモオニングコオトを着て、太い籐のステツキを提げて、蹌〱踉と墓詣に出た。

道の氷は硝子を蹈毀したやうに、兩側の屋根の霜は的皪々と輝いて、空との風の有るでも無いに、寒氣は意地惡く骨身に浸みて、眩い日光も纔に色ばかりで、些の熱も無いが、霽々した霜日和に町は自から景氣付いて、薔薇屋の門に干してある杉箸の山も、藥舗の軒に並ぶ金看板の炫燿も、現金掛直なしの日除を洩れる友禪メリンスの掛切も、何と無く榮々しく氣を有つてゐる。

目は種々の物を見るのと、耳は雜多の音を聞かされるのとで、うか〳〵

と思が紛らされるのに、新しい空氣には裹まれ、華かな日光を浴びて、賑しい往來の中を行くので、柳之助も我を忘れて步行が果取る。此町通を二町ほど來ると、唯有る角に一軒の花屋がある。店の外に葬禮の贈花が四對立派に仕上つて、內には四人掛で殘る一對を精々と拵へてゐる。

お類は花を活けたので、此店が買付であつたから、柳之助は今日の手向の花も此で買つて行かうと爲たのであるが、之を見ると有繫に不快を感じて、入るも可厭になつて、五六步行過ぎたのである。此先の横町には未だ一軒大きなのが在るが、此が好いと云つて、類さんは最負であつたから、此で買つた方が佛は喜ぶであらう、と思飜して、竟に直と入る。狹い土間に四人も仕事をしてゐるのであるから、足も容れられぬ。閾の上に靴の頭を蹈懸けて、

「おい、花を與れんか。」

と内を一目眴したが、並むである花溜には屑のやうな物ばかりで、何も無い。主は椿の枝をぱちりと剪むで、

「今日は如何も御氣毒樣で。」

と此方も向かず仕事に掛つてゐる。

「花は無いのか。」

「へい、今日は…………」と益取合はぬ。

「其處に在るぢやないか。」

柳之助は土間に轉してある薼の南天をステッキで指せば、

「是は御註文で、」

「少し賣つてくれ。」

「どうも然は參りません。此先の横町に花屋がございますから。」

「我家ぢや始終お前の所で買つとるのだよ。」

「へい、どうも毎度難有うございます。」

「其南天を二枝と、水仙を少許賣つてくれ。」

「是はお上げ申す譯には參りません、此花に用ふのですから。」

煩いと云ふ氣色で、主は拵へてゐる花の陰へ廻つて顏を見せぬやうにして了ふ。

「賣れんのか。」　と柳之助も怫然とする。

「へい。」　とばかりで、後はちやきり〳〵と鋏の音ばかり。丁稚や手傳は連に柳之助の顏を見て、惡く默つてゐる。

柳之助は主の隱してゐる顏を搜出しては睨付けて、姑く動きもせねば物も言はずに店の內を眴して、又主を睨付けて、ふいと此を出ると、忽ち惡口でも言つたらしい語が聞えた。

柳之助は益憤懣して、跂るやうに足疾に急いで、横町の花屋へ行くと、其處は倍も店が大きくて、世辭が好くて、代物も山のやうにある。思ふまゝの南天と、水仙と、椿もあつたから椿も買つて、寒菊もあつたから

寒菊も買つて、前の口惜紛れに陰と買つて、それで胸の霽れたは可かつたが、片手に餘るほど有るのに、南天の實が惡く搖々して、急ぐと落ちさうで、歩き難いことと夥しい。平生腕車を好かぬ健脚の柳之助も、二三町行くと大きに持扱つて、已むを得ず、乘らうと決した。

車夫は寄つて來て、谷中までの直を言ふと、無論不當であつたから、柳之助は其三分の二に直切れば、もう三錢遣つてくれ、と六七間も跟いて來るのを、其で乘らうか、乘るまいか、と生返事をしながら遇つてゐる側へ、一臺の腕車が驅けて來て、叱飛ばすやうに聲を懸けた。

見ると、若夫婦の合乘。仕入の外套を着て、遊獵帽を横冠にして、濁黒い顏に眉と髭の歷々と濃い、眼光のぎよろりとした男が、大圓髷に結つて、水色縮緬の羽織の衣紋が抽けて、半分肩を出して、眞白に濃く塗つた、赭面の橙膚理の毒々しく太つた細君に幅をされて、危さうに推付けられながら、其肩頭へ手を廻してゐるのが、勁つてゐるとよりは、取着

いてゐると見える恰好で、細君は惡澄に澄してゐるのに、夫は獨欣々として話を爲かけてゐるのである。

慌てゝ避ける機に、柳之助は手に持つ南天の枝頭を否と云ふほど其車の輻に擦られて、はっと思ふ間に、最も大きい二朶は引斷られて轍の迹に滾つた。車は委細管はず一間ばかり行過ぎる。

「おい、待て！」　と柳之助は覺えず呼止めた。

車夫は歩を緩めて首を捻向けると、車の上の二人も一様に顏を揃へて見返る。其三つの面を柳之助は一つに睨むで、

「失敬ぢやないか。」

「何が失敬だい。」

と車夫は憎々しく言返して、なほも對手になる氣か、足を住めたのである。

柳之助は一時赫と急立つたが、車夫風情と爭ふとは、我ながら餘に仂な

い、と思返して口を噤むだが、道に落ちてゐる南天の朶を見れば、有繫に口惜くも情無くもある。

「間拔めい！」

と言捨てゝ、車夫は大急に橫町へ曲つて了つた迹に、無念を怺へて柳之助は茫然立つてゐたが、旋て落された二朶を拾つて、外套の衣兜に入れた。

直を付けた車夫は此時又勸めるのを、

「要らん。」　と言つたのが、其氣でも無かつたが、極めて慳貪に、前の車夫を極付けるやうな調子であつたので、

「要らなきや止せ！」　と同じ調子で車夫も言返した。

柳之助はステッキを揮回して、大跨に此を立退いたが、途上〳〵考へれば考へるほど、折角の花を疵物にされたのが、無念で〳〵堪へられぬのである。

車夫風情と爭ふのは如何にも仂ない。仂ないには違無いが、尋常の花で

はない、佛に供へる花を這麼にして置きながら、一言の謝罪を爲ぬのみか、間抜と言つた！　彼頰桁を此ステッキで撲つて〳〵撲曲げてくれなかつたのが遺憾だ、と今になつて見ると、爭はなかつたのも殘念で。車夫の無禮に亞いでは乘つてゐた奴等の無禮！　彼等から一言の挨拶は有つても可然のである。

第一、彼夫婦は如何であらう、醜態極る！　類樣が見たら何と言ふだらう。我家の裏に居る巡査が、何處へ行くのか、折々艶飾して夫婦連で出るのを、類さんは見ては、始終可厭だ、可厭だと言つて居たが、其樣子は今の奴等に能く似とる。

人も有らうに那麼奴等の車に、類樣に供へる花を躰無しに爲れては、實に耻辱だ。我が忍んでも、類樣の性質として、那樣汚れた物は見向もせん――那樣物は又持つて行かれもせん、と拾つた二朶を地に投付けて、持つてゐる束の中から南天の枝は引拔いて棄てゝ了ふと、遊むでゐた三

人の女の兒が我勝に駈寄つて、

「小父さん、これ要らないの？」

と聲を懸けるのは、祖母様の袥で乳兒を背負つた年長のお莨盆。その間に慈姑の把柄に赤い切を懸けた六歳約のは、枝付のを擔いで、

「やあ、南天だい、南天だい。」

と獨先に駈けて行く、他の二人も喜ばしさうに殘らず拾つて行くのを、柳之助は我を忘れて見てゐた。

又後から車が飛して來る。今度は聲を懸けなかつたけれども、柳之助の方から聞着けて、顏を振向けると、前の車は、藤鼠の頭巾を冠つた所は高島田らしい、金縁の眼鏡を懸けて、白茶地に疎い飛形のショールを着た娘を載せて、後の車は、圓髷に結つた、四十五六の氣凜とした、口喧しさうな、豊腴の、赤光に光つた、其母親と見える。鼠ぽい毛絲の機械織のショールを絡つて、車も稍古りたのに乘つてゐる。

「おや！」　と後の車から聲を懸けて、止れと命じながら五六間曳れて行くのを、

「やあ！」　と柳之助も帽を取つて、足早に追ひかける。

藤鼠の頭巾は遙に行延びたのを、後の車夫がおい〳〵呼むだので、漸く止つて、今引返さうとする時、柳之助は後の車の側に立つて挨拶を始めた。

「好い所でお目に掛りました。」　と車から言へば、

「何地へ？」　と柳之助は訊ねる。

「お宅へね、上らうと思ひまして。」

「あゝ、然でしたか。」

「お島も御墓詣がしたいと言ひますから、連れまして。」

「はあ、其は。それぢやもう墓詣はなさいましたか。」

「いゝえ、御一所にと思ひましてね、家から直に參りましたよ。」

前の車も引返して來ると、お島は頭巾を取つてゐる。色の白い、髪の薄い、目鼻立の發揮として賑かな、姉のお類よりは容色勝との噂であるが、小軀で痩過ぎた所は、何と無く霜朽てゐる。

シオールを後へ取ると、小豆色の縮緬の羽織に御召縮緬の變裏の二枚襲、空色の紅入友禪の襟を懸けて、海老茶に瓦盡の糸錦の丸帶。玉入の繊い指環を穿めて、髮の飾は、本甲蒔繪の政子形の櫛に、モオル細工の前挿、後は金被の透彫の玉に松葉形の鼈甲脚、金被の管根掛をして、結立ではあるが、鬢の薄い所爲か、髷の座が悪くて、どうやら島田を假りて戴せたやうに見える。笑顏をすると、歯の黒いのが一寸見えて、片靨が入つて、透徹るやうな聲で、物言の人懐しげな、孰かと云へば羞含まぬ質であるが、途中の不意の所爲か、物も言はずに、重くるしく會釋をしたばかり。柳之助も同じく默然で、極を悪さうに挨拶をした。

「これから墓詣に行かうと思つたですけれども、歸りませう。」

「おや、なるほど大相にお花を。」
「まだ南天の好いのがあつたです。」
と口惜しさうに言つたが、其を如何したとも母は訊ねなかつた。
「それぢや折角御出掛のところを何ですけれど、お墓詣は明日でも御一所に。」
「はあ、今日は止します。止した方が可いです。私は後から参りますから、貴方は御先へ行つて下さい。」
「貴方お車は？」　と母親は訊ねる。
「私は車は所惡ですから。」
「それぢや、失禮ですがお先へ參ります。その御花は持つて參りませう。」
「あゝ、然ですか。」　と母親へ渡さうとすると、
「あの、私が持つて參りませう。」
とお島が車を寄せるので、柳之助は其方へ渡すと、例の笑顔を以て受取

る。二臺の車は再び軛を正して一散に走出す、迹から柳之助は片手を洋袴の衣兜に入れて、ステッキを敵手に躘踵と歩いて行く。

（四）の二

此日來老婢も鬱々して、病人の枕頭にても附いてゐるやうに、心配やら陰氣やらで精を疲らしてゐる折から、思懸けぬ今日の來客には、雲霧も一時に霽れて御日樣を拜むやうな心地がして、華美な縮緬の文色に薄暗い座敷も急に明くなつて、聞いてさへ元氣付く、母親の冴々とした高調子、元は何か無しに飛立つばかり嬉しくて、物も手に付かず、ちやほやと待しながら、座敷を出たり入つたりする毎に、

「好くまあ入らつしやいました。」と幾度言つたか知れぬ。

お島母子は八疊の間の殆中央に四邊を拂つて端然と置物のやうに並むで、手爐は出たが、茶の出ぬ内は、極が付かぬと云ふ趣でゐる。

「お前さん單身で然ぞお困りでせう。私もね、旦那が那云ふ樣子だつたから、如何して御在かと思つて、其ばかりが氣になつて、一寸來たいと

思つてゐると、此間から内の家翁が風を引いて、久しく寐たものですからね、手放されなくて。」

と母親は萓を吃ひながら、隣の茶の間の隅に茶碗の音をさせてゐる老婢に話しかける。

「おや、其は如何も。それでも、もう全然御快しうゐらつしやいますか。

と其邊を啓散して何か捜してゐると、お島が入つて來て、

「つまらない物ですが、」と最中の折を出す。

「おや、まあ如何も！」と推戴いて、

「奧樣御土産を、どうも難有う存じます。」

旋て茶を調へて持つて出ると、

「手の無い所を、もう御管ひなさるな。お客樣ぢやないのだから勝手に何しますから。」

「いゝえ、もうお管ひ申す所ぢやございません。奧樣が御物故遊ばして

から、眞にお宅は全で闇でございます。私は此通老耄れて役には立ちませず、旦那様は毎日鬱いでばかりゐらつしやる、もう〳〵、貴方、陰氣で陰氣で、ちと御保養でも遊ばしませんと、御病氣が出ませうでございますよ。」

「困つたものですね。學校の方へは毎日…………？」

「いゝえ、此間學校からお人でございましたけれど、其後未だ一度も御出掛が無いのでございますよ。而して唯毎日鬱ぎ通して在つしやるのでございますから。」

「困つたものですね。」

と考へながら吸殼を撃くと、莨入の傍に飛むだのを、お島が見付けて始末をするも知らずに、母親は熟と考へてゐたが、

「私が都合が出來ると、些と來てゐて世話をして上げたいのだけれど、内も無人でね…………。」

「然やうでございませうとも。」
話の途切れる折から、門の外に靴音がする。
「おや、お歸りだ。」
と母親は居住を正す、老婢は起つ、後からお島も出迎に起つたが、格子の啓く音と與に迯込むで來て、口を掩へて吃々笑ふ。
「何だねえ！」
と母親が可恐い顏をする時、玄關で男の聲、
「あゝ、別に御變も有りませんか。」
之を聞くと母親は呆氣に奪られた。お島は小さな聲で、
「戸籍調よ。」
「おや、然かい。」

（五）の一

柳之助も歸つて來て見ると、元が一人で孑然と爲てゐる平生よりは、內に歸つたらしい心地がする。

彼が此姻家の母親に對する感情は、固より多少の遠慮や隔の無いではないが、自分の可愛がつた類樣を可愛がつて、間接に自分までも始終世話になるので、左も右も餘所々々しくは思はれぬ。今後の所帶の始末に就いても、半分は葉山の意見、半分は此人の了簡も聞かねばならぬ位には考へてゐる。

其は單に感情の上から、柳之助が然うまでに考へたのであるが、事實は最一層然うなければならぬ理になつてゐるので。例へば、家政上經驗の無いお類の手には餘る事が每々あつた。その都度母親を呼立てゝ、力を藉りる事もあれば、相談を懸ける事もあり、陰ながら其保護を受けてか

たのである。獨り何時でも呑氣な柳之助は、米の直も知らなければ、膳の魚の名を聞くでも無く、月々お類に扶持を宛行つて、日々に其又宛行扶持を受けて、所帶向の事は一向御坊樣であつたから、お類も御坊樣は敵手にせずに、母親ばかりを賴にして、萬般賄つてゐたのであるが、那樣事も柳之助は悉しく知らずにゐたのである。

內證に怨云ふ關係があつたのであるから、鷲見に嫁いだ娘なれば、既に歷とした一家の主婦である、赤い切掛けた島田の內とは違ふものを、母親は猶且內に居る娘が親類へ泊にでも行つたやうな氣で、昔に變らぬ愛情を有つてゐた爲に、折々お島から怨言を云はれて苦笑をまた事さへある。

故に其關係から謂はうなら、鷲見は桃瀨（お類の生家の姓）の別家と云ふ狀で、會計上の關係こそ無かつたが、其他の一切は、春は延餠の厚さから、夏は浴衣の見立、夜寒に風をお引かせ申すな、炭の應いのがある

から買つて置いてあげた迄、事とあれば、「阿母さん、阿母さん！」であつた。憚も無く煩く面倒を見させられるで、子は可愛い、母親はいつまでもお類を子供のやうに思つて、其子供に世話される柳之助は、子では無いが、他人では無い、則ち婿といふ一種の可愛い所のある、有繫に便に思はるゝ人、其人は、無邪氣一方の、お坊様が成人して髭の生へたばかりのであるのが、却つて恁云ふ地位に居ては最愛がられて、「小才な浮露のよりは、藝さへあれば男は彼の方が可いのさ。」と母親は常に言つて漆は剝げるが、生地は剝げぬ、いつも柳之助の同じなのを、第一の取柄にしてゐる。

實意で訴へれば必ず實意で受けてくれる、信に人の親らしい、と夙て柳之助は此母親を信じてゐた所へ、お類の病中の世話から、續いてその亡後の始末まで、身一つに引受けて、而も自分と同じやうに悲むて、同じやうに泣いたのを見てからは、いとゞ頼しく思ふ人の今日來たのは、何

にも換難く心嬉しいのである。
嬉しくは思ひながら、口頭に出しては言得ぬのも、母親一人ならば未だしもなれど、お島と云ふ例の他人が傍に居るので、氣屆さうに柳之助は默々してゐる。母親は前から話の内も浸々柳之助の顔を視てゐたが、
「何處ぞ御不快のですか。」　と竟に訊ねた。
私も然う思つてゐたと言ひたさうな顔で、脇正面からお島も眤と目を着けてゐる。
「いゝや、別に…………。」
「然うですか、大變お痩せなすつたよ。」
氣遣しさうな目をして母親は益眺める。
「お痩せなすつてねえ。」　とお島まで言出した。
「毎日どうも不愉快で…………可けません！」
と言ふのを待構へてゐたやうに、母親は、

「その所爲ですよ。」と一も二も無く言へば、果然言中てられた風情で、柳之助は返す言も無い。

「而して内にばかり御在なさるのは可うございませんよ。未だ御出勤をなさらないさうですけれど、外へ出ると氣が紛れて、却つて好いものですから、お可厭でもね、無理に御出勤はなさいましよ。又餘り長く休むで御在では不可のでせう。」

「何有、それは病氣屆を出して置いたですから。」

「だつて、病氣でもないのに病氣屆を出して遊むで居ては、酷いぢやありませんか。」

お島は一寸笑ふ。

「皆行るですよ。」と言ひながら眞面目の柳之助が可笑いとて、お島は又一寸笑ふ。母親も生眞面目、

「他は他ですわね。身體の爲にも良うございますから、奮發して出て御

覽なさいまし。」

「それは出やうとは思ふです…………。」

「思ふばかりぢや可けませんね。」

外に所在も無いので、お島は又笑ふ。

「思ふですけれど、朝になつて、行かうとすると可厭になつて…………。」

「それぢや何にも成りませんね。」

「如何か爲やうは有りませんかな、毎日寂しくて、寂しくて、實に居ても起つても在られんですがね。」

「元とも其話を去て居たのですがね、それは今迄居たものが急に居なくなつたのですから、然うでせうとも。」

「實際然うです。」と俯き勝の顏を柳之助は乾と振擧げる。

「私が内の方が手が放されると、當分の内でも來て居て上げたいのですけど、何分にも…………。」

「それは好いですな！　來て居て下さい。可いでせう、好いですがね。」
乘地になつて柳之助は頻に膝の前むを覺えず、爲に母親は膝頭の痛いほどぐい〳〵手爐を推付けられながら、心靜に思案をしてゐる。
「お內の方は如何かなるでせう。」
「如何もねえ。」と母親はお島と見合ふ。
「然うねえ。」とお島も眄すばかり。
「何とか考へませうけれど…………。」
暫く姿の見えなかつた元が突然出て來て、
「さあ御掃除が出來ましたから、何卒御二階へ。」
柳之助は先づ案內に起つ。母親とお島は續いて椽に出ると、柳之助のコオトの襟が歪みなりに折れてゐるのを、お島が見着けて、
「あの、襟が。」
と心着けると、一寸正したのが、猶可笑しく歪むだので、お島は寄つて、

整然と正して、次に肩の雲脂をば持つてゐる絹の手巾で二つ三つ拂へば、婀かしい香が鼻の頭へぱつと立つ、柳之助は忽ち思出して、階子を踏むさへ氣の無さゝうに、づしりばたり、づしりばたり。

「何しろ、恁して家を有つて御在なのに、世話をしてあげる人が無くては、信に不都合ですねえ。」と其ばかりを母親は切に苦にする。

「不都合ですとも！　然し、唯不都合だけなら我慢は出來るけれども、寂しくて、寂しくて、内に居られんですな。始終類の事ばかり胸に浮むて、考へれば考へるほど氣が蒻蘊して來て、奈何したら可からうと思ふです。今日なども恁やつて貴方が來て居られると、何と無く類が今に昇つて來るやうな心地がするですね。――死んだとは想はれんです。」

故と他を見てゐる母親の目には零れさうに涙が一杯になつてゐる。柳之助は怺情無く前から潸々と落してゐるので。お島は未だ然ほどでもないが、他の泣くのを見てもゐられず、愁然と俯いて、どうやら身に浸みる

氣色。

「病中は非常に貴方が世話をして下すつた。私の心配も非常でした。吁、然し死んで了つたです！　死んでくれては實に困るです。私は還麼困つた事は無いてす。種々未だ用が有るですのに……………もう一遍逢ひたいてすな。」

と破れたやうに柳之助は泣出す。

「もう〳〵其話は舍諸ませう。貴方も諦めて下さい、よう、過ぎた事は爲方がありませんから。何でも氣を引立てゝ、身體が大切ですよ。つまらない事を考へて病ひでもすると可けません。」

まだ〳〵泣きたいのを怺へて、母親は涙を拂つて見せる。

「類の事を考へてゐながらも、今日のやうに貴方がたゞ居られゝば、未だ幾分か心強いです。唯一人で考へ出す時は、實に其は耐らんてすね。」

「ですから單獨は可けません。」

又母親は單獨て置かぬ工夫を案じてゐる。
「貴方に當分泊つて居つてもらふ譯には行かんですか。」
「それが、ね…………。」
「然うすると非常に好都合ですけれど。」
「それでは、ね…………。」
とやう〳〵母親が言出すと、柳之助は勢好く話の方に顔を向ける。
「如何にか都合を志て何しますから、明日はまあ御墓詣を志て、明後日から學校の方へ御出なさいますか。」
「出ませう！」と柳之助は一層勢付く。
「お出なさる？　なら左も右も都合を志て、…………。」
「來とつて下さるか。」
「えゝ、可うございます。」
「これは難有い！」

まづは愁の眉も展びて、菓子が出る、旋て午餉の膳が出る。是から日の暮れるまで唯坐つてゐるのも退屈、幸ひ天氣は快し、珍しく然ほどは風も起たぬから、明朝と云はず、今から墓詣を爲ては。と急に話が着いて、一時といふ頃、三臺の車を聯ねて、谷中へ走らせたのである。

上野邊の一寸した所で晩の支度を爲て、點燈頃に歸つて來たが、其夜は久しぶりで二階の灯も下の灯も曠かに、臺所も靜に犇き、闇の木戸の開閉も聞えて、それが一時鎮ると、物の響は幽しい琴の音となつて、糸の調が絶えれば話聲が爲て、話聲が歇めば又爪音が姑く續いて、十時前まで閑かに歡樂を盡す氣勢が爲た。

(五)の二

翌日柳之助は遂に出勤したのである、すると直に母親は、釜に湯を沸すやうに元に吩咐けて、二階へ昇ると、お島は新聞を用意して、是から冬籠をする氣で、火燵に火を入れてゐる。

「可けませんよ、それ所ぢやない、さあ〱用が有るのだ。」

と突如に急立てられて、迅雷耳を掩ふに遑あらず、お島は火箸を持つたまゝ、

「何？」　と長く引張つて、其間瞬も爲ず母親の顏を視る。

「掃除をするのだよ。」　と母親の急くほど、

「何處の？」　とお島は猶落着く、落着く譯ではない、餘程吃驚したのである。

「大掃除をして、此二階を奇麗にするのだから。」

「此二階の掃除？」

何だかお島には全然理が釋らぬ。

「何故、阿母さん。」　と依然急かずに訊ねると、母親は益落着きかねて、

「何故でも可いから、早く支度をおしな。」

お島は悔しさうに折角入れた火を埋けて、憤れたさうに立起つて、怨めしさうに母親を見たのである。掃除を爲ろなら爲もせうが、始の約束が御墓詣に來たので、お客に來たので、泊に來たので、何の爲に好い衣類を着て、髪を結つて、御土産を持つて來たのであらう。如何考へても、他の家の掃除をしに來たのではない！

親の言ふ事ではあるが、お島は不服であつた、が不服とは言得ぬから、

「この寒いのにねえ。」　とばかりで、母親が傍で精々と身支度するのを棒立に立つて拜見してゐる。母親はぐいと一つ下緊を緊めて、

「さあ、よう、寒いことがあるものかね、阿母さんさへ恁云ふ勢だ。」

「好い勢ね。おゝ、寒い！」と袖を重ねて身を竦める。

「早くお爲なね。」と少し睨まれて、漸くお島は友禪縮緬と黒繻子の晝夜帶を解始めると、母親が、

「寢衣を持つて來て、その上へお端折り。」

故と彼方を向いてお島は返事も爲ずに、出來るだけ其だけ遲々してゐる。其間に母親は支度を爲て了つて、忙しげに下りて行くと、迹はお島の獨舞臺。最初の所作は、其處に解いて置いてある帶揚を故々取つて、放付けて見る。それから、くる〳〵と帶を解いて、又放付けて見たが、是は根から郤含なかつたのである。

「此寒いのに、他の家へ來て掃除なんぞを爲なくても可いのに！」

「お島や、お島！」と階子の口から母親が喚ぶ。

「何？」

「下へ來てお着替へ。」
餘り捂いたら叱られやう、と有繋に其も可恐に、お島は帶と帶揚を抱へて、旋て下りる。

程無く三人繋つて推寄せたりと云ふ勢で昇つて來たが、いづれも効々しい襷懸の手拭冠、箒に拂塵、バケツトに雜巾、塵取等の得物を面々用意して、先戸棚を始めて、座敷中の道具を順繰に椽へ運出して、煤掃ほどの掃除を始めたのである。

四邊に出てゐるお類の篋のやうなものは盡く取片附けて、從來老婢の手の屆かなかつた不潔をば刮去るやうに奇麗にして、天井裏も拂へば、疊も拭く、散かして在つた道具を秩序好く据直して、障子の硝子を磨いて、次に火鉢の灰も篩つて、午まで係つて三人とも委靡して、お島は在合ふ椅子に靠れて奄々いつてゐれば、母親は平坦と坐つて息繼の莨を吃しながら、相對して少時は語も無かつたが、一杯に射入る日影に座敷は輝く

やうで、劃然と隅々も際立つて、列ぶものは列むで、納る物は納つたので、廣々としたのを、
「ねえ、お島、見違へるやうになつたぢやないか。」
と樂しさうに母親は眴す。
「此座敷こそ仕合だけれど、お客は災難だわ。」
午後には下も署と掃除をゑて、一通片付いた所へ、柳之助は精々と歸つて來て、何も知らずに内に入ると、間違へて他の家へ飛込むだか、と疑はれるほど奇麗になつてゐるので、
「誰か今日來るのか。」と偶然元に訊ねる、と訊ねられた方が却つて希有な顏をゑて、
「何でございます。」
「客でもあるのか、大相奇麗になつたぢやないか。」
之を聞くと元は思はず笑つたのである。

「面白い事を有仰います！　貴方が旦那様でゐらつしやりながら、旦那様の御存じの無い御客來が有るものでございますか。」

「然だなあ。」　と又茶の間を覗いて、

「やあ、奇麗になつた、如何云たのだ？」

「まあ、一寸御二階へいらつしして御覧ぜまし。」

と獨り喜むでゐる老婢に逐揚げられて、柳之助は煙に捲かれながら昇つて見れば、實に二階の奇麗になつたことは、住荒した我家の俤は無くて、別けて驚かれたのは、始終陰々として一種の氣の曇つてゐたのが、廓然と晴れて、隅々まで眩いほど明くなつたのである。而して不思議なのは、二人の居らぬのである。撞乎と座敷の中央に坐つて、四邊を珍しさうに眗してゐると、元が昇つて來る。

「お客様は如何した？」

「今し方御風呂へ御出になりました。」

「奇麗になつたな！　如何したのだ。」
元は始めて大掃除の始末を明して、御客様の骨折の疎ならぬ趣を陳べる。
柳之助は至極滿足して、然れば此母親に當分居てもらつたならば、幾計慰められるであらう、と益懷しくなるに就けて、昨日あたりから、必ずしも忘れるではないが、幾分か紛れるかして、此日頃鬱りと胸に盈ちてゐた愁も次第に蒸發して、其量を減じて行くやうに覺ゆるのである。
もう歸るか、もう歸るか、と待つ間を獨兀然としてゐると、一旦蒸發したものが忽ち集合して、又胸が苦しく塞がる。
這麼に家を奇麗にした所を類さんに見せて、喜ぶ所が見たい。此家には限らぬ、甚麼物が有つても、甚麼事を爲ても、自分一人が喜ぶだけでは、一向張合は無い。類さんに喜むでもらふのが自分の一種の喜である。愁い事がある、類さんが傍から慰めてくれる！　樂な事がある、類さんが一所に喜むでくれる！　であるから何を爲る効もあつたのだ。今では其

張合を失つて了つた。吁、寂しい、心細い！　渺々たる太洋に唯獨泛むでゐるやうなものだ。世間に人は多いけれど、其は浪のやうなもので、決して頼にはならぬ。頼になる人は死んで了つたのだ。

情無い、情無い！　生きてゐたらばと思ふと、身も世もあられぬほど戀しくなつて、コオトの內衣兜から急に紙包の寫眞を出して、づらりと四枚疊の上に並べて、片手を支いて、昵と眺めてゐたが、軈て束髮の一枚を取擧げて、生けるが如く接吻をすると、淚がほつたりと寫眞の横顏を霑した。手早く手巾を出して、窃と拭いて、次は島田のを取つて、視てゐる最中、二人の歸つた物音に、慌てゝ掻集めて、紙に引裹むで、衣兜に入れて、手巾を遺れて立起る。直に二人は昇つて來て、柳之助の顏を見ると、泣いた目は未だ濡れてゐる、母親は何とも言はぬがお島は頻に見る。拭かうにも手巾は無し、連に瞬を爲ながら、鼻聲で掃除の禮を述べる。

獨で居れば憶出すが、母親の前では例の紛れて、此日も然ほどは味氣無いでもなく暮して、夜となる。夕飯には母親の注意で一銚子付けて、食後には茶を點れて、一時お島の琴の調があつて、元も呼ばれて、左も右も人數であるから、それだけ賑に十時頃まで雜談をして、三人は二階に寢る。元の方便品は殊勝ながら、都合に因りて母親が陰に差止めたのである。

朝になると、寒いのに母親が効々しく先に立つて、お島を敵手に食事から、衣類から、時間の注意までして、出勤せねばならぬやうに仕向けるので、柳之助は義理にも出掛ける。

お類に成代つて氣を着けるのが母親で、動くのがお島で、此二人が寄つて、お類の居た時のやうに柳之助の世話を爲るのであるが、その行屆く點から謂はゞ、世慣れぬお類が、人形に衣類を着せるやうな世帶の持方とは差つて、一家の爲にも、一身の爲にも、彼此柳之助に取つては、數

倍の利益はあるのである。

母親の善く爲てくれる事も、お島の善く働いてくれる事も、柳之助は有繋に解らぬではなかつた。或事に就いては用意と謂ひ、懇切と謂ひ、母たる人は母だけに到底類樣などは企及も無い、葉山が曾て（年寄も世帶道具の一つなり）と云ふことを言つて、自分の經濟の不取締を責めた事も今更思中る、ではあるが、爰に一件其等には換へられぬ大缺點があつて、謂ふに謂はれぬ不足を感じる。それは懇切に於て、用意に於て、秋毫中分は無いやうなものゝ、又全く無いでもないと云ふのは、總ての仕事が機械的？ である。其實決して那樣事實ではないのであるが、左右柳之助には然う感じられる、此機械的――其大缺點が柳之助の最も胸に徹へて、益類さんの忘れられぬ所以である。

母親を始として、お島も元も寄つて聚つて、下にも置かぬやうにして待す。お類は殆ど放出して置いて、現在給仕に付いてゐながら、自分の氣

儘に手を塞げてゐる時には、「おい、飯！――と言ふのを、「貴方、手があるぢやありませんか。」と見向きもせぬ。それほどならば始から老婢を付けて置いたが可さゝうなものを、其は柳之助が不承知で、言はれて見れば如何にも手があるのであるから、其手を役つて杓子を持てば、「あれ、然う下から堀つちや可けないわ。」と小突れる。

非機械的も亦甚矣が、柳之助の身に取つては、是が至極滿足なので、或者の深切よりは或者の邪慳が好いと云ふ其片意地を慰めるには、千萬の或者の深切も、到底如何とも爲ることは稱はぬので。

然し、其が深切であつて見れば、柳之助も喜ばぬではない。唯他の或者の邪慳に比べては、不足に思ふ所もあるが、決して其をば深切の到らぬ故とは考へぬ。母親をも懷しいものに思ふ、が其裏に例の不足があるので、彼の心は安じない、獨で居れば憶出す、憶出せば耐らぬほど戀しくなる。如何したらば此の不足が無くなるか、と云ふ事に就いては、柳之

助は全く考へなかつた、類さんさへ甦つたならば、と始終思ふ外には。而して類さんの外には此不足を充すものは斷じて無いと信ずるほど、追慕の念は彌已まぬのである。

獨り母親が其を考へたのである。葉山も陰に心掛けてはゐるが、母親の方が差迫つて考へてゐる。其事に就いてか、外に用事があつてか、此日柳之助が出ると間も無く、母親はお島を遺して單身で出掛けた。それを送つて、二人は奧へ入りながら、

「お孃樣、お一人でお寂しうございませう。」

「姉樣が居ると好いのですけれど。」

「然やうでございますとも。折角御泊にお在あそばしても、奧樣が居らつしやいませんではお樂がございませんねえ。今日は半休でございますから、直に旦那樣も御歸來になります。」

「兄樣ぢや困るわ。」

「御姉様の代に御世話をなすつて上げて下さいまし。何を致しても私では御意に入らないのでございますから。」

「私も困るわ。」

（五）の三

柳之助は歸つて來る、食事を濟す、飄然と二階へ昇る。續いて元は勝手へ退つて片付物をする。半時間ばかり經つて、其所を仕舞ふと、茶の間に出て來て、まづ火鉢に取付く。二階は闃寂としてゐる。

大相靜だ。お二人とも睨合で、然ぞ窮つて御在なのだらう、と元は勤篤に見舞に行つて見れば、柳之助が惘然と火鉢に靠れて、傍の机に厚い西洋本の畫の入つたのが披いてあるばかりで、お島の影も見えぬ。

「おや、旦那樣、お孃樣は？」

「知らんよ。」　と柳之助は澄してゐる。

「おや、おや、御二階ぢやないのでございますか。」

「然だ。阿母さんは何時頃歸つて來られるのだ。」

「私は一向存じませんで、それはお孃樣が。おや、まあ何地へ行らつし

やいましたらう。」

と元は倉皇と下りて、

「お孃樣！」　　と呼むで見ると、小座敷の内で返事をする。

「あれ、まあ此方に在らしつたのでございますか、私はお二階だとばかり存じましたのに。」

と扉を啓ければ、窓の好い日向で新聞を見てゐるのである。

「貴方、お二階へ行らしつてゐて下さいましよ。」

「何爲て在らつしやるの？」　　と振向く拍子に炳然と眼鏡が嚴しく光る。

噫、島田に眼鏡！　折角のお孃樣も體無しになる、と元は熟思ふ。彼の解つた阿母樣が如何間違つて這麼眞似を爲せるのであらう、と最一つ熟思ひながら、

「又何だか鬱いてゐらつしやいますから。」

「然ですか。」とお島は起上つて、一寸身繕をしてから出て行く。二階の障子を啓けると、

「兄様！」と聲を懸けたが、柳之助は其を聞くと、甚麼ものであつたか、異に胸が騷ぐやうな心地がした。

彼の（兄様！）と呼ぶのは今に始めたのでは無い、お類の存生中折々遊びに來た時分からの（兄様！）で、又改めては一昨夜からの（兄様！）である。けれども柳之助の耳には、今日の（兄様！）は例のとは違つて、別の意味でもあるやうに聞えたのである。

その所爲か、入つて來たのを見向いたばかりで、柳之助は返事が不圖出なかつた。例よりは羞しさうに入つて來て、火鉢を一寸離れて、投出されたと云つた風に坐つて、

「遊びに參りましたよ。」

總ての樣子が何と無く變つてゐるので、柳之助も調子が合はなくて、

「あゝ、然ですか。」と變に稜のある應答をして、幅つたいやうにしてゐるので、お島は間が拔けて、少しばかり忸怩ついたが、
「お茶でも點れませうか。」
と火鉢の傍へ躪寄れば、柳之助は迷惑さうに、靠れてゐた身を退けて、
「はあ。」と机の方へ向直る。
見ると、火は大方白くなつてゐるので、お島は炭を繼ぎ始めたが、餘り顏と顏との近いのが眩いやうで、柳之助は益迯身になる。お島は割に臆した樣子も無く、小取廻に其邊の始末をして、湯の沸くのを待つてゐる。机に向いて、書見を爲るでもないに、柳之助は何を一言云ふでもなければ、此方を向かうでもない。實はお島も話が無いので、鐵瓶の胴を挲りながら、
「晩方には阿母樣は歸ります。」
「あゝ、然ですか。」と一寸此方を向いたかと思ふと、直に彼方を向

いて了ふ。

「御歸になつたら、能く氣を着けてあげろ、と然う申して參りましたけれど、私には何だか一向氣が着きませんから…………。」

と例の片靨でお島は微笑む。

「いや、別に用も無いですから。」

「御用が有りましたら、御遠慮無く。」

「可いです。」

話は又此で斷れて了つたが、湯は未だ沸きさうにもせぬので、お島は氣にして炭を直してゐると、

「茶は私が點れるですから、島さんは下へ行つても可いです。」

「あら、何せ用は無いのですから、私が致しますよ。兄樣は御勉强なさるなら、爲すつて下さいまし。今直に沸きます。」

それでもとは推して言はれぬので、柳之助は已むを得ず書見を始めたが、

氣が侵して讀むてはゐられぬ、如何かしてお島を逐拂はう、と其ばかりを考へる。

お島の方では逐拂はれる人とは夢にも知らぬから、一廉引承けた氣で勤めてゐるのであるが、自分も亦多少面白づくで、彼此世話をして見たい氣味の無きにしもあらざる態で、內に居て阿爺樣の腰を按つて睡氣催すのとは、同じ面倒を見るのでも、大分氣持が違ふ。

若し柳之助が尋常であつて、此くらゐに口數を寡く、此くらゐに冷遇をした事なら、お島は艴然として起つに違無い、けれども、柳之助の素氣無いことは、豫て心得てゐる。其口數の寡いのも、其冷遇なのも今日に限つた事ではない、と十分に呑込むでゐるから、恁云ふ人物だと覺悟をして、格別氣にも懸けぬのに、想はざりき！　柳之助は難有迷惑で、如何か早く始末を付けたい、と實は勃々してゐるので。

「あゝチン〳〵いつて來ましたよ。」

とお島は鐵瓶に觸つて見る。

何か言はれる度に柳之助は冷汗が出るかと思ふほど可厭で可厭でならぬ。其を悚へる爲に兩手で頭を支へて、見たくもない本を眤と視てゐる。その樣子をお島は見付けて、窃と顏を覗けば、眉を皺めて、息を屏めてゞもゐるやうに見えるので、

「兄樣、如何か爲すつて？」人懷こい調子で訊ねる。

その（兄樣！）が骨身に浸みて、柳之助は耐へられぬほど可厭であつた。物を言つてくれなければ可いに、と浸々思ふのに、連に何か言ふ。其上に（兄樣！）は我慢がしかねる。

「いゝや。別に…………。」と言ひながら、起つより早く從々と座敷を出て、下りは下りたが、行所も無いから、庭へ出る、嚴しく寒い。寒いけれど出たものであるから、足の向くまゝに、地尻の杉垣と物置の蔀とで衽形に劃られた物干場の方へ廻つて見ると、隈笹の所斑

に生へた日陰に、長い霜柱の蠢々と立つてゐるのが癪に障つて、三足ばかり踏付けて、颼と來る風に吹捲られながら、椽側に還つて來れば、お島が丁と其處に待つてゐて、

「本當に如何なすつて？」

柳之助は進退谷つて、

「寒いですよ、二階へお出なさい。」

「貴方も入らつしやいな。」

逾弱つたが、免るゝ路も無い。

「行くです。」

「さあ。」

此困厄に就けても柳之助は母親の歸來が待たれた。お島は又、母親が傍て、睨まれるのは餘り香しくない、實は何でも遣つてのけたい氣が勝つてゐるので、それには煙たいもの丶無い方が勝手である。

從來度々お島は遊びにも來たが、柳之助と對坐は今日が初發なので、姉が居なければ母親が居て、毎も自分の出る幕は無かつたから、萬事控目に控目にとえてゐたのである。

元來母親の教育の方針は、何所までも女子は溫和に品好く、と云ふのであるから、娘に向つての小言は、其躾ばかりであつた。姉のお類も隨分世話を燒かせたが、母親の望む所迄は行かぬ間に、柳之助に緣付いたかと思ふと直に今度の始末となつた。お島は又姉より一倍世話を燒かせる、則ち母親の敎育の方針には、姉より多く其性質が悖つてゐるのであるが、母親はそれでもお類を躾けた時のやうに、焦燥と氣骨は折らぬので、目も離されぬやうにしてゐながら、こつそりと遠退いては眺めてゐる氣味がある。畢竟それは、お島が何でも遣つて退けやうと云ふ氣だけに如才無い所があつて、其點に於ては、我子ながらと思ふほど出來すのが、母親は何より嬉くて、何程の事を爲得るか、それが見たさに不知綱を弛め

る事もあるのである。姉のお類も決して遲鈍の方では無かつた。なるほど躾ける目から見たら、足はぬ所も數有つたらうけれど、母親が案じたほどの意氣地無では無かつたのである。然し、その十八で爲た所作をばお島は十五で爲て見せた。賢い代には間違ふと往々と出過ぎる。其を出過ぎぬやうに、而して賢い所は何所までも賢いやうに、と母親は始終笞を執つてゐるのであるが、何かに就けて此才氣が穗に露はれるから、自から溫和に品好くといふ母親の註文には合ひかねた。けれども親の慾は、能く氣が着いて、拔目の無いが上に、溫和に品好くといふのであるから、お島の身にしては極めての難題である。右の通賢いから、母親の前では憖ひ働振をして譴られうよりは、樂な溫和の方が勝と極めてゐたから、それで丁度好い加減に如才無くて、十に七までは母親の氣に稱つてゐた。因て親の前のお島と人中へ出てのお島とは、大分調子が變るのである。

柳之助は始めて其調子に出會つたので、唯呆れるばかり。細君の類さんさへ、然までは爲てくれなかつた事を、この人は立入つて爲てくれさうなので、何と無く氣味惡く思はれる。お島の方では又、變人とは聞いてゐたが、浸々傍にゐるのは今日が初度であるが、なるほど變人に感心して、彼の姉樣が能く此人に辛抱が出來た、と緣と云ふものゝ不思議と驚くばかり。

柳之助は如何ともお島を逐拂ひかねて、爲う事無しの一寸遁に、其最嫌ひのものゝ一つである浴になりと行て來うと思立つた、借したものを督責るやうにして勸めたが、毎も薄黒い頸をして、傍へ寄ると莽と膩臭いのには類さんも弱らせられた、やう〳〵諫めて一週間に一度とした、其さへ傍から突々かれなければ容易に出て行かぬ人が、今日は自分から浴にとは、變だと元は思つた。

其日の薄暮に母親は還つて來たのである。柳之助は盲龜に浮木の歡喜て

あつたが、例の素氣無のことであるから、然ほど顏色にも言語にも顯はれぬ、唯火鉢の前面に坐らせて、何を恁と話を爲やうでもないが、内心は切に嬉いので。怨靈は仍其所に姿を顯してゐても、此難有い護符のある爲に、寄らうにも寄られず、立竦になつて怨めしげに見てゐる。それでも有繫に氣丈夫であるやうな想。その護符の母親が還つて來ると與に、怨靈のお島の樣子は脫然と變つて、是ならば傍に居られても未だ〳〵辛抱の出來るほど、遽に溫雅になつて、殆ど別人のやうに端然としてゐる。如何にも端然としてゐるは可いが、母親が居ると居ないとでは、是程違ふかと思へば、何の故に母親が居れば溫和にしてゐて、居なくなると忽ち馴々しくするのであるか、柳之助は甚麼事にもお島の了簡が解めぬのである。實に柳之助の怪む如く、お島は急に溫和になつて、母親の傍が離れられぬやうに內端にしてゐる。それをば柳之助は不思議さうに、且は氣味が好さゝうに、折々見遣つては母親の話を聽いてゐた。

其内に母親は少し改つて、
「それからねえ……………。」　と言出したが、餘り言ひたく
はない事らしい樣子で、
「お茶を一つおくれな。」　と故とお島の方を向いて、何と言つたもの
であらう、とそのまゝ考へる體であつたが、旋て此方を向くと、
「内へ歸つて、今日話をして見たのですよ。」
何の話やら一寸解らなかつたので、柳之助は胡亂に、
「はあ。」　と先づ應へると、
「あの話、私が當分此方に來てゐる話ね、……………。」
それで好く解つて、
「はあ、はあ、はあ。」
「話をしました所が、嚴君の言ひますには、未だ如何も加減が爽快しな
いのに、私が居なくては信に不都合だ。何ならば恁しては如何だ、お島

はどうせ遊んで居るのだから、私の代に當分お島を置いて、お世話を爲てあげたが可からう、つてねえ。」

衝跳ねたのは柳之助、お島は別條も無く聞いてゐる。

「私と違つてお島ならば、若いものゝ事であるしますから、お爨婢代りにもなるし…………。」

と言つた時は、有繋にお島の目は（情無い事を言つて下さる）御母樣の顏を斜に見たのである。

「貴方の方でもお使ひなさるのに氣が置けなくて、却つて可からう、つてね。それは間に合ふことは、私よりはお島の方が餘程間に合ひますのさ。嚴君も今晩あたりは又些と氣分が惡いので、私に行かれては困るとお言ひなさるのを、直に歸つて來る約で出たのですから、其話旁今夜は行つて、明日早く歸つて參りますと云つて、無理に出て來ましたの。ですから、お島をね、私の代に遺いて參りますから、何分お頼み申します

よ。」

呆れて柳之助は何とも言ひかねた。此人を傍に附けて置かれるよりは、獨で寂しい方が遙に勝。設へば山道を行くのに、杖も欲いが、其が無いならば無いでも、無いからとて荷物を持たせられるのは迷惑。柳之助は幾と挨拶に窮つたのである。此儘に為て置けば荷物を持たせられるし、折角好意で言つてくれるものを、無下に斥るのも氣の毒なり、如何したら可からう、と頻に考へてゐる側で、母親はお島に向つて、明日からの心得を諄々と說いてゐる。

(二八)の一

折角の好意ではあるが、折角にも好意にも換へられぬので、柳之助は思切つて其折角を斥つたのである。斥りは斥つたが、隨分斥り難いのを、重くるしい口ではいとゞ語が足りなかつたので、母親は此人がお島を所惡とは知らぬから、斥る理が解らなくて、唯例の變人から否むのであらうけれど、此人の爲から云はゞ、如何しても自分かお島か附いてゐるに越したことは無いと信じたから、設むば少々可厭がつても、是非附人は置いて行くと、藥を飮ませる了簡でゐる。其も決して母親の一存ではない。お類が歿くなつてからの柳之助の樣子は、一部始終元から聞いてゐる。どうでも家内を些と賑にせねば、益鬱して了つて、彼分では病氣にもなりかねぬ、恁である、那であると、自分が見てゐて心配でならぬ通を話して、それには是非ともお孃樣を當分お貸し下さい、と懇々も陰て

元から頼むだのである。自分の所見も然である所へ、元からも然言はれたので、母親は柳之助に話さぬ前から、肚の中では丁と其に極めてゐるのであるから、柳之助の遲々した謝絕は沸湯へ水を滴すやうなものであつた。一言云へば二言に返されて、柳之助は母親から浸々說得されて、終には言句も出なくなつて、話は其に極つて了ふ。

柳之助は頗る不平であつた。けれども常に不平のやうな顏をしてゐる人の事であるから、格別目には立たなかつたが、此時ばかりは母親も憎かつた、元は怪しからず生意氣であつた、お島は固より可厭な奴！

然し子供でもないものを、無遠慮に要らぬ世話を燒いて喜ぶやうな母親でもない。但お類に敎へられたことがある、「彼人は那云ふ人物だから、此方で善いと思つたら侃々然う爲て了はなければ可けない。」實際お類は此主義で一家を支配してゐたのである。母親も始終其を見てゐて、又與つて力を盡した事も寡からぬので、今度の件に就いても其主義を執つて、

(此方で善いと思つた)から、(侃々然う爲て了つた)ので、敢て柳之助の孤立を侮つて阿母樣ぶるのでもなければ、變人を好い事にして攪亂したいのでもない。

其翌日柳之助の出勤を待つて、母親は自宅へ引取つた。お島は早速木綿裏の衣類に着替へて、袂から友禪の襷さへ出る始末。それを見ると、

「如何な事でも、貴方、那樣物を。」と元は笑つた。

「いゝえ、働きますよ。もう今日からはお客樣ぢやなくつて。」

御手傳と云ふ資格で、二階掛と爲つたのである。

彼は金縁の眼鏡を掛けて、薄色縮緬の羽織を着て、お孃樣として見たよりは、働きぶりの世話に變した娘形の方が、敻に樣子が好く見えるので、同じ御同胞でも、歿くなられた奥樣は、召物の裾を曳いて、人の働くのを懷手して立つて見てゐらつしやるのが御好であつたし、又其が好く御似合なすつたが、と元は何方かと云へば、如才無いお島の方に惚れたの

てある、若し是で眼鏡さへ無かつたら、と顔を見る度氣にしてはゐたが。左にも右にもお島は能く行屆いて柳之助の世話をした。總ての仕向が姉よりは深切で、而してなか〳〵實意もある。好く爲れるだけ柳之助は懊惱くて、三日四日と經つほど益〻怺へかねる。傍に居られたら、勿論の事、聲が聞えてさへ心地が快くないのに、否といふほど附絡はれるので、内には居禁らなくなつて、一日學校から歸ると直に飛出して、（類さんの所）へ行つた。

空は雪氣に曇つて、野廣い墓場に人見一人見えぬ。高い木と赤土と、無數の墓石と凋れた花と、鳥の音と自分ばかり、其間をば悲い風が絶えず吹いてゐる。此に來ると胸が忽ち張裂けるやうになる。忘れてゐた事も盡く憶出されて、我ながら怪しいまでに涙が出る。柳之助は隣の墓の臺石に腰を掛けて、森としてゐる四邊の閑寂を、もしや地の下に聲など爲はせぬか、と待つやうに聽澄しては泣いてゐた。吹募る日暮の風に落葉

は雨の如く降被るを、頭から一杯に浴びても、仍動かずに復らぬ事を思窮めて、折々名殘惜しげに、傾く日影を見返つては、起つにも起たれぬ氣色であつたが、今まで見えた其處の高い碑さへ模糊となるまでに暮れて來たので、

「もう行かうか。」とやう〳〵起上る。

落葉の中の二坪ばかり、是が類さんの居間か。雨曬の標の五寸角、是が類さんの今の姿か。無常は世の習とは云ひながら、見れば見るほど、考へれば考へるほど、情無いやら、慘しいやらで、如何にも見捨てゝは歸りかねたのである。いつまで居た所で際が無い、歸ると決して、その墓標に寄つて浸々と別を告げた、鷲見類子之墓、其字は葉山が書いたのである。

「あゝ、葉山！　には幾日會はんのだらう。爾來未だ會はんのだ。此方から行かんければ例も尋ねて來るのだけれど、愠つとるのか知らん。然

も無ければ、這麼に久しく來ん事は無い。或は慍つとるかも知れん、是は行かんけりや惡いな。」

葉山の所へ行けばお種と云ふものが控へてゐる。內へ歸れば、お島と云ふものが待つてゐる。柳之助は行くべき所に心を樂ませる方はない、而して行かねばならぬ所は何處も心を苦める所。從來然云ふ場合には內へ歸つて慰められた類さんの、今居る所は、折角來ても坐る事さへならぬ墓場である。墓場でも可い、窖の中でも可い、已むなくば、慰められぬでも可い、せめて顏なりとも見られるならば、其一時間の爲に柳之助は百人のお島とお種の中に十日の辛抱を爲るでもあらうに、その最も慰めらるべきものに、最も悲まさるゝが上に、苦めらるゝのである。

柳之助は進まぬ足を曳いて谷中を出た。さてそこで、葉山の所へも餘り行きたくはなし、內へは猶更歸りたくはなし、師走の寒空に闇黑を彷徨いて、心の慰む由も無いから、早く暖い內へ入らねばならぬ。進まぬ足

も寒に急がれて、彼は眞一文字に湯島の切通を上つたが、凡そ一時間の後には葉山の玄關に埃塗れの靴を脱いでゐた。

(六)の二

「あゝ、丁度好かつた。今君の家へ寄つて歸つて來た所だ。久しく見えなかつたぢやないか、帽子以來だ。」

と葉山は可懐がる。然言はれるほど面目無くて、柳之助は纔に苦笑をする。

「けれども君も些も來てくれんぢやないか。」

「彼翌々日急に名古屋の方へ出張とて、昨夜歸つて來たばかりさ。」

「あゝ然うか、居なかつたのか。」

「留守見舞ぐらゐには來てくれさうなものだ、と實は此方から恨むでゐたのだよ。」

「少しも知らんだつたものだから。」

「元に聞いたが、此頃は毎日學校へも出るさうだね。」

「あゝ、爲方が無いから出る。」
「何が爲方が無い奴があるものか、結構さ。其外に未だ變つたことがあるだらう。」
柳之助は首を傾げて、
「何も無いな。」
「否、有る理だ、能く考へて見給へ。」
指圖通り柳之助は改めて首を傾げて能く考へたが、
「何か知らん、どうも無いがな。」
「君の家に美しい人が居るぢやないか。」
之を聞くと柳之助は苦い、苦い顏をして、
「うむ彼か！」と言つた限。
「獨で承知してゐたつて、私には解らない。彼は何處の人？」
「彼は何でもない。」

「何でもないとは妙ぢやないか。何かだらう。」

「類の妹さ。」

「それ見給へな、お類さんの妹なら君にも義理の妹だ、それを何でもないとは怪しからん事だ。」

柳之助は是非に及ばず、

「それは然うさ。」

「あゝ、それぢや泊懸にお手傳に來てゐると云ふやうな事實かね。」

「然うさ。」

「始めて見たが、姉様には些も肖てゐないね。」

「肖とるものか!」と吐出すやうに言ふ。

「大層愛相の好い、氣が利いてゐさうだねッ」

「如何だか僕は知らん。」

「何といふ名だい。」

「島。」

「お島さんか、婀娜な名だ。」

「君は女子さへ見りや誰でも賞める。」

「那樣に有仰らなくても可い、好いのを好いと言ふ分には差支はあるまいぢやないか。」

「ぢや彼は好いのかい。」

「まあ、一寸好いね。」

「僕は嫌ひだ。」

柳之助は此嫌ひなお島を何とか處置したい爲に、葉山の智惠を借りやうかの所存もあつたのであるのに、(好いね)と聞いては甚だ賴もしくなかつたが、問はるゝまゝに、泊懸に來てゐる來歷を一遍話して聞かせると、

「なるほど。それでは聞いて見るほど君は先方の好意を無にしてゐる理だ。第一お島さんが可哀さうぢやないか。」

柳之助は不懌な色をして、

「君は直にお島の事を言ふ。」

「言ふ理ぢやないが、親切に世話を爲に來てさ、嫌はれてさ、結局が逐還されは、隨分氣の毒な話ぢやないか。」

「氣の毒でも何でも嫌ひなものは爲方が無い。如何かして還して了ひたいと思ふのだけれど、還つてくれとも言へんしねえ、可厭で耐らんのに傍に附いとつて囑みも爲ん事を爲て、實に懊惱くてね、僕は這麼弱つた事は無い。如何か、君、穩に還す方はあるまいかね、僕はもう彼が長く泊つとるやうなら、內には居らん意だ。」と柳之助は思込むで言ふ。

「何を行らない事を言ふのだ。內には居ないと云つたつて、誰の家なのだ。」

「僕の家さ。」

「自分の家を駈出すのかい、不見識極るねえ。」　と葉山は顔を顰める。

「それだから、何とか方はあるまいかと聞くのに、君はお島に惚れとるもんだから…………。」
「おい〳〵大概にしてくれ給へ、惚れてるとは餘りだよ。」
「けれども好いと言つたぢやないか。」
「好いと惚れたとは別さ。君はお島さんは嫌ひだらうけれど、悪いと云ふほどでは無からう、其と同じ事さ。」
「まあ其は如何でも可いとして、如何か還したいのだがね。」
「其程可厭なものならば還すが可いけれど、私の考でも、當分居てもらつて萬事の世話を頼むだ方が可からうと思ふ。有繋は阿母様の經營て、私も同意だがね。」
柳之助は鼓舌をして、
「不要だ！」　と顔を背ける。
「那様に又可厭なものなら始から斷れば可いのに。」

「今になつて那樣事を言つたつて所爲が無い。」
「それは此方で言ふことだ。」
葉山も母親と同意といひ、且はお島を好いと云ふ人であるからは、智惠を借りたいにも、到底出來ない相談と思つたから、もう言出すまいと爲たが、是から還れば、又お島を見なければならぬ、と思ふと悚然とする。是ばかりは如何でも怺へることは出來ぬのであるから、其に就いて智惠を借りるには、此葉山より外に人は無いと考へて、
「何と云つても僕は可厭なのだから、助けると思つて工夫をしてくれ給へ、ねえ僕は賴むのだ。」
「君が然う言ふなら然う爲るも可いけれど、考へて見たまへ、誠に理窟の合はない話ぢやないか。」
葉山の聲は漸く鋭い調子を帶びて來る。
「ねえ、他が折角深切に世話をしてくれるのを、嫌ひだからと云つて斷

る？　人情として出來ないことだ。幾許嫌ひだと云つても、少しは其深切に絆されさうなものだがね、君のやうな變人は全く多度無いよ。」

時に因ると、葉山は其平生と打つて變つて、極めて率直に、極めて悃誠に、飽くまで痛切に言はねば止まぬ。其時には自から冒す可らざる氣力があつて、必ず人を動かすのである。柳之助は面目無げに熟と俯いた。

「君の目にも能く世話を爲てくれると見えるのだらう。見える？　然うだらうとも。それで君は嬉しいとも何とも思はないかい――如何だね。默つて居る所を見ると、嬉しくはないと見える、是は怪しからん！　志て見ると、君がお類さんの事を思つて頻に零す涙、あれは空涙だね――あれは僞だね！」

「何故？」　と柳之助の尖聲を應けて、

「何故？　僞に違無い！」　と葉山も劣らず意氣込む。

「何故？」　と柳之助の目は彌輝く。

「それぢや、他の深切も嬉しいと思はなければならない理だ。」
「思ふ！　僕は思ふとも。然しお島は僕は嫌ひなのだから爲方が無いぢやないか。君は無理な事を言ふよ。僕が類を愛して居るならば、お島をも愛さんければならんと謂ふけれど…………。」
「誰が那樣言を云ふものか。」と手酷く極付けられて、
「然うかい。」と柳之助は凹むで了ふ。
「私の言ふのは、細君に其程情があるならば、他にも相當の情が無ければならない、ねえ、忠臣は孝子の門に出づさ。一體君は妄に人を嫌ふけれど、嫌ひにも二樣あるよ。第一が不吃嫌ひさ、所謂虫の好かないと云ふ奴だね。第二は理由が有つて嫌ふのだ、恨が有るとか、說が合はないとか、善人が惡人を嫌ふとか。同じ嫌ひでも是は可いが、君のは第一の方で、極質の惡いのだよ。それも性分なら是非も無いけれど、其が爲に他の深切まで無にすると云ふに至つては、不都合だね。切めて深切にさ

れたらば、今まで嫌ひだつたものも、好きと云ふ迄には行かずとも、嫌ひでないくらゐには成つてもらひたいものだね、如何しても然う行かないかい。」

「僕は恁云ふ人間なのだから。」

「さあ、然云ふ人間だから困ると云ふのだ。」　と葉山は稍喋り労れた體で、息を繼ぎながら少時柳之助の様子を眺めてゐたが、

「それともお島さんに内に居られては、大きに迷惑するやうな事情でもあるのかい。」

此は如何なる意味であるのか、柳之助には解りかねたのである。

「迷惑するのは、可厭なのだからさ。」

「可厭なのは？」

「嫌ひだからさ。」

「嫌ひなのは？」

「嫌ひなのは…………可厭だから…………。」

「それぢや逆戻だ。お島さんが君の世話を善く爲ると云つて、一體甚麼鹽梅に世話を爲るのだね。餘り世話を爲過ぎるので、それが可厭で、還して了ひたいのかい。」

「其も有るさ。」

「はゝあ。」　と葉山は口を閉いたまゝ考へてゐる。其(はゝあ)が極めて怪しげな(はゝあ)であつたので、柳之助は怪訝な目をして、其(はゝあ)の後に來るべき言を私に待構へてゐる。

「それぢや樣子が變なのだね。」

「別に變な事は無い。」

「無い？　君が懊惱がるのは、お島さんが何か大いに女房氣取で世話を爲るからぢやないのかい。」

「女房氣取？　然うさな、然云つても可いかな。」　と頻に胸の中で解

釋してゐる。葉山は矢庭に
「然うだ！」　と膝を拊つて、
「確乎したまへ。」
「何が？」
「君は惚れられてゐるのだよ。」
「馬鹿な！」　と柳之助は可恐い目をする。
「馬鹿なことがあるものか。女房氣取で君の世話を爲ると云ふのだらう。それが惚れてゐるからさ。」
「惚れてなんぞ居やせんよ。」　と欝陶しさうに横を向く。
「惚れられてゐるか、ゐないか、其を感じない奴があるものか。」
「だから惚れてゐやせんと云ふのに。」
「惚れてゐないものが、何で女房氣取に世話をする？　其が何よりの證據ぢやないか。」

「證據でも何でも、僕は可厭なのだ、嫌ひなのだから、如何かしてくれ給へ。」

「然う聞くと益不便だね、可いぢやないか、最少し一所に居て遣つたつて。」

「可かん可かん！」　と膝を搖つて柳之助は其耐ふべからざるを示した。

葉山は柳之助が（女房氣取）と云ふ語を拒まぬ所から、切當お島は惚れてゐるものと早合點をしたのである。如何にもお島が殆ど（女房氣取）に世話をするのは事實に違無いが、その（女房氣取）は决して柳之助の女房氣取ではなくて、女房の女房氣取で。お島の（女房氣取）の心の内には一點も柳之助に對する戀は無い、畢竟は彼の能く氣の着くのと、世話好とが過ぎる爲に、女房的に傾いたまでの事である。柳之助も固よりお島が然れてゐやうとは、假にも思はなかつた。然し言はれて見れば、成程その

世話の行屆き方が(女房氣取)とでも謂ふべきであるから、(然云つても可いかなあ)と獨語ちたので。(女房氣取)なる語は世上の慣用に於て決して非戀ではない、三句は去らねばならぬ。さては葉山が一句で捨てなかつたのを、早合點と云ふのは寧ろ酷でもあらう。男の方では好かぬのに、女が片思で、執念く附絡ふと云ふ有る例の、それは義理にも人情にも換へられず可厭なものさうな、今柳之助のお島に於けるのは即ち其型である、と葉山は恁う考へたから、それでは柳之助の可厭がるのも萬更無理ではなからう、と彼は變人を責める念も融けて、片思の人も不便ではあるが、男の性に合はぬのも、それまでの縁で致方が無い、氣の毒ながら手に掛けずばなるまいかと竟に覺悟をした。覺悟はしたやうなものゝ、葉山も當面其手段には窮つて、姑くは唯「然さね〳〵。」と言ふより外は無かつた。種々に工夫を凝したが、何も柳之助あたりが思付きさうな鼻元思案ばかりで、賴まれたほどの智慧は如何振つても出ぬので、終局に

は匕を投げて、

「これは窮つた！」と太息を吐く。

「君が窮つちや窮るよ。」と柳之助は氣が氣でない。

「何しろ先方の感情を害しては拙しと云ふのだが、根が感情を害する事件なのだからね――尤も其處が難しい所だから、他の智惠を借りるのだらうけれど――此智惠は一寸無いよ。」と又熟と考込まれるほど柳之助は遄出して、

「甚麽のでも可いよ、僕には全で方案は無いのだから。」

「道具でも貸しは爲まいし、善いのだの、惡いのだのと、別の箱に入れてあるのでもないやね。何しろお島さんだけなら如何とも始末が付くが、阿母樣と云ふものが控へてゐるからね、これが餘程面倒さ。左右親と云ふ奴は何かに就けて邪魔にされる、昔から割の合はない役だよ。」

と苦しい中で猶且贅辯を言ふ。

「僕は君、母親は所好なのだよ、少しも邪魔にしては居りはせんよ。」
と極眞面目で言へば、葉山は呆れもしないと云ふ顔で、
「漫然洒落も言へない！　今のは洒落だよ。折角洒落を言つても、傍から註らなければならないやうぢや、洒落の効が無くなるわね。」
柳之助は目が覺めたやうな聲で、
「あゝ、洒落か。」
「あゝ、洒落かぢやないよ。」
憤たくもあり、可笑くもあり、横肚が奇痒たくなつて葉山は笑ふ。
「何處が洒落なのだ？」
柳之助は飽くまで眞面目でゐる。
「洒落に番地があるものか。」と今度は自分の洒落に感動して、葉山は大いに笑ふ。何故とも解らぬが、（洒落）に（番地）と云ふ配合が可笑いので、柳之助も一所に笑ふ。葉山は又直に他を向いて、少時考へてゐた

が、
「どうも今急には出ないから、今夜寝ながらゆつくり趣向して置かう。」
「ぢや明日かい。」
「明日又學校の歸途に來るさ。」
「間違無いだらうな。」
「如何か考へて置くよ。」
「然うかい。」と柳之助は茫然志てゐる。
「何を又爵いでゐるのだ、一盃飯まう。」
「僕は何だ……………飯の方が好い。」
聞取れなかつたか、葉山は聞正す、
「何が好いつて？」
「飯の方が。」
「飯?!　まだ吃らないのかい。そんなら早く言へば可いのに、要らない

我慢をしたものだ、ぢや腹が空いたらう。」
「隨分空いた。內に歸りや有るけれど…………。」　と極の惡いやら、氣の毒やらで口籠る。
「飯の無い家があるものか。」
葉山は早速手を拍たうとすれば、柳之助は慌てゝ止める。止めた所で急に言出しかねて頭を搔く。
「如何したのだね。」
思切つて柳之助は、
「給仕が付いちや困るな。誰も出て來んやうにしてくれたまへ。」
「お易い御用だ。宜しい〳〵。」　と葉山は手を鳴らす。

（七）の一

柳之助は翌日又葉山を尋ねて遂に一策を授かつて、歸ると直に机に向つて何やら書出した。お島は傍に居て見れば手紙。何の手紙で、何處への手紙であるか、それは問ふ必要も無ければ、見る必要も無し、又覗くべきでもなければ、柳之助が覗かせも爲ぬのであるから、お島は唯手紙を書いてゐると云ふだけを認めたのである。旋て筆を擱いて、こそ〳〵と卷收めて、狀袋に入れて、上書を爲た。何と書いたのか、其もお島は見なかつた。すると柳之助は其を持つて座を起つので、

「あら、兄樣、お手紙なら私が持つて參りますよ。」　とお島も遲れじと起てば、

「何、可いです。」と振拂ふやうにして柳之助は座敷を出る。

手紙を出すに違無い。然ならば毎も他に出させるのを、秘すやうな氣勢

は合點が行かぬ。然思へば、書いてゐる中も自分の方ばかり氣にしてゐたが、何の手紙て、何處へ遣るのだらう、と爰に始めてお島は、(どうも變だ。)と直に後を追つて二階を下りたが、はや柳之助は見えなくて、表の格子の啓く音がする。元は居る。

「兄樣は？」

「今お出掛になりましたよ。」

「何方へ？」

「郵便局とかへ行くと有仰つて。」

「あゝ然う。」 とお島も拍子拔がして、二階へ引返した。

彼は自分の邪推を悟つたのである。郵便局へ行かねばならぬ手紙とあつて見れば、元に投函させる理にはゆかぬ、自身に持つて行くのは是は當然。其をば變に思つたのは此方が早計つたのである。

手紙を書いてゐるのを、他に見られるのは誰しも不好なもの、強ち秘す

ではないが、見せたくはないもの、と益自分の非を悔いてゐると、表の格子の啓く音がする。おや！　と思ふ内に階子を昇つて來る音がする。又おや！　と思ふ所へ柳之助が入つて來る。郵便局へ行つたと云ふのではないか。郵便局までは二町未滿もあるのではないか。駈けて行つたにしても、未だ行着かぬほどの時間に、歸つて來るとは是は異しい！

「何方へ行らしつたの？」　とお島は耐りかねて訊ねると、

「郵便を出しに。」

函なれば八九間先の角に在る。時間は其處へ行つたほどであるから、お島は其と察して餘は聞かずに、

「郵便を出しにいらつしやるなら、元が參りますのに。」

柳之助は默つて机の前に坐つて了ふ。

「何故今日に限つて獨で……。」　とお島は艴然として、益劇しく流眄

に挂けたが、柳之助は脊面になつてゐたから、其は石に矢を射るやうなものである。然しお島は(立つ矢もあるものを)、と云はぬばかりに姑く見遣つてゐた。今日にも限らぬ、實に此頃は往々と然でない爲方が見える。自分に言ひさうな用をば元に言ふやうな事がある。それも恁云ふ氣の人物であるから、と段々勘辨もして見たが、何やら然ばかりでもないらしい所もあるやうに想はれて、氣拙くないでも無かつた折から、此一條と二度まで挨拶を爲ぬ無愛相とが、酷くお島の心地を惡くしたのである。因で彼は自ら屑くして矢庭に二階を下りて了つた。其音を聞きながら柳之助は可恐いものを見るやうに振向いて、

「あ、慍つた！」

慍つたお島は其晩は遂に二度と机の傍に來なかつた。氣の毒な事をしたとは柳之助も思ひながら、又懊惱なくて可いとも考へる。然う考へる中にも、氣の毒なと云ふ念は絶えず往來して、餘り好い心地ではなかつた

が、明る朝になると、お島もはや機嫌を直して、毎に變ることも無い。恁なつて見ると、昨夜の氣の毒は忽ち忘られて、寧そ又慍らして遠けたくなる。可厭で〳〵ならぬお島に三食ともに給仕をされるのが、毎日の苦痛で、渇いて飲まうとする水から欬が起つやうな想で、お島の顏を見ると、柳之助は半分の食慾を減じざるを得ぬ。家内なるもの丶快樂が十とすれば、寡くとも其四は膳の上に無ければならぬ。外で錢を費はうでもない柳之助は況て人一倍家内で慰められてゐた。類さんの給仕でなければ、決して箸を把らなかつたものが、是では彌滿足の出來やう理が無い。彼は其樂を享くべき時に最も深く苦まされるのであるから、彼のお島に對する不快の念は一食毎に増長すると云つても、敢て差支は無い。柳之助は近頃自分の窶れて、色澤の惡いのを見て、是は畢竟お島の爲に消化力を碍げられて、十分に飯が食はれぬからではあるまいかと疑つてゐる。けれども此朝は平生よりも食が進むだ、葉山に授けられた策も今

日中には行はれて、明日から光風霽月の天地に呼吸するのであると云ふ希望の爲に勵まされて、例刻に柳之助は出勤した。お島は食事をして、二階の掃除をして、浴に行つて歸つて、身仕舞をして、丁度了つた處へ、車の音がして、客來の樣子であるから出て見れば、思も寄らぬ母親が來たのである。

傍に居られては煙たい母親でも、少し遠つて居て顏を見れば、飛立つほどに可懷い。早速二階へ案內して、

「よく來てねえ。」とお島は珍しさうに摩付いて坐る。母親は然ほど嬉くもなさゝうに、

「あゝ。」と鈍い返事をして、お島の白粉の薄過るのを何か言ひたさうに見て、

「鷲見さんは御出勤かい。」

「あゝ毎日御勉强よ。でも阿母樣能く出られてねえ、內も忙しいでせう。」

「あゝ。」

「何か用なの？」

「あゝ。」　と母親は何やら屈托してゐる。その氣色でお島は屈托をしてゐるのは其用であらうと曉つた。若しや自分に關つた事ではあるまいかと思へば、善かれ惡かれ氣になつて、

「何の用なの？」

「お前の事でさ。」　と母親は罪ある如くお島を見る。

「私の？」　と胸は悸々、

「何？」　と目を瞪る。

實は此方に來る一週間ほど前に薄々縁談があつた、それをお島は小耳に挾むでゐたから、多分は其が纒つたのではあるまいかと想つた、其外には自分の事で母親が飛で來るほどの用事は無い理、それほどにして叱られるやうな咎のある覺は無し、十が九までは縁談と合點したのであるが、

其にしては母親の樣子が些と異しいので、然して見れば緣談でもあるまいし、何とも推測は着かぬけれど、(お前の事)とあるからは自分の事へさあ何であらうか、と切ない片唾を嚥むでゐると、母親は又お島を見向いて、前簪の顚倒になつてゐるのを一寸正して、

「今朝此から手紙が來てね……………。」

「兄樣から?」　とお島は覺えず顏を突出す。

「あゝ。」

「然う?」　とお島は昨夜の事が思合される。彼の樣子と謂ひ、母親の氣振と謂ひ、何に爲ろ吉い耳ではあるまいと思へば、心弱くも胸は騷ぐ。

「而して兄樣から何と言つてあげて?」

「お前に還つてもらつて、私に來て居て欲いつて。」

お島は自分の耳を疑つた。

「何てすつて？」

其顔色を見ると、母親も二度言ふには忍びなかつたか、默つてゐれば、

「私に還れと云ふの？　えゝ、還りませうとも！　昨夜書いて居たのは那樣手紙……………然う、それで阿母樣今日來たの？　然う。」

何氣ない躰を見せやうとするほど、お島の怺へかねる胸の内は猶顯れる、頰の邊は燃ゆるやうに赤くなつて、

「何云ふ理でせう。」と聲の調子さへ變つて來る。

「何も那樣に慍らなくても可いぢやないか、異しな子だねえ。」　と母親は笑を作つて、

「畢竟お前ては若いから何と無く氣が置けて窮屈だから、それで年寄の私の方が可いといふのさ。」

「然う手紙に書いてあつたの？」

「書いてはありはしないけれど。」

「それおや如何だか判りはしない。阿母樣其處に手紙を持つてゐて？」
「置いて來たよ。」
「何と書いてありました。」
「お前では馴染が薄いから何も遠慮があつて、用が賴み難い――まあ謂へば、お客が來てゐるやうで氣屈でならないから、私と代つてもらひたいと云ふのさ。」
「何日私がお客のやうに爲てゐたらう。」
「然うは書いちやないけれど。」
お島は少時考へてゐたが、忽ち手巾を掀却けて、
「それおや私は嫌はれたのね！」
「然云ふ事情おやないよ。」と口には言ふものゝ、母親も決して快い心地は爲ぬのである。お島は顏の熱氣で騷る目を襦袢の袖で二つ三つ擦つて、後は眼鏡を拭き〳〵、

「然うに違無いのよ。」
或は然うに違無いと思ふのか、母親も姑く續く語は無くて居たが、旋て氣を變へた氣色で、
「何かい、不斷那樣やうな樣子が見えてゐたかい。」
「私が嫌はれてた樣子？」　とお島は悔しさうに故と言ふ。
「又那樣事を。嫌ふと云ふ事情ぢやないけれど、氣屈で迷惑さうな樣子でもさ。」
「え丶、それは始終那樣樣子。」
どうせ嫌はれたからにはと云ふ氣で、お島は捨鉢な挨拶をする。
「お前は嫌はれた〱とお言ひだけれど、何ぞ嫌はれるやうな事でもお爲なのかい。」
是こそ母親の最も聽かむと欲する所で、始めお島を見て不興であつたのも、正に之ばかりを懸念したからである。と云ふのが、母親の胸中には

別に深意のあるゆゑて、それは柳之助もお島も、恐くは阿父樣さへ餘り深くは知らずに、唯母親一個で會得むでゐる一件の事がある。柳之助がお島を嫌ふと云ふ事は、實は其件とは根本的關繫があるのであるから、それで母親は然も無い手紙の一條も怪しからず苦になるので。

「私は別に嫌はれるやうな事をした覺も無ければ、お氣に入らうとも爲やしない。だから私は歸るわ、兄樣に嫌はれたつて些も困らなくつてよ。」

思へば思ふほどお島は胸に据ゑかねて、

「私は這麽悔しい事は無いわ！」　と言ふより蚤く手巾を顏に掩て、飮泣を始める。

「何だね、お前は。」　と言つては見たもの丶、嫌はれたとしたらば、然ぞ娘氣には悔しからう、泣きたからうと、母親も不便の心の起らぬではない。まして可愛い我子の事である、なるほど惡い所を惡いと言はれてさへ、親の情では快い氣持はせぬものを、嫌はれたと云ふ事情ではな

からうけれど、自分と代つてくれは餘り嬉しくなかつた。自分は還されても娘は來て居てくれの方が、親の身にしては好ましい。お島に泣かれる迄は、然までに深く母親は考へなかつた、唯一個で會得でゐる件にばかり屈托して、何ぞお島が我儘な事でもあて、柳之助に疎まれたのではないか、と寧ろお島に對する不興であつたが、さて此塲に窺むで見ると、我子は我子で、矢張可愛い。然し柳之助がお島を嫌ふと云ふ事は、手紙の表にも無ければ、お島に聞いた所でも、別に恬と云ふほどの事は無い。その無愛相は性分で、變人なのも今更始つた理ではないから、何かに就けて打解けぬと云つて、其をば直に嫌はれた證據に取ることは出來ぬ。彼此考合せて見るに、嫌はれたと確に言斷るほどの目處は無い。因で母親も一時は疑つたやうなものゝ、全く例の偏屈から出た事と思直して、お島を慰めたが、本人は容易に得心は出來なかつた。假令嫌はれたでないに爲よ、喜ばれたのではない。又嫌はれたならば嫌

はれたて一向管はぬ、柳之助などに好かれなくても困らないとは思ふが、是までに氣を着けて世話もした、働きもしたものを、何が不足で中途から還されるのか、其がお島は悔しくて〳〵ならぬ。自分は從來何處へ出ても、必ず氣が着くと云はれた、如才無いとて持てた、顏さへ出せば、お島さんが來た！と他から嬉しがられぬ事は無かつた。それほどの自分とお島は私に信じてゐる。此度泊に來てゐるのも、何も自分の酔興ではない、種々母親にも賴まれたし、柳之助が寂しがつてゐる樣子を聞いて見れば、あゝ氣の毒なといふ心から、故々世話を爲にも來たのである。其世話を爲るに就いても、姉樣への回向と思ひ、兄樣が可哀さうとも思ふから、有らむ限の力を盡した意なので。設是程の事を他で爲たならば、甚麼に喜ればるであらうと思ふのに、中途から還されるとは何事であらう。それほど自分は足はぬものであらうか、不束なものであらうかと、お島は這麼恥辱を搔かされた事は無いやうに、返す〳〵も唯其が悔しい

のである。

固より母親の知つた事ではない、母親に向つて怨を抒べる筋は無い、又餘り言過ぎると叱られるに極つてゐるから、もう母親には言ふまい、けれども、言はねば濟まぬ胸の内、言ふ人には屹と言はなければと、やうやう涙を拂つて、柳之助の歸來を晩しと待つた。母親は又外に苦勞があるので、是も浮かぬ顏を爲て、互に身に沁みぬ話を爲てゐた。

(七)の二

三時少し轉ると柳之助は歸つて來た樣子。元と話す聲が聞えるので、母親は指圖をしてお島を出迎に起たせると、起ちは起つたが、階子を下りると殆ど柳之助と擦違に、すうと離れて小座敷へ入つて了つたが、其姿を見れば(悔しい)が忽ち上衝げて、扉を閉てると與に、お島は潸々と涙を零した、その又胸の内は沸返るやう。

阿母樣さへ居なければ、追駈けて行つて言ふだけの事を言つて遣るのだ。而して理屈が違つてゐたらば、兄樣も何も有るものか、謝罪せて遣る……―端然と手を支いて御辭儀をさして、立派に謝罪せなければ承知しない。劈頭、どうせ貴方の御細君ぢやありませんから、姉樣のやうな理には參りません、と然う言つて遣らなければならない。然すれば彼人の事だから、必然忸怩して碌に口も利けはしない、嘻々した聲をして、決して那

樣理ぢやないとか何とか曖昧なことを言つて、狼狽するに違無い。然う爲れば猶言つて遣る、どうせお氣に入らないのですから、早速歸ります。長々どうもお世話樣になりました、然ぞ御迷惑でございましたらう。お氣に入らないものを、私の方でも切て置いて下さいましとはお頼み申しません、自分の家がありますから、自分の家へ歸ります。

家への土産に、又私の後學の爲にもなることですから、何處がお氣に召さないのですか、其を聞かして下さいましと、管ふ事は無い、思入れ詰誣を言つて遣る。管ふ事があるものか、甚麼事があらうとも、二度と再び此家へ來るものか、死んだつて、殺されたつて來るものか。決して決してもう〳〵來ることではないから、何でも管はず言ふだけの事を言ふ。而して、今迄貴方の爲には是々恁々働いてあげましたが、貴方は其が判りますかと、少し酷いけれど言つて遣る。それくらゐの事を言はなくて償ふものぢやない。第一私の爲た事に何處に不足があるのでござ

いますよう!!　何處にても不足があるなら、言つて御覽なさいまし。自分ては不足の無い意でございますが、貴方のやうな萬事にお氣の着く、行屆いた方の目から御覽なすつたら、私のやうな不束者の爲る事は、然ぞお氣に召さないだらけでございませうから、何卒御遠慮無く有仰つて下さいまし。

宛然敵の柳之助が目の前に居る氣になつて、言ふだけの事を言つて去る其場の光景の想像が、終には事實であるやうに思做されて、

「えゝ、悔しい！」　とお島は我知らず片膝を疊に撃きつけて、手巾を咬裂いて、身悶をして、悔し涙を零す。

えゝ、もう言つて遣りたい、言つて遣りたい、けれども、阿母さんが居るから、那樣事は言へない。彼人單身なら屹度言つて遣る、然したら仂ない女だと思つて吃驚するだらう。那樣人に吃驚されたつて管ふものか、思入れ吃驚さして、可恐い女だと思はせて遣る方が可いとも。何ぼ女だ

つて這麼に恥を掻かされて、默つて引込むでゐるやうな、那樣意氣地の無い事があるものか。是非、是非！　言はなければ承知爲ない、如何かして言つて遣らう。

考へれば考へるほど、お島は激して、衝と起つたが、

「あゝ、阿母樣が居る！」　と靑菜に沸湯を沃けたやうになつて、ばつたりと又坐る。坐れば考へられる、考へれば我慢の爲されぬほど悔しい。到頭一枚の手巾を燐鰯のやうに裂いて了ふ。

（七）の三

此間二階では絶えず話聲がしてゐた。何を言ふとも聞取れぬけれど、折折柳之助の聲が能く聞える、其度にお島は憤悶する。

樣子は知れぬが、如何にも母親とは打解けてゐるらしい。變人だと云ふからは、誰にも無愛相かと思へば、母親とは那麽に親しく話をする癖に、自分には如何であらう！　寄らず觸らぬやうにして始終遁げてゐる。變人であるから誰にも那麽かと思へば、母親には然うでない、斷然自分は嫌はれたに極つてゐる。那麽人物に嫌はれたかと思へば、我ながら餘り情無い、とは謂ふものゝ、又能く考へて見れば、腹も立たない。那麽理の解らぬ人物に嫌はれたからとて、其が如何したのだ！　可厭で幸ひ、好かれては迷惑。いつそ此儘無言で歸らうか、とお島は思つても見る。同時に又考へたのは、どうも阿母樣の語氣では、私が這麽恥を掻かされて

も、那様に悔しいとは思つてくれないらしい。而して何方かと云へば、少々誤つても私を置いてもらひたいやうな樣子。先から何を話してゐるのか知れぬけれど、もしや彼人を宥めて、那云ふ不束なものでも我慢を為て、最少し置いて遣つてくれなどゝ、囑みでも為てゐるのではなからうか、噫、可厭な事、可厭な事！　誰が？　自分は幾ら其氣でも、阿母樣が何と話を為てゐるのか知れない。那樣事でもあつたら恥の上塗、私は未だそれほど耄碌は為ない。甚麼話を為てゐるのだか、聞きに行かなければならない。もし那樣話であつたら、是から直に歸つて了はう。

恁う覺悟してお島は小座敷を出た。徐に階子を歷つて、次の間の障子を啓けるまでは、密々と聞えた聲が、俄に何か掩被せたやうにぱつたり歇むで、故とらしく煙管を撃く音がする、其は母親である。阿母樣まで他を袖にして、えゝ、水臭い、とお島は益腹が立つ。

區分の紙門を啓けかけると、撞着るやうに顏を見合せた母親は、

「少し今お話があるのだから、お前さんは下へ行つておいて。」

お島は胸が塞つて言が出ぬ。此悔しさは退くにも退かれず、其儘熟と立つてゐると、

「よう、少し下へ。」　と言ふ母親の目は更に多くの言を含むで、お島の眉間を射る如く見る。

母の言には背かれぬ、が柳之助の姿を見て一言も云はずにのめ〳〵と往かれうか、又水臭い母親に向つて多少の恨の無い理にはゆかぬ。彼此默つて爰は引込みかねた。

散々怨を言ひたい柳之助は空々しく彼方を向いてゐる、頼に思ふ母親には逐立てられる、而して自分は四五寸紙門を啓けたばかりで、入ることもならず、然も間拔に立たされてゐる。その極の惡さと悔しさは何とも彼とも謂はれぬ。此胸を快くする爲には、如何なる目に遭はうとも決して苦しくないとまでに思つた。お島は上衝げる涙を咬むで、

「私は是から歸りますから！」と言ふが否や紙門を礑と閉てる。

「何の事です！」と母親の聲のする頃には、階子を亂次に駈下る響がして、その中で何を落したのか、鏘然鏗然！――お島は眼鏡を破して了つたのである。物音の氣立しさに驚いて老婢は臺所から濡手を拭き拭き駈着ける。其途で破れた眼鏡を拾つたが、之に就けても尋常事ではあるまいと思ひながら小座敷の扉を啓ければ、這は抑、お島は泣伏してゐる。元はおろ〳〵聲で、

「まあ、お孃さん如何なさいました。」

嬉しくも問はれるほどお島はいとゞ悲しい。今までは忍音に泣いてゐたのが、堰きかねて衝と聲が出る。

「如何爲すつたのでございます。まあ、お眼鏡まで這麼に爲すつて。」

眼鏡と涙とは其實何等の關係も無いのである。然し元は何ぞ關係の有るやうに思つた。三度聞返さるゝまで、涙を禁めかねたのであるが、

やう歔欷ながら、

「私は悔しいわ。」　と辛くも言つて、後は又暫く泣入る。段々励られて、竟に其（悔しい）事情を話せば、元は他人でありながら母親のやうに辛くはなくて、

「それはまあ飛でもない事を！」　と今更主人の變人に呆れ返つた。

有繫に年の効は、其と口へ出して主人の沒分曉を喚散すやうな事は爲ぬ、なるほど飽くまでも主人の曲つてゐる事、お島の腹を立てるのは理の筋を言つたのである。然し彼は主人に成代つて重々其心得違を詫びて、お島の心を和げやうと努めた。而して、今往かれては自分一人で何程困るか知れぬから、此年寄を助けると思つて、最少しの所胸を撫つて辛抱をゐてくれるやうにと、お島が來てから家の爲になつた次第を陳べて、

「御存の通り旦那は那云ふ一國者でゐらつしやるけれど、お肚にはもう少しの毒も無い、宛然子供のやうな方なのですから、何卒まあ惡からず、

決してお氣にはお留めなさらないやうに。」

と元は幾度も頭を低げて詫るやら、宥めるやら、語に語を盡した。お島も今は氣の毒になつて、元の手前は泣くに泣かれず、涙は拂つて見せたが、柳之助に對する(悔しい)の念は、之が爲に一厘でも減じたのではない。寧ろ、他人の元さへ這麼に思ふものを、其世話をされた當人が難有いとも思はぬのみか、こつそり母親へ手紙を出して、躰好く逐拂はうとは何事であらうと、なほ〳〵其處置が然でない、其了簡が憎いと執念は益深くなる。

この元が柳之助の母親であつて、此樣に手甲摩つて詫びたにしても、お島は決して恨を忘れやうとは思はぬ。彼が奉公人であるからは猶の事那まで言つてくれる志は嬉しい、無に爲たくはないけれども、誤られる筋が違ふからには、勘辨の爲やうも無ければ、又勘辨を爲べきでもない。元の謝罪は元の謝罪、柳之助への恨は柳之助への恨、とお島は其二件の

膳の納所を別にして、元の前は躰好く作へて左も右も濟した。

程無く夕飯の膳立が始まる。お島はもう〳〵這麼家の用は火箸一本持つまいと覺悟はしたなれど、年寄の元を一人動かすのも勦しゝ、先の種々言つてくれた深切も忘れられぬ、彼との馴染も今日が別と思へば、義理からも情合からも手傳はずには在られなくなつて、此家の爲に働くのではない、元の手傳をして遣るのと極めて、お島は小座敷を出たのである。旋て座敷に膳が並べは、元は二階へ知らせに行く、續いて二人の徐々と下りて來るのを合圖に、お島は飄然と其處を出て、又小座敷へ入つて了つた。

柳之助も母親も席に着いた、――お島は出て來ぬ。二人は箸を取つた、――未だ出て來ぬ、因で元は迎に行つたが、姑くすると悄々還つて來て、

「お孃さんは御飯は召上らないと有仰います。」

(八)の一

翌日の午前お島母子は二挺の車を揃へて柳之助の門を出たが、それぎり母親も還つて來ず、鷲見の家内は再び其寂しい主人と老婢の二人になつて了つた。柳之助は引續いて出勤を怠らず、朝々例のステッキを挈げて躘踵と出て行つては、躘踵と歸つて來る。生徒の受は不相變善い。授業に於ては決してお島を取扱ふやうに不深切なものではないのである。彼を(妻が)先生と呼ぶ同僚も、其(妻が)を失つた後の柳之助を見て、別に變つた樣子も無いのを酷く怪むだ。休憩の間も人とは話を爲せぬやうにして、毎も窓の側に立つて、雨手を背後にして外を眺めてゐる。折には書を見てもゐれば、莨も吃ふ、それらは皆舊の通で、唯一事變つたのは、(妻が)と言ふ言を口に爲ぬやうになつたのである。或人は之を或人に不審えた、すると、乙の或人は笑つて、

「當然ぢやないか、無は指す事は出來ない

「然でないよ。」　と甲の或人の曰く、

「無の現在は無ぢやけれど、過去よ、過去を言出さんのが餘程不思議ぢやないか。」

誰も誰も此疑問に對して確答を與へる者は無かつた。（妻が）先生とまで仇名を取つたほどの柳之助が、弗と其（妻が）何であつたとも、恬であつたらばとも言はなくなつた。

外に異常の點を覓めたなら、顏色が憔悴して、何となく氣力が衰へたが、始終惘然と窓の外ばかり眺めてゐるやうな風であつたから、彼等の目には、平生も彼の顏色は憔悴して、氣力は衰耗して見えたので、今更際立も爲ぬのか、舊の仇名をそのまゝに彼は（妻が）先生と呼れてゐる。或人は此名の今は妥當でないことを說いて、プロフエツサア　キンドウ（窓）と改めるが可からうと言出したが、行はれずに了つた。

學校に出ては此有樣、家に歸つては全く二階に閉籠つて、寢てゐるのか起きてゐるのか知れぬほど閑寂に在てゐる。せめて食事の時には、元が頻に話を爲るやうに仕向ければ、煩惱がつて、他の言は能くも聞かずに、思出しては、

「元、寂しいなあ！」とばかり。言はれる元の身も隨分寂しい、お島に歸られて落膽してゐるさへあるに、主を見ればいとゞ氣が滅入る。四十九日も過ぎた此頃でも、未だ〳〵悲歎は少しも薄がぬ樣子で、折々日を泣腫してゐるのを見る。其當座のやうに取亂してこそゐないが、思窮めてばかりゐる證は、始終愀然として在る。此分では如何なるであらう、病氣でも出なければ可いが、と元は其も亦苦勞になる。何程傍から氣を揉むだ所で、別に爲む方も無い、自分も配耦を喪して、經驗がある、まして稼人の夫に先立たれたのであるから、其悲歎は可愛い奧樣に別れたやうなものではない、それでも日子の經つに就けて、終には何か恬か

忘れられるもの。半年も一年も然う〱思窮めてゐられるものではないから今に、と思直しても、氣の滅入ることは猶且滅入る。

柳之助は近頃遽に甚しく思頽れて、間さへあれば太息を吐いてゐやうと云ふので。有繫に學校に出てゐる間は、氣の浮かぬながらも左にか右にか紛らされてゐるが、内へ歸るとなると、其途から漸々欝出して、門を入ると倶に胸は曇つて、座敷へ入る、二階へ昇る、机の前に坐ると、今まで辛くも紛らしてゐた思が一時に紛と寄せて來て、埓も無くお類の事を考へさせる。其が爲に柳之助は悲み、悔み、嘆き、慕ひ、恨み、儚み、而して遂には泣かされる。漸く其涙を抑へたかと思へば、又追懸けて泣かされるまでの順序を反覆される。愁環端無て、如此く同じ事を反覆し反覆しゐても、涙は倦くことを知らず毎も新しく催される。但之を幾度と無く反覆す心は遂に勞れて、其苦に堪へかねると、忽ち机の傍を起つて、例の室の内を頻に運動する。

其最能く愁環の廻るのは夕暮である。四邊の次第に黯くなるにつれて、凄寥は逼つて來る、哀は頻に誘はれる、其時こそ胸も張裂けるばかりに切思めて、在るべき心地も爲ぬやうに覺える。或夕暮特に耐りかねて、戸外へ飛出して、近邊を行遍つて見たのであるが、氷を擦したやうな寒い寒い風の中でも、家の内よりは其思を紛らす便は有つたか、翌日からは黄昏になれば必ず戸外へ出なければ愜はぬやうになつて、其時刻には六七町も歩いて歸つて來るのが、毎日の習慣となつた。憊して歸つて來ると、恐るべき夕暮は過ぎて燈が點いてゐる、夜になつてからは一時机に向つて勉强を爲る。柳之助は聞ゆる勉强家である。悲の爲に久しく其勉强を廢してゐたのが、學校へ出るやうになつてから氣を取直して又始めたのも、究竟は己の好む所で憂を忘れやうと云ふ氣。彼は世間の狹い身であるから、平生他よりは机の上に多く友を求めて、心を慰むる所は其專門學の研究である。

宵の内は暫く無理にも其て紛らされるが、到底長く思出さずにはゐられぬ、一二時間の後には必ず不覺心になる。其時は又夕暮に惱まされるやうなものではない、常に彼が學理の研究にも、晝間よりは夜中こそなかなか深く思を凝し得るやうに、生憎其事も亦鋭く考へられる。彼が最愛の妻に就いて考へるのは、失望に就いて考へるも同じことで、深く考へるのは則ち深く失望するのであつた。人は渇くと理不盡に水を欲がる、柳之助の戀しさも其の理不盡で、幾と身も世も爲に忘られるまで悶えても苦むでも、仍放されず苛れるに堪へかねては、寧ろ快く死なうかと、彿と迷の出ることさへある。

或夕暮から遽に甚しく凄寥に惱まされたやうに、又或夜から遽に此失望の苦痛を劇しく感じた。固よりその凄寥もこの失望も今に始つたのではない、切なる悲を覺えた日から引續いて、日毎に夜毎に其が爲に苦められてゐるのではあるが、此頃になつて遽に一層甚しく感じられるのであ

る。夕暮の凄寥は左も右も例の散歩で漸く凌いで、夜の更に此悶々に澆ぐに一合の酒を以てして、酔を藉りて無理に睡る、——睡つて纔に忘れるのである。恁して酒の力で忘れるのが夜毎の例である如く、彼は一時から二時までの間に必ず目を覺すが癖となつた。覺めると與に戀しさの念は再發する、謂ふに謂はれず侘しくなる、忽ち全身の血は氷りつゝ、或所へ曳入れられるやうに覺える、耐りかねて寒さも何も忘れて寢床から蹶起きる、而して劇しく室の内を運動する。其間も絶えず胸の内では悶え〳〵てゐるので、此時彼の眼は全く乾いて、懼の有る如く瞠きながら、或ものに逐はれるやうに慌忙しく往きつ復りつして、我と我胸を抱竦めて、焚ゆる如き呼吸で喘いでゐる。稍一時間も此躰で、漸く疲れて寐床に倒れると、それから朝までは一息に寐る。是が夜毎なので、柳之助は苦しさも苦しゝ、不思議にも思つて、後には病ではあるまいかと考へた。

夕方の微昏くなる時の其の身に泌みて凄寥！　夜になつて憶出す時の其の味氣無さ！　酒が醒めて眞夜中に目を開く時の其の侘しさ！　尋常ではない、と自分も熟思つて、

(何故近頃急に這麼になつたのであらう？　此有樣で一個月も續いたら、病氣にならずには措かぬ。或は既に病氣なのかも知れぬ、一種の精神病かも知れぬ。幸に病氣でないにしても、普通の病氣よりも更に苦しい。或病人が發熱するやうに、時を限つて始る所は、如何しても一種の病のやうだ、噫、精神病にでもなつたのか！)と柳之助は遂に疑を抱いたのである。

畢竟恁云ふ事になるのも餘り類さんの事を思ふからだ。類さんの事ばかりは然し忘れられん。忘れられんけれど、毎日毎晩のやうに苦しい想をして、それで類さんが復つてくれるなら可いが、唯苦むばかりで何の効も無いのだ　此後彌那が劇しくなれば、必ず體を傷める、體を傷めれば

彌那痛苦を登さんければならぬ。自分が此上病氣になつた日には、其心細さは如何であらう　看護をしてもらふ類さんは居らぬ、傍から慰めてくれる類さんは居らぬ、此二階に唯獨瘦衰へて臥て居る？　唉、思出しても慄然とする。病氣にはなるまい、病氣になつては困るから、今後は類さんの事を忘れるやうに努めやう、類さんの事さへ忘るれば病氣にはならぬ。何とかして忘れやう、今日から斷然忘れやう、と固く心に誓つた其夕暮も、昨日に同く淒寥くて、其夜も同く味氣無くて、其夜中も同く目が覺めたので、翌日は其に懲りて、一層固く心に誓つたのである。誓つても誓つても仍日毎夜毎に苦められることは變らぬので、柳之助も有繋に我ながら可恐いやうな氣がして、

(如何したのだらう。我は如何しても如何かしてゐる。固よりそれは類さんの事は忘れられん。自分では忘れやう、忘れやうと爲るけれど、猶且始終考へてゐる。その通り戀しいことは戀しいけれど、十分もう諦めて

は居るのだ。是程諦めてをるのに、如何いふものだらう、解らん！　して見ると病氣かなあ、醫者に係らうかなあ。」

彼も今は幾と其辛さに堪へかねて、此上は人手を藉りて苦艱を脱けるより外は無いと思つて、一躰恁云ふ事が有るものであらうか、其を先づ質ねやうと、葉山に會つて仔細を話したのである。

一々聞いて見ると、葉山も心穩でない。

「それは成程病氣と云つても可からう、まあ〳〵病氣だね。然し藥を飲むだから直に復ると云ふ理には行かない、腹の痛いのや、便通の無いのとは大分違ふから。何しろ孑然獨で居るのが、其が大毒なのだよ、病は其處に在るのだ。學校へ出てゐる間は那麼事は無からう？　然だらうとも。君は思込が深いから、獨で居るとお類さんの事ばかり考へてゐるのだらう。それほど戀しい人だ、その人が居なくなつたのだから、世の中が面白くないのも無理ぢやない、それは察しる。萬々察してゐるが、そ

の戀しいを棄却にしなけりや迚も可けないね。成程忘れやうとしてゐる？　それは可い。如何しても忘れられ……………ない？　それが可けないぢやないか。

然う言ふと又慍られるかも知れないけれど、忘れる方は幾多もあるのだ。然し君は強ひて忘れやうと爲ないのだから困る。甚麼にしても忘れやうと思へば……………あゝ有る段ぢやない、大有さ。唯內に打坐つてゐて、忘れたい、忘れたいと言つてゐたつて、それは不可だよ。君は其種だらう。笑つてゐる所を見ると手の筋だね。それぢや可けません、依様木に緣つて魚を求めるのだ。因だから、此間のお島さんの件なぞは好かつたのだけれど、君が變屈だから困るよ。其後音信は無しかい、阿母様も內々慍つてゐるのだらう。此頃然やつて苦しまされるのも、一はお島さんの怨念だあね。で、阿母様は君の今後の事に就いて何と言つてゐるい。別に何とも言はないか？　因でだ、君の意見は如何いふの？　あの所帶はあの

まゝ長く持つてゐやうと云ふのかね。別に考はない？ 最一つ因でだ、女片の無い所帶と云ふ奴は不都合なものだ、何、元が居る？ 元なんどは女片の部ぢやありません！ 那は棒切か、襤褸切さ。もつと好い女片さ。

細君と云ふものが無ければ、所帶を持つ必用はまあ無いのだ、然うだらう。それでは如何だい、彼所帶を疊む氣は無しかい。而して如何する？ まさか廻國に出るのぢやないよ、一先所帶を疊むで、小奇麗に下宿でもして、呑氣に勉強を爲たら如何。

然しね、又慍られるかも知れないけれど、」 と一服付けながら柳之助の氣色を見れば、

「何を、僕は何も慍りはせんよ。君の忠告に對して僕は慍る方は無い。」

「巧く言つてるよ。」 と葉山は煙管を落して笑ふ。

「善、吃と慍らないね、請合つたね？ 實は外でもないが、君だつて長

い間には何れ繼聘を迎ふのだらう。まあ聞き給へ、唯話だから。何、迎はない？　一生迎はない？　それなら猶の事、所帶を持つてゐるには當らない理だ。直に繼聘が來ると云ふのなら、折角持つた所帶を疊むで了ふ事は無いけれど、君の今の樣子では、なか〳〵急には迎ひさうもないから、それなら…………。」

「急にも晩くも僕はもう一生妻は有たんと言ふのに。」

と柳之助は忽ち機嫌を損じる。

「うむ、是は惡かつた。一生有たない！　然うだ。然うだが。是は話だからまあ聞き給へ。有つにまた所で急な事ぢやない。あれさ、話だと言ふのに、可いかい、斷つて置くよ、話だよ。急な事ぢやないと、而するとだ、君は彼家に獨法師で居る間は、必ずお類さんの事を思出さずにはゐられないよ、如何して、如何して忘れられるものか。忘れなくつても管はないのさ、始終思つてゐるのも可いやね、唯其だけの事で濟みさへ

すれば。いや、所が濟まない！　然だらうね、現在病氣にもならうとしてゐる始末ぢやないか。ねえ、體を傷して了はなけりやならない。然して見れば、不實なことを言ふやうだけれど、是は如何あつても全然忘れなければなるまい。其處だて、忘れやうと云ふには獨で居るのは極惡い、——紛れると云ふ事があるまい、何でも紛らさなけりや可けないのだ。幾らお類さんの事だから好いと云つたつて、忘れられずに快々〳〵してゐるのは隨分辛からう。苦しい？　然だらうとも。體に障るよ。今の分で打遣らかして措いて一月も續いて見給へ、立派な發狂になつて了ふ。今更所帶を疊むで下宿をすると云ふのも變なものだから、曩日も言つた通り、まあ〳〵當分私の家へ來てゐたら如何だい。下宿から見れば遙に上等さ。座敷料は戴かず、炭錢は御附にして、それで浴が立つて、洗濯もしてあげてさ、第一食物が好いよ。少々滯つたつて可厭な顏を爲るぢやなしさ。高いから減けろと言へば無料までには減けやうと想ふ。何と如何だらう

――觀音樣が店を出したつて儲うは行くものか。實の有つたものだらうが、これで惚れなきや先方が無理です。」

柳之助は少く所思があるので、即答しかねて熟と考へてゐると、

「強ひて勸める譯ぢやないが、君の病氣に對する國手葉山の處方はまづ此外には無いてね。左も右も獨で孑然内に引籠むで居るのは何より毒だよ。」

太息交りに柳之助は、

「實際然うだね、僕も然う思つとる。」

「それぢや別に那樣に考へることは無いぢやないか。折角持つた所帶だから、疊むで了ふのも面白くないと云ふのかい。」

「何有、那麼所帶なぞ！　君の言ふ通りだ、妻が居なけりや無用なものだ。妻が居なくなつてからはね、自分の家も自分の家のやうな心地は爲やせんもの。唯飯を食つて活きて居るだけなら、別に所帶を持つとる必

要は無いさ。」

「然う思ふなら疊むが可いのさ。」

「然うだね。」

彼は葉山の忠告を容れて、我家とは思はれぬ所帶は疊むで了つて、身輕になつて勉強爲やう氣にはなつたのである。然し、深切に再三言つてくれる同居の件に就いては、左か右か言を濁して、全で諾否は言はずに別れて了つた。

（八）の二

一日二日は切に其事ばかりを考へてゐたが、さて分別は容易に着かぬ。葉山へ同居はしたいが、お種と云ふものがゐる、是が必ず第二のお島となつて、自分を苦めるに違無い。又獨で孑然と内に居るのは、正しく病氣の根であるのみならず、可厭なことは日毎夜毎に不相變苦められる。もう十日と此家に辛抱は出來ぬ。葉山の所へ行かぬまでも、此所帶は疊むで了ひたい、了はなければならぬ。さて而して何處へ行かう？　相當の下宿を探すか、葉山へ同居をするか、何方かであるが、それも考へれば何にも一得一失はあつて、又自分の所帶に越した事は無い點もある。因て擦つたり揉むだりして、幾度も考直し〳〵した末、如何あつても所帶は仕舞つて、轉居をして、氣を變へるが何よりであると決した。斷然其氣になつて見ると、何處と目標は無いが、或所へ轉居したと假定

めて、其處の生活が極めて愉快で、面白く勉強が出來て、お類の事も忘られて、世話をしてくれる者が無くても更に不自由ではなくて、日曜毎に谷中へ墓詣をして、それが何よりの樂事で、獨身はなか〳〵呑氣で、學問には適當であるなどの善い事ばかりが、手に取るやうに胸に浮ぶ。勿論其は空想である、空想にしても隨分愉快を感じる。之が實際であつたらば、其麽に愉快であらうと思ふほど、益〻此家が厭はしくなつて、「轉居、轉居、轉居に限る！」と是非の考慮も無く、はや明日から家内を片附けやう、と氣ばかり立つて、何處へ轉居するのやら、其邊は未だ一向雲を摑むやうでありながら、此家を出れば、眺望のある、閑靜な、日向の好い小奇麗な、二間ほどの二階が借りてあつて、掃除も整然と出來て、何時でも御入來を待つばかりの仕掛になつてゐるやうに想はれる。盛に其空想に驅られてゐる爲に、殆ど類さんの事を思ふのも忘れて了つて、夕暮も氣になるほどは凄寥を感じず、夜になつても引續いて

忘れ通してゐた。催眠劑として毎夜買せる一合の酒も、例に因つて机の側に備へてありながら、其には手をも觸れずに、柳之助は寢床へ入つて了つたのである。

明朝になつて目が覺めると、斬られた夢の假であつたやうなものではない、味と安堵の息を吐いて、

「おゝ！　昨夜は無事であつた。」　と心の動悸の姑くは止まぬほど、彼は近頃に此程の歡喜は絕えて覺えなかつた。陷穽の底からやう〳〵這出て、始めて蒼々した廣野を見たやうの想で、枕を擧げて四邊を眴してゐたが、岸破と床を起きて、

「轉居だ、轉居だ！」　と大聲に呟けば、折から階子下を通る元は何と聞違へたか、

「はい。」　と直に昇つて來て、

「御用でございますか。」

「呼びはせんよ。」
「おや〳〵然やうで。」
然て轉居を爲るに就いては、第一に厄介になるのが荷物である。一所帶抱へては下宿も出來なければ、同居も出來ぬ。まづ此始末から着けねばならぬ、類さんの持つて來たものは一式之を生家へ返して、所帶道具は長年好く勤めた元へ與れやう。然して了へば自分の持物は本箱に机、夜具に衣類、目欲いところは那樣もので、それで大分身輕になる。所帶を疊むと云へば、と處置をするより外は無い、と自分は思ふが、甚麽ものであらうか、と彼は再び之を葉山に詢ると、
「臺灣へでも之くやうだね。」と直に例の洒落であつたが、
「それぢや如何するかね。」と意見を聞けば、
「可い、大出來だ。お類さんの物を全然返すのは、これは至極好い立案だ。然し、先方でも然やうでございますかと應それとは受けまいぜ。そ

れよりは、當分預つて置いてくれと云ふので……簞笥が一棹に葛籠に長持だね、其外夜具に、然うだ細々した道具類か、手も無く釣臺三荷だ。け返す理なしだ、那樣に舁ぎ込まれちや一寸困るね、倉庫でも無ければ。然すると預つてくれも異しなものだし、依樣君の事だから、いつそ端的に、此方に在つても不用なものだから、お島さんへ形見にと云ふやうなことで、屆けたが可いだらう。」

「あのお島へ遣るのは可厭だ。君は妙にお島が好きだよ。」

心から恨めしさうに柳之助は言ふので、葉山は怺へかねて噴出す。

「何ぼ好きだつて、他の形見顔で義理を爲る奴があるものか。お島さんへと言へば、それで丁と阿母樣も阿爺樣も喜ぶのだと云ふことさ。其は可いがね、所帶を疊むと云ふ口には、姻家へも相談を爲なければなるまい。爲れば止められるね、何故でも止められるよ、止められます！それに一昨日私も漫然話はしたけれど、未だ百個日經たないのだね。百

個日も經たないのに家を仕舞ふのは餘り世間躰が善くない。はあ、來月の十一日が？　もう然なるかね。それは君を知つてゐれば、百個日も一週忌もありはしない、今度所帶を疊むのも、其人の事が忘れられないから起つた事なのだけれど、那が所謂世間躰だ、媼家の人たちの手前もあるわね。當今家を仕舞ふのは些と書生流過ぎる。因で恁したら如何。最少しの所家はあのまゝにして措くのだ、而して私の家へ遊びに來るさ――夕方から泊に來ると云ふやうな事にするのだ。甚だ億劫な話だけれど、外に爲やうも無いでね。主が一人に奉公人一人と云ふ家内で、主が毎晩泊に出かけるのも、條理の合はない譯で、實は隨分拙い智惠だけれど。是が媼家の方へ一所になると云ふのなら、それで又可いさ、仔細は無い。何しろ百個日經たないと云ふのが氣になるね。」

葉山も之には大きに窮つて、我ながら拙い智惠より外には出ぬのである。柳之助も氣を挫かれて、言はれて見れば一々理がある。百個日も經たぬ

内に住居を移すさへ、成程如何はしく思はれるのに、其人と始めて持つた所帯を崩すのは、情に於て忍びざるのが當然であらう。姻家の方でも感情を害するに違無い、類さんも然ぞや怨に思ふであらう。切めては百個日の法事を此て為て、それからの事に、と又了簡を變へは變へたが、それと與に彼の失望は太甚しい。

一日でも早く退きたい家に、未だ此先凡そ六週間も居なければならぬと思へば、如何して暮されるであらう、と柳之助は途方に暮れたが、思返されぬ所を是非も無いと思返して、左も右も百個日過ぎるまで待つ！とした所で、轉居は爲る、就いては其用意を爲ねばならぬ。今から六週間といふ日があれば、寧ろ十分に用意を爲るとせう。明日にも引越すやうに騒いでは見たが、實は何の用意も無いので。此暇に徐々と支度を爲るも可からう、と所爲事無しに氣を取直して、轉居の前に於ける始末と、後に於ける處置とに就いて、彼は百方考へたのである。

下宿に爲うか、葉山へ同居を爲うかの二事、是こそ第一着の問題でありながら、未だに決定してないのは迂濶であると、先之から極める事にして、考へたが、考へたが、依然分別は着き切らぬ。十の八までは葉山に

同居がしたいのであるが、唯お種と云ふものが可厭さに、好ましからぬ下宿と秤に懸けてゐるので、此は既に幾度も考へては、毎も分別が着かず仕舞で、其時になつたらば如何にかなるだらうで、拋却してあるので、實は今日に至るまで未だ行先は定らぬのである、それは定らぬが、轉居をするだけは確としてゐる。因で、彼は遽に定めかねる分別は後にして、容易に手の着けられる始末からと思付いて、一日元の針仕事をして居る所へ出掛けて、

「お前急に一つ裁縫をしてくれんか。」

見苦しく取散した所へ恐多いと云ふ風で老婢は慌てゝ、座側を片附けながら、

「甚麽お仕事でございます。」

「夜具だ」

「お夜具？　縫直すのでございますか。」

「いや、新しく縫ふのだ。」
老婢は（へえ）とばかりで、異しな事をと思つた。
「縮緬の夜衣と云ふのはあるかなあ。」
いよ〱異しいと思ひながら、
「へい、御座います。」
「紋附は異しいかなあ。」
「へえ？」　と元は彼の問よりも未だ異しい顔をして、縮緬の紋付か、夜衣の紋附か、其意が解りかねてゐる。
「紋の付いた夜衣だ。」
「如何な事でも……………。」　と元は笑出した。此に葉山が居たらば、然ぞや呼吸の續くまで洒落のめした事であらう。柳之助は眉さへ動さず、
「然うかなあ。」　と老婢の笑止むのを待つて、
「夜衣だから、紋が付いとつても誰も見やせんから管はんぢやないか。」

老婢は又可笑がる。

「私は又わざ〳〵御紋付の夜衣をお拵へなさるのかと存じたのでございますよ。」

「それは可笑いさ。」と柳之助も始めて少しばかり笑つて、「俺の言ふのは、夜衣の紋付よ。お前は紋付の夜衣だと思つたか。」

夜衣の紋付に紋付の夜衣、何方でも同じ事でありさうなものを、と老婢は又其が可笑くて健か笑ふ。

「那樣に可笑いか。」

「旦那樣は本當に面白いことを有仰います、而してまあ何をお拵へになるのでございます。」

「紋付で夜衣を拵へるのだ。」

「へえ？」と老婢は又解らなくなる。

「尋常の衣服で夜着は出來るのかな。」

「何と有仰います。」
「一反あれば夜衣は出來るか。」
「然やうでございますよ。」
「然すると、尋常の衣服を解して、それで夜衣は出來るのだな。」
「然やうでございますよ。」
「それぢや拵へてくれ。」
「へえ。」　と元には未だ全然と會得めぬ。
「蒲團は如何だ。蒲團も出來るかな。」
「やつぱり御服でゞございすか。」
「然うだ、やつぱり衣服で拵へるのだ。」
「而して其は旦那樣が御召になるのでございますか。」
「然う俺が着るのだ。」
元は慄然として、さあ大變！　旦那樣は到頭お氣が觸れたさうなと、然

う思へば此五六日別けて色澤の惡い柳之助の顏を、其と無く打目戍つては、眼色に氣を着けたが、變つた所も無いらしい。幸ひに未だ然ほど劇しくはないが、些少は確に違つてゐると見て取つた。

彼が二十年も前深川に所帶を持つてゐた頃、隣の長屋に髮結が住むでゐて、それの夫は鳶の者であつたが、是が不圖發狂した。その病の初發は、或日外から歸つて來ると、唐突に妙なことを言つて、氣味が惡いから一寸來てくれと呼れたので、直に行つて見ると、手拭を挈げて藥罐の中を覗き散して、もう少しだ〳〵と言つてゐる、容體に恁うと變つた所は無いが、唯眼色が可恐くなつて瞿々してゐた。狂人は何でも眼色で知れると云ふことを、其時人に敎へられたのである。

紋服を解いて夜衣を拵へる！　藥罐を覗いて、もう少しと、餘り相違は無いと思ふほど、柳之助の顏を視る元の目は多少か常ならぬ色を顯して來る。

「何を俺の顔を那樣に視るのだ。夜衣は出來るとして蒲團は如何だ。」
「で旦那樣が其を召すのでございますか。」と稍聲も顫へる。柳之助は一向無貪着に、
「然うだと言ふのに。」
「わざ〳〵御紋服を暴殄になさいませんでも、旦那樣のが那麼して歴然とお在なさるぢやございませんか。それから未だ奥樣のもお奇麗になつて御座いますよ。那樣に貴方御夜具なんぞは多度ございましたつて爲方がございませんよ。」
柳之助は耳聒しいと云ふ躰で、
「可いよ。別に要るのだ。いづれお前にも話を爲るけれど、少し事情があるのだからまあ拵へてくれ。」
「へえ、それは拵へは致しますが、如何遊ばすので。」
「如何しても可いぢやないか。」と少しく聲が暴くなつたので、

「へえ。」と老婢は默つて了ふ。

此間答の末、柳之助は佛間の小座敷へ老婢を連れて、押入の簞笥からお類が大事の縮緬の紋附を出させたが、其は亡人が祝言に用ゐた、鳩羽鼠の衱模樣で、質な更紗縮緬の二枚下着が附いてゐる。其更紗の質なのも、裾模樣でないのも、長く着られるやうにと、母親の心を籠めたのであるものを、未だ〳〵裾模樣も着られる齡で、其主は亡き數に入つたと思へば、形見こそ今は仇なれで、元は不覺に鼻を塞らせる。花橘の其ではないが、簞笥を啓けると薾然と起つ麝香の香に、柳之助は胸迫つて、少時は主從とも言は無かつた。

「もう一枚、能く着とつた縞の衣服があるだらう、那を見せてくれ。」と柳之助は簞笥の傍を離れて、座敷の内を歩き始める。

「あの絲織のでございますか。」

「絲織だか何だか知らんが、ぴか〳〵光るのさ。」

細い矢絣崩の、（おさすり）に着た絲織の小袖を出して見せると、其だと言ふ。さて縮緬の紋服は夜衣にして、絲織を蒲團に爲る、出來るだけ早く仕立てるやうに、と重ねて誂へたが、爲を思つて飽くまで元は不承知であつた。なるほど主の命であるからは、而して主の物であるからは、煮て食はうと、炙いて食はうと、おのれの横出る所でないとは知つてゐるが、當初に疑つた如く、此所作は如何しても正氣ではないと思ふから、如何に奉公人でも齡の手前唯諾々とばかり言つてはゐられぬ。まして姻家の母親などに對しても、這麼無法な事を爲しては合はす顏も無いわけと、口を極めて此思立を止めたのである。然し彼は既に止める時迚も止るまいとは覺悟した。何故となれば、恁云ふ無法を思立つほどに氣が狂つて居るからは、理非を聞分ける耳は得持つまいと思つて。が、左も右も止めるだけは止めて見て、聞分けたらば幸ひ、聽かぬやうならば、陽は畏まつて置いて、此始末を姻家の方に知らせやう、と胸を定めて、さ

て止めて見たのである。

案の定言へば言ふほど氣色を損じて、

「お前が拵へるのが可厭なら頼まん、仕立屋へ遣る、俺が持つて行く。」

と例に無く息巻く具合、元は斷然其の正氣でない事を確めたのである。因て、然やうならば私が致しますから、と御意次第になつて、件の二枚を風呂敷に包むで、其を抱へて茶の間へ退ると、なほ跟いて來て、直に取掛れと逼る。元も之には弱つて、種々に言飾へたが、柳之助は傍に坐つて桿でも動かぬ氣色。又此で遲々してゐたら、引攫つて飛出しさうに見えるので、爲む方無さに澁々膝の上に紋服を披げて、鋏を持ちは持つたが、燃立つやうな紅絹の色と、好もしい染の香氣とに、目も眩れ、心も消ゆるばかり、(勿躰ない)で胸も張裂けるやう。餘り切無さの一寸遁に、元は鋏を委いて、用ありさうに又紋服を把玩引廻して、襟を見たり、裾を見たり、力の有らむ限怛怩してゐると、其氣も知らず柳之助は、

「好い夜衣が出來るだらう。」

其尾に附いて元は再び懇々と搔口說いた、恁した立派な紋服をば夜衣などに爲て了ふことの暴殄と、姻家の親御樣に對しても辨疏の無さに、如何も鋏の刄が當てられぬゆゑ、之ばかりは思止るやうにと。

誠は面に顯れて、命乞でもするやうに、如何に老婆心とは謂ひながら、餘りの事々しさに柳之助も驚かされた。實に元は此を先途と面を犯して諫めたのである。爲に彼の心も動いて、なるほど年寄の身にもなつたら、傍に附いてゐて恁云ふ無法な事を爲せるには忍びぬのであらう、其とても究竟は此方の爲を思ふから。左も右も事情を話さぬのが惡かつた、藪から棒に註文したゆゑに、如何するのかと吃驚ゑたのであらう、とやうやう心着いたので、百個日の後は此所帶を疊む事から、荷物は姻家へ還す一條、彼への形見頒まで具に聞かせると、元の驚愕は益太甚しい。それてこそ紋服の一枚くらゐは引裂くのさへ無理は無いと思つた。事情を

聞くほど、如何かしてゐるのではあるまいかの疑團は彌解けぬ。なか〳〵紋服を暴殄にするくらゐな事ではない、もつと〳〵大きく氣が觸れてゐるらしい。其大きさは到底僱婆風情の手も口も出せる所ではない、いづれ姻家の親御樣も何とか言はれるであらうし、葉山樣も其曉には又何とか爲さるであらうからと、まづ〳〵手拭を挈げて藥罐を覗くやうな取留らぬ所作の無いのを、元は其身の厄兔にして、左か右か柳之助の言ふことが會得めたのである。然う思つて見れば、始から深川の隣キ印のやうに眼色が變つてゐたでもなし、變な調子も無かつたし、世間で謂ふ發狂とは違ふ、女に溺つて譯もなく家藏を潰したり、慾に牽されて見す〳〵大損を爲る例と同じやうな、一時の迷とでも云ふのである、と其は其で釋然解つたとして、さて此を仕舞つて其から如何爲るのやら、有繫に其も聞きたい。

「それで、何でございますか、一先此をお引拂ひ遊ばして、暫く御勉強

を為さいまして、又何頃御家をお持ち遊ばすので？」

「それは今から解らん。」

「いづれお持ち遊ばすのでございませう。」

「もう面倒臭いから持つまいかとも思つとる。」

「それでも貴方、又奥様が御出になりましたら然うは…………。」

と言ふのを柳之助は引手繰つて、

「奥様なんぞ來るものか！　俺は死んだ奥様の外に奥様は有りません。」

元も或物を引手繰られた心地で、柳之助の顔をば探すやうに瞻して、

「では、もう奥様はお有ちになりませんので？」

「有つものか、一生有たんのよ。」

「一生お有ちになりませんので？」

「もし俺が先に死んで、奥さんが殘つて居つたら、元、猶且奥さんは一生寡で居るよ。然云ふ約束だもの、俺も一生獨で居るのだ。それだから

一生忘れん爲に是で夜具を拵へて置くのぢやないか。」

彼の語氣は漸く沈むで、後は氣の腐つた太息をして、

「つまらんよなあ、世の中は。」　と絲織の小袖を引寄せて、それを丸めて枕に仆れる。

元も其胸中を察して見れば、お可憐と思はぬではないが、男の口からは餘な言分で、樣子を知らぬ日には、同然手拭を挈げて藥鑵を覗くやうに見ゆるであらう。何處までも情の深いのには違無いが、深過るのも變なものと考へた。

「それは然うでもございませうけれど、女子は女子、殿方は殿方で別でございます。一生お獨では、それこそ御不自由で、迚も續くものではございません。昔から女子は操を立通しますが、殿方の然うまゐりませんのは、女子の寡居で不自由なのは左か右かなりますけれど、殿方では其辛抱が出來ないのでございます。ですから、殿方は奧樣を二人有たうが、

三人有たうが、誰も何とも申しは致しません。女子の方は爲れば辛抱の出來るものを、又外の男を有つては濟まない義でございますから、操を立てるが道としてあるのは、其處なのでございませう。」

之を聞くと柳之助は遽に起回つて、

「やあ、元はなか／＼學者だね、こりや感心した、感心したよ。」

「あれ、可厭でございますね。」

「然う言ふ、世間では然う言ふのだ。然し、男だつて女だつて人間に差は無からう。男は不自由しては困る、女は不自由しても困らんと云ふ理屈は無いぢやないか、誰の不自由も同じ事だ。

世間の人はね、能く話をする時自分の細君の事を(嬶)などゝ言ふよ、ね、然う言ふ人が能く有る。それがお前、紳士とも謂はれる人がだよ。俺には如何いふ理だか那が解らんね。何ぼ自分の妻だからと言つて、(嬶)とは失敬ぢやないか。何て那樣に輕蔑するのだらう。俺は他が(嬶)などゝ

言ふのを聞くと、(畜生)と言つとるやうに思はれて、不愉快で耐らんね。(畜生)と言ふのも同じぢやないか、那樣に輕蔑しとる細君なら、有たんが可いのだ。其等の人は一體如何云ふ精神で妻を有つとるのだらう。妻と云ふものを下女う何かのやうに考へとるのだ、それだから其細君が類さんのやうに歿なりでもすると、下女が出て行つたやうに直に代を迎ふ。而して其を當然のやうに考へとる、世間一般に。那樣方が有るものか！俺は然うぢやない、俺は細君は朋友だと思つとるのだ、深切な朋友だと。實際然うぢやないか。」

直には後を續けぬので、元は間を合せて、

「然やうでございますとも。」

「然うだらう、然うさ、無論然うさ、二人と無い朋友だ。朋友が死んだと云つて、直に代が出來るかい、出來やせんだらう。下女なら幾多も代がある、其だつて、是は好いと思つた下女の代は滅多にあるものか。猶

更細君ぢやないか、其代が容易に……………所か、全く有りはせんよ。」
「それでは有りましたらばお迎ひ遊ばしませう。」
柳之助は嚴に頭を掉る。
「有つても迎はん！　又有る理は無い!!」
「それは御座いませんか存じませんが、若や御座いましても、お迎ひ遊ばしませんので？」
「うむ、迎はん！　決して迎はんよ。それは不自由な事も知つとる、男は女と逢つて、操を守らんでも可い事も知つとるさ、然し俺は他の者を奥さんに有つ氣は無いのだ。類さんの事は如何しても忘れられんもの、忘れられん間に有つことは出來ん、然だらう。然し俺は一生忘れられんから、一生有たんと極めたのだ。
既往の事を考へて見ると類さんには、非常に世話になつたのに、生きとる時ばかり大騷をして、其人が死んで了ふと直に忘れるなど丶云ふ、那

樣薄情な事があるものか。死んでも死なゝくつても、世話になつたのは世話になつたのだし、可愛いのは依然可愛いのだ、死んで了つたから如何でも可いと云ふ氣になるやうでは、本當の夫婦の情ではない。だから、俺は類さんは死んでも猶且生きとる時のやうに思つとる、一日だつて類さんの事を思はん日は無いよ。類さんが生きとる内俺が他の女を可愛がつたら、類さんは甚麼に慍るだらう。慍る慍らんは措いて、類さんは俺一人の事を思つとるのに、俺の方では他の者を可愛がると云つては實に濟まん義だ。那樣事が人情として出來るものではないさ。可いかい、生きとる內でさへ那樣事が出來んものを、死んで了つて居らんからと云つて出來るかい、死んだらば猶更氣の毒で出來んぢやないか。既に死ぬと云ふ事が可哀さうなのだ、親や夫やね、又那したい、恁したいと思ふ事を遺して、未だ二十二や約で死ぬ！　這麼可哀さうな事があるものか。何爲に世の中に生れて來たのだ、唯悲しい思を爲に來たやうなものぢやな

いか。其だけでもう十分可哀さうなのだ。」

ほつたりと涙を零して、

「其上に俺が又他の者を嫁に迎つて、今まで類さんと暮して居つたやうに面白さうに一所に居つたら、類さんの心地は甚麼だらう！　屍に鞭つと云ふ語がある、死んだものを打つのだ、酷い事の譬に能く言ふ。幾許怨が有つても、死んだものを敵手にするのは卑怯だ。」死んで了へば怨は消える、ねえ、怨が有つてさへ、死ねば線香の一本ぐらゐは上げて遣るべきだ。まして睦しくゐた夫婦ぢやないか、那樣氣の毒な事が出來るものか。如何なる不自由にも換へられんから、俺は一生獨身で暮す。死んだ上は夫は他に奪られる！　這麼可哀さうな事があるものか。死んだのは如何も爲方が無いから、せめて俺だけは他の者と夫婦にはならん、是が類さんへの寸志だ。類さんの死んだのに較べれば、俺が不自由するくらゐは何でもない。類さんも死んだから、俺も不自由する！」

元に話をしてゐながら、思迫る餘に半は獨語になつて、覺えず悲を漏すのである。元は挨拶に窮つて、

「御尤でございますとも。」

餘りと思ひながらも、理極めて哀さに、その意に悖ふことは折から言出されもせず、縮緬の紋服を暴殄にするぐらゐに止立を爲るも氣毒になつて、彼の鋏は惜氣もなく覺に小袖の襟の絲を弗と斷る。

（十）

お種はふと目を覺した。枕頭のランプの光は幻のやうに、添寢の保は能念も無い顏をして小い鼾を立てゝゐる。何氣無く隣の寢床を見れば、安火を入れた夜着は人の膝を立てたやうな形をしてゐるが、枕ばかりで夫の姿は無い。はっと思つたが、居ない理、未だ歸らぬのであつた、晩い歸來であるが、それとも未だ時が早いのか、と起回つて枕時計を見れば、二時十分過。

二時過ぎたのに歸來の無いのは、今夜はもう歸らぬのであらうか。會社の方達と小飲に行くと夜の更けぬ事はないが、理事の百瀨樣が御一所では、又大勢藝者などを呼散して、擧句は何處かへ……………に違無い。交際も可し、間には御外宿も可いけれど、此頃は近所に能く火事があるし、又方々へ偷見が入つて物騒だと云ふのに、恁云ふ時は可成早く歸る

やうにして下されば可いのに、猶且醉ふと面白くなつて、後では何も否、瀨が所好だから敵はないなど〻。好いことばかり言つて、御自分もお嫌ひではないのだから爲やうが無い。

外は風が凄じく吹捲る。

あゝ可厭だ、劇い風だ。

臺所の方でびしり〳〵と柱などの干割れる音がする。何だか氣味の惡いと思ふ矢先に、ばたりと紙門に打當る物音。お種は慄然として息を凝したが、傳婢が轉側を打つたのらしい。

今は全く目も覺めて了つて、火事でも無ければ可いがなど〻、案じ過して耿々してゐると、風の隙を潜つて遙に狸囃子が聞える。庭の軒端を鋑と風が何かに觸るのであらうけれど、人などが忍むで屋根へ昇るやうにも意はれる。地虫の鳴くやうにラムプれぢい〳〵、時計は軋々、或は遠くに或は近くに、何とも付かぬ響が絶間無く耳に入つて、睡らうとし

ても落着かれぬ鼻頭へ、床の梅が香が芬々と來る。
睡られぬに就けて夫の歸來が待たれる。二時は過ぎたが、三時頃に歸つたことも無いではない。お歸來が有るか知らぬ、有れば可いが、賴に思はるゝ車の音さへ聞えぬ、巡査も巡らぬ、誰も通らぬ、卒然に二三羽の月夜鴉か啼立てる。
忌はしさに目を瞑つて凝然として居ると、忽ち戶外に跫音がしたのである。もしやとお種は鬢まで被つた夜着の襟を寬げて、聽耳を欹てれば、其音は駒下駄で、はた〳〵と我門に近く樣子、さてはお歸來か、と胸を動悸させて、猶能く聽けば、夫の跫音ではない。夫の跫音でもないものが、益近いて、遂に門口と覺しい邊ではたと停つたので、お種は背筋を氷で摩でられるやうに悚然として震へる。
停つたまゝで、待てども〳〵動かぬ。
胸は早鐘を撞くやうに騷ぐのを、熟と怺へて益耳を澄してゐれば、やう

やう動いて、其跫音は後戻をした、かと思へば又立返つて門口の邊に停る。 放火か、賊か、二つの內！ とお種は耐りかねて起きて見やうとしたが、其も可恐し、何か爲るまで打遣つても措かれず、如何したら可からう、と首を擧げて四邊を眴すと、夫の枕頭に煙草盆がある、煙管がある、是屈竟と引寄せて、氣立ましく唾壺を連打にして、

「えへ、えへへん、おほん。」

後に又二つ撃いて、外の樣子を聞澄せば、何處から嗅付けて來たのか、はや二三頭の犬が必死と吠立てる。其聲に保が目を覺して泣出すのを、賺しながら氣を配つてゐると、最も善く吠える犬は、一聲高く叫むで、健か打据ゑられた音、お種は寢んねんようも震聲で、斷然奧の阿爺樣を起さうと覺悟した。もう呼ばうか、さあ起たうか、と踟躕してゐる間に、外の曲者は聲を揚げた。

「葉山、葉山！」

是はと思ふ間も無く、徐に門の戸を丁々々。犬は獨連に吠付くのを、遂ひながら又丁々。

「おい、葉山、此を啓けてくれんか。」

まづは怪い者でもなかつたか、とお種は吽と息を吐いたが、さて誰の聲やら記臆が有るやうでも、急には心當が付かぬ。左も右も寢間を出て、出窓の戸を一枚啓けると、外は眞晝のやうな月で、呟さに顔も向けられぬ。颼と吹込む風は折角の寢溫を餘さず掻攫つて、殆ど絶えも入りさうな寒さ。格子の間から斜に覗けば、踏張つて唸る犬、退歩しつゝ吠ゆる犬、餘り吠えて勞れたらしい犬、見えるのは犬ばかりで、人の姿は隱れて、但其影法師が長く地に曳いて眼前に横はつてゐる。

「何方でございます。」と聲を懸ければ、其影は動いて、

「あゝ、鷲見です。」

記臆のある聲と思つたお種は、と聞いて今は少も疑はぬ。

「おや、大相お遅く。」と言ひさま閉然と戸を閉てる。

犬は未だ慊かずに吠切る。柳之助は例のステッキを揮つて又一つ吃はせると、見事に外されて、發矢と大地を撲たされる、戞然と落して、

「あ、痛……つ。」と手を振るやら、噓くやらしてゐると、門の戸が啓いて、

「如何なさいました。」とお種が顏を出す。

「今犬を撲失つて、手を撲つたです。」

匇々にステッキを拾つて、門を入りながら、

「遲く出て如何も御厄介です。」

「如何いたしまして。」と閉鎖をするお種の横顏をば、身近に置いてあるランプの光が一杯に照してゐるのを、柳之助は側に突立つて、暗い所から眺めてゐたが、平生の無愛想！　その無愛想が艴然としてゐるやう。その艴然としてゐるのに劣らず柳之助も苦い顏をして

閉鎖をして了ふと、お種はランプを把つて前に玄關を上りながら、「此方へ入らつしやいまし。」までが、一向入らつしやいてはなくて、逐出すやうに聞える。其後に跟いて、柳之助は座敷へ通れば、火鉢の角に燈を置いて、お種は直に次の間の閨へ入つたので、外套を着たまゝ寒さうに立つてゐたが、此時氣が着いて見ると、鐵瓶が架けてあつて、湯がちん〳〵沸いてゐる。もう三時だと云ふのに、恁して火を熾して、湯が沸いてゐる、何の爲であらう。葉山は夜中に起きて茶でも飲むのか知らぬ。葉山は隨分種々な事を識つて居つて、種々な事を爲る男だから、是も亦自ら用ゐる所が有るのであらう。今に聞いて見やう、と自分は燈をさへ消して寢るのに、湯が沸してあるには、何の爲かは知らねど、この用意に驚きながら、冷たいと痛いで痺れる手を鐵瓶の胴に摩擦けて、葉山の起きて來るのを待つてゐたのである。お種の寢間へ行つたのは、葉山を起しに行つたのとのみ柳之助は想つてゐる。旋てお種は寢衣の上

に銘撰の不斷羽織を引被けて出て來る。

「大相お遲く、何方の御歸で。」　とお種は火鉢の前に坐ると、直に鐵瓶を下して、馳走ぶりに火を撥ける。

「家から來たです。」　とばかりて、柳之助は寢間の方へ氣を奪られて一向葉山の起出でる氣勢のせぬのを待遠うがつてゐる。

「おや、然うで。」　とお種は炭を加いて、側に布巾を被けた茶道具の盆の在るのを引寄せながら、

「何ぞ急な御用でも？」

「いや、別に…………。」　と可成く話を避けるやうに遇ひながら、葉山の起きて來るのを待つたが、寢間はいつまでも閴寂として、誰の起きたらしい音もせぬので、

「葉山君は未だ起きませんか。」

「今晩は留守でございます。」

「えゝ、留守？」
柳之助は失望する前に先づ一番吃驚した。
「未だ歸りませんので。」
柳之助は目を圓くして、
「はあ。」　と言つた口を塞ぎかねた。
「今晩は歸るまいかと思ひますが。」
「はあ、然うですか。」　と姑く茫然してゐて、氣の拔けた時分に、
「何方へ？」
急に旅行でもした事と思つたのである。
「會社の方達と會飲のだと申して、下谷の方へ廻つたのでございます。
今まで歸りませんから、今晩はもう歸りますまいと思ひます。」
「はあ、然うですか。」　と未だ呆れた顔をしてゐたが、
「何方へ泊られたのですか。」

隨分尋ねても行きかねまじき柳之助の氣色、行かうと行くまいと、其は別にして、此答にはお種も窮つた。言へば姤くやうでもあるし、第一譽めた話でもない事を聞かせるも恥かしい譯、是まで言つたらば大概解りさうなものを、解らぬほどの人に聞かせるのは、猶の事好くないと考へて、其近處の朋友の家へ醉つて轉込むだのであらうと云ふやうに話して置くと、柳之助は渡に舟を失つた心地で、

「はあ、然うですか。」　と言ひは言つたもの〻、歸らうか、待つて見やうか、何と爲う、

「窮つたな！」　と頭を搔いて、又少し思案して、

「窮つたな！」　と太息を吐く。

「急な御用でございますか。」

「いや、別に何ですけれど………。」　と言ふ傍から兩手で頭を犇と抑へて、

「窮つたな！」
それほど窮るならば用の有りさうなものを、今に始つたではないが、變な人だと思ひながら、此夜深に來たのは切迫の事であらうに、と折惡い留守が如何にも氣毒で、せめては何とか欵待をしたいと切に考へながら、先づ出來たので新煎を出す。
柳之助は心を空にしてゐる體であつたが、出された茶をばがぶりと飲むて、
「それぢや歸りませう。」と外套の鈕を一つ繫けて、未だ十分躊躇してゐるのは、如何にも用有りげに見えたので、お種は又推して訊ねると、彼の答は前の如く（いや、別に。）であつた。それならば直に歸りさうなものを、自分を對手に爲るでもなく、其事でも思案してゐるらしい樣子で、いつまでも遲々してゐる。
次の間の枕時計が四時を打つのを聞いて、柳之助は持つた帽子を側へ投

出して、

「貴方もうお寢み下さい。」　と仕舞つた卷莨入を出しかける。お種は寢衣に羽織で、肌薄の寒いこと夥しい、幾度と無く緊々と襟を掻合せては、身顫の出るのを怺へ〳〵てゐたが、

「いゝえ、どうせ目が覺めて居りましたのですから。」

「然うですか。」　と柳之助は其氣で莨を吃してゐる。話は無し、所在は無し、唯惡寒いばかりはお種も辛くて、

「もうお遲うございますから、お泊りなすつていらつしやいまし。丁度拙夫の床が暖まつて居ますから、那を此方へ持つて參りますから。」

好いた人は居ずに、好かぬ人ばかりの內に泊る氣は無い。然うかと云つて、是から家へ歸る元氣は猶無い、家に居るのが可厭に此夜深に飛出して來たのである。然し當にして來た人が不在であるからは、歸るより外は無いが、わざ〳〵此寒さに歸つた所で、甚麼ものであらうと思ふに就

けて、今のお種の言が身に沁みる。

（どうせ目が覺めて居る）と言つた。夫の歸を待つて目を覺して居たのであらう。（拙夫の床が暖まつて居る）と言つた。氷のやうになつて歸つて來るであらうからと、其支度を爲て待つて居たのである。此に火の熾してあるのも、湯の沸いてゐるのも、皆夫の歸を待つてゞある。恁して十分に用意のある所ならば、歸るにも歸榮がある。自分は歸ると、元が寐惚けて戸を啓ける、臺所ラムプを假りて眞暗な座敷を通つて、微寒い階子を昇る、二階はラムプが陰々點いてゐて、火も無ければ湯も無い、座敷の眞中に煢然と床が一つ敷いてある、煖まつてゐるどころか、鐵の板のやうに冷たくなつてゐる。此寒いのに那麼處へ歸つて行かれるものか。類さんが居たらば、恁云ふやうに支度を爲て待つて居るであらう。其を想ふと柳之助は忽ち恍然として姑く心の樂まされて居る間は、我前に人の睡を忍むで竊に寒に震へてゐるのも忘れてゐたが、ふと氣が着けば、

待つ人は無い！　待つてくれる人には死なれたのである！　自分を待つ人は亡くなつて、他のは活して無事に居ると思へば、可羨しいのか、憎いのか、好かぬお種の姿も不覺に見られる。

彼は長年此家に往來してゐる事であるから、可成會はぬやう〳〵とは爲てゐたものゝ、主の妻であつて見れば、萬更會はずにも濟されなかつた。會ふことは數知れぬほど會つたが、傍に出て居られても、早く行けがしと思ふばかりで、目を着けて浸々視るほどのことは無い。又他から見るやうなれば見られぬやうにして了ふので、可恐いものは見たさであるが、可厭なものには誰しも傍目も轉らぬ。見ることも見られる事も、柳之助は快しと爲ぬのである。今夜ばかりは不思議に例の可厭でもなく、然かと云つて別に如何と云ふ氣のあるでもなく、究竟お種なる虫の好かぬ妻君ではなしに、或一個の女子に對する心地で、其顏なら容なら様子なら、思はず識らず目を留めて視た。今夜見るお種は彼の平生考へた葉山の妻

ではない、葉山の妻は昂然として、愛憐の無さゝうな、何處かに圭角のある、男らしい理窟でも言ひさうな、一から十まで彼の氣に適はぬものであつたが、今夜のお種は信に靜淑に、弱々とした所も見えて、不相變愛嬌も世事も無いが、更に憎むべしとも覺えぬ迄に、女らしく可憐であつた。其所爲か又美しくも見えた。固より醜い容色ではない、人に依つたら輕々しく美人と言ふかも知れぬ、色も白し、目鼻立も揃つてはゐる、が、自分は決して美しいなどゝは思はなかつたのが、今夜は左も右も美しいと可されたのである。何故に然うまで變つて見えたのかは、柳之助も自分ながら解らぬので。洗晒した小豆色のフランネルの單衣に襟を懸けた柳條の布子を重ねて、紫太織の細帯を緊めて、寢亂れた襟は寛け勝に胸の白いのが覗かれる。天神の鬢が少しく縺れて、萎えたやうな肩状をして、何處と無く取締無く、寒さうにしてゐる姿に、夜闌の燈の射した所は、格別好く見えたのである。

柳之助がお種を見る時は、毎も神々しく髪を結つて、服裝を整然として、一寸坐るにも勿體臭く、專ら奧樣として見識を取つてゐる最中のみであつたから、此人に這麼柔い樣子の有らうとは實に想も着かず、之が大きに柳之助の目には美しく見えたのである。

猶彼の心を動したのは、夫を待侘びて目を覺してゐたのと、床を煖めて、湯まで沸して待つてゐるのと、其までに爲てゐながら夫の今に歸らぬとて。其胸の中を思遣れば、明日は知らず今夜の所は不便の人でならぬ。自分は歸つても誰待つものは無い人、お種は待つても歸られぬ人、大小の差こそあるが、心細さは似たものである。自分は一度たりとも類さんに恁云ふ思を爲せたことは無いが、之が類さんであつたら如何するであらう。

柳之助は獨で考へて獨で益々不便にして了つて、何とか慰めて遣らなければ心が濟まぬやうに覺えて、

「どうも居るものが居らんと寂しいですなあ。」と取着も無く言出した。

「然うでございますよ。貴方も然ぞ種々御不自由で在つしやいませう。未だ些の昨日のやうに思ひますけれど、もう廿日計で百個日にお成なさるのでございますねえ。」

「然うです。」

「然ぞ御不自由でゐらつしやるだらうと思ひましてね……………。」

「不自由は可いです、唯寂しくて、寂しくて、それが如何も敵はんですね。葉山君は何ですか、今夜のやうに他で泊られる事が折々あるですか。」

お種は寂しげに笑を洩して、指環を拈りながら微に俯いた。

極の悪い時、言出し難い時、指環を拈りながら其を瞶めるのは、お類の癖であつた。其の謂はれぬ可愛らしい樣子をば、葉山の妻に見せられやうとは、甚麼事にも思設けなかつたから、柳之助は殆ど其人のお種であ

ることも、恐くは自分の柳之助なることも忘れて、心のみ怪しげに衝跳いた。

偶には内を空けるが、其は交際で如何も爲方が無い、とばかりでお種も深くは言はぬ。因で話は切れて了つたが、四時も半となるのに、柳之助の歸る氣色は無い。お種は益寒くはなるし、少しは睡くもなるに、假初にも客であれば、一人置放にして御免を蒙る譯にも行かず、泊れと言へば、今にも歸るやうなことを言ふし、如何にも手を着けかねて困じ果てた。

柳之助は又、午前と午後とを取違へてゞもゐるやうに優々と坐り込むで、それで恁と話のあるでもなく、睡くもないから不如此儘夜の明けるを待たう、と云ふ了簡でゞもあるらしく唯兀然としてゐる。

此寒いに歸りたくもないとならば、泊りさうなもの、泊るが好ましくないならば、面白くも無さゝうに惘然してゐずとも、匆々と歸りさうなも

のを、行きたくもなければ、泊りたいでもない鹽梅で氣の重さうにしてゐるのは、何ぞ心の落着かぬ事が有るに違無い。其でこそ此夜更に故々尋ねても來たのであらう。左も右も葉山に逢つて歸らねば氣が濟まぬので、恁して何方付かずに遲々してゐるのとお種は考へたから、切めて話でも無くては彌敵手をしてゐられぬので、又其事を訊ねて見る。二度まで柳之助は（いや、別に。）で紛らして了つたが、今度はやう〱裹みかねた躰で、

「用ではないです。用ではないですけれど、……………實に僕は弱つたです。」と泣出しも爲さうに見えたので、お種も驚かされて膝を前めると、折から鷄が啼立てる、其にも管はず柳之助は家を飛出した仔細を話始める。

成程彼の言ふ如く、用事ではない、然し尋常一様の用事よりは未だ厄介な、久しく打絶えてゐた夜半の寢覺が今夜卒に再發して、而も其が從來

ついに覺えぬほど、寂しくて、心細くて、抑へても〳〵曳入れられるやうて、如何にしても內には居耐らなくなつて、寒いも夜深も考へる遑無く、寢衣の上に外套を引被けたまゝで飄然と飛出して、實は來る氣も無しに來たのであると。お種は唯呆れるばかり！　一躰那樣事が有るべきものだか、何だか、皆無腑には落ちぬので。餘程變な人もあれば有るものと、却つて念にも懸けず輕く聽いてゐたが、柳之助は尋常ならぬ氣色で、その心細い家へ還る氣力は無いらしく見えたから、いつそ泊めたが可からう、とお種は獨斷にして、夫の寢床をば此方に移して、須臾夜も明けるゆゑ、暫く橫になるやうに勸めたのである。すると柳之助は何と思つたか、衝と起つて、

「いや、歸りませう、僕は歸ります。」

（十一）

翌日の點燈頃柳之助は又尋ねて來た。葉山は此から一盃飲まうと云ふ所て、茶の間の火鉢の傍に膳を控へて、鯛の菽乳羹を沸々いはせながら、柔かい袢纏を引被けて、全然冬籠の支度の出來た所を、今更起たせられるのも辛いと、奥へ通されるのは嫌ひの柳之助とは知りながら、幸ひ誰も居らぬから此へ、と婢に案内をさせると、可恐可驚と云ふ態で入つて來たが、葉山一人で妻君は見えず、燗の世話なども自分で爲てゐるのを、希しげに眴して、

「お寒う。」

「いや、お寒う。今旨い物が出來る所さ、まあお坐んなさい。」

「遊びに來たよ。」と柳之助は外套のまゝ火鉢の前面に趺坐を搔く。

「昨夜も來たさうだつたけれど、生憎留守て。」

「君は何處へ泊つたのだ。」

「好い所さ。」　と葉山は片笑みながら鐵瓶から德利を引出す。

「何處だい、好い所と云ふのは。」

毒見をしたのを柳之助へ差して、

「情人の所さ。」

「情人?!」　と稍愕然とした躰で、

「怪しからん！　虛だらう。」

「虛な事があるものか。」　と葉山は眞顏になつて見せる。

「怪しからんね！　其は何處だ。」

「聞いて何に爲る。」

柳之助は唧と塞つて、

「何にも爲やせんけれど、唯聞くのさ。」

「漫然情人の所なんぞが敎へられるものか。」

「何故？」

「財の在所を云ふのも同じ事て、物騷だからね。」

「馬鹿な！」　と柳之助は苦り切つて、然も衝付けるやうに盃を返して、

「虛なのだらう、君、ねえ、本當の事を言ひたまへよ。」

「て、もし本當なら如何する氣だね。」

「那樣事を！　無論僕は默つては措かん。怪しからんぢやないか、情人なんて何だ。君は妻君が有るぢやないか。妻君を何と思つとるのだ。」

眉を昂げて詰りかければ、

「是は難しくなつた。ぢや情人は虛て、實はと行かう、實は、飲過ぎて朋友の所へ踣り込むで了つたのさ。」

「それぢや可いけれど、家を空けるのは止し給へよ。」

葉山は笑ひながら頭を抑へて、

「畜生め、昨夜細君から頼まれたな。」
「何を？　僕は何も頼まれやせんよ。」
「お種が宜く申ましたよ。」
逸早く柳之助は勘違をして、
「妻君何所かへ行つたの。」
「何所へ行くものか。今朝から奥に寝て居る。」
「寝てゐる？　如何してね。」　と少しく慌てれば、葉山は故と萎れながら、
「病氣てねえ、困つたよ。」
「病氣？　本當かい、君、風でも引いたのかい。」
「なか〳〵。」　と葉山は苦々しさうに首を掉る。
「甚麽病氣だよ。」
「なか〳〵。」

「だから甚麼だと言ふに。」
「大病！　どつと蓐に就いてゐるのさ。」
有繫に柳之助は眞僞を疑つて、葉山の顏を眺めたが、其額には何と書いてもなかつた。
葉山は鍋の物を椀に取分けながら、
「而も其大病は君ゆゑさ。」
「君は何を言ふ？　僕が知るものか。」
「君は知らない？　然うかい、それぢや君の所爲ぢやないのだらう。去て見ると誰だらうな、昨夜遲く來た客は？　今朝の天明まで居たのは。」
と諷誡られて、柳之助は躍起となる。
「僕さ、それは僕だらう。」
「あ、君かい、それぢや依然君だ。」
「僕は妻君を如何も爲やせんよ、怪しからん！」

「何ぼ阿多福でも、豈敢に君が今戸燒の火入と間違へて、蹴付けてお出額を打毀いた義ぢやないさ。けれど君のお合手を爲てゐたらう、ねえ、それで到頭風を引いて、今朝から頭痛て、眩暈がして、惡寒がきて、鼻が塞つて、苦しがつて唸つてゐるだらうぢやないか。成る程風を引いたのは自分の洒落さ、然し引かせたのは鷲見柳之助君だよ。さあ、それだから切めて見舞にでも行つて遣り給へ。這麼苦しい思を爲るのも鷲見さんの御蔭だと、今朝から言續にして君を怨むでゐるから、漫然飛込まうものなら喰ひつかれる、用心をきて行き給へ。」

僞を八分に聞いても少しは懸念の氣味で、

「那樣馬鹿なことを！」

「僞と思ふなら、行つて喰ひつかれてお出なさいな、手前は知らないから。」

喰ひ付くは、葉山が例の滑稽にしても、風を引いたのは、何やら信らし

いので、柳之助は氣を變へて弱く出る。
「それは濟まん事を爲た。實は僕もね、那麼夜深に來ては迷惑だらうとは思つたけれど、實際內に居られんだつたものだから……惡かつたね。君が居ると思つたから來たのだけれど……。」
「知れた事さ、丑の時詣の行く時分に亭主の留守を覘つて來れば…………。」
「何時僕が覘つて來たよ、失敬な！」と柳之助は眞に成る。
「何時僕が覘つて來たと言つたよ。他の妻君を病氣にして置きながら、逆捻を吃せるのは手嚴しいぢやないか。」
と聞けば又氣の毒になつて、
「本當かい、君。」
「僞だと思ふなら奧に寢てゐるから行つて見るが可い。」
「それは僕は濟まん事をしたなあ。」

「君は誠に濟まん事を爲たよ。」
と不知しく爲れるほど、傍に居るのも奇痒いやうで、何と挨拶を爲たものであらうか、と大きに柳之助は氣にしてゐるのを、葉山は其と横目に見ながら、ちびり〳〵と飲みかける。
「君、濟まん事を爲たね、僕は。風邪は氣を着けんと可かんよ、妻も初發は風邪だつた。風邪は一寸した事のやうに誰も思つとるけれど、多くの病氣は風邪からだよ。それは早く藥を飲まんと可かんね。」
彼は意を留めなかつた浴後の風邪が因で、最愛の類さんを亡つたのであるから、今お種が風邪と聞いたのは、心の痛と聞いたよりも、腸加答兒と聞いたよりも、なか〳〵死に近い病であるやうに、忽せならず可恐く覺えたのである。
「躰は大事に爲んと可かんよ！　人間と云ふものは割合に脆いものだ。」
と後は何か物の見えるやうに柳之助は眤と壁を矙めてゐれば、葉山は一

寸振向いて、

「旦那、お吸物が冷めます。」　と言ふのを現に聞きながら柳之助は趯然と座を起つて、

「一寸僕は行つて來やう。」

「何所へ行くのさ。」

「妻君の所だ、――僕は見て來る。」

「御見舞かい、それは御奇特な事だ、……は可いが喰ひ付かれるよ。」

「可い、もう那樣言。何處に臥とるのかね。」

「本當に行くのかい、是は不思議だ。君は始終來ても家人に會ふのを可い厭がつてゐるぢやないか。二十九歲になつて人見識を爲る人ぢやないか、その鷲見君が如何したものだ、寒いから雪でも降らなけりや可いが。」

「行つちや異しいかな。」　と葉山の膳を見下して杉立に立つてゐる。

「何が異しい事があるものか。それが禮なので、從來の方が餘程異しく

て御在なさる。」

「然うだらう、だから行くのだ。それに君は僕の爲に妻君は風を引いたと言ふぢやないか。」

「いや、それぢや自分が風を引かせたから見舞に行くので、然も無ければ死ぬほどの大病でも訪ねてはくれない氣かい、不實なものだ。」

と横を向いて飮むでゐる。

「決して那……………那樣事は無いさ。まあ行つて來やう、何所だか敎へてくれ給へ。」

葉山は婢を呼むで、案内を吩咐ける。其に續いて出たかと思ふと、直に柳之助は入つて來て、慌忙しく外套を脱捨てゝ行く。

奥の六疊へ伴れられて、婢の紙門を啓ける途端に内を覗くと、絹中形の大夜着を山のやうにして、お種は腹這になつて、枕頭に保を据ゑて、張子の面を被つて首を掉つてゐると、保は干菓子の松葉を面の口へ擬つて、

面白さうに遊むでゐたが、
「奥さん、お客様が。」　と婢が通じると、お種は屹と振向いて、思懸けぬ面色で黯い紙門の外を見込む目前へ、柳之助が衝と顯れたので、
「まあ是は。」　と夜着を撥斥けて、早速蓐の上に居直ると、保は呆れた顔で、盱々した目をいとゞ圓くして、知らない小父さんでもないが、無氣味さうに視てゐるのを、婢が紙門の外から手招を爲れば、彼面と菓子を容れた紙の鞄を手早く引抱へて、疊を蹴立てゝ迯げて行く。
「どうも這麼に取亂して居りまして、大變失禮でございます。」
「はあ。」　と應けた限で、莨は外套の衣兜に入れて置いたも忘れて、有るたけの衣兜を撈廻して、やう〳〵手に觸つた手巾をば切めて曳張出して、出たくもない洟を去む。
「昨晩は又失禮を。」　と實は此方から言ふべき所をお種に先を越されて、彌引込むではゐられず、

「いや、私こそ失禮しました、御病氣ださうですな。」
「いえ、何有、ちよいと風を引きまして。」
「昨晩お引きに成つたのださうで、どうも實に僕は失禮しました。」
「いゝえ、貴方、お午後にお湯に參つて、一寸寒いと思ひましたら、それから頭痛が爲出しまして。」　とお種は取繕つて言ふ。
「はあ、然し御氣分は如何ですか。今葉山君に聞きましたら、大變そのお惡いのださうで、僕は心配しました、ですから一寸お見舞に。」
と叉手を背廣の衣兜に入れたが、萇は依然無い。お種は帶の緩さに前の直に亂次なるのを、氣にして正しながら、
「それは如何も恐入りました。何有もう些の鼻風なのでございますよ。葉山が那樣事を申しましたか。」
「はあ、昨夜僕が晩く來た爲に貴方が風を引いて、今朝から唸つて居る、と然う言ふてす。」

お種は笑つて、
「僞でございますよ。」
「僞ですか、あ、僞ですか！」
「もう始終冗談ばかり言つて居つて困ります。」
「然し、風邪は注意せんと可かんですな、藥は？　はあ、飲みましたか、それは一番可いです。死んだ妻は藥が大嫌でした、究竟其が爲に死んだと謂つても可いでせう。初發は風邪でした。實際風邪は總ての疾病を誘ふですね、それだから注意せんと可かんですよ。一寸した風邪なので僕も那麼には思はんでした、それに妻は能く不斷風を引いたですから、自分は勿論、僕も大した事は無からう、と平氣で居つたです。」
忽ち打つて變つて柳之助の喋るのにお種は驚いた。
「其が失でした！　輕い内に滔々藥を飲ましたら、何でもなかつたです。實に殘念したのです。貴方の今の風邪ぐらゐの時に藥を飲むだら、難は

無かつたです。貴方は善い、貴方は善い！　藥をお飲みなさるから善い、妻は其藥が嫌なのだから爲やうが無いぢやありませんか。ですから僕は喧しく言つたです、然すると直に慍るです……から好加減に爲て措いたですけれど、僕も不注意でした。本當に貴方も注意を爲さいよ。躰は大事に爲なければ成らんです。死んぢや可けません、死んぢや大變です。もし明日になつても癒らんやうだつたら、醫者に診せるが可いですね。葉山君は平氣で酒なんど飲むで居るけれど、僕は心配でならんですよ。妻も同然風邪からですからね、而して同然湯に行つてからです。那樣事が似とるですから、僕は何と無く不愉快です。」

未だ何か言ひたいことが有り氣に、柳之助は熟と首を傾げてゐる。お種は曩から努めて起きて居た爲に少し頭痛がするので、柳之助の手前其とはなしに片手で額際を揉みながら、

「いろ／＼御深切に難有うございます。」

柳之助は忽ち見着けて、
「あ、頭痛がしますか。お寝みなさい。」
「いゝえ、何有。」
「お寝みなさい、え、お寝みなさい。」と起つと跌けて、茶托ぐるみ茶椀を蹴飛して、縦々とお種の蓐の裾へ廻つたので、何を爲るのか、と逃身になつて見てゐれば、夜衣を扛げて、
「お寝みなさい、お寝みなさい。」
「あれ、まあ飛でもない！　貴方何卒…………。」とお種は身を揉むのに、柳之助は獨り會得むで、
「何有、可いです、お寝みなさい、被けてあげます。」
「では御免を蒙つて私は横になりますから、何卒貴方それだけは…………折角でございますけれど。」
とお種はやう〳〵の思で彼の手から夜衣を引放す。

「はあ、然ですか、それぢや…………。」と調子の外れた顔をして、柳之助は悄々座に復つたが、坐るか坐らぬかに、

「ぢや又、…………お大事に爲さい。」

と魚膠無く起上るのを、お種は機嫌を損じたと見て、實は頭痛がして早く行つてもらひたいのではあるが、義理にも留めずには居られぬ所で、膝の上に引附けてゐた夜衣を拂ひ除けて、

「貴方、まあ宜いではございませんか。」と蓐の端まで身を進める。

「はあ、難有う。又…………。」と迯げるやうに柳之助は此を出て、茶の間に還つて見れば、盃盤狼藉として葉山は既に櫻色の機嫌。

「如何したい、喰付かれも爲なかつたかい。」

「那樣事は無い。」

「そりや、まあ結構だつた。餘り長いから如何したかと、實は今君の御見舞に出掛けやうと思つた所さ。でも能く這麼に長く居られたね、捉ま

つて話込まれたのかい。」
「いんや。」
「默然で唯睨競かい、あゝ氣の利かない！」
「いんや。」
「然うでもない？　ぢや甚麼だらう。」
「病氣の事に就いて種々忠告を爲て居つたのだ。」
「君が？」　と葉山は眉を皺めたが、
「ふむ、不思議だ。何しろ、女と應待を爲るのは、どうも照れて可かんものだ。私などは極臆面の無い方だが猶且窮るね。それを君が今まで繫いだのは感心したものだ。
いや、毎も言ふことだが、恁してお互に兄弟のやうに爲てゐながら、細君には他人行儀なのは面白くない、是非殿樣同樣にお見識り置かれて、末長く御懇意に願はなければ非さ。能く世間に在るぢやないか、獨身の

内は仲を善くしてゐたものが、所帶を持つと妙に遠かつて、毎日のやうに往來をしてゐたのが、段々と御無沙汰になつて、結局には年始だけの顏出になるよ。それから其先が、到頭一錢の郵便はがき一枚とまでなるのは酷からう。お互に何かまあ端書にはなりたくないぢやないか。それに、甚だ意氣地の無いやうだが、他が妻君を持つと、何と無く其家へ行難くなる奴さね。と云つて、持參附でもなければ、御臺所を持つて來て居るのでもないのだよ、それなら別に妻君に對して遠慮も糸瓜も無さゝうなものだけれど、其處が妙さ、這は生きながら山の神とも崇められるほどの德が有ると見えて、十七八の可愛らしい娘でも、頭に圓い髷を載せて火鉢の前に端然としてさへゐれば、さあ諸の出入る惡黨輩は戰慄いて、私のやうな益友までが自と氣兼を爲るよ。そこへ行つて長尻をしたり、夜を更したりさ、就中時分時に落着拂つて、其擧句が引張出しの、其晩が旦那樣晩歸などゝ來た日には、神罰は忽ちだね。

君などは然云ふ事は御心得はあるまいけれど、妻君と云ふものは何處のでも必ず一冊づゝ、親にも見せないと云ふ、それはなか／＼嚴しい帳面を皆須むでゐるものだよ。えゝ、妄ぢやないとも、搜して見給へ、お類さんのもあるから。その帳面と云ふのが、名を聞いてさへ凄然するね。」

葉山は我面白に調子付いて、

「何と書いてあるかと思ふと、可いぢやないか、(屹度覺帳)！ (屹度)が面白い。此二字の裏に、伸上つて、えゝ悔しいといふ妻君の顏が見えるやうだ。」

柳之助は一向氣の乘らぬ顏で、

「その帳面は何だい、君。」

「おゝ、その帳面、その帳面には第一に、内の亭主を引張出す遊蕩友達、來ると飯を食つて行く客ね、一寸貸せを言つて來る奴、其外亭主の醉つて歸つた晩、内を空けた日、怪しい手紙の來た日、など〻云ふ所を一々

記けるのさ。別して、家の不爲になる友達の名は、洩無く留めて置く爲の帳面だから可恐からう。何の爲に留めて置くかと云ふと、それ、そこが(屹度覺帳)だ。此御帳面に留められた奴が、其次に踵々行かうものなら慘膽！　輕い所で、異う諷諫られの、少し重いと、顔色を爲れます。一遍お帳面に留められたが最期、もうそれからは行く度に冷遇を蒙るのだから、有繋に誰も行く氣は無くなるわね。因で自然と足が遠くなる、すると、其奴が屹と他へ行つて吹聽します、誰某の家へ行くも可いが、あの嚊が左衛門尉胸惡だから面白くないとか、見たくでもない不見識な面を爲てゐるとか、是が又亭主の名折にもならうと云ふ一件だ。那樣評判でも立つと、來て差支の無い人までが自と來なくなる態。然かと云つて、是が何も、女慧うして牛の肉と馬肉と間違へた義ではない、お帳面に記けられる奴の方が重々惡いのだけれど、一寸聞くと妻君の爲方が善くないやうに言はれるのは、そこが女子の損、罪の深い所なのさ。

尤も人間と云ふ奴は弱いもので、所帯を持つた日には、から意氣地は無いのさね。幾許才子だの色男だのと頤を撫でゝも、それは阿爺のソップを啜つてゐる時分の太平樂で、窃と笹折を挈げて親睦會を拔けて歸ると、貴方また差配が來ましたよ、などゝ脅迫されるやうな始末ぢや、萎縮ずには居られないよ。何と云つたつて、獨身の內のやうに氣散は無いのさ。割前で蕎麥を食つて、歸りがけに、一寸その時計を貸し給へ、などゝ云ふ鹽梅に物事が手輕に行きません。それが一つは交際の疎くなる發端で、お互に育つて、いつか鼻の下に髭でも生へれば、何か紳士のやうな面にも見える、いや又銘々も一廉紳士の氣さ。因で種々外飾もあつたり、言はれない內情も出來たり、彼此生活が複雜になるに就けて、隔離の出來るのは、實に致方が無いのだ。

然し今の（覺帳）の一件でね、牝鷄の禍を爲る所も大きに有るのさ。其が又所帶の方から謂へば、爲筋にもなる所だから、帶になれば襷には長し

だ。だから考へたね、家に女房あるはさ、恰も庭續に畑の有るが如しだらう。それ、畑には培養をせなければ物は生りません、培養をすれば庭の方が臭くて耐りません。此理窟だよ、女房は庭續の畑さ。臭いからと云つて、それで畑を棄てられもせまい。どうで匂ふものと諦めて、莠と來たら鼻を撮むまでの事さ。

所が君などは臭いのに恐れて、全で寄付かないから拙いよ。珍しさうに吹聽するまでの事は無いが、夫婦の間は魚と水との如しさ。君などは別して睦じかつたから、穴と鰻との如しだつたよ。亭主は動き廻るから魚だ、内君は澄してゐるから水だらう。その魚を求めるのだよ、人と交際を爲やうと云ふのは、魚を求めるのに水を恐れて如何なる。何處までも水理を會得むでゐて、因で始めて魚も獲れるのぢやないか。

噫、息が切れる。」と忙しさうに茶を一杯飲むで、

「さあ魚が水を得たから勢を增したぞ。因でだ、君も是からは、努たか

らうけれど水にも入りさ、臭かつたらば鼻も撮むでもらはなければならない。と言ふと、何だか私が酷く細君に恐入つてゐて、君が常住來るのを細君が陰で可厭な顔でも爲る所から、その禁厭に些と胡麻を摺つて置いてくれ、と頼むやうに聞えるけれど、那樣不見識なのぢやないよ。實は從來度々言つた、けれども君が聽いてくれないから諦めて居たのだけれど、昨夜と云ひさ、又今の見舞に出掛けた手際と云ひ、如何して隅へは置けません。不斷其呼吸で遣つてもらへば何の事は無いのだ。遣れば其だけに行くものを、變に竦むで居なくても可いぢやないか。その呼吸さ、その呼吸で是非一番今日から改めて始めてもらはう。それに、いづれ君の彼所の所帶を仕舞ふと、内へ來るのだらう。」

應答が無いので、葉山は聞直す。

「來る意なのだらう。」

其顏を柳之助は眩しさうに見て、ほやけた聲で、

「未だ極らんのだよ。」
「未だ極らない？　それぢや此方ばかりで極めてゐたのか、大失敗だ。來たら可いぢやないか、それとも何處か外に所期があるのかい。」
「有りは爲んけれど。」
「それぢや如何するのだ。」
柳之助は墨々してゐる。
「もう何とか極めてなけりや、間際になつて狼狽だらうぢやないか。」
深切にも言ひ、推しても了簡を聞いたけれど、漠然とした挨拶ばかりで、竟に要領を得ずに了つた。
旋て十時の時計を聞くと、柳之助は急に身繕を爲るので還るのかと思ふと、
「今晩泊つて行つても可いかい。」
「泊る？」　と葉山は餘りの思懸なさに念を推す。

「不都合かい。」

「不都合な事は些とも無いが、希しいことを言ふからさ。」

「又此二三日寝られんで窮る。還らうと思つたら可厭な心地になつたから、泊めてくれたまへ。」

「可哀さうに元は一人で寂しからう。」

（十二）の一

所帶を疊むのは姻家の母親は大の不同意で、男たるものが一家を搆へたのは一人前になつた證と云ふもの、それでこそ始めて男の數に入つたのである。世間にそやれ政治家だ、學者だと、高慢ちきな顏をして、滿足に一軒の所帶さへ張切れぬ人が幾多もある。甚麼に可重人か知らぬけれど、高が自分の身始末、それが出來ぬやうで、何が出來やう。私に謂はせれば、三文の價値も無い人士、昔の武士は幾許貧乏しても皆武具の用意はしてゐたと云ふ。紳士とも謂はれやうものが、家を一軒持たずに居て濟むであらうか。世間へ對しても誠に愧しい譯――腑効の無いことである。それとても意氣地が無くて持つて持てない所帶なら爲方も無いが、然でもないものを、醉興にも程が有つたもの、今更下宿住とは何事であらう、と云ふのが母親の了簡。そこへ話をしたから以ての外で、柳之助

は太く意見を爲れたのである。而して、一旦歸いた娘は、身體さへ差上げて貴方の物になつてゐるものを、離緣を爲れたではなし、その荷物を復される理は無い、私方では請取りませぬと云ふ口上。母親は辯舌爽快柳之助は口不調法と云ふのであるから、犇々言捲られて、ぐうの音も出なかつた。

然し、如何やつても不愉快の所帶は疊むで了はうと思込むだ柳之助は、辯解がましく反復して、その不愉快の事情を抒べたのである。すると母親の言ふには、其不愉快も當座の事で、長くて半年も經たうなら、左か右か忘れられる。一旦所帶を持つたものが、下宿住や同居などをして、その不自由の辛抱が出來るものではないから、一圖の了簡で那樣事を爲やうより、年寄の言ふ事は聞かうもの、那麼にも煩をば可愛いものに思つて下さる貴方の事を、惡いやうには思はぬのであるから、まあ〳〵騙された氣で、もう二月三月あのまゝで辛抱を爲るやうに、と理を分けて

の意見、と云ふよりは頼むやうにして言聞かせたのである。段々談話の裏に、柳之助も(はてな)と氣の着くことがあつた、其は正しく後妻の事に就いて母親が謎を懸けたので。此謎を懸ける前には微見したので、微見す前には匂はしたので。實は匂はしても利かなかつたから微見し、微見しても通ぜぬやうであつたから、到頭謎を懸けて見たので。柳之助も有繋に(はてな)と思つたのは其時で。是は長く話をさせて居る所ではないと心着いたから、

「それでは最一度考へて見ます。」と草々に切揚げて別れたが、因で思合せると、母親の不同意なのは、お島を後に直さうと云ふ肚に違無い。それでは愈彼所帶を持つては居られぬ。母親が不同意なら不同意でも管はぬから、此方は此方で斷行するより外は無い、と柳之助の決心は益固くなる。

「考へて見ませう。」と言つて別れた限、七日經つても十日經つても、

考へて見た挨拶が無いので、母親は氣にして、百個日の法事の打合旁柳之助を訪ねたのである。

その日は日曜で、彼人の事であるから休日だとて出懸けは爲まいけれど、然し朝の間にと、十が十まで在宅と見込むで、好物の菓子を土産に喜ばれる氣で來て見れば、案外の留守！

「何からお話し申さうやら。」と云ふ顏で、可懷さうに元が款待をするのも、餘り嬉くはなかつたが、之から樣子を聞いて見れば、昨夜から歸來の無いのは葉山へ泊つたのであらうとの事。と言置いて出たのかと聞けば、然うでもないが、近頃は毎晩のやうに食事を了ふと葉山へ遊に出かけて、內は寂しくて寢られぬと言つては泊つて來る。それから直と出勤して四時に歸る、日暮までは內で、又葉山へ出向く。

「內は私一人のやうなもので、もう〳〵寂しくて敵ひません。」

と怨言がましい元の口氣。

「それでもまあ〳〵旦那樣の御爲には、葉山樣が誠に洒脫なお面白い事てございますから、お遊びに御出になるのは、御氣霽になつてお宜しうございませう。其所爲か、此頃は一時のやうに欝切つて御在なさるやうでもございませんから、其がまあ何よりでございます。眞に一時の御樣子では、御病氣にでもお成なさりはしまいか、と私は慄々いたして居りました。」

段々聞くほど母親は腑に落しかねる。近頃は夜泊を爲る、而して一時のやうに欝いでは居らぬ、百個日が經つと所帶を疊む、而して此間も言ふには、もう一生妻は持たぬと決心した。如何も言ふ事爲す事が變だと思つたが、それでやう〳〵解めた。一生妻を持たぬのも、所帶を疊むのも、近頃は機嫌の好いのも、皆其の夜泊が爲す業？　何處の葉山か知らぬが、はて困つた事になつた、と母親は遽に投首をして熟と考へ始めた。元は其體を見て、是は何でも逢はねば濟まぬ用があるのであらうと察して、

「遠くもない所でございますから、車を持たしてお迎にあげませう。」
と氣輕に起つのを、母親は力無げに頭を掉つて、
「まあ、止しませうよ。」
「でも貴方、折角御出あそばしたものを、もう一服あがつて在らつしやいまし、雜作はございません、直でございますから。」
「いゝえ、葉山さんには居りますまいよ、いづれ百個日には會ひますから…………。」
思案萓に雁首の熱くなつた煙管をば、思切つたやうに筒に容れて、母親は窃と長吁を吐く。
「日曜でございますから葉山樣と御一所に御出遊になつたかも知れませんけれど、まあ左も右使を遣りませうでございます。」
強ひては母親も止めぬので、元は早速迎の車を誂へて來る。
程經つて門の外に車の音がして、

「へい、唯今。」　と車夫が格子を啓ける。元は飛んで出る、母親は耳を欹てる。

「えゝ、今朝ほど彼方の旦那樣と龜井戸へ梅見に御出になりましたさうて。えゝ、御歸來は晩方だらうと有仰いました。」

「おや、然でしたか、御苦勞樣。」　と元の言ひ切らぬ間に、奧から聲が懸る、

「其車で直に私は歸りませうよ。」

(十二)の二

悔見とは虚妄、宿から使の來た時柳之助は確に葉山の二階に居たのである。思懸けぬに母樣の訪ねて來たは、恐らくお島の事。曾ては大變と、用捨も無く居留守を遣つたことは遣つたが、さあ後になつて胸の安からぬこと太甚しい。彼の率直の了簡では大罪でも犯したやうに、居ても起つても在られぬ樣子で、默つて考へてゐては、時々堪へかねて、

「僕は惡い事をしたなあ。」と餘り煩く言ふのが、到頭葉山の耳に障つて、

「それほど惡いと思ふ事なら、初發から遣らないが可いぢやないか。後で又惡いと氣が着いたのなら、此で喑々言つて居ずと、先方へ行つて悔つて來るのが早手廻だ。高が居留守を遣つたのぢやないか、それしきの事に憂懼するやうな事ぢや、君とは漫然と同乘も出來ないよ。何故も無

いものだ、車の底が抜けはしないかと、輪が一つ轉がる度に聞くだらう、弱虫!」

呵られると、それで落着いたが、依然内々は氣に恚てゐるので、葉山は竟に咬むで哺めるやうに、憖ひ歸つて會つたらば、徒足をさせたくらゐには換へられぬ氣の毒の想を爲ねばならぬ次第を說いて、漸く安堵を爲せたが、之に就けても、旋て所帶を疊む大事件の斷行が此人に出來やうか、と危いものに思つて、其始末方を試に訊ねたものである。

如何いふ方寸の內か、と葉山は片唾を嚥むでゐると、柳之助は平然としたもので、荷を積むだ車の後から、鑛物の標本とランプを兩手に持つて、宰領して行くゝらゐに、いと易く考へてゐる。葉山は呆返つて洒落も出ぬ。恁云ふ場合には如何する、此處置は何と着けると、先づ姻家への掛合、老婢の始末、差配への挨拶、荷物の世話も有らうし、道具屋も呼ばうし、第一に引越先の算段、恁も爲なければ成らず、那も爲なければ成

るまい、と一人の才覺で八天狗を働かねば成らぬ面倒を、一々並べ立てて責めて見たが、それでも自若として、

「那麼事は勿論僕には出來ん。」

「御大名の引越ぢやあるまいし、殿樣にも御家來にも一人限の癖に、惡く大束なとを言つて落着いてゐるよ。殿が御手を下して遊ばさなければ誰が參つて仕るのさ。」

柳之助は莞爾とも爲ず、

「僕は無論始から那麼事は君に遣つてもらふ意で居るのだもの。」

「えゝ！」と葉山は故と目を瞪つて、

「恐れながら御前へ申上げますが、只今君と仰の有りましたのは、葉山誠哉の義でござりまするか。」

「何故さ？」

「何故とは酷い。いや此義ばかりは葉山誠太夫平に御免を蒙りませう。」

「何故、何故、何故！」と柳之助は遽に狼狽へて、
「そりや可かんよ、可かんよ。」
「何方が可かんか知れるものか。」
「可かんとも、もう然う極つとるのだもの。」
「誰が極めたのだ！」と澄した顔を柳之助は打目戍つて、
「そりや窮る、僕に窮る。」
一切其邊の相談は無かつたから、如何爲るのであらう、と葉山も實は思つてゐたのであるが、いづれ事の有る日には舁込むで來やうと、其肚では居たものゝ、（無論）であるの（極めてゐる）のと、何の話も無い先から役割が付いて、萬端委せられてゐるには、少しばかり肝を潰した。然し大方這麼事であらうと思つた、と快く引承ける事は引承けたが、爰に甚だ迷惑至極の一條が有ると言つて、葉山は頻に首を傾けた。
それは外でもない、姻家の思はく、是が極めて辛い。如何言つても由無

い恨を受ける人にならねばならぬので。話の樣子では、母親は飽くまて所帶を疊むのは不得心で、柳之助が一生獨身も胡亂で、と云ふのが妹のお島を後へ直さう下心であるから。其を柳之助が嫌つて、所帶を崩して、行先はと云へば自分の家。此自分なる葉山が日頃兄分であるとは、母親は能く知つてゐる。さて見れば、是は柳之助の智惠ではあるまいと來る。何でも葉山の差金に違無いと來る。餘計な事を爲る憎い奴だと來る。然う來られるのが誠に嬉くない、と葉山は此の所を考へたのである。

因て、此事情を柳之助に話して、萬端の世話を爲ぬてはないが、此を何とか一つ稜立たぬやうに、巧く片附けたいもの。君も從來散々世話になつた岳母の事、又此後とても末長く親類の往來を爲なければ義理が濟まぬから、事を手暴に遣過ぎて、此限喧嘩面になつて了ふのも甚だ好ましからぬ。又自分にしても、親類盃の席に列つて、不束な娘を何分とも願ひまする、と開き直つて賴まれた兄樣であつて見れば、姻家の阿母さん

に睨まれたからとて何の可恐いことは無いが、それでは如何も寢覺が好くない。彼方も立てば此方も立つて、九尺二間に戸が三枚ばかりも實は欲いくらゐの所であるから、此は例の變人で遣られては、本人は其で可からうけれど、哀を留めるのが萬端の引承人、是が皆打被らねばならぬから、君たるものゝ所作は、「大立者の役で難しいね。」と葉山の腕組は容易に釋けぬ。

成程然うでもあらうけれど、素より自分が組立てた所帶、其を自分が毀すのに、然まで他に氣兼を爲ずとも可さゝうなものである、と柳之助は甚だ其意を得ぬのみならず、母親も亦故障などを言ふべき理ではない。然るに今度の件に就いて不服なのは、畢竟お島を妻に與れたいが爲、其を此方が否むだからとて、それで感情を害するのは手前勝手と謂はねばならぬ。手前勝手に對して會釋を爲る必要は無い、と柳之助は獨で業を沸すばかりで、一向件の始末に就いて智惠を絞らうとも爲なかつた。實

は其智惠も葉山に委せた萬端の内の一つに勘定して、那麽思想は全く自分には無いからと高楊枝でゐる。そこは宜しく葉山が引承けて、工夫をゐたが、さて思はしい智惠は出ぬもので。

此夜も柳之助は泊つて、翌日學校の歸途に直と姻家を訪ねたのは、無論葉山の指圖で、其から二週間の後が百個日の法事、葉山誠哉も親類の格で其席に招かれたが、此が聊か兄分の技倆と、手藥煉を引いてゐた効に、姻家の兩親と懇談數刻に渉つて、左やら右やら例の件は落着した狀、此上は別して親しく末々まで不和變などゝ嘈く中に、母親も頻に滿足らしく爲てゐたが、時々忘れたやうに可恐い目を爲る、苦い口角を爲る、氣が着いては溫容にゐてゐるのを、絕えず見てゐたのは座中に葉山一人。

（三十年七月）

多情多恨 後編

（一）

さて一所になつて見ると、お種の想つたほど、柳之助は其事を苦に病むのでもないらしい。夫から聞いた所では、間がな隙がな思窮めて、食べるものも食べずに泣いてゐるのかとも考へられたのである。猶夫は懇々も言つた、鷲見はまるで病人なのだから、其心得で取扱はなければならぬ。何でも看病を為る意で、深切に、優しくと、聞いた時はお種も白失した。

抑も家内に人一個殖ゑるといふは、思の外面倒なもの。それが、奉公人でもなく、厄介でもなく、泊客でもなければ、萬更預りものでもない、同居と謂へば謂ふやうなものゝ、尋常の同居とは少し理が違ふ。第一主

の親友であつて、此方から言出して世話を爲るのであつて見れば、勿論大事に爲なければならぬ、次には看病も爲なければならぬ、總て主同樣に扱はなければならぬ、究竟二人の夫に傅かなければならぬのである。夫一人、その一人に傅くさへが手一杯の大役である。一日の務はそれでもう〳〵澤山なに、四歳になる保といふ子もあれば、七十に近い舅もある。或時は最一人お種の欲い場合も有るのに、同じ厄介ながらも偶には何かの手助になる人物でゞも有る事か、目に見えて手の掛る、相應に氣苦勞も爲ねばならぬ、所謂二人の夫を有つやうなものと思へば、有繫に慄然としたが、案ずるよりは產むが易して、まづ柳之助が一日の生活は、朝の八時に學校へ出て、午後の四時に退けて來る。それから二階へ昇つて燈の點く頃迄机に向つてゐる。其內には夫も退けて來る、一所に夕飯となる。二階を鷲見に貸してから、夫は大方茶の間にゐる。夜になれば其處へ話に來ることもあり、又此方から二階に遊びに行くこともある。

やがて寢る、それで仕舞なので。

別に何の事も無い。言出しては泣き、思出しては鬱いでもなかつた。夜は寢られぬからとて、過日のやうに雞の鳴く迄御伽に坐らせられるでもなかつた。お一人で御寂しからうと、茶を煎れて持つて行つて、合手を爲なければ濟まぬのでもなかつた。然し、柳之助は無口で、無愛相で、世話になりながら氣毒さうな顏も爲ずで、構つてもらはなくても困らぬといつたやうな風で、始終不足らしい、折角世話をしても効の無い、居られて面白くない御客ではあるが、其處が正是手の掛らぬ所と、お種は少しも可厭な顏を爲ずに、彼此と陰ながら心着ける。

葉山は又、自分が押張つて同居をさせたのであるから、如何でも爰で柳之助の氣が引立つてくれなければ、面目の惡いやうな所もあるので、昨日は恁う、今日は如何と、日々の樣子に注意して、殆ど其一顰一笑にも心を動すばかりであつたが、幾分の歡喜は、學校へ出るにも、話をする

にも、乃至は机に向ふにも、大分元氣が出たやう。――假其までゞなくとも、漸く諦は付いた懺悔。」

「もう一息だ。」と葉山は頼しく思つた。

成程一時から見れば、元氣も出たやうではあるが、未だ〳〵顏の色は雨晒にされたやうに、光澤も脂も脱けて、頰の邊は凄いほど羸れて、何を見るにも勢の無い眼色で、其さへ直に伏目になる。身體の疲勞した爲か、不相變思徹めてゐる所爲か、何と無く起居が耄けてゐる。

お種の注意で怠らず滋養物を薦めてゐるが、引移つてから未だ漸く二週間許と云ふので、然したる驗も見えぬ。それをお種は頻に遣立つて、如何か最少し發揮さうなものであるが、と折に觸れては言出すと、一口葉山は擽つたいやうに笑ひながら、

「尋常の病氣擧句ぢやなし、牛乳やソツプのやうな物で責立てたつて、然う着々肥立つて耐るものか。那云ふ病氣には又別に結構な適藥が有る

のさ。」
「何でございます。」　とお種が眞に承ければ、
「お前たちの嫌ひな藥よ。」　と益擽つたさうに笑ふ。
「私が飲むのぢやございませんから私が嫌ひだつて管はないぢやございませんか。甚麽藥なのです？」
葉山は天を仰いで徐に頤を撫てた。
「甚麽藥と云つて、一寸申難いのさ。」
判然は解らぬが、大方那樣事であらう、とお種も稍勘付いて、
「貴方又鷲見樣のやうな方に惡い事をお誨へなすつては可けませんよ――
――本當でございますよ。」
葉山は衝と橫を向いて、鼻の心で笑つてゐる。
「昨晩も大層お遲うございました。」
「然やう、然やう、彼此一時過でしたかな。」

言へば冷かされるか、飜弄されるに極つてゐるので、お種は其なり默つて了つて、暫く無言でゐる内に、葉山は直に我を折つて又話出す。

「實に不思議な事も有るものぢやないか、昨夜俺は吃驚した。」

お種は應答もせずに精々と縫仕事をしてゐる。

「えゝ、おい、吃驚したと言ふのに。」

「然でございますか。」

「もう止さう、張合の無い。」　と葉山は座を起たうとすれば、

「はい、伺ひますよ。」

「心身に聽くなら話すけれど、……………昨夜まあ社の員と行つたと思ひな。」

「行らしつたのですか。」　とお種は顔を擧げる。

「まあ行つたのよ。」

「それ御覽なさいまし。」

「餘計な事を言はずに話の要領を聽きなよ。行つたのだ、すると顯れた

のが、四五日前に披露をしたと云ふ藝者だ、可いかね、それが料らず俺の乳母の娘で、（やゝ貴方は）と云ふ事實でも何でも無かつたけれど、吃驚したね。其藝者が十八九だ、十八九は少しも驚かなかつたが、お類さんに生寫！」

「へゝえ。」とお種も有繫に針の手を停める。

「それ、聞いてさへ吃驚するだらう。まして正の物を見たのだから、驚いたらうぢやないか。」

「本當でございますか。」

「背恰好から體度、聲は全然て違ふがね、それは目鼻立から額際、頰の具合、いやもう肖たとは未だ。

そこで俺は反復思つたね、嗚呼之を鷲見に見せたら、甚麼に喜ぶだらう。——鷲見は乾度泣出すよ。て、調子が又馬鹿にお類さんに似てゐるのだから耐らない、何處か恁う女學生染みた、それは餘程似てゐる。那は是

非鷺見に見せたい、見せなくちや謬だ。那は全く鷺見の爲に出來てゐる藝者だよ。」

業々しいにも程が有ると言ひたさうに、お種は獨り面白さうな夫の顔を視るばかり。

「何と不思議ぢやないか。」

「然ですねえ。」と不承々々。

「然ですねえ處かい、這麼結構な藥が亦と有るものか、ソップや鷄子で那の鬱の虫が治りつ事無し、所謂氣保養と云ふ奴でなけりや。疾から其は考へてゐたのだけれど、何しろ精進中の體だ、そいつを曳張出して茶屋小屋這入は、第一佛の前へ對しても濟まずさ、俺も亦餘り無分別のやうで、そこらが何と無く具合が惡かつたから、實は今日迄控へてゐたのだ。

それで、日増に鷺見の樣子が好ければ、酷く譽めた話でもないのだから

那樣事はお舍諸に爲やうと思つたのだけれど、何しろ那してお前が切と盡力してくれるけれど、牛乳やソップぢや迚も可けませんよ。其處へ持つて來て、今の瓜二つと云ふ藝者を見たものだから、もう耐らなくなつて了つた。如何だい、右の藥を少々ばかり用ゐるのは。」

法界悋氣でも無しに、細君は徹頭徹尾の不贊成。

「まあ那樣事はお舍諸なさいましよ。」

極めて冷々に言つて退ける。

「何故？」

「何故でもお舍諸なさいましよ。」

「家暮は困る！　解らな過るぢやないか。」

お種は色を正して、

「私も家暮ですし、菅見さんも家暮です。」

「成程。」　と夫は餘所々々しく言ふ。

「ですから那樣意氣な藥は症に適ひは爲ません。」

「適つたら如何する？」と葉山は意氣込めば、

「それですから、適つたら猶大變ぢやございませんか。貴方は、もう…………。」と後は言はぬほどお種は眞に〳〵呆れたのである。夫は夫で又別に呆れて、

「困つたものだ、辨らない人だ。如何すればお前のやうに家暮で塊るのだ。一寸洒落に藝者を揚げると言へば、もう直に其場で帶か何かの無心を言はれて、翌日は芝居へ連れさせられて、三日目には起請の取替でもして、……。」

「もう可うございます、解りましたよ。」と匆々と針箱を仕舞つて、取散したものを片附ける。

「おや〳〵縁日商人が夕立を吃つたやうに、無闇に片附けるよ。如何したのだ。」

「もうお夕飯の支度を爲なければなりません。あれ、あれ、其を踏むで居らしつちや困るぢやありませんか。」

見れば膝の下に裁片の端を敷いてゐたので、葉山は其を取つて投付けながら、

「食だ〳〵と、嚇しなさんな、腹なんぞは空いてゐるものか。」

「それでもゝう支度を爲なければ。」

「私と鷲見のは御無用になさいよ。」

「晩く上るのですか。」

「いゝや、是から。」

「では直に上りますか。」

「直に行くのよ。」

「何方へ。」

「へん、家暮め！」

(二)

湯島切通を驀地に下りて一直線に走らせる二臺の人力車は、三町許も行くと、唯有る横町の角に停つた。

上野の彼岸櫻も昨日今日咲初めたとはいひながら、未だ薄寒い夜風が砂を捲いて來る。此風さへ無かつたらばと想れるのは、さすがに春めかしい月の色、朧に霞む向側を、古風に辻占や花輪糖が呼むで行けば、此方側では何處とも知らず媚かしい三味線の音が幾所に聞える。

車を下りた二人は、霜降の二重外套を着て、挽付の低いのを蹈いたのゝ後から、洋服の一人は蹤蹤と案内されて行くやうな樣子、――葉山は到頭柳之助を連出したのである。

旋て其横町を曲ると、忽ち一廓の別天地、狹い兩側に軒ラムプやら御神燈やらが星の如く輝いて、意氣な音〆は行くほど繁く、通過る格子の内

から突然に太鼓を撃つて、黄色い聲を出されたので、柳之助は不意を吃つて、(あゝつ)と言つたが、其聲を返して、

「おい、おい、何處へ行くのだよ。」

「まあ何でも可いから跟いて來給へ。」

「僕は西洋料理が可いな。」

「西洋料理でも何でも御好次第。」

柳之助は不安心な顔を爲て、前後を眗しながら葉山に追付いて、

「非常な藝者屋だね。」

うんともさんとも言はず、葉山は匆々と歩くばかり。

「えゝ、葉山、僕が出る時妻君がね、今晩は早くお歸んなさいと言つたよ。而して何だか心配さうな顔を爲とつたが、如何云ふのだらう。」

「さあ、如何云ふものかね。」　と葉山の目は笑つてゐる。

「だから早く歸るが可からう、飯を食つたら直に歸らう。」

「勿論さ。」と言ふより早く葉山は硝子の燈籠を懸けた門へ衝と入つた。案内が入るから柳之助も跟いて入つたので、何屋であるのやら一向知らぬのである。

門の内は奥深く御影石で甃むだ露地の正面が秩然とした式臺造で、障子が一枚啓いて、銀地の衝立が電燈に反射してゐる、其陰を隠顕忙しさうに走る人影も見える。

玄關にかゝると直に婢が顯れて、葉山の顔を見るより空々しく可懐さうに、

「おや！　入らつしやいまし。」

何と無く間の悪い状で、柳之助は葉山の後に立ちながら、見るとも無く目を遣ると、左手の小陰が立派な供待になつて、自用車らしいのが五六臺並むで、車夫は雜然と火鉢に聚つて酒を飲むでゐる。

何といふ家か知らぬが繁昌する店、と柳之助は思つた。奥まつた一間へ

案内される途次〳〵、思寄らぬ所に階子があつたり、無理な所に座敷があつたりして、頻に藝者の徘徊ふのを見掛けたが、大分二階の賑かな樣子。二人の通されたのは、茶掛つた小意氣な六疊で、折廻した椽の外は中庭になつて、その筋向の間では客と藝者の藤八を打つ影法師が映るのを、柳之助は突立つて見てゐたが、

「馬鹿な眞似をしとるな。」と障子を閉てゝどつかり坐ると、此狹い間を電燈の光は耐らぬほど眩く照して、未だ火鉢も出ねば、婢も來ず、唯明くばがりあつて闃寂した中に、葉山が床柱に靠れて、象牙の煙管筒の頭を閑さうに抜差する音がスポン〳〵と鳴る。柳之助は又更紗紬の裀の上に我張つて貧乏動をしながら、黑部杉の天井を不思議さうに眺めてゐたが、矢庭に、

「腹が空いた。」

「これから飲まうといふ前に立つて、どうも賴もしくないね。」

「けれども腹が空いとるのだから爲方が無い。實際此は西洋料理も出來るのか。」

「何でも。」

「ふむ、然うか、成程。」

「何だい、酷く感心するぢやないか。」

「どうも僕は恁云ふ座敷に電氣燈は可笑いと思つたが、其所爲だな。」

葉山は怪訝な目をして、

「どの所爲だい。」

「和洋を兼ねるからだらう。」　と大いに發明したやうに言ふ。

「何だ、愚にも付かない。」

所へ婢は火鉢を持つて來て、直に引返して茶と菓子を運ぶ。

「あゝ腹が減つた。」　と又もや柳之助の呻くのを聞いて、婢は茶を注いでゐたが、

「あら、洪水は岐阜と極つたのですが、飢饉は、貴方、何方？」

「え丶。」とばかりに柳之助は荒膽を挫がれた。虚さぬ葉山は、

「今朝の火事は番町だよ。」

「あら、然う、番町には私の情郎が居るのよう。」

と惡身をしながら甘怠れて言ふのを、柳之助は愕然と打目戍つてゐたが、やがて眉を皺めて横を向いた。

「いや、然うだつけかね、はてな、もう臺灣にはゐないのかい。」

餘り葉山の眞面目さに婢も不覺と釣込まれて、

「おや、何故、貴方。」

「軍夫の話だらう。」

「おふざけなさいよう！　貴方の洒落は例でも罪が深いから可厭さ。」

「もつと罪の深い事があるのだが、知つてゐるかい。」

「大知り！」　と圖に乘る途端、耐りかねたか柳之助は、

「早く何か食はうぢやないか。」
正に是晴天の霹靂、婢は打魂消て、如何に此人が家蕋てあるか、後學の爲に見て置きたいといふ顏で、彼の面を眺めながら、
「貴方は餘程賤しいよ。此は待合ぢやありませんか、物を食べるなんて、那樣賤しい事を爲る所ぢやないの。」
是も亦柳之助には霹靂一聲で、
「や、此は待合茶屋か。」
「はい、待合茶屋でございます。」
柳之助は慌て氣味で、
「葉山、此は待合茶屋なのかい、おい。」
「何爲、和洋兼帶の料理屋だよ。今直に命じるから辛抱したまへ。それぢやお若さん、何ぞ旨さうなものを、大急でね。」
「何に致しませう。」

「西洋料理だ！」と柳之助は獨で主張する。
「御前があゝ有仰るものだから、それぢや西洋料理と爲やう。」
「貴方も？」
「俺は謝る。」
「では、此方は西洋料理、よろしい。そこで貴方の御肴は？」と御肴の二字に惡く力を入れて、頗る諷する所あるが如し。葉山はぐつと呑込みの、
「それには今日は些と註文が有るのさ。」
「でせう？」と全然心得てゐるのは、更に葉山には心得られなかつた。恁して又彼此と手間取るのを、柳之助は可悶がつて、
「早くしてくれ、もう耐らん。」
急立てられて婢も耐らず、好い話は後にして、
「よろしい、汽車の綱曳！」と忙々出て行つたが、直に入つて來て、

(でせう?)の話を續ける。

「本當に貴方は罪が深いよ。ですが彼妓も流石だと思ひましたね。貴方とは感心!　全く目が高い。一昨日も來て、(先方樣は御存無しの片思だからつまらないわ、姉さん。)か何う言つてるから、及ばずながら私も不便になつて、よろしい、今度入らしつたら私が是非一本買つていたゞいてあげるからなんぞは、今考へて見ると、お若さん馬鹿だつたね。片思とは世を忍ぶ假の名で、實は貴方の方にもトンと胸に應があるのは、こりや凄い!」

何を履違へたのか、獨合點をしてお若の辨じつけるのを、葉山は一向不案內さうに聽いてゐたが、

「おや。それは又部類が違ふやうだ。誰だい。」

「誰だいもないぢやないかね、かね、かね。」とお若は嘯く。

「私の今晚の註文といふのは、少々事情ありで、此間の、それ、姬松と

いふのね…………………」

言ひも訖らぬにお若の猿臂は早くも延びて、葉山の鼻頭でびしやりと一つ拍子を打つた。

「お頼ん申しますよ。」

「はて、心得ぬ。」　と思入がある。

「怪しやなあでせう。何ですよう、不知不識しい、其ぢやありませんか。」

「ぢやお前の言は姫松かい。」

「はあ。」

「そいつは大失敗だ。」　と葉山は頭を圓める。

「ぢや貴方の御心當は未だ別にあるんですか。」

「何さ、其は嘘だけれど、…………困つたねえ。」

葉山は少しく困つたのである。お若の說に據れは、今晩呼ばうとする藝者は、嘘にも自分の事を彼此言つてゐると云ふ。それこそ唯呼ぶのなら

困るどころではない、至極妙であらうが、生憎妙でないのは、例のやうにわい／＼で推掛けて來た今夜ではない、不思議にも鷲見の類さんに生寫の其藝者が、柳之助に見せたいばかり、見せての上の分別も隨分無きにしもあらざる矢先へ、意外の門違は有難迷惑とも、不都合とも。お若は那樣事とは知らぬから、彼者には極内で、功德になるから呼むで遣つてくれなどゝ頻に懇願する。考へた所で葉山も今更爲方が無い。

「看板に詐があつたら代は戴くまいね。」

「貴方でもない、お目が第一曇らぬ鏡でせう。」

「ぢや掛けて見やう。」

「飛んで來ますよ。」とお若も嬉々起つ。

「羽の生へた猫ぢやいよ／＼看板に詐がありさうだ。」

「なんぞと言つて置いて、後で面倒が勃起つたつて私は知りませんよ。」

と出て行く。

柳之助は漸く夢の覺めたやうな顏をして、
「何の話を爲とるのだか、更に解らんぢやないか。而して誰か來るのか。えゝ、何が來るのだ。」
「誰も來やしないよ。」
「羽の生へた猫と云ふのは何だい。唯猫なら藝者だらう、けれども羽の生へたと云ふのは？」
「うむ、あれは酒落を言つたのさ。」
「何の酒落だい。」
益責められて、葉山も少し塞つたが、
「今に持つて來るから見給へ。」と拙いながらも遁げて見れば、柳之助はそれで得心して、
「うむ、料理だね。何か變つた料理ろ何かだらう。」
「愛嬌があるねえ。」と葉山は下肚の痛いのを怺へながら。

旋て酒は出たが、食ふものとては、ちよつぴりと燒海苔に裂鯣、氣取つた香の物ぐらゐ、柳之助は到底空腹を癒しかねて悶々してゐると、襖の外で艶なる聲が、

「姉さん、此方？」

「はあ、直と。」

とお若の案内に應じて顯れたのが藝者である。鬘ほど豐の髮を潰島田にして、白粉が濃いのかと見えるほど色白の、豐頰の、眉の好い、目元の涼しい、左に泣黑子のある、仇氣の無い、芝居の娘形を摸したやうな風なのが、閾際で挨拶をして顏を擧げると、はつとした鹽梅で、お若の傍へ匐るやうに坐つて、

「貴方。先日は如何も。熱いのね、姉さん。」

と菫色の絹ハンケチを顏へ加てれば、お若は橫目で、

「御尤！」

「あら、姉さん、來早々苛めなくつても可いぢやありませんか。」

「苛められても可いぢやありませんか。」　と姫松は一轉と背後を向けて、

「知らない！」

「貴方、お酌！」　と葉山に銚子を出す。

爾時お若は障子も響けるばかりに、

「えへ、えへ、えへん。」

唯驚いたのは柳之助。待ちに待つた西洋料理は來ずに、羽の生へてゐるとか謂ふ猫が顯れたので。事有りげに葉山は自分を誘出して、晩餐でもといふから其氣でゐたれば、料理屋へは來ずに待合茶屋へ來た。何の爲に待合茶屋へ來たのであらう、而して何の爲に藝者などを揚げたのであらう。其も此も可いが、何の爲に始から恁々だと明さなかつたのであらう。彼は元來洒落の好きな男であるから、是も例の手で、自分を驚かす爲に故と秘してゐたのであらうか。其にしても此場の樣子は、五里霧中

を徘徊するやうで、一向合點が行かぬ。成程好むで這麼所へ遊びに來るほど有つて、葉山は誠に面白さうに見える。けれども自分は更に面白くない、のみか、不愉快である、寧ろ苦痛を感ずる。お若とかいふ彼緒面の婢、彼は何者である、客を客とも思はず、無禮極ることを言つたり、厭ふべき擧動をしたり、殆ど我々を侮蔑してゐるのである。實に見るも汚はしい。

それから次には藝者！　那も大會などの場合には、興も佐ける、席上の周旋もする、必要の道具で、賑かな、好いものであると思はれる。然し、恁云ふ人の少い場合には、何の必要が有るのか。凡そ女子は彼等の年齒では、人の前を怯れて、物をさへ得言はぬ、手を一つ動すにも淑しくしてをる、其が處女の美德とも謂ふのであるに、彼は男の如く大膽に物を言つたり、物馴れた老者のやうに差出た振舞を爲る。實に其憎さは、面に唾しても遣りたい。

而して彼等は仲間同士で勝手に喋つたり、笑つたり、戯れたり、怪しからぬ我儘を働くばかりで、全く眼中に客といふものを置かぬではないか。我々は何の爲に這麼所へ來たのか、而して何の爲に藝者を揚げたのか。這麼中で物を食つたとて決して旨からう道理が無い。恁して居る中も絶えず一種の苦痛を感ずる。

自分の家で自分の膳で、その方が幾何氣樂か知れぬ。彼等は我々の一擧一動一言一句に卑むべき注意をして、少しでも見出す所が有れば、忽ち捉へて笑草に爲うと、那樣事ばかりを始終念懸けてゐるのであらう。從來は厭ふべき人としてお種さんを遠けてゐた。今度一家の人となつて見れば、能く世話をしてくれる。それでも未だ何と無く隔てられて、十分には打解けられぬ、何所までも他人のやうな氣がして。彼赭面、彼藝者、思へば彼等こそ他人の、厭ふべき奴なので、家に居てお種さんと話をする時、或は給仕をしてくれる時、決して此に今居るやうな苦痛は感

ぜぬ。
西洋料理が來たら、早く食つて、安樂な我家へ還らう、と柳之助は熟と考込むで、葉山の洒落も、姫松の味な文句も、お若のお喋舌も耳には入らず、兀々と苦い顔をしてゐた。すると姫松は思出したやうに、
「貴方や、大層お眞面目ぢやございませんか。お一盃召上れよ。」
と柳之助の前へ向直れば、其顔を尻目に挂けて、
「俺は要らん。」
「あら、餘り御挨拶ぢやありませんか。」
其處へ葉山は身替の盃を出して、
「此人はお肚が空いてゐるので機嫌が惡いのだ。お若さん、御誂は如何したよ。」
「那樣にお邪魔になさらなくっても參りますよ。」
と空の銚子を攫つて起つて行く。

「鷲見、ちつとも飲まないぢやないか。今日は君への御馳走なのだよ。これほど御馳走してゐるのに、一言も挨拶をしてくれないのは酷いぢやないか。何とか言つてくれ給へ、此御馳走に就いてさ。」

心有りげな葉山の語も柳之助には十分に判じかねて、

「どの御馳走？　未だ何も有りはせんぢやないか。」

それを理窟ぽく、眞になつて言ふのが、姫松には餘程可笑くて、

「貴方や、御覧なさいな、這麼にお酒だの、種々お肴だの、電氣燈だの、藝者だの、有るぢやありませんか。」

「御馳走さ。」と葉山は窃と頤で藝者を指したが、姫松は煙草を吸付けてゐたので知らずにゐる。

藝者が御馳走は柳之助にも解つたが、之に就いて何とか言へとは、何と言ふのであらうと、藝者の方と葉山とを見合せて、遽に口を開きかねてゐる。

「よく見たまへ、肖てゐるだらう。」

柳之助は正直に昵と姫松の顔を眺めるので、

「あら、貴方可厭よ。」とハンカチイフで黒子の邊を隱しながら、首を縮めて斜に葉山の方を見込むで、

「貴方、這麼人の善い方に那樣惡智惠を付けるものぢやありませんよ。貴方こそ肖てゐる癖に。」と嬉しさうにゑてゐる。

「乃公のにてゐるのは土鍋のお粥さ、長々の疾病でね。」

「あら、然うすりや。」と姫松は忽ち居直つて、

「私は水を汲むだり、お香々を切つたり…………。」

「指を切つたり、血を出したり、乃公が舐めて遣つたり、結いて遣つたり。」

「噓ばつかり。」と巽に紮みかける。葉山は面白半分、

「物は試しぢやないか、切りもしないで何が解るものか。」

「私は隨分切るわ！　星さん。」

彼は此家での變名を星と云ふ。それは一座の同伴は皆各自に持物が有るのに、葉山ばかりは未だに月と見たのがないと云ふので、お若が此名を付けたのである。

「切つてもらはう、切れるなら切つてもらはう、然し薄く切つておくれよ、私は齒が惡いから。」

出し拔れた姬松は悔しさうに默つて了つて、在合ふ盃の冷えたのを把つて自暴に呷と飮む。

「餘り見事！　是はお重ねだ。然し體に障ると誰かゞ共難儀だよ。」

と注いで遣る。

姬松は昂然として、

「御心配には及びません、土鍋でお粥を煮てくれますとさ。」

「畜生め！　お香々なら乃公が切らうよ。」

「どうぞ成るたけ薄く。」

「いや、今度は此方が自暴に飲む番か。」　と自分の前には盃が無いので、隣のを拾はうとすると、

「誰に肖とるのだ、僕には解らんよ。」　と今まで視てゐたやうに、柳之助をやう〳〵言出す。折から嚢に拳を打つてゐた座敷で、調子を低く、

ツヽン　ツン〳〵　チツチリン　チリレン　ツンテン　ツトチンチンチン去りし女房のツヽンツン形見とてツトチンチンチン行燈に殘せし、針のあと、わが子を膝に、引寄せて、男なみだの、もらひ乳。

柳之助は熟と聽いてゐた樣子であつたが、別に何とも言はなかつた。言ひたいことの有る葉山も先控へて默つてゐると、姫松が纔に、

「好いのね。」　と呟く傍から、又もや(更行く鐘)を唄出す。

聞捨にならぬ美音が手に取るやうなので、有繫に此方でも水を打つたやうにしてゐたが、旋てそれもチリレン　ツンテン　ツトチンチンチンと

納るのを切掛に、葉山はしみ〴〵藝者の横顏を眺めてゐた目を突如と外して、

「肖てゐるのが解らない？　是が？　是が解らないかい。」

「解らん。」　と柳之助は又一目視て首を掉る。

「是がだよ、是が解らない事があるものか。　えゝ情無い目だ。　能く見給へ、ようく！」

「可厭よ、もう、星樣、どうせ土鍋でお粥ですからさ。」　と姬松は小氣味を惡がつて、外方を向いて了ふ。

柳之助は益稀有な目をしてゐるのを、葉山は少しく焦燥氣味て、

「もう解つたらう。　如何だい、肖てゐるだらう。」

「もう星樣、私は澤山よう。」　と姬松は衝と起つて、座敷の外へ遁出した。

「未だ解らないのかい、是は怪しからん！　君は醉つてゐるからだ、……

………。」

「醉つとるより腹が減つとる。」

「うむ、然うだ。それぢやまあ腹を拵へてから、能く見給へ。」

早速手を鳴せば、漸く今來たと云ふので、姫松とお若が料理を運び込む。柳之助は得たり賢しと、五皿と云ふものを前に並べて、夢の如くスップを吸つて了ふと、息も吐かずに肉叉と食刀を十文字に構へたが、梭を投るやうに左右の一上一下するのを、感心して視てゐた姫松は、

「巧いのねえ、あの手つきが。貴方餘程黒人よ。而して第一召上るのゝ速いこと。」

「そこへ惚れたか。」と葉山は又言懸る。

「いくら惚れてもねえ、私のやうなものゝ合手にはなつて下さいませんとさ。」

と聞いて柳之助は窃と顏を擧げたが、藝者は葉山の方を瞶めてゐるので、

又窃と食事に掛る。

「又お前ほどのものが片思を爲るなんて、那樣腕の無い話があるものか。それは丁度金の有る奴が泣言を云ふのと同じ心意氣なのだ、誰が本當にするものかね。」

實際姫松はお若の言つた通り此星さんには酷く岡惚れてゐるのであるから、葉山が何處までも茶にしてゐるのが、悔しいやら、愁いやら、噬付きたいほど憤れたくて、

「好い加減にして下さいよ。何も那樣に異う有仰らなくったつて、御迷惑なら御迷惑だと有仰いな。」

葉山は然も氣の毒さうに、

「言つても可いかい。」

有繫に意外の挨拶に姫松も今は堪忍袋の緒が切れたやうな聲をして、

「はあ、有仰いとも！」

「言ふよ。」

「仰有いな!!　慣れつたい。」

「迷惑…………。」

姫松は瞥然と見る。

「どころかい。」

「何ですつて?」

がちやんと物の破れたやうな音がしたので、二人とも吃驚して見向けば、柳之助が肉叉と食刀を皿の上に投出したのである。而して窄袴を緩めながら、

「あゝ、食つた〃食つた!」

「さあ腹が出來たら見たまへ。」　と葉山は忽ち女の方を餘所にすると、姫松は茫然して、又今に構つてくれるのを心待にしてゐたが、急には那樣氣色も無いので、不滿さうに襦袢の襟を弄つてゐた。

腹の出來た目で見ても、誰に肖てゐるのやら柳之助には解りかねた。葉山は怺へかねて、(類さんに生寫)と打明した所で、成程と横手を拍れる豫想が、なか〳〵蠢然とも爲ぬのみか、

「類さんに!?」と呆れられて、

「然う!」とばかりに二の句は續かぬまでに失望したのを、何處を如何見て、何を言つてゐるのやらと、此人にも似合はぬ馬鹿々々しさを、柳之助は聲高に笑つたのである。葉山は又、是程肖てゐるものを、本人にあらざるよりは之より肖やうがあるものではない。彼の目は如何かしてゐる。其も知らずに他を笑ふなどゝは以ての外と、小癪に障らぬでもなかつたが、左も右も面々が見る目の事、肖ぬと見たものを是非肖てゐるに爲る事もならず、

「何故是が肖てゐないだらう。」と持餘して拋出したやうに言へば、

「何故でも肖て居らんものは肖て居らんものぢやないか。」

僞でもなく柳之助は肖てゐぬと見たのであるが、葉山は見れば見るほど肖てゐるので、如何しても彼の言が信じられなくて、

「本當に肖てゐないかい。如何しても然うは見えないかい。」

と冗くも訊ねた。柳之助は頑として――葉山は實に彼の自分に向つて此時ほど頑とした事を見なかつたのである。

「何處が肖とるのだ？　君は如何かしとるよ。」

葉山は決して自分の目が如何かしてゐるとは信ぜぬ。其通りに柳之助とても自分が然うとは信ぜぬ。

「これは證據裁判となつた。」と葉山が呟くと、彼は猶頑として、

「僕より確な證據は無いぢやないか。」

間に介つて狼狽されたのが姫松。抑も誰に肖たのやら、肖ないのやら、始は何だか洒落のやうであつたのが、後には段々むづかしくなつて、岡惚の星さんは機嫌を損じたやうな顏色。食べる物さへ食べて了へば可恐

い事は無いと云はないばかりに、彼木訥漢の急に氣の强くなつた面の憎さ。左も右も捨てゝ置いたら惡からうと、
「酷いわ、貴方がたは。他の顏を捉へて議論したりなんぞして。」
因て葉山は氣を換へて、
「ちつと心意氣でも聞かうか。」
「是非伺ひませう。」　と姬松は急遽くして壁際に寄せてある三絃を取りに起つたのは、是からたつぷりと思の丈を糸に言はせる覺悟、乃至少しは自慢の喉も聽いてもらつて、萬更一山百文の不見手でもない處を見せたい下心。
衣兜の時計を出して見ると柳之助は起上つて、
「行かう、もう十時だ。」
「あゝ行かう。」　といふ聲を聞くと、姬松は三絃と挈げて慌忙しく取つて返したが、ずつと落着拂つて、

「歸すもんですか。」
「でも此人が歸ると云ふから。」
「私は此方は留めはしないわ。」
「さあ、葉山。」　と柳之助は自分の席から二三尺ばかりを忙しく往きつ復りつしてゐたが、左右女が彼此言つては自分を袖にして葉山を留めたがる、葉山も強ひては歸りたがらぬ樣子を見て、往きつ復りつの區域を次第に擴げて、遂に襖の外へ出て了ふ。

（三）の一

例より早く退げて柳之助は還つて來たが、彼は出入ともに何と下へ言葉を掛けるでもなく、下宿屋の階子を昇降するやうに、すうと出て行つて、すうと入つて來て、直に二階の居間へ引籠るのである。お類の居た頃は、出るにも歸るにも、其姿を見て何とか言はねば氣が濟まぬやうに、搜出しても一々辨るのであつたが、此に來てからは、弟と那樣事は無くなつて、無挨拶極るのを、（現金な男だ）と葉山は言つてゐる。お種も慣れて了つて今は格別怪みもせぬ。柳之助は机の上へ帽子とポオトフオリオを投出して、上衣を脱がうとする所へ、婢が昇つて來て、

「あの奥樣が、お茶がはいりましたから入らつしやいまし。」

呼れゝば猶豫をするでもなく、直に婢の跡から降りて茶の間へ行けば、お種は葉山の爲るやうに茶器を並べて、姿勢までが似てゐるやう、傍に

は保が大人しく遊むでゐたが、柳之助が入つて來ると、睫毛の長い、黑晴勝の、圓い目を擧げて、餘り可愛がつてくれぬ小父さんをば、何爲に來たらうと云ふ樣子で眤と打目戍つた。其の狀は彼が馴染の理髮床にある西洋畫の(犬の鼻頭へ葡萄を出してゐる子供)の額に善くも似てゐたので、「坊や。」と言ひながら其傍に坐ると、忽ち俯いて、後が可恐さうに母親の方を見向いて了ふ。

「今日は薩摩煎が出來ますから。」　とお種は錫の直截の茶壺を取擧げる。

「あゝ、然うですか。」　と柳之助は例の通り話が無い。

「昨晚は御愉快でしたさうで。」

柳之助は少しく赤面した。出掛に妻君は、早く歸るやうに、と心配さうに言つたのを記憶してゐる。それに歸つたのが十一時。彼は早く歸るやうにお類に言はれて、曾て早く歸らなかつた例は無い。十時と云つた

のを十一時にでも歸れば、翌日お類は怏々としてゐる。お種も心地は同
してあらうと思へば、何氣無く茶に呼れるさへ、餘り肩身は廣く覺えぬ
のである。
「何爲、愉快ぢやなかつたです、那麼事は。」
「何と云ふ藝者が參つたのです。」
「何と云ふのですか。」
「三味線でも彈いて騷ぎましたか。」
「三味線などは全然彈かずに、唯喋つとるばかり。あれぢや何の爲に呼
むだのか更に解らんですな。御馳走を爲ると云ふから、甚麼御馳走かと
思つたら、那麼ものは御駄走ぢやないです。而して類に肖とる、肖とる
と云ふのですが、なあに何處も肖とりやせんので。」
「然うださうでございますね。拙夫では大相善く肖てゐる、其を貴方は
全然肖てゐないと有仰るが、決して那樣事は無いから、是非私に見せた

いなど、言つて居りました。」
「肖とるのですか。あれは全く妄で、唯那麼事を言つて僕に娫つたに違無い。」
「いゝえ、那樣事はありませんよ。」と柳之助は不圖考へて、
「然し肖て居つたら……………。」
「妙でせうな。」
其曉には柳之助は如何するであらうか、とお種も差當つて妙に考へた。
「肖て居つた所で藝者ぢや……………。」と柳之助は苦笑をする。
「然うですとも。」とお種は屹と頷いたが、そのまゝ話は途切れて、二人ともぽつ〳〵と薩摩煎に手が出る。誰に話を爲るにも、相對では柳之助は其人と面を合せることを得爲ぬので、別けて馴染の薄いだけ目を羞せてゐる。折々見向けば眩さうにして、可成庭の方を見い〳〵、やがて億劫さうに言出した。

「然し、藝者でも可いですから、適には氣の紛れるものがあると大變好いと思ふ時もあるですな。酒が所好だと酒でもがぶ〳〵飲むですけれど、然うは飲めず。僕は別に娯樂と云ふ事が無いですから、其が實に困るです、毎日々々唯不愉快で。」

長吁を吐いて、見るとも無く保の顏を眤と視てゐれば、いつか又彼方を向いて、母親の膝を枕にしたのを、彼は猶一瞬もせずに瞳を据ゑてゐる。

「それは然うでせうとも。宅へお出なすつた時分より、此頃では却つてお痩せなすつたやうですよ。」

「然うですかなあ。」と柳之助は蒼黑い頰の邊を撫でゝ見る。

「少しは御保養もなさいまし。ちつとも元氣が無くてゐらつしやる、殿方はそれでは可けません。憖して折角お伴れ申したのですから、甚麼事をしても御氣分を復してあげなければならないと、拙夫も始終然う申して居ります。」

お種の聲は優しげながら命令する力を有つやうに、柳之助は何と無く其が胸に浸みたのである。

「はあ、自分も元氣の無いのは知つとるです、不愉快でゐるのは可厭なのです。………………如何したら此心地が一洗したやうに皆忘れて了へるでせうなあ。生替つて來たいですよ！」

援を乞ふが如く彼はお種の面を鋭く眺めた、その苦悶は非ぬ方を見てゐられるほど弱いものではなかつたので。

「親は無し、同胞は無し、係累も責任も何も無い體だから、實は死んでも可いのです。」

お種は慌忙しく、

「那樣事を有仰るものぢやございませんよ。何ぼ奥樣の事だから可いと申しても、それでは貴方は依樣女子の爲に身を果すのではございませんか。それでも殿方の…………。」と保を膝に搔載せて、

「あれ、大相生意氣な事を申しまして、つい喋過ぎまして。」

「いや、然うでないです、決して那樣事は無いですよ。何卒言つて下さい、十分に言つて下さい。言つてくれる者が無いから、僕は何時までも同じ事を考へて、獨で苦むで居るのです。遠慮無く言つて下さい、僕は喜むで聽きます。ねえ、言つて下さい。甚麼に言つても可いです、無論僕が餘り思過ぎて居るのです、自分も其は知つとるですから、喜むで聽きます。」

誠は溢るゝばかり面に露れて、お種は寧ろ可恐く覺えた。

（三）の二

夙てお種は柳之助の餘りに女々しいのを善くは思はぬのである。抑も男の涙を流すのは、決して其妻を失つた時などではない、それが又戀しいや、可懷いで、羸れるまでに心を惱ませて可いものであらうかと考へてゐたから、柳之助の所作は馬鹿々々しいと思ふほど氣に合はぬので。男といふものは、もつと佗然とゐてもらひたかつた。然も無くては、女といふものが、氣の弱い、物に動じ易い、迷の深い、事に臨めば怯れ勝のもので、左右に獨立の難しいのを、傍から支へて、手を牽いて、仆れぬやうには誰が扶けるのである？　其は皆男の役、その男が柳之助のやうに弱くて如何するのであらう。男としての價値は少しも無いではないかと、彼は此點に就いて專ら柳之助を非難するのである。

とは謂ふものゝ、此世に唯一の樂としてゐた最愛の妻を亡つた柳之助を

ば、何て可憐と思はぬことがあらう。瘦衰へて元氣も無く、鬱々としてゐるのを見るに就けて、それまでに思込むでゐる心の中は甚麼であらうと想へば、女々しいのは別にして、謂はうやうも無く可憐でもある。偏屈ではあるが、謹直な、溫和な、潔白な、熱心な、眞率な、眞に惡む所とては微塵も無い人物と思ふほど、お種は誰救はぬ其人の苦艱をば、手も着けずに見ては居られなかつた。出來るだけは扶けたい意で、勿論お類樣が傍に附いてゐるやうな譯には行かずとも、他人として世話の出來る限はと、靴下の踵の先まで氣を着けて、陰ながら善くしてゐたのである。

他人がそれまでに心配をしてゐるものを、知つてか、知らずか、柳之助はお類の外には神も佛も無いやうに、義理も人前も管はず、始終苦々しい顏をしてゐるのは、餘りと云へば世話効の無い、と能く勘辨はしてゐながら、折に觸れては心地を惡くもする。其とても畢竟餘り女々しいか

ら起る事と考へれば、猶更その女々しいのが堪へられぬほど憎くもあれば、齒痒くもあつたが、決して色にも口にも出さなかつた。適には夫まてに呟く事はあらうけれども、怺へ〳〵て柳之助に對しては其不快を洩すやうな粗忽は無かつたのである。

同居してから柳之助がお類の事で浸潤話をするのは今日が初發と云つても可い、又逃げるやうにしてゐる柳之助が同感を求めやう理も無い。未だに彼はお種に打解け得ぬけれど、外に居て見た葉山の妻と、今は朝夕を共にするお種とに對する感情の良違つたのは事實である。彼の舅に仕へる具合、保を愛する樣子、夫を待ふ鹽梅、他に對するから下に臨む調子、一家を治むる技倆まで——固より那樣事を注意する柳之助ではないが——一所に居れば、見るとも無しに長い間には自づと目に入る、彼は人の妻として非難すべき點は無いと見たのである。從來は故無く嫌つてゐたものゝ、實は其人は一家の主婦として咎むべき所は無いのである。

人の妻であつて、人の妻として缺けたる所が無ければ、其人は寧ろ敬すべきもの。

其よりも直接に彼の感情に影響したのは、同居する以上は主よりは多く妻君の世話になるものを、知らぬ顏では濟まぬといふ考量、彼の無貪着は、杓子あたりで給仕の動靜を察るやうな工夫は無いが、善くされると惡くされるとが解らぬほどの仙人でもなければ、お種の深切にしてくれるのが決して見えぬのではなかつたから、猶更其に對して感謝の意を表する必要を知らぬではない。まして其人は敬すべき妻君であるからは、少しも猶豫する所は無いのである。

それでもお種に親むのは、何と無く氣の進まぬ所から、然う思ひつゝ猶且遁げるやうにしてゐた。尤も彼は世間の誰にも大方恁云ふ調子で接するので、他から嫌はれるのも全く此點、其代には一旦好かれさへすれば、飽くまで好かれるのも此點である。

此頃では柳之助はお類の事を噫氣にも出さぬやうになつた。實は葉山から堅く封じられたので、言へば益々忘られぬ種であるし、言つたとて復らぬ事を、もう〳〵君も言ふな、二度とは我も聞くまい、と或時屹と言渡されたので、柳之助も其後は愼むでゐるのであるが、その苦辛は忍ぶに餘る。當時の彼の身の上は、富も、名譽も、榮達も、學理の發明も、海外留學も、何も外に所望と云ふは無い、唯一件、言ひもし、聽かれもして幾分の憂を忘れたい。せめては其が彼の心を慰める、一つより無い道、其道を塞がれたのは、彼に取つては呼吸を碍げらるゝほどの苦悶であつた。

如何に然うかとて、打解けた間でなければ、言ふ効も聽かれる効も無しお種に向つて訴へやう心はさら〳〵無かつたから、他には諦めもしたやうに見えながら、胸の中では一層焚ゆるばかりに思亂れて、此二週間を過したのである。今日料らずもお種に其事を言はれて見れば、有繫に嬉

しくないことは無い。設ひ然ほどに打解けた間でないにもせよ、一面には敬すべき人、一面には親まねばならぬ人の口から出たのであれば、而して彼は其事に就いて熱心に忠告してくれさうな語氣であつたので。もし其事に就いてならば、如何なる言でも柳之助は喜むで聽くのである。人が有つて、忘れて了へと誨へるならば、自分も復らぬ事は忘れたいのである、喜むで忘れる、忘れる方法を聽きたいのである。彼は其思に同感を求めたいばかりではない、隨分抗撃を受けても苦しからず思つた。熱心なる抗撃ならば、冷淡の同感よりは幾何望ましからう。左にも右にも其事の噂ならば、彼の心の一時を慰むるに足るのである。久しく慰められもせず、涙にばかり暴されてゐた彼の心は、忽ち死灰の中に一點の熱を起して、不覺に悸きつゝ、彼は逼つてお種の口を開かせたのである。逼られてお種も思ふ旨を話した。

其主意は依樣、復らぬ事は諦めるより爲方は無いと云ふに過ぎぬけれど、

其言ふ事の裏に、實家の母でも、葉山でも、最愛のお類でも、なか〳〵此場合には、恁くまでに弱果てた心を劬り得まい、と身に泌みて感じた點があつた。其は優しい聲でもなければ、可懷い語でもない、不朽の道理でもなし、高い教でもなし、畢竟は彼が舅に仕へるのも、子供を愛しむのも、夫に傅くのも、下に臨むのも、皆其同一なる誠(?)があつて、彼の心を動かしたの外は無い。

話は不圖又昨夜の噂に轉つて、例の肖てゐる、ゐないの問答になつたが、其末に柳之助は恁う言出した、

「僕の目には如何しても然う見えんのだから爲方が無いです。那樣ものよりはもつと善く肖とるものがあるですから、二三日内に其をお目に掛けませう。」

「へゝえ。」とお種の不思議さうに目を瞠るほど、柳之助は心陰かに得意で、輕々しく說明を與へる氣色も無い。

「それは何でございます。」

彼は逾誇りかに笑を含むで、

「まあ、何ですか、其時まで言はん方が可いですな。一寸解らんでせう。」

とお種の判じかねてゐる樣子を見て、

「解りますか。然う、少し考へれば解るかも知れません。」

と然も興あり氣に子供染みた喜笑を爲る。

「何でございます。」

問はれるほど猶惜むで、

「解りませんか。」とばかりて、なか〳〵打明けさうにも爲ぬ。而して其を樂みさうにまてゐる彼の洒落は餘りに無邪氣なので、お種は馬鹿馬鹿しいのと執固いのを可厭がつて、

「はあ、解りません。」と手短に言つて了つても、柳之助は未だ興有りげに持扱つて、

「解りませんか。」

「解りません！」

彼は常に其夫の洒落や贅言を憎むことは夥しい。談話の中に無用の諧語を交るのは、愚弄するも同じとまでに考へてゐるのに、一言や二言の洒落ではない、全で一つの謎を懸けたのであるから、例も夫に洒落られて懊悩なると必ず默つて了ふやうに、又默つて了つたのである。然うとは心着かぬから、可厭がられてゐる謎を柳之助は猶も面白さうに續ける。

「それは大きいものです、隨分大きなものです。」

お種も萬更抛つても措かれぬので、

「へゝえ。」

未だ解つたらしく見えぬので、彼は勿躰さうに一歩を進める。

「而して角いものです。」

默つてゐるお種の顔を見い〳〵、

「大きいもので、角いもの、解りましたか。」

「へゝえ。」　とお種の挨拶は、最早應答と謂ふよりは唯聲であつた。聲とよりは太息の碎片と謂ふのが寧ろ適當かも知れぬ。

「其の方が背とるです。一番那で葉山君を驚して遣らなければ。もつ二三日の內です。然う、丁度此位の大きさです。」

指頭で疊の上を書つて、其跡を見ながら首を傾げて、

「隨分大きい。」

顏を擧げて、

「一寸解りますまい。」

（四）の一

柳之助が前觸をした二三日內もはや明日あたりとなつた。忘れたのか、氣にも留めぬのか、お種は別に何とも言はずに居ると、夕飯の膳に坐るや否や、

「明日ですよ、此間お話したものは。」と柳之助は然も其人の待ちに待つ事でも注意するやうに、顏を見ると言出した。お種は生得の昂然とした調子で、

「はあ、然うでございましたね。」

「明日です。」

「明日何だい、此間お話したものだなどゝ、暗號電信を打つたりなにかして。」と葉山はお種から聞いたのを忘れて了つてゐる。一言心着けられて、

「うむ、あの（解りませんか）事件、彼がいよ〳〵明日？　それは面白いね。然し、君の目は腐つてゐるのだから、是が本當の駄目だ。あのくらゐ肖てゐるのを、（何處が肖てゐる？）とは何事だらう。女の方は見ずに物ばかり食つてゐる人物だから可厭になるよ。」

「まあ明日のを見てくれ給へ、此間の讐を復るのだから。」

「へゝ反討にならないやうに用心するが可い。」

「然し君は何でも難すから、何せ難すだらう。難されても僕は管はん、自身が善いと信じたら、それで善いのだ。」

「それで善いとも。誰も然うだらうぢやないか。私だつて善いと思へばこそ這樣細君にでも添つてゐるのぢやないか。」

お種よりは柳之助が極を惡くして、顏の遣端に困り果てる、細君は又始つたと云ふ躰で、默つて聽いてゐる。

「今話をすると實に嘘のやうで、少々氣が尤めるけれども、私が嫁を娶

ふと云つて騷いだ最中には、一時に八軒から申込が有つて、如何だ〳〵と拂曉から媒人が玄關に詰掛けて、我勝に話を付けやうとするので採めるね、始末にいけないから、番札を渡して會ふ事にしたが、近所では噂だつたさうだ、葉山樣の玄關は嫁取のやうぢやない、藥取だ！」

細君も柳之助も笑はされた。葉山も可笑かつた口角を改めて、

「其よりもつと偉い話がある、横濱物產會社の支配人をしてゐる、それ、あの木澤ね、」

「え〻、澁井樣の御親類の。」　とお種も知つてゐる。

「あの木澤、もう其方此方四十だらうが、財は有るし、嬌飾すと來てゐるから若い。妻君の歿なつたのは去年の秋の末だつたかな。」

好い加減に聞流してゐた柳之助も急に身に沁みて、

「はあ、何て死んだのかい。」

「子宮病だ。子宮病だの、胃病だの、熱病、卒中、赤痢などゝ來ると、

まことに死榮のしない病氣さね。そこで此間中頻に繼聘を探してゐると云ふ噂だつたが、いや、候補者の有ること／＼、それが、木澤の所望は初婚のものに限ると云ふのだよ。財の力だね、四十面を掣げてさ、十五年も添つた先妻があつたのだ、それで初婚の候補者が腐るほど有るとは、日本の婦人も好い度胸になつたものさ。

歐羅巴では七十にもなる伯爵の所へ花の蕾の十八ぐらゐのが喜むで適くなどは珍しくないさうだ。其を考へると、人氣は惡い國に違無い。偕老同穴の契と云ふのが本文なのに、後家になるのが山で嫁入をするとは好い畜生だ。

成程財は貴いのには極つてゐるが、然う又拘られても世の中は面白くなくなるよ。第一生娘などゝいふものは錢勘定や米の直を知らないのに限る。財さい有れば（ひよっとこ）でも老夫でも御出なさいでは、生娘のことがあるものか、賣女だ。

那麼所へ嫁に適かなければならないなら、私は淵川へ身を沈める、と物も食はずに泣通すやうな魂が無ければ、可頼くないぢやないか。それが本當の生娘さ。」

「貴方、あれ、御酒が零れますよ。」　とお種は夢中で辨じてゐる夫に心着ける。心着けられても猶且夢中で、

「いよ〱木澤の所へも嫁が極つたさうだが、十九歳とは如何だい。男はもう四十だ。四十に十九！　悔しいぢやないか、え、餘りだね。それて、身分も惡いのぢやない、小金も有るさうだ、何でも麻布邊の可也にしてゐる官吏の娘で、高等女學校を卒業して、ピアノなども鳴すし、女子普通の業は立派に出來て、箱入の無瑕なのだ。寫眞を一寸見たが、好い器量さ。少し意地は惡さうだけれど、何處へ出したつて見事な花嫁だ。まあ考へて見たまへ、是が食ふに窮る身分ぢやなし、不具でゞもあるぢやなし、年が更けてゐるぢやなし、そんなら出戻ぢやなし、年が十九で、

縮入てさ、教育があつて、器量好で、相應な身分なのだよ。いくら陽氣が惡いつて男旱は爲やまいし、何も好き好むで那麼小父さん見たやうな所へ……噫、情無い奴だ！。若い娘の身空で色も戀も無しに、慾の一點張とは如何だい！　然云ふ匹婦の腸こそX光線でお願ひ申すのだ、而して寫眞版に取つて、娘のある家へ一枚づゝ配つて置きたいね。」

言はれても言はれても酒を零し零し葉山は仇のやうに罵つた。

「女も然うだけれど、その木澤と云ふ人も……然うな、世間のものは妻を失ふと、直に又娶ふやうだけれど、那は如何云ふものか知らん。死んで了ふと直に忘れて了ふのかね。」

葉山の不平は花嫁に在つたが、柳之助は却つて男の方の了簡が聽きたいので。十九で二度目の所へ嫁入る娘よりも、十五年も添つた妻の一周忌も爲ぬのに後妻を迎へる男の心を疑ふのである。

「それは別問題だ。」

「別問題だ。然し僕は常に疑つとるのだから、聞してくれ給へ。」

葉山は手を揮つて、

「もう止さう。明晩の前講と致さうよ。」

獨で葉山の辨じてゐる内に、柳之助は匆々と食事を了つて、此時は膳を離れて、次の間で卷莨を吃してゐたが、獨語のやうに、聞かせたいやうに、

「直に後を娶ふ人が能く有る。」と壁に靠れて、目を瞑つて、斷々に煙を吹きながら、其語を默讀するやうな躰であつた。

霎時は葉山も物を言はず、連に飯を食ふ氣勢がして、折々お種が給仕をするらしい物音。隱居所には保の聲が聞えて、急に鎭つた迹とて夜の更けたかと思はれる閑寂を、熟と柳之助は聞澄してゐたが、やがて何氣無く目を開くと、眞晝を欺くランプの光は鮮に夫婦の姿を照して、舞臺の幕が開いたやうに、今更異しくも目を惹れる。

「愉快らしい夫と滿足さうな妻とは見好げな一間に相對つて、夫は外の勤から歸つて暢々として居れば、妻は一日の事を寛々物語らうと、誠を籠めた膳調をして、待つ待たれつした二人は安樂の天地に憂世を忘れてゐる。」

嗚呼、夫婦一日の樂は夜食に在る。目の前に那麼樂しげな夫婦が居れば、一間隣には這麼儚い獨身が、其樂の無い外に更に一の悲を懷いて、暗い處に蹲つてゐる。ランプの光は夫婦ばかりを照して、殆ど自分の所へは來も爲ぬ。彼等は明い所に樂むでゐるのに、自分は暗い所に棲むでゐる。何ぞ世に在る我身の上の此居所と相似たるや、幸の光は此身を照さぬのである。彼等は樂むのに自分ばかりは悲む。何故に同じ人間でありながら此幸不幸があるのであらう。如何にせば昔の幸を取復し得るであらう。考へても〳〵、唯物可恐いほど儚くばかり覺えて、或は此黯澹い所に閉籠められたまゝ、遂に葬られて了ふやうな氣がして、居耐らずに明い方

へ飛出すと、
二人の驚いたこと！

(四)の二

此夜は思寄らずも柳之助には格別不愉快なるものであつた。二人を驚かして明い處へ割込むだ所で　その樂しげなのが頽れるでもなく、二人は二人だけ、自分は自分で、暗い所に居たのと異らぬのである。

其實葉山もお種も自分達の方は措いて、柳之助に話掛けるやうに、やうにと努めたのであるが、彼は一向嬉しくもなくて、心の中には、

(自分は二人の樂を知つてゐる、彼等は決して自分の此苦は知るまい。嘗て葉山が大醉して年始に飛込むだ事があつた、其時類樣と二人で非常に介抱した事がある。類さんが氷嚢で葉山の頭を冷しながら、二時間も附切に枕頭に附いてゐた、自分は衣類を脱せたり、夜具を出したりして、大騒をやつた。それでも二人して騒いでゐるのは樂であつた。二人が心を一つにして、互に手足の如く動いて、或一つの事を二人して半分づゝ

爲るのは、一種の謂ふべからざる幸が自から其中に在る。二人は今如何に幸であるか知れぬ。大醉の葉山は其時前後も知らなかつたが、自分は今知過るほど何も彼も知つてゐる。大醉したやうに此悲がもつと劇しく、もつと急であつて、寧ろ前後を知らなかつたならば、此不愉快は覺えぬかも知れぬ。此悲がもつと劇しく、もつと急であつたらば、自分は甚麼になるのであらう！)

彼は果して其を願ふのであらうか。此悲の大醉は發狂である、その醉覺の水は無論自殺でなければならぬ。彼は自殺を喜ぶ狂人ではなかつた、發狂に樂まむとするほどの變人でもなかつた。然し、彼は何を樂に生きてゐるのか、生きてさへ居たらば失つた樂が又得られるのか、と常に考へては迷つてゐたのである。

(二人の幸なのに就けて、自分の苦は？　葉山の大醉は一時であつたが、自分の憂目は是から長く、或は一生續くのである。

恁思ふと猶更他の幸を見るに忍びかねて、彼は遽に起つて、二階の居間へ還つたが、還つて見れば、なか／＼還つて來るがものは無くて、暗黒の中に唯一個心を引込めたラムプが有るか無きかの悲し／＼に、其載せてある机の上だけを照すばかり。而も其光を受ける物は一樣に死顏の色をして、傍へ寄つたらば然ぞ身毛も竪たうと冷たげに見える。此微寂しい影の中に白銅鍍の寫眞立が漸う隈取つて、筆筒の側に飾つてある、俤は圓髷で紋服の半身、誰のと問ふまでもない。

柳之助は行くよりラムプを佐と明くして、坐ると寫眞を眤と見入つてゐたが、其目は瞬くのを忘れたやうに、姑く瞪つてゐる間に、机掛の花唐草の上に滴々と露を零した。始めて其時瞬を爲ると與に、兩臂を張つて机の上に俯いたまゝ、容易に顏を擧げずにゐたが、やがて思切つた躰で振仰げば、涙は頰の邊まで濡してゐる。左の掌で腹立しげに其目を擦拂ふと、ラムプの火屋は響を作して、裂けて頽れて落ちる、火は翻られ黒

烟を噴く、慌忙しく吹消せば、お類の寫眞も、机も本箱も、二階も我身も、有つたものは皆無くなつて、唯一面の闇い中に柳之助は身動もせずに沈としてゐた。何を考へてゐたのやら、火屋の碎片の冷徹るまでも、其儘に居竦つてゐると、何時來たのか階子の口で例の元氣な聲、

「や、眞暗だ、如何したのだ。」

柳之助は萎縮れた聲をして、

「待つてゐたまへ、待つてゐたまへ。」

「如何した、如何した。」

（五）の一

今日は前觸をした今日であるのに、柳之助は何も持たずに歸つて來たので、お種も有繫に尤めずには措かなかつた。彼は失望に堪へぬ險しい顏をして、

「もう二三日待つて下さい。」と言ふさへ殘念さうな、其氣色を見てお種も、

「はあ、然うですか。」で濟して了つたが、今日には限らぬ、毎でも歸つて來ると、不思議に機嫌を惡くしてゐる。別して不思議なは、朝出て行くのに斷て那樣事は無い、顏の色なら言語なら、朝は割合に冴々して、謂はゞ樂しげに心の急がれる風がある。それが歸つて來ると憔悴として、門を入るも脚の重いやう、或は然も無く歸ることも數の中には有つたなれど、朝出る時に氣の濟まぬらしい樣子の見えた例は前後に一度

でも無い。

不圖恁う見出した以來氣を着けると、往と還との容體は版で捺したやうに、いつも〳〵同じである。それは持つてゐられるステッキ、あのステッキでも知れる。往は飛ぶやうで、還は引摺る、と年寄の耳ながら閑さに聞出した隠居所の舅が面白い證明。

返す〳〵もお種は不思議でならぬ。何故に出て行く時は機嫌が好くて、歸つて來れば苦い顔をするのであるやら。女氣の思過して見れば、餘り好い心地は爲ぬのである。歸つて來るのは誰の家である？　その家へ歸るのが不愉快となら、不愉快の因は其家に無ければならぬ。此家の何處が不愉快で、何が氣に入らぬのか。もしお類さんが此家に居ないからとならば、學校へ行つたとて居るではなし、又始終鬱ぎ通してゐるものが、毎日の勤が何の面白からう、誰にしても怠勝になるが當然である。然も此家が可厭さうに、出て行く時は冴々として、歸來と云ふと憔悴してゐる

る、之には何ぞ理が有らう。
それとも塒に還る鳥の疲れた翼に飛ぶさへ怠く見えるのか、但は例の變人ゆゑかと種々に判じたが、固より何も當推量、唯疑の無いのは其事實で、
「眞に御父樣の有仰つた通り、成程其に違無い、ステッキの音からして然うだ。」
左にも右にも仔細の有りさうな、不思議な、けれども其より未だ心得られぬのは、學校の出勤を怠らぬのが、不思議の中での不思議と謂ひたい。箸を持つさへ力無げに、大息ばかり吐いて、如何に怏々してゐる那裏でも、決して學校を休むだことが無い、休まうとしたことさへ無い。人に言を交すさへ物憂さうにして居るものが、如何して面倒な教授が出來やう、學校へ出る氣が出やう。彼人の氣では、學校も出勤も抛つて、思ふさま鬱いで居さうなものを、是ばかりは願に掛けて一日でも疎にせぬの

は不思議の中の不思議と謂はうか、不思議の上の不思議と謂はうか。迚も有りさうも無い事、出來さうも無い事！　之に就けても熟く變人に違無い、とお種は思ひに思つたのである。

此日の不機嫌は別けて甚しく、昨日までの氣色は何處へやらであつたが、翌朝も同樣で、其睡げな顏はいとゞ恨が有るやうに、其恨をば又抑へるやうに下座敷の椽を踏散しながら、お種を見ると、

「僕はどうも病氣です。」

葉山に呼れて茶の間へ入れば、

「僕はどうも病氣だ。」

苦痛を洩すのか、不機嫌の辯疏をするのか、左にも右にも自分から平生の氣分ではないことを訴へながら、不相變柳之助は學校へ出て行くのである、而してステツキの音も例に依つて飛ぶやうに。お種は呆れる張合も失して、これで歸來は甚麼であらう、と午後の退校を待つてゐると、

謂ふまでも無く引摺りながら、悄々門を入つて來たが、お種に逢つて始めて出した言は、

「僕はどうも病氣です。」

一度ならず二度までも病氣と聞いては案じられる。委しく容躰も訊ねて、然うならば然うの樣に爲ねばならぬ、と其意で始めた話の中に、お種は竟に日頃の不思議を言出したのである。有繫に柳之助は當惑の躰で、

「はあ、朝出る時は然うですかな。歸つて來る時は那樣風に見えますか。」

姑く考へて居て、

「然し實際然うです。今の所では何も樂は有りません、學校へ出るのが……………何故樂？　其理ですか。」と苦笑をして、

「學校の仕事は割に面白いですよ。それは何です、氣分の惡い時は面白くはないですけれど、それでも内に獨で悄然して居るよりは未だ可いです。教場に居ると大勢を相手にして、學問以外の事は全く考へんですね、

それが大變善いです。内に歸つて來ると、紛れる事が無いから、始終類の事ばかり考へるやうになるです。學校に出て居ると其が無いです。是ばかりは實に姻家の母の賜だと僕は常に思ふです。類の亡くなつた當座、僕は學校も罷めて了はうと思つて、もう打遣かして長く休むで居つたです。葉山君にも隨分言はれたですけれど、聽かんで居つたのを、到頭姻家の母に勸められて出たのが發端でしたが、それから今日まで、貴方も知つとる通り、恝して病氣を忘とるやうな顏をして、心地も快くないですけれど、僕は一日も休むだ事はありません、實際行かん方が不愉快なのですから。若し學校が無かつたら、僕は本當の病氣になつて了ふでせう。

葉山君にも貴方にも非常にお世話になつて居るです、今度お宅に來てから一層貴方の御厄介になつて居るです。それに内に歸つて來ると、不愉快な顏ばかりして居つて、僕は甚だ相濟まんです。」

纔に頭を下げたのも、お種には在るよりは可哀に見えて、口には言はぬ心の底までも、それて讀めたやうな想がする。

「何卒是は病氣だと思つて恕して下さい。」

其聲は重く沈むで、聽く身は緊しく壓へられるやうに覺える。

「此間も貴方から忠告を受けました、自分も其は承知して居るですけれど、それで依様可かんです。どうも病氣です、恁云ふ病氣ですから、管はずに抛つて措いて下さい。」

聞けば不思議でも偏屈でもなくて、這様可憐も世には在るものか。人の執るべき務は誰苦に爲ぬものは無い。三十になつても四十になつても七日に一日の日曜を皆樂にする。大人氣無いやうに思はれるが、務となれば何仕事もそれ程に辛いのである。彼人も學問が所好だとて、衆が一日の日曜を思ふやうに、六日の務を喜ぶのでもなからうに、其辛い務をば未しも樂にする身は甚麼思であらう。何程働いても、彼人ばかりは衆と

逢つて、待つ日曜が無い、其上に七日の間務めるにも勝る辛さが片時も胸を離れぬのであるから、其辛さよりはとて他の可厭がる務をばせめてもの樂にしてゐる。同じ人間でありながら、他の苦を漸う樂にしてゐる其辛さは凡そ如何ほどであらう！　それで堪へられるものか、堪へられぬものか、彼人は日曜無しに一週間を他の倍も倍も働くと異らぬのである。

自身にも病氣だと云ふ。あれで病氣にならなくて如何せう、欝がなくて如何せう、痩せなくて如何せう、不機嫌でなくて如何せう、偏屈にもならなくて如何せう。

とお種は後で獨り考へては、自分も曳入れられて欝いでゐた。

彼は柳之助の女々しさを嫌ふとよりは殆ど憎むばかりで、其點に於いては毫も假す所は無いのである。今の歎も悲も憂きも辛きも皆其ゆゑとは識つてゐる、けれども其樣子を見、其心根を聞いては、酷らしく道理ば

かりで責めもならぬ、其は其、可憐さは可憐さで、其可憐さの極は、彼の罪すべき女々しさゝへも一時幾と忘れたのである。

我胸一つに置餘したか、ステッキの音を聞知つた舅にも此事情を話すと、老の氣は更に脆くも打涙ぐむで、

「あゝ、御氣毒な事たのう。それは能くまあ面倒を見てあげるが可い。私は婆樣に別れてもう十年になるが、今でも時々、あゝ生きてゐたらばと思ふ事がある。其當座は忘れられんものだ、と云うて大切な躰を那麽事で傷してはならない。お前たちも何分氣を着けてあげるやうに、のう。」

爾後は飛ぶやうなステッキの音のする朝々、お種は獨で情無い思をしてゐた。彼が歸つて來ての不機嫌も、内に居ての苦い顏も、引續いて始終見せられるけれど、從來偏屈とばかりに勘辨をしてゐたものが、何も病ゆゑと、今では優しい思遣になつたのである。

お種にははや忘れられてゐた再度の二三日内の期限も今日といふ日、彼

の歸來が例より晩いので、例は晩い葉山の方が先に歸つて、その噂をしてゐると、轞々と玄關へ橫付にした車がある。婢は取次に出た樣子、聞えるのは柳之助の聲。

「おや、鷲見だよ、車に飛つて來た、如何したのだらう。」

鰻が天上でもしたやうに驚いた葉山の顏色。其顏をお種は屹と視て、

「御病氣か何かぢやないのですか知らん。」

「行つて見な。」

(五)の二

お種の出るまでも無く柳之助は縦々と奥へ入つて來た。新聞紙に包むで莎繩を廿文字に掛けた竪三尺許に横二尺程の扁い物を重さうに提げて、お種を見ると口を銜いて、

「出來たです、出來たです。」

常は窟のやうな目も霽々して、鼻止さへ何と無く笑含むでゐる。お種は呆氣に取られて、

「何でございます。」と其物の何よりは、今日の彼の何が判じたい面色。

葉山は小机を引寄せて、其に大美濃の罫紙の假綴を六七冊、膝の上にブツク仕立の小厚い版本を披げて、會社の調物をして居たが、柳之助が閾際に立つて、其傍に件の包が壁に寄掛けてあるのを、振向いて横から眺

めながら、

「何だい、大きな物を。うむ、それで車に乗つたのか。何を買つて來たのだ。」

「鷲見さん、何でございます。」

「えゝ、今見せます。」

彼は忙しげに其包を明の好い方面へ立直して、縄を解き始めたが、未だ帽子を冠つたまゝでゐるので、お種は背後から徐と取つて茶棚の上に置いた。旋て覆の新聞紙を引剝すと、柳之助は一歩左側へ寄つて、二人の面前に其物を顯はしたのである。四つの目は忽ち注ぐ。

「能く肖とるだらう。」と柳之助は左臂を張つてコオトの腰に拳を付けて、右の手で眼鏡の端を抑へながら、連踏をして二人の顔を眴した。是は教場に於ける彼の得意を表す體度で、他の答を聞くまでは、眼鏡に手を觸れては始に見た點を變へずに視るのである。

葉山の先づ笑を含むで迎へたのは、お類の立姿を七分の半身に寫した油畫の肖像。額縁は唐草摸様を浮彫にして分厚の西洋木地で、大さと云ひ、裝飾と云ひ、總躰に仰山らしく出來てゐる。

繪姿は柳之助の最も善いと云つて居る寫眞を手本に、歸寧の風俗を寫したので。高島田に結つて、(桃の實に仙雀)の挿込、高い前髮の陰に牡丹形の櫛の端が見えて、見事に鬢が出てゐる。額の廣い、濃くない一字眉の、小さい目の鋭く澄むだ、鼻狀は準縄で、好く緊つた唇頭の愛らしい、頰から頤の邊の四合した、小造の細面は慧しげに、又何處と無く薄つてもゐる。稍横向に、片手は椅子に掛けて、右を袖に引入れて、白襟に縮緬の三枚襲、上は水色の(丸に四方木瓜)の紋服、下着は鳩羽鼠の更紗で、帶は葡萄色地に金茶の網目を織出して、銀鼠で細く光琳千鳥を一群づゝに、處々唐松を地色で配つてある。縹々と絡つた緋の花纐纈の帶揚は胸の邊に雲鶴の形を見せて、帶留の金具は柳の輪の中に金色の一輪椿。

畵は水彩風に見面好く塗つて、飽くまで綿密に筆を用つた、俗氣の多い、仕入染みたものであるが、寸分差はず寫得たとて、柳之助は至極の滿足で、二度まで期日を遲らしたゞけの事は有ると、言分無しに引取つて來たのである。

「まあ大相好く出來ましたこと。」とお種は物珍しさうに眺めてゐる。

其顏を見い／＼柳之助は自分も覗込むでは、

「肖て居るでせう、ねえ、隨分能く肖て居るでせう。」

葉山は元來這油畵なるものが大の所惡で、月の中の兎と油畵の善いのは、話ばかりで見たことが無いと力むでゐるのに、別して善くないのを見せられたのであるから、一も二も無い、續けさまに皮肉が言ひたくて敵はぬのを、やう／＼推怺へて、寧ろ揣摩加減を拜見する氣でゐたが、柳之助が得意で喜むでゐるものを、物が物ではあるし、猶更非は付けられぬので、無理に一箇所を取立てゝ、

「なるほど能く肖てゐる。」と左も右も言つたのは、御座つてゐると知りつゝ目を瞑つて鵜嚥にする想。何とか言はれるに相違無いと、毎度の事ゆゑ柳之助も其覺悟でゐたに、恁う聞いては遂得意で、

「好く出來るだらうか、上手に畫いてあるかね。」

葉山は是に於いて益言ひたい、それを最一つ推怺へて、

「肖てゐるから可いやね。」　と無據に答へる。

「誠に能く肖てゐらつしやるではありませんか。御髮がねえ、好く出來てゐます。」

「然うですかな。」　と柳之助は額の側に立つてゐたのが、不知お種と並むで見物の一人となつて了つてゐる。

「何だな馬鹿々々しい、畫を看てゐて髮の出來を譽める奴も無いものだ。同じ譽めるのなら御器量を譽めるが可いぢやないか。」

お種は挨拶ぶりに少しばかり笑を含む。急に憶出したか柳之助は、

「さあ、君、如何だ、是で此間の仇を復つたらう。」
「仇とは？　仇と呼れる覺は無い。」
「有る。君は有て居もせん藝者を…………。」
「うむ、あの一件かい。」
「君は反討にすると云つたぢやないか。」
葉山は悸へ次手に最一つ悸へて、澁々ながら、
「それは爲ても可いけれど。」
「出來んだらう。」
言ひたい口の蠕々するのを頻に撫廻して、
爾時お種は始めて、柳之助の面上に心の底の打解けた餘波が自から寄せるやうな笑の浮ぶのを見た。旋て彼は油畫の正面の壁に雨膝を抱へて靠れながら、餘念なく眺盡してゐる間に、夢見る如く吾を忘れて了ふと、

其繪姿の鋭く澄むだ目は忽ち可懷さうに動いて、堅く結むだ唇も綻びる、横顔をさへ振向ける、傍に寄つて來さうにしては、又彳むで嬉しげな樣子をして、遂には物を言懸けた。彼は記憶の出來ぬほど種々の話をした、樂しく過去つた事やら、待たれる行末の事やら、睦しい今の事やら。然し、彼は此半年の身に積る歎も、胸に餘る悲も、世は闇の如き凄寥も、それらの事は全く覺の無いやうに捨てゝ置いて、他愛無い私語ばかりに醉されてゐたのである。彼は幻に語つてゐるお類をば、此世に亡い人とは思はなかつた。或時此夫婦は此樣に倚添つて、此樣に樂しく、此樣に話をしたのである、今彼は其の或時の柳之助で、お類とても百年も生る偕老の妻でこそあれ、泉下の魂と思はうか、まして是が畫などゝは。噫、それも一瞬の後！　空想の樂は盡きて、憂世は終に憂世に返り、畫は畫になつて了ふのである。

此幻の醉は長く醒めずにはゐなかつたが、醒めての後も常よりは冴々と

して、多時雜談に時を移したが、話の中も彼は間がな隙がな日を遣つて、唯油畫に執着してゐた。

彼が見さへすれば、其肖像は必ず微笑を含む、必ず物を言ふ、畫と思へば可恐いまでにお類は活動してゐる。葉山は又見れば見るほど拙いものに思つた。彼の思ふほど或は拙くはないかも知れぬが、左も右も善い出來でないのは事實。(これを二階の座敷へ懸けられるのか。)と葉山も肚の中では隨分閉口してゐたのである。

座敷の道具としては然もあらうけれど、是で柳之助の觀好に不足は無いので、強ひて又其巧拙を論じたなら、彼の前にはお類の肖像の名畫はおそらく一面も無い。當時お類の肖像を完全に寫し得る畫家は誰であらう。若くは當世でなくとも、日本でなくとも、希臘、伊太利、佛蘭西、乃至全歐羅巴のあらゆる古來の名匠中にも誰が在らう。天下にお類を畫いて其人を寫得るものは柳之助一人ではあるまいか。彼は其妻を畫くに於て

は、古今絶無の名匠と謂はねばならぬ。彼は水の上でも、闇の中でも、處を嫌はず自在に寫得るけれども、唯筆を用ゐて形に現す術を知らぬ。故に此油畫は假に其術を備つたまでの事で、俤だに眞を寫して謬が無くば、柳之助には其が名畫。お類をだに畫いた圖であれば、彼には世間に一人の名匠も無いかはりに、又一面の惡畫も無いのである。

「實に好く出來た、ねえ、好いぢやないか。」と柳之助は又言出す。

葉山は顧みて他を言ひたさうに、

「好いよ、好い。」

「之を懸けたら又一層引立つだらう。」

此拙いのが引立たれたら事だ、と益閉口して、今日ばかりは葉山も小さくなつて、徐々調物に懸り始めたが、柳之助は獨で油畫を眺めてゐる。葉山は折々口を轉しては樣子を見ると、何時見ても猶且眺めてゐる。其躰を見れば、心の中が思遣られる、思遣れば傷しくもある。世間には喧

喧ばかり爲しゐる夫婦、性の合はぬ夫婦、折合の付かぬ夫婦、義理で添つてゐる夫婦、夫婦でありながら夫婦の効の無い夫婦が幾多もある。その中に一人に換へて、せめてお類は死なしたくなかつたと思つた。

「どれ、持つて行かう。」と柳之助が額を取りにかゝれば、

「もうお歸りかい、ぢや合乘でも申付けやう。」

「何故？」

「夫婦連で歸るのぢやないか。」

柳之助は弗と嬉しかつたので、

「うむ、まあ然うだね。」と言ひは言つたが、惘然立つて考へてゐるので、

「何を考へてゐるのだ。」

「いや、もう行かう、行かう。」

額を引抱へて、蹣跚出て行くと、莎繩が絡むで四五尺も後を引摺つてゐ

る。

「もし、もし、奥様の御帯が解けてゐますよ。」

（五）の三

築地ホテルに社員の送別會があるとて、葉山は日の薄暮に出掛けたが、歸つて來たのは、世間も寢鎭つて、其車の響は三町四方へも聞える頃、好い心地に搖れて一睡した爲に、大方醉も醒際の薄寒さうな風をして、

「何時だ、大分更けたやうだ。」と居間へ通る。

「彼此一時でございます。」とお種は火鉢の前面へ座蒲團を直す。燈の下には疊紙を披げて、子供の衣服が縫掛けてある。其をば一寸推遣つて、

「お茶を淹れますか。」

「何卒ね。」と鼠縮緬の襟卷を脱つて、繋糸織に變八丈の二枚下着の襟を合せ〳〵、身を細くして火鉢の縁に兩臂を掛ける。

「恁云ふ事と知つたら、折を挈げて來るのだつけ。」

「毎でも那樣事を言つてゐらつしやる。」
「何爲志は有るのだけれど、如何も彼の折と云ふ奴は挈げつけないと誠に恰好の惡いものでね。男風だつて萬更でもなし、一寸好い服裝をしてゐても、趯々彼奴を挈げて行く所を見ると、まあ大概の岡惚は帳消になりますよ。」
「貴方などは些と帳消になつた方が可いのぢやございませんか。」
「痛入ります！（女房の妬くほど亭主持てもせず。）然し其位に思つてゐなければ、亭主が茶屋へ行つたのを一時になるまで夜延をしながら待つてゐの、歸つて來るとお茶を召上れなどゝ、然うお手厚くは參りますまい。噫、俺は今晩發起した、お前が死んだら鷲見と二人で尼になつて了はう。」
「私は急には死にません。」
「まあ然う有仰らずに、せめて一月ばかり。」

「然うすれば如何なさるのです。」
「然うしたら少しは女房の有難味が解るかと思つてよ。」
「本當には爲ませんから。」
葉山は笑つた後を欠にして、
「いや、何の彼のと云つて、女房を麁末にしては濟まない。生きてゐれば不足を言ふやうなものゝ、死なれたら大きに不自由を爲ます。鷲見を見るに就けても、大事に爲なければ謬さ。是から精々心懸けて、大事に爲やう、大事に爲やう。」
と黒魚子の紋付の羽織を脱捨てゝ、黒博多の盲獨鈷の帶を解きかけながら、出て行際に、
「さあ奥樣、お寢みなさいまし。お風でも召すと可けません。」
「馬鹿にゑてゐらつしやる。」とお種は直に其羽織を取つて疊むでゐると、寐間の方で、

「お蔭樣で煖い〳〵。」と聲のする傍から、保が唔々言出す。

「貴方、起きますよ。」

葉山が賺してゐれば、直に又寐付いた樣子。お種は夫の衣類を始末して、それから茶の間を片付けて、自分が寐支度をした頃には、葉山は鼾を立てゝ居る。

階子口への通路の扉が醱つてゐるので、お種は鎖めに行つて偶然瞻げると、二階から明が射してゐる。柳之助は必ず燈を消して寐るのである。もう二時と云ふのに起きて居やう筈が無い、寐忘れたのであらう、と火元を氣遣つて階子を昇つて、窃と襖を啓けると、柳之助の枕頭に若い女が悄然と立つて、ゐると見たお種は一時に體溫を失つて、逆竪つ身毛は全身に鍼を立てられる想、處々の肉は異しげに顫つて、聲は出ず、進退は取れず、日も眩れて立竦むでゐたが、忽ち氣を取直して見定めれば、心の迷でも何でもなく、床脇の壁にお類の油畫が寄掛けてあるので。柳

之助は床の間を枕にして、其傍にランプは恰も油畫を照すやうに置いてあるから、一面に隱々として黯澹い中に、其繪姿の物凄さは陰火に現れた影かとも見ゆる。

直に油畫と氣は着いても、お種は猶且傍へ寄るのは無氣味であつたが、思切つて衝と入る途端に、柳之助の夜着が蠢々と動いたので、覺えず飛退つて、疑懼目を着けてゐれば、又動く。

「鷲見さん、お目覺でゐらつしやるのですか。」

聲を聞くと、柳之助は枕を擡げて、顏を振向けたが、裾の方に居るお種には、夜着の襟に隱れて見えなかつた。枕頭へ廻つて、見ると、目は泣腫れて、涙は仍夥しく濡つて、密に啜上げてゐる。

「貴方、如何なすつて？」

物を言はうにも彼は涙に吭を塞がれて急には聲も出ぬのを、お種は待ちかねて又訊ねるので、柳之助は顏を背けながら、

「何爲又考出して…………あゝ、もう、もう泣きはせんです。」

彼は嘗てお種に言はれた事がある、其に對しても此始末は面目無いので

お種とても此で何と言つたら可いのやら言に窮つて、何を考へるともなく控へてゐた。柳之助も姑く默つて、此方に顔を向得なかつたが、

「もう泣きは爲んですから、何卒行つて下さい。」

「はい。」

「もう思ふまいと思つとるですけれど、此油畫を見たら又種々の事を憶出して、吁！」と彼は打俯した。

「然う貴方のやうに思つてゐらしつたつて爲やうが無いぢやございませんか。」

打俯したまゝ又泣いてゐるらしい。

「餘り然う思窮めてゐらつしやると、お體の毒でございますよ。」

急來る涙の間から彼は聲を振搾つて、

「何故僕は恁でせう！」

身を顫しては、

「何故僕は忘れる事が出來んでせう！」

悔涙を咬緊めながら、柳之助は床の上に起直つて、我と我身を責めてゐる。彼の苦み呻く後に餘所々々しく立つてゐるのは誰？是ほどに戀焦れてゐる夫を目の前に置きながら、何處を風が吹くと云ふ顏をして、他は如何あらうと、自分ばかり綺麗にしてゐれば其で可いのか、餘りの薄情も、書であれば所爲も無いが、所爲も無い其書が憎いほど、お種は沁沁柳之助が慘しかつた。

「もう決して思はないと有仰つて置きながら、獨且恁云ふ物をお拵へなさるから、何にも成りは致しません。今晚も之を御覧なすつて、憶出してゐらつしやるのでせう。それでは幾許忘れやうと有仰つたつて、忘れやうが無いではございませんか。何と思召して恁云ふ物をお拵へなすつ

たのでございます？」

柳之助は目を擧げると、寢衣姿でありながらお種は一點の亂した所も無く、屹と容を正して、力を籠めて視てゐられるので、慌てゝ居住を直して、

「實は是は疾に註文したので、其が漸く出來て來たのです。貴方にも從來度々言はれたのに、又這麼所を……どうも面目無いですな。然し、如何して知れたでせう、下に聞えたですか。葉山君は起きて居られるのですか、あゝ、然うですか。」

彼は涙を拂つて、襟を掻合せた。

「僕は今まで人の死ぬのを這麼に悲しいものとは思はんでした。世間には妻に死なれたものは、何も僕ばかりと云ふではないですものな、其を僕ばかり這麼に悲しがるのは、考へて見ると可慙いです。葉山君も言つたですけれど、僕のやうに何日までも〳〵思切れずに愚痴ぽく泣いとる

ものは無い。然うでせう、然うだらうと自分も思ふです。然し、僕は決して思切れんのぢやないですよ、思切ることは十分に思切つとるです。思切つたのと忘れられんのとは僕は別だらうと考へるです、如何ですかね。もう死んで了つたものは如何したつて爲方は無い、で思切つとるです、然し、始終考へん事は無いですね。それが何も死んで了つたものが思切れんで考へるのではないですよ、唯考へては悲しくなるのです。世の中には種々不愉快もあるですけれど、死んだものゝ事を考へるほど、そりや不愉快はありませんな。葉山君は善いです、貴方が居つて。貴方も善いです、葉山君が居るから。僕は此油畫、油畫の外には、外には何も…………。」

と言ひも敢ず顔をば袖に摺付ける。

「それはお察し申さないではありませんけれど、貴方のやうに然う思つてゐらしつたら、御體に障ります。もう現在障つてゐらつしやるではご

ざいませんか、ですから猶々氣が閉ぢて、其が爲に、不知紛れて了ふものも附纏つてゐる理でございます。全く御體を不良してゐらつしやるのです、腦もお不良なつて居るのでございますよ。ちと御保養でもなさいまし、而して御體が良くさへなれば、御心地も自然と良くなりますから。而して恁云ふ物を御覧なさるのは却つて可けませんねえ。今日の晝間は珍しく元氣でゐらしつたから、結構だと思つて居りましたのに、是が出來た爲に今晩のやうな事では、此油畫は毒になりますから、當分の内仕舞つてお置きなさいましな。」

生憎保の啼聲がするので、

「それでは私は是で參ります、貴方も今晩はもうお寢みなさいまし。」

「はあ、どうも種々……………。」

柳之助は階子の口まで見送に出て燈火を見せる。

「憚様、もう宜うございますよ。」

お種は降りて了つた。柳之助も枕に就いたが、直には睡られぬので、又油畫を看てゐれば胸が塞つて涙が出る。思切つてラムプを吹消して夜着を引被つたが、未だ目は冴えて轉側ばかりしてゐると、旋て階子を昂つて來る音。

枕を欹てゝ待つてゐれば、又お種が、片手にラムプ、片手に臺付のコップを載せた銀鍍の西洋盃を持つて、小腋に壜を抱へて、入つて來たが、燈が消してあるので、

「おや、もうお寢みなすつたのですか。」

「いや、未です。」　と柳之助は頭を擡げる。

「葡萄酒を持つて參りましたから、之を一盃あがつてお寢みなさいまし。」

「それは故々……………。」　と起回らうとすれば、

「然う爲すつてゐらつしやい。」　と一盃注いで盃を差寄せる。柳之助は腹這になつたまゝで會釋をしたが、其時彼は一種異樣の所感を起して、

胸の内が漲るやうに覺えた。先一口に其半を盡して、綏かに息を繼いて旋て飲乾して了ふと、お種は待構へて、

「もう一盃召上れ。」

「はあ。」　とコップを出せば溢れるほど注れて、彼は直に口を着けたが、其吃餘を樂しさうに燈に翳して子供らしく眺めてゐた。又一口飲むとコップを盆の上に置いて、言難さうに少し笑ひかけて、

「妙ですな、係して居ると何だか妻が居るやうな心地が爲るです。失敬ですけれど貴方が妻のやうに思はれるです、大變それて酒が旨いです。」

「多度召上れ。」

柳之助は嬉しげに、

「飲みますよ！　もう一盃下さい、是で三盃。あゝ醉つた。然し這麼に愉快な事はありません。毎でも酒を飲むと係う愉快になれるなら、毎日飲むですけれど、今晩のやうな事は實際有りませんものな。」

何彼と言ひながら三盃目も不知空けて、

「もう一盃、どうぞ。」

「大層上れますね。」　とお種は平生と違ふ呷服の手並に少し驚いてゐる。

「旨いですもの、貴方。」

「上るのは可うございますが、過ると後が苦しうございますよ。」

「酒の苦しいぐらゐは何でも無いです。酒の苦しいぐらゐ！」

と苦笑をして、四盃目も半分飲むで、

「貴方は御迷惑でせうな。」

「いゝえ。」　とは言つたがお種も決して迷惑でない事は無い、彼此三時半にもなるのである。

「お寒いでせうな。」　と何ぞ寒くない方法を見出さうとするらしく、柳之助は首を擧げて四邊を眴した。

「いゝえ。」　と又答へたが、實は兩袖を重合せて、隙洩る風に惱されてゐるので。柳之助は空のコップを拈廻して姑く躊躇する躰であつたが、

「寒いですから貴方も一盃如何ですか。」

「私はもう…………………。」

「然うですか、それでは僕が飲みませう。」

「那樣に…………可うございますか。」　と內々加減をして注ぐ。

「旨いですもの。如何して這麼に旨いでせう。然も非常に愉快なのですよ。貴方の爲に今晚は非常に愉快なのです。御迷惑でせうけれど、もう少し居らしつて下さい、可いですか。貴方が行つて了はれると、又寂しくなる、僕は其が心細いですから。」

「それでも貴方もう四時ですよ。」

「四時!?　御迷惑でせうな。」

「朝が早うございますから、もう私も臥りませんては。」

柳之助は是非も無さゝうにコップを把つて、未だ有るのに、

「それではもう一盃！」

(六)の一

今日の日曜は、國民生命保險會社の取締役糸川壽平が高輪の自宅に園遊會を催して、葉山夫婦も招待を受けたのである。此催は彼の長男の壽がボストンの商業大學を卒業して、此度歸朝した祝と、支店設立の事に就いて山陽道筋を巡回する主の留別會とを兼ねたので。今や時候も一重櫻の咲きも遲れぬ彼の廣庭は、年月心懸けて名ある花の數を二百餘も寄せてある。時も此時、庭も此庭、誰有つて當日の盛會を豫想せぬ者は無い。夙て壽平の信任淺からぬ葉山は此際秘書官的隨行を命ぜられて、兩三日内には發足するので、謂はゞ今日の主方である。

天氣は人々の願ひに願つたやうな誂向の快晴ではないが、氣遣れる花曇と云ふほどにも無く、少しく風が有つて、寒ならず、暖ならず、朝から小鳥などが長閑に囀散して、日曜としては玉の如き日和。

午前十時からとあるので、主方であれば九時ほどには行着いてゐなければと、お種は七時前から身仕舞に掛つたが、其間には子供もあるし、夫の世話も爲るので、手廻を爲た意でも、漸く帶留のバチンと緊つたのは八時、疾に車は門に來て軛を並べて待つてゐる。

庭には保が河童頭を十筋ばかりの一寸髷に結つて、黒羽二重の熨斗目の染摸様に鶸茶の同じ下着、淡紅色縮緬の兵兒帶を繚々と後結にして、紫天鵞絨の靴を踏いて、遊ばしてゐる保姆も赤柳條の二子の新しい布子に餘所行の柳條繻子の帶を結めて、襟はメレンス友禪の華美なことは千代紙のやう、赤毛ながら結立の銀杏返を大事さうに頸を長く、坊様の袂の引摺るなどは二の次にして、拘つて帶を掛いたり、繻絆の袖を引張つたり、可笑いやうに憂身を窶してゐる。

お種は支度が出來て、急遽く座敷に出て來ると、其處に兩箇の居るのを見て、

「峯や、もう行くのだよ。」と聲を懸けて茶の間へ入つたが、葉山は見えぬので、二階であらうと昇つて行けば猶且居ずに、柳之助が唯一箇、洋服を着けて、外套まで着て、肘掛窓に靠れながら、投足をした膝に帽子を載せて、保が目覺しく着飾つて庭に遊ぶのを兀然と瞰下してゐたが、人音がするので振返つた。

「おや、此方にも居りませんか。」とお種は襖を啓けたまゝ内を見込むだ其態は繪にでも畫いたやうで、見違へるほどの美しさに柳之助は思はず軀を捻向けたのである。

お種は生壁色の小紋縮緬の紋服に、黒繻珍の丸帶を結めて、納戸の染柳條縮緬の二枚下着、白茶の微い綾紗形の襟をして、長繻絆は肉色の中形縮緬。歌舞伎形の圓髷に結つて、髪は艶々と濃いのに、肌理は膩なり、色は白し、薄化粧をさへしてゐるので、何處と無く劃然と水際立つて、四五歳は確に若くなつたので、一目見た時は實に別人か、器量勝りの妹

かとも思はれた。粧れば恁うも美しくなるものであるか、彼も屢ばお類の粧り飾つた姿を見たが、迚も是程に粧榮のしたのを覺えぬので、如何にとも奇異の思を爲るより外は無い。變りも變つて、其體度まで例よりは嬝娜に、若氣の羞しさが見えるので、柳之助は呆顔をして見惚れてゐるのを、お種は有繋に曠ましい、其風情が彼には猶好く見える。

此にも居らぬので、お種は挨拶も匇々に降りて行くのを、柳之助は慊らず思つて、續いて降りた、すると其鼻の先に、夫婦は行合つたまゝ座敷の眞中で立話をして居る。

葉山の扮裝は、黒魚子の五紋の羽織に上は澱むだ平御召の變千筋、下着は紋御召の襲、薄色の仙臺平の袴を着けて、四合として白足袋を踏いた所まで凡ならず見える。彼も此も目覺しく立派になつたのを、彼は陰に驚いてゐた。平生は餘り色を動さぬお種も、今日は樂みさうに嬉々して、辨の無い保まで跂ねたり、笑つたりして入つて來る。恁う一間に打揃つ

た親子は皆美々しく着飾つて、是から園遊會へ行くと云ふのを、椽側に足を投出して眺めてゐる人は、此日和の日曜を誰と何處へ行くのであるやら、折々日影に向つては帽子の埃を彈いてゐたが、

「今日は然し天氣で可いね。」

「あゝ大當さ。」　と葉山は振向いて、

「君もゝう出掛けるのだらう。」

「僕の方の園遊會は寂しいばかりだ。」　と強ひて笑ひながら漸く身を起した。彼の行くべき園遊會は、何千人の來賓も唯大小の石を並べた谷中の森の中である。それを思ふとお種の胸の中は、此天氣の忽ち曇つたやうに鈍らされて、然ぞ柳之助の身になつたらば、今日の此有樣は熱鐵を飲される想であらうと、顏を向けるも氣の毒で、何と言はうかと案じてゐれば、葉山が例の紛かして了ふ。

「それぢや此方は賑かな墓詣か。まあ、何方にしたつて同じやうなもの

だ、野天でお辭儀をしてばかりゐる具合は。」

柳之助も爲方無しに笑ふ。

「時に此方は燈の點く前には歸つて來るから、可いかい、留守を賴むよ。

「どうぞ鷲見さんお願ひ申します。」

「留守番？　はあ。」

「留守番は所聞が惡いね、如何したつて疲曳の老夫とよりは想はれない、冬になると火之番をして、不斷は門番といふ役廻だ。然し本當に早く歸つて來て留守をしてくれなくては困るよ、一寸火鉢の抽斗にも二百圓と三百圓入つてゐるのだから。」

柳之助は此間凝然と兩箇の樣子を視てゐたが、

「實に僕は感服した、どうも立派になつたね。」

「一番此から行つて日本銀行と背競をして見やうか。」

「妻君が實に立派になつた。」

「いや、是は大きに失禮。」
「鷲見さん、今日はお人が惡いぢやございませんか。」
とお種の方でも感服してゐる。柳之助はなか〳〵眞面目で、
「いや、本當です。」
「飛だ事を有仰る。」
「いや、實際！　大變立派です。」
餘り言れるのでお種も窮つてゐる、柳之助は又惡く眞面目になつてゐる、其の兩箇の樣子をば何とも謂れず可笑く見物してゐた葉山は怺へかねた躰で、
「大した事になりましたな。」
五分の後に三臺の人力車は南に向つて走つて行く。反對の方角にはステツキを曳いた後姿が寂しさうに暫く見えた。

(十八)の二

從來に柳之助は姻家の母にも慰められ、葉山にも勵され、元にも劬られたし、お種の世話にもなつた、其度身に沁みて感じたことの無いではないが、其感情は決して胸に留つて長く彼を樂ませるのではなかつた。彼のお類を悼む執着と失望とは正しく此等の力に十倍して、さほどの人の情も氷の巖に二三滴の熱湯を澆いだやうに、纔に融ける傍から直氷りついて、後には何の驗も無い。直と其ばかりを思窮めてゐる胸の中には、他事を容るゝ隙は無いのである。外にも種々の事を彼は見もし、聞きもした、其等の見聞した事は猶更夢か風のやうに過ぎて、要するに彼の胸にはお類が生きてゐて、始終それを對手に餘念は無かつたのである。疑はしいのはお種の晴衣の姿、是ばかりは何故か夢のやうにも風のやうにも唯一時のものに消えて了はず、墓詣の往復にも彼は其俤を見てゐた。

歸つてからは猶目を去らず、再び其を實物で見るのが如何にも樂く思はれて、頻に夕方の歸來が待れた。之をお類にしたならば、珍しくもない事で、寧ろ彼の常であつた。學校に出て居ても、歸る途上も、或は人を訪ねて居ても、彼の心の底に此感情の全く絕えた事は恐く無かつた。お類は彼の生命で、彼の神で、彼はお類の彼であつた。

然し、其は最愛のものが存生中の事で、今となつては所詮其思を樂むことが愜はぬばかりに、彼は瘦せるやら、泣くやらして、失望の苦を極めてゐる。假初にもお類の外の他人に對して、彼の此思を爲るのは、天にも地にも是が初發である。固より思ふとても、お類に就いて思つたほど劇しく切に、極めて樂しく、甚しく待れるではないが、但其の思の全く同じであるのは、今朝のお種の異樣に美しく彼に見えたよりは、更に更に幾分の不思議を加へなければならぬ。

柳之助は考へた――甚麼にして歸つて來るか。歸つて來たらば自分を見

て甚麼顔を爲るであらうか、而して甚麼事を言ふてあらうか。葉山夫婦は園遊會の中でも有繫に折々は思出してゐた――内では如何してゐるであらう。孤獨の寂しさに又考へて泣いてはゐまいか。尋常の孤獨の寂しい留守と違つて、夫婦連で遊びに出掛けた迹であれば、然ぞ不愉快も一層であらう。お種は別して女氣に、無殘な事を爲たやうに思ふのは、門で車に乘つた時、「それでは。」と柳之助が目禮をして、悄々スッテキを曳いて行つた態が、執念く目に附いて、車の着く迄忘れかねてゐた。其人の心の中を推量すれば、自分たちばかり面白さうに、然も酷しい爲方のやうて、幾度か心地を不快しては思直してゐたが、今日の柳之助は慰ひに彼等の想ふやうなものではなくて、却つて愉快に獨り樂むで、窓の富士を看ては長閑に莨を吃し、茶の間に來て寢轉むでは菓子を撮み、茶に呼れて隱居所へ話にも行き、外の麗かさに庭の内を獨行の園遊會までして、結局が葡萄酒の手酌と興じて見ると、過日夜深に六盃と傾けた

と同じ調子に受けられるので、段々面白くなつて重ねる程に、好い心地に醉つたと思ふと、つい横になつたと思ふと、昏々と噎耐らぬと思ふと、……………………………………。

お種の歸つて來たのを見れば、此半日胸に浮べてゐた俤は、なか／＼朝にも增して柳之助の目を牽いた。保に着更を爲せるとて、優しく面倒を見て遣る片手には、何彼と誠實に夫の世話を爲る、其樣子は一日の疲勞も忘れて、自身の事は後廻しに、務を大事と心懸ける中に、十分愛情の籠つてゐるのを、傍で觀てゐれば、柳之助も倶共に樂まされる。

何個月と同居をしてゐるのであるから、彼も今日始めて之を見たのではない、又お種とても保養を爲してもらつた難有さに、今日に限つて現金の働振を爲るのではない、彼は終始同じやうに是だけの事は屹と勤めてゐるので、それは柳之助も今晩と平生との間に如何ほどの相違を見出したのでもないが、美しい人の美しく振舞ふだけに、凡ならず幽しく思は

れたのである。

此母に育てられる保は幸ひなもの、此細君に事へられる葉山は滿足であらう。何を見せても譽める事の無い葉山が、如何して此無人相の、人形のやうな、面白くもない細君に添つてゐられるであらう、と常に其をば疑つてゐたが、虫の好かなかつた自分さへ長い目で見てゐれば、恁して合點も行くのであるから、彼の滿足は無理も無い。曩に隱居所で話を聞けば、老人の嫁自慢は非常なもので、我娘でゞもあるやうに那の恁のと善い事ばかりを擧げてゐられる。口數は寡し、愛相は無し、唯那だけで舅の機嫌の取れさうな理が無い。其で那麼に喜ばれて居るのを見れば、盡すべき所を十分に盡してゐるのでなければならぬ。

始は成程所惡であつた、物を言ふのも可厭であつた。顏を見るのも不快であつた。憚無く謂はうなら、葉山が那云ふ細君を持つて居るのが實は不服であつた。類さんも那云ふ勿躰ぶつた人は附合ひ難くて可厭だと言

つて居た、實に其通であつた。それが一所になつてから、段々親くして見ると漸く解つて來た。別けて此二三週間此方は急に心の隔も薄くなつて、何か朋友のやうに思はれる。今朝の美しさ、又今晩の幽しさに就けて、彼は一層深く其の心立と行とが賴しくなつて、此美しい、此誠ある人に世話を爲れる自分は、其夫の如くに、其子の如くに幸でなくとも、其友としては最も好き位置に居るものと考へたのである。

左にも右にも其人に對する感情の遂に一變するまでに、柳之助は此日のお種を幽しくも美しく見た。然ほどに美しかつたのも粧つてゐた所爲と爲れば、翌日からは又美しくも何とも無くなつて了はねばならぬ。其時彼の感情は果して如何なるであらう。

翌朝彼はお種を見た。無論小紋縮緬の小袖も着てゐなければ、絹のハンカチイフも持つては居らぬ。朝の事とて未だ寢衣のまゝて羽織を着て、埒も無く袂に取附れて胸を披開げてゐる。其爲體は決して立派ではなか

つた、水際などは一向立ちさうにも爲ぬ、けれども其顔を見るのが何と無く可懷かつた。昨日見たやうに輝いて美しくはなかつたが、何處か幽しい其人てあつた。

(七)の一

葉山の發足した後の家内は火の消えたやうになつて、客來は無くなる、車の出入は絶える、急に毎日の用は減つたので、自から家中の往來さへ稀になつて、晝間の不景氣、夜の寂寥、主が居れば意氣がられる朧月にも宵寢をして、庭の櫻までが長閑の日を面白くも無さゝうに散初める。他はともあれ、何かに就けて心細いのはお種の身の上、せめては保を對手に幾分か慰められても、旅中の安否を氣遣つて、由無い過慮などを始めると、居ても立つても在られぬ事がある。床の間には陰膳を据ゑて、朝夕其前に神佛を心願して、立つた其日から歸來を待つてゐる。旅先は案ぜられるし、家内は寂しゝ、何方を向いても心細い中では、有繫に柳之助でも頼に思はれる、日比此人をば確乎とした所應の無い、卒といふ時には働けさうにも考へぬけれど、無いには勝して多少かの氣丈夫でも

ある。それと與に彼は近頃一時の變人でもなくなつて、自分に爲向ける樣子の大分變つたのをお種も認めた。微塵も那樣氣は無かつたのが、葉山に對する調子で自分にも心易くする加減が見えて、夫からも聞いた事であるが、

「近頃は妻君も一家の人のやうに思はれて來た。」と言つたとやら。

然う思へば然とお種の腑にも落ちて、此際其も賴の力にならぬではない。

葉山が不在になつてからの柳之助は殆ど主同樣の待遇を受けたのである。彼の不在の爲にお種の彼に爲向ける事と、彼に對する注意とは、大方客まず與へられて、其樣子は、客でもなく、朋友でもなく、嫂が主の弟の世話をする狀で、彼が若し二月前の鷲見であつたならば、毒蛇の舌の上に載られたほどの苦艱でもあらうけれど、今の柳之助に取つては、草臥れて倒れた處に絹布の蒲團が敷いてあつた喜にも劣るまい。

主が留守中の兩箇の間を簡單に說明する爲に、葉山をば壁に喩へる。夫

が内に居ればお種の便は其ばかり、柳之助とても彼の外に頼は無い、謂はゞ双方から靠れてゐた壁である。其壁が取拂はれたらば、勢ひ兩面の背は搗合ねばならぬ。柳之助も對手が無くて寂しければ、お種は猶更である。まして柳之助は當時の感情からも、境遇からも、到底お種を疎遠にしては居られぬ。お種とても同じ事で、顔を合せる度の重るほど懇意にもなれば、懇意になるほど好むで顔をも合せる、心易い話も出る。

過日彼は愉快に葡萄酒に酔つた時、

「失敬ですけれど、貴方が妻のやうに思はれるです。」と言つたが、今は果して何と思はれるであらう！　彼は久しく病人であつたのが、薄紙を剝へ／＼やうに日增に顔色を直して、多くは油畫の出來た日の機嫌でゐる。

二階は彼の住所であるのに、其二階に昇ると近來彼は得も謂れず微寂しく覺ゆる。紙門を啓ければ正面の壁に、お類の肖像畫が懸けてあるので、

入ると先づ目に着く、柳之助の氣が摧かれるのは是である。其顔を見ると與に座敷の内は黯澹くなつて、寤めてゐながら夢に魘れるやうな心地になる。還つて來るまでは此油畫を見るのが一個の心寛に思はれて、先づ一目見なければ左も右も氣が濟まぬ、因て見れば堪へられぬほど可懷いに就けて直に情無くなる。

彼は出入にお類を見ねば措かなかつたやうに、此油畫をも生ける人と同じに考へて、朝々出るにも必ず一目は逢つて行くのである。然れど忘れられぬ油畫でありながら、彼はなか〳〵其で滿足されぬのみか、一方には彌、忘れられぬ不滿足を高めてゐる。葉山にも言れゝば、お種にも言れたが、如何にしても割愛して此油畫を取拂ふには忍びかねた、見れば胸を傷めると知りつゝ、見ねば可懷さに堪へられぬのである。

長く此微寂しい二階には居耐らぬので、柳之助は不知降りて來る。下は主の留守中でも、茶の間へさへ行けば人氣も多く物豐に、居心好く住馴

されて、四下の目に觸れるものは皆活潑〳〵としてゐる。其中なれば白湯一杯でもなか〳〵旨いのに、お種が居て何彼と傍で氣を着けられる。彼の二階から茶の間に來るのは、草臥足を曳いて旅籠屋に着くも同じであつた。入つて來ると容易に起たうとは爲ずに、話が盡れば默つて居て、長く然してゐる中に又何か話出す。お種も客と云ふのでなければ、用の間を缺いて對手を爲るではなし、格別迷惑でもないので、何時までゝも居たいほど置いて措くのであるが、柳之助は口數は寡し、お種は無愛相の方であるから、此對坐は時として爭論した後のやうに、反が合ひかねて兩方で持餘してゐるらしく見ゆる事がある。それでも柳之助は立たうとも爲ぬ。お種の思ふには、近頃彼の頻に茶の間に來てゐるのは、主が居らぬ寂しさに話に來るのであらうけれど、話も所在も無くなつても猶且居るのは、今迄とは打つて變つた仕打、如何いふのか知らぬと獨で怪むでゐた。

或日柳之助は例の話も盡れば、所在も無くなつた時、
「此へ本を持つて來て讀みたいですが、可いてすか。」
お種は何故とも聞かれず、惡い事も無いので、
「えゝ、宜しうございます。」
「お邪魔でせうな。」
「いゝえ、何も邪魔な事はございません。お持ちなさいまし。」
「然うですか。」　と柳之助は滿足の氣色。
彌解らなくなつたのでお種は遂に訊ねた。
「何故お二階で御覽なさらないのでございます。」
「えゝ、二階は單身で寂しくて。此の方が何と無く心地が快いです。此に居ると内へ歸つたやうな氣が爲るですけれども、二階は如何も不愉快て、獨で寂しいと又考出して、具合が惡いですから。」
「あゝ、然でございますか。それぢや此で御勉強なさるのは宜しうござ

いますが、子供が參つたり私が用を爲たり致しますから、お喧しうございますよ。」

「それは一向管はんです。此に居つても唯た單身ぢや依樣寂しくて可かんのですから、其方が却つて可いのです。」

彼は葉山の爲るやうに火鉢の側に小机を据ゑて、試に書見を始めたのである。其日から柳之助の二階へ昇るのは殆ど寐る時ばかりで、夜も宵の内は茶の間に居て、二三日の後には、袋棚や机の上に彼の書籍、備忘錄筆墨、圖引器械等が此間の道具のやうに秩然と据置になつた。

（七）の二

始終傍に居て見ると、何かの端にはお類の噂が出て、又かと思ふほどお種は一つ話をさへ幾度と無く聞される。其人に歿られてからは謂ふに謂はれぬ不自由があるとの述懐が出たのを機に、お種は夙て折が有つたれば勸めて見るやうに夫から含められてゐた再婚の事を其と無く言出した。

「一度奥樣のお有なすつた方は、如何しても御獨では可けないものださ。うで、精細した面倒を見たり、傍でお世話を爲たり致すのは、女子でなくては屆きません、それが又女子の務なのでございますもの。」

柳之助は謎とは氣が着かぬから、

「然うです。妻が居る時分には何でも無かつた事が、今になつて見ると一々不便を感じるてす。一つは其が不愉快の因にもなるのですね。而して一番に窮るのは、實に寂しいですよ。葉山君が恬して毎日お留守です

から、貴方も寂しいでせう、ねえ、寂しいでせう――。僕は能く知つとります。然し僕の寂しいのは、今貴方の寂しいぐらゐではないですよ。丁度貴方の寂しいのと同じ心地の、もつと〳〵非常なのですから、察して下さい、僕は實に耐らんです。」

「留守の事ですから私の寂しいのは爲方もございません、…………。」

「それぢや僕の寂しいのは猶爲方が無いぢやありませんか。」

「貴方のお寂しいのは如何でもなると思ひますが…………。」

柳之助は瞪つた目をば可喜しげに耀かして、

「如何してゞすか、えゝ、貴方。」

想の外の歡喜にお種は少しく怯れたが、

「貴方は御自分から寂しい思をして在つしやるのですもの。」

「それで貴方が忠告して下さるなら、僕は何でも聽きますから、言つて下さい。」

「御忠告の何のと云ふほどの事ではないのですけれど、唯貴方の御心地が何ひたいので。」

「はあ、何でもお話します。貴方には是から又長く僕はお世話になりたいのですから、何でも遠慮無く有仰つて下さいな。」

「いゝえ、別に御遠慮をすると云ふほどのお話でもないのですけれど。」

「それぢや猶言つて下さいまし。」

「貴方は生涯今の御不自由で在つしやる御意ではないのでございませう？」

「如何いふ義ですか、今の不自由で…………？」

お種は言更へて、

「いづれ又お宅をお持ちになるのでございませう。」

「それは持つても可いですけれど、然し何ですな、僕は永遠も御厄介になつて居りたいのですが、御迷惑ですかな。」

「宅に在つしやる分は些とも迷惑な事はございませんのですけれど、恁して在しつては、貴方は永遠も御不自由で、寂しい思をなさらなければなりませんよ。」

「那樣事は決して無いです。」と連に頷いて柳之助は獨で心得てゐる。それでは全で寸法が違つてお種は大きに考へる。

「それでは御不自由でもなく、お寂しくもないのでございますか。」

「不自由ですけれど、其はもう爲方が無いと諦めて居るです。寂しいのも、貴方が恁して家内のものゝやうにして下さるから、僕は滿足して居ます。可いです、是で可いです。」

「何も貴方強ひて御不自由をなさらんでも可いぢやございませんか。」

「強ひて爲るぢやありません、是は究竟自分の不幸なのです。」

「でも今後の御不自由は貴方が強ひて爲さるのぢやございませんか。」

「それは何故ですか。」

お種は姑く考へ澄してゐたが、
「御繼をお聘ひなさいましな。」
「繼聘を？　妻をですか。」　と柳之助は顏の色を變へる。　お種は故と事も無げに、
「然うでございます。」
「那樣氣は有りません。」　と決然とした挨拶。
「御不自由をなすつても？」
「はあ。」
「寂しい思をなすつても？」
「はあ。」
「それで御病氣にでもお成なすつた時は誰がお世話を致します？」
「…………………………………………………。」
「お年を取つた後の事も考へて御覧なさいまし。　お掛りになる子供衆も

無くて、六十七十にお成なすつて御自分でお働きなさる事が出來ますか。」

「…………………………………………………。」

「そこらも少しはお考へなさらなければなりますまい。一躰如何いふ御考で御繼はお聘ひなさらんのでございます。」

思案に晦れてゐるのか、柳之助は熟と面を背けて、何の答も無い。

「いづれ御考があるのでございませう。」

「別に考は無いのです。」

「拙夫も實は其事を御心配申して居るのでございます。貴方も見す〳〵御不自由をなすつて在つしやるのではございませんか。從來よりは此から後が、奧樣がお有なさらなければならんのでございます。」

「それは然うかも知れんですけれど、もう妻を持つ氣は無いのです。其に就いては種々又事情もあるので、一生獨で遣ると極めて了つたです。」

「事情と有仰るのは？」

「少しお話の出來ん事情です。」　と、覺束さうもなく語が濁る。

「お話が出來ないと有仰れば爲方もございませんけれど、そこは拙夫とも御相談を爲すつたらば、又甚麼にも御心配を致しませうから……」

「葉山君に賴むでも行かん事情なのです。もう如何か此話は舍して下さい。妻などは要りませんよ。病氣でもしたら貴方にお世話してもらふ意です。僕は貴方を姉と思つとるですよ――實際然う信じとる！」

お種は可笑らしく思つて、

「姉樣では酷うございます、妹にして置いて下さい。」　と何と無く笑談にして了つても、柳之助は飽くまで眞面目で

「あゝ、妹でも可いです、何方でも可いです。」

お種は覺えず笑ひかけた。

「けれども葉山君が兄ですから、貴方は仍舊姉ですよ、ねえ、姉で可いでせう。」

仍お種の默つて笑を含むでゐるのを、柳之助は不安心さうに、

「貴方が姉です、僕は弟です。」

正午に卷忘れた時計の引摺られるやうに鳴るので、お種は氣が着いて見ると、

「おや、十時。貴方もうお寢みなさいまし。」

「はあ、行きませう。」と柳之助は兩手で膝を拂つて、起ちさうにしたのを伸にして了つて、

「吁、吁。」と言つたまゝ憒然と燈を瞶めてゐたが、

「夜は如何も可かんですな、此頃は晝間は大變快いですけれど。」

「御氣分がですか。」

「然うです。是は全く貴方の御蔭です、今に僕は此のお禮は爲ますよ。」

「貴方何を有仰るのです。」

「夜になると二階へ還るですな、その不愉快なこと、可厭で耐らんので

す。」

「あゝして油畫も飾つてあるのに那樣事を有仰ると、お類さんがお怨みなさいますよ。」

柳之助は爲やうが無しに笑ふ。お種は勝手へ下げる物を片付けて婢を呼ぶと、李のやうな顏をした廿歳ばかりのが入つて來たが、柳之助を見ると思出した躰で、

「あの、未だお二階のお床が延べてございませんでした。」

今日は仲働が暇を乞つて朝から出たのである。

「それぢや直に行つてね…………。」

婢は忸怩してゐる。

「もうお寢になるのだから。何え、可恐くて行けない？　如何したといふのだね、子供ぢやあるまいし、二階へ行くゝらゐが…………燈も點いてゐるぢやないか。額が…………額の畫が可恐い？　意氣地の無い人だね、

それぢや勝(保姆)と二人でおいでな。勝も可厭だつて？　然うすると鈴(仲働)は強いね。おや、然うかい、毎晩お前が頼まれて一所に行くのかい、まあ可厭ぢやないかね。」

柳之助は吃々笑出して、

「あの畫が可恐いか。それなら可い、自分で遣るから。」

「困つた人たちだねえ。」

「試に相濟みません。」と李はいとゞ赤くなつて婢は匇々に起つて行く。奥では笑事であらうとも、婢等には大抵の苦難ではないので、之を一日の思にしてゐる。抑も事の由來は、始めて油畫の出來た其晩、お鈴が床を延べてゐたら、可愛らしい聲で「もし、もし。」と言つたとやらで、それから可恐がり出して、二人連でなければ夜は決して二階へ昇らぬ。彼等はいつか薄々柳之助の事を知つて、陰では種々の取沙汰をして怪談がつて、實は晝でさへ一人で行くのは皆二の足を踏むでゐる。

「では私が参つゝお床を延べませう。」

「いや、決して。自分で遣ります。」

「まあ、行つしやいまし。」とお種が起てば、

「それなら階子の所まで送つて下さい。」

「大相な路程のやうです。」

（八）の一

多くの人を好かぬ代に好く人をば甚しく好くと云ふ彼の氣質は、燃ゆる如くお類を愛して、葉山を信ずることは一圖に凝固つてゐるのである。彼は此二人よりは無い友の別けて難換き一人を亡つた爲には、他が兩親妻子兄弟と一度に一家を擧げて亡つたほど力を落して、一時は殆ど此世に望をも絶つたのである。而して其人の亡い後も、一旦燃された彼の念は、なか／＼急に消えては了はなかつた。猶其火は他に向つて費やさるる所が無かつたので、竟には自己の心を燒れて、彼は如何ばかり苦まされたであらう？　日毎夜毎の彼の涙も此胸苦き焰をば得鎭めぬのであつた。

彼のお類を亡つたのは、謂はゞ優しい聲と、柔かい手と、溫かい心とを失つたのである。其聲と手と心とは、安穩に柳之助が一日を生活するに

到底缺くべからざるものであつた。彼が病むばかりの不愉快は缺くべからざるものを缺くゆゑで、もしお類が再生したならば、勿論彼は焔も涙もあつた事ではない。次には優しい聲と、柔かい手と、溫かい心とが別に有つて慰めたらば、彼は如何に爲るであらう？　彼は決して其等をお類の外には望まぬのであつたけれども、彼の生活の上から其必要の有ることは疑も無いのである。始め老婢の元も其必要の幾分を充さうとした、然し彼の聲は餘り皺嗄れてゐた。其次は姻家の母であつたが、此手も柔かながら餘り乾びてゐた。當人に其氣は無かつたやうなもの丶、實は母親が其必要を全く充させやう爲のお島といふものもあつたが、不幸にも彼は全く不必要以上に遇はれて、恨を呑み、ハンカチイフを咬裂いて還つた。葉山も試に優しい聲と柔かい手を、藉りやうとしたが、柳之助は羽の生へた猫に弄ばれるやうな腐れた愛情は持たなかつた。然ばかりの必要をも、彼は自ら必要とは感ぜぬのであつたか、或は再び外に求める

意は無いのであつたか、左にも右にも必要は必要であつて、必要を缺くのは不愉快で、今の不愉快は昔のお類のやうに、柳之助は如何にしても其傍を離れかねたのである。

藥を美味として服する病人は無いけれども、病は其が爲に痊るのでなければならぬ。彼の葉山に同居したのは、而して自とお種に親くなつたのは、好しからぬ藥を飲されたも同じで、姑くは苦い思をしてゐたのである。漸く其にも慣れて見れば、圖らざりき、お種の優しい聲と、柔かい手と、温い心とは彼の不愉快の苦痛を劬るのであつた。柳之助がお種を可懷く思初めたのは之が爲である。例の彼の氣質であるから、一旦心を傾けた以上は、飽くまで其人に心を傾けるので、お種に對する感情も今は日一日に好くなるばかり、葡萄酒に醉つた夜の言が又憶出される、

「失敬ですけれど、貴方が妻のやうに思はれるです。」

然し彼は他の妻をば我妻と思はうとは思はぬ。姉と言つたが、姉に思ふ

のでもなかつた。葉山が男子としての友である如く、女子の友として彼はお種を愛するのであつた。

（八）の 二

老人も未だ氣は着かぬが、近來柳之助のステッキの音は出入ともに一樣になつて、時としてはなか〳〵歸來の勇しげに響く日もあつた。彼は例として還ると直に二階へ昇つて、油畫を一目見て、直に下りて茶の間へ行く——朝出るにも必ず一寸二階へ昇る。それも彼の居間であるからは、誰怪むものも無かつたが、或朝仲働のお鈴が掃除をしてゐると、柳之助は出勤の服裝で昇つて來た。

何ぞ取りに來たのであらうと思ひながら、何氣無く見てゐれば、直と行つて油畫の前に立つたのである。其額は彼の長と同しほどの高さに掲けてあるので、前に立てば顏と顏とが丁ど向合ふ。向合せると柳之助は引還して降りて行く。やがて門を出る靴音が聞えるのを待つて、お鈴は拂塵子を持つたまゝ階子を駈下りて、臺所の口から、

李色の婢は洗槽元から、

「お留さん、一寸。」と呼付ける氣であつたが、

「何さ。」と見向も爲ずに洗物をしてゐるので、

「面白い事があるんだよ。あの、ねえ、」と其傍へ寄つて行つて、

「鷲見樣の、お前…………。」

「お客樣と言はないと叱れるぢやないか。」

「まあ可いからお聽きよ。彼人の面白い所を見ちやつたんだよ、今。」

「何を見たの？」とお留は用の手を休める。

「私がお二階を掃除してゐると彼人が昇つて來てね、何を爲るかと思ふと、油畫ね、……私はもう考出しても可厭になつちまふ。」

とお鈴は片手に頰を支へて、首を捻曲げて獨笑を爲る。

「如何したのさ、一寸。」

「あの油畫へ傍やつて顏を推付けて、而して降りて行つちやつたのさ。」

「それっ限かい。」　とお留は氣も無い顔。
「それっ限さあ！」
「如何いふ義だらう？」
お鈴は愛相の盡きた目遣をして、
「解らなきや可いよ。」
「油畫へ顔を推付けたのかい。」
「あれさ、油畫ぢやないよう。」
「それぢや何さ。」
「油畫の顔ぢやないか、懀つたいね。」
「依然油畫ぢやないか。」
「それは知れてゐるわね、油畫は油畫だけれど、油畫の顔さ。油畫の顔へ自分の顔を推付けたのぢやないか。」
「お前さんは本當に早口だよ。」

「どうせ貴方のやうにお品好くは參りません。決して腸なんぞは出てゐない御襷を掛けて、島田の根なんぞは拔けてはゐないで、おゝ、まあ御品の好いこと！」　と一心に喋立てるお鈴の顔へ、突然お留は手水を引潑ける。

「あゝ、何を爲るのだよ！」　と痿む所を追蒐け〳〵是を先途と濡手を揮舞されて、お鈴は這々二階へ逃昇つて了つた。

此後と云ふものは、柳之助の出入に二階へ昇るのは、巽しいとお鈴に目を着けられてあれば、外に用も何も無く、唯其を爲に行くのであると極つて、臺所では（可厭な人）と云ふ事になつてゐた。

一日彼は學校から還ると、油畫の次には見るものにしてゐるお種の姿が茶の間に見えぬので、隱居所へでも行つたのかと思ひながら、火鉢の傍へ坐つたが、四下の樣子が何と無く變つて、常には取散してあるべきものが片附いてゐるのも心寂しい。例も還つて來る時分には保の聲も爲るのに、それの聞えぬのも張合の無いやう。椽側の障子に遲々と猫の行く影が犬ほどに映つて、老人の咳が一つした限り、家内は森として、眠さうな稽古琴の調が遠く度つて來る。何所で彈くのやら、此爪音の殆ど聞えぬ日とては無いので、其が又耳に附いて、柳之助は可厭で〱腹が立つほどに思つてゐるのが、今日は殊更小懊惱く、餘り嫌ふので先方も娫ひ面になつて執固く彈くのでもあるやうに覺えた。

旋て跫音が爲る、入つて來たのはお鈴で、

「お召更をなさいまし。」
柳之助は要らざる世話を燒く奴だと思つたが、
「奥樣は如何した？」
お鈴はお鈴で、自分が盗むだのではなし、拷問される理は無いとは思つたが、
「一寸お出掛になりました。」
「はあ、何處へ？」
「本郷の方へ。」
「本郷、何時頃？」
「二時頃でございました。」
「本郷？　何の用だらう。」
「私は存じません。」　と（如何した）の腹癒に少し手强く出たが、柳之助は氣にも留めず、

「何時頃お歸來だ。」
「直にお歸來になると有仰いました。」
「もう四時だ。」　と柱時計を見て、不足らしい顏をして考へる躰であつた。其をお鈴は惡く眞面目爲つて居るのを見て、肚の中は可笑いが一杯。
「あの、御召更をなさいまし。」
「獨で爲るから可い。」
「それぢや御召を出しませう。」　と起ちかければ、柳之助は懊惱さうに、
「可い、可い、獨で爲るから可い。」
お鈴は極めて淑からしく、
「はあ、然やうで。」　と座を起つて行く。
柳之助は出入の着更には常にお種の手を假るのであつた。然も無ければ

獨で遣るとも、氣心の知れぬ婢輩に身邊の事を爲れるのは無氣味なので、お類の居た頃には老婢の給仕で食事を爲た事が無いのである。

彼は本意無さうに起つて、飄然と座敷へ出て、彼地此地と地平を爲るやうに歩き始めた。然して歩いてゐる間には不知不識時は經つと考へたらしく、間有つて胴衣の衣兜から銀時計の磨かせたら善かりさうなのを出して見ると、四時十分！　時は彼の歩いた間よりは經たぬものを、最少し經つても可さゝうに思つたかも知れぬ。猶其時を費させる爲に、旋て二階へ昇つた。

今昇つたと思ふと降りて來たので、

「又推付けて來たのだよ。」　と臺所ではお鈴が囁く、お留が笑ふ。

柳之助は又一遍座敷から茶の間へ通つて、茶の間から座敷へ出て、座敷から椽へ出ると、お種と保との不斷着が魚を開いたやうに日南に並べて干してある。

其側に腰を掛けて、姑く空と庭とを眺盡してゐたが、空は此頃に希しく曇模様て、折々日の光は鼠色に薄れるかと見れば、又急に時明が射して眩いほど晃いては、次第に淡く衰へる。指して雲と云ふ雲は無いが、空は一面に蒼色を失つて、羅を一重隔てゝ其を望むやうに例より低くも見える。生温い風が時々に吹起つて、沈丁花の甘酸い香が呼吸を爲るやうに傳はつて來る。庭の樹々は大方一樣に青み初めた中に、垣の隅に三株ばかりの一重山吹が引塊つて亂脈に咲散して、趣も無く唯ひよろ〳〵と高いばかりの辛夷が數へるほどの蕾を挈げて風に搖られながら立つてゐる。

いづれを眺めた所で何の風情も無いので、柳之助は庭へ下りて散歩をして見たが、其とても風情は無いので、直に飽いて舊の椽に腰を休めたのである。傍に擴げてあるお種の不斷着を見れば、曩日園遊會へ行つた姿が憶出される。其後は弗とお種の粧つたのを見ぬのであるが、——今日は

甚麽にして行つたのであるか、一寸出たのであれば、然したる事は無からうけれど、恁して着更、たからは無論それだけには見えるであらう。必ず幾分か美しくなつたに違無い、何程美しくなつたか、——左も右も美しいお種を見るのは、今の彼には上も無い樂であつた。

園遊會から歸つた時！　お種は輝くばかり美しく見えた。お種とは想はれぬほど變つて美しかつたので、自と氣が改まつて、例のやうに物を言ひかけるのも何とやら憚られたのに、先方からは常に違はず馴々しく爲れた其嬉しさ。其嬉しさと其美しさとを懐へば、今日とても其愉快の幾分を覺えるのであらうと考へると、漸く不興も釋けて、又時計を見れば五時である。六時に歸るとしてもゝう一時間、と有繋に力付いて、風情も無い椽から起つて、内へ入ると始めて心着く、

「おゝ、試驗の答案を撿べるのであつた。」

慌てゝ座に着けば、其處には小机が据つて、飾つたやうに秩然と其上が

片附けてある。今日には限らぬけれど、今に歸つて來る美しい、可憐い人の注意と思へば、可賴しさも可賴しい。六時といふのを力にして、それまで一勉强と、茶の揉革の手擢れたポオトフォリオの見苦しく推込むだのを披いて、三束の答案を取出した。

學問には熱心に、授業には懇切の柳之助は旋て鉛筆を把つて答案の撿閱に着ると、傍目を一つ轉るでもなく、左の手に額を支へて、右の膝を搖りかけ搖りかけ、鋭意の極は吾を忘れて一心不亂であつた。此間に何程の時が經つたやら、全く覺は無くて、唯一級三十四名の答案の半を捻べ了つた時である、沈靜徹した玄關に轟度る車輪の響、

「お歸來！」　と車夫の聲。

柳之助は衝と起つと、膝頭に机の端を引掛けて、物の見事に打覆せば、机は四本の脚を差擧げて、さながら助を呼ぶやうなのを、纔に一目見遣つたばかりで、周章と玄關へ出れば、はやお鈴、お留、お勝は居並ぶと

よりは推重つて出迎へてゐる。車夫は保を抱いて、一足後れにお種が格子を入つた所。

「やあ、お歸來ですか。」

お種は紺の深張の日傘をお鈴に渡しながら、一寸會釋をして、

「唯今歸りました。」

此日のお種は質な風通織の一つ小袖に黒縮緬の羽織を着て、鳩羽鼠地の淡泊とした更紗縮緬の長襦袢、襟は薄色の金茶に白と江戸紫で藤の折枝を小形に散したので、帶は地模樣の革色繻珍と黒繻子の腹合。輪の大ぶりな銀杏返に玉の簪を一本插して、昨日結つたばかりのも風の有る爲に夥しい鬢の縺を、外の暖さに上氣した淡紅の頰の邊へ振被けて、何と無く草臥れたらしい體度は、美しいよりは婀娜に見える。

今日は自身に子供の傳を爲るやら、乳を欲がられるやらで、おのづと服裝も緩むで、腰から裾の邊が稍埓無くなつて、髮さへ亂れてゐるのに、

纎削に縮緬を着て拔々とした横姿の媚かしさは、平生邸風に堅氣裝のお種には迚も有るべからざる樣子なのを、柳之助は陰に驚きながら、之もなか〳〵可厭ではないのである。然し彼は、飽くまで園遊會の姿を標準にして、但それほどに正つては居ずとも、恁まで碎けた風俗をば全く豫想せぬのであつた。曩日のやうに品の高く立派の所は無いが、今日の婀娜に色めかしいのも、又變つて更に得も謂はれぬのは、其樣子の打解け易く他を可懷さうにして、動もすれば少しは我儘などをも言ひたげに想はれるのである。曩日は葉山も居れば、自分も今ほどの馴染は無かつたので、唯美しいと見るのみで濟むだのが、今日のお種は左に右に我物のやうに考へられて、又彼とても自分の考へる如くに自分を考へてゐるらしく考へられる。待侘びた顏を見れば、早く茶の間へ行つて、暢然と相對になつて落着きたいので、柳之助の胸の内は一秒の前後を爭つてゐると縹色絹の裾を曳いて忙しげにお種は隱居所を出て茶の間へ入つて來るの

てゐる。

柳之助は嬉々して何も手には付かぬながら、引覆した机の始末をして、呼と一息したと云ふ躰でお種が坐ると、得ならぬ衣の香と幽しい人香の頻に匂ふのを、柳之助は軟に酔ふやうに覚えて、傍に居ると思へば、何か無しに唯可喜しく胸の騒ぐのみで、暫くは言ふ事さへ無くてゐる。お種はおのれの姿をば訝しさうに柳之助が連に目を着けるのを見尤めて、亂れた襟を掻合せながら、

「どうも這麽奇い恰好をして、……………着更へて参りませう。」

「まあ、可いです。ねえ、まあ、可いです。」

柳之助は誤るやうにして宥めたが、お種は氣の濟まぬ顔で、

「でも餘り亂次がありませんから。」

「何為那様事が……………先から僕は然う思つとるのですがね、貴方は今日は大變變つて見えるですよ。」

「然うですか。」　と後を聞きたげに待つてゐる。
「一寸何ですな、藝者のやうです。」
お種は吃驚して而して赤面した。まさかに自分が那樣者のやうに自墮落に見えやうとは、夢にも嘘にも餘り想の外で、信にはならぬ柳之助の見る目と思返しはされるもの丶、と言はれ丶ば有繫心に慙ぢずにもゐられぬ。譯の解つた夫に詰められたよりは、彼の口から出たゞけにお種は聞辛く冷汗を流したのである。
「まあ、可厭ですねえ、早く着更へませうよ。」
お種は羽織の紐を解きかけて起たうとすれば、
「まあ、可いです、貴方、最少し居て下さい。」
「直に着更へて參りますから。」
「まあ、着更へずに、姑く然う爲とつて下さい。」
「何故でございます？」

「大變貴方は其が好いですもの。」

「其が好いとは？」

「その服裝が好いですよ。」

「貴方は實に此頃お人が惡くなりましたよ。」

「何故ですか。」

「服裝だとか、風だとか云ふやうな事は、從來些とも有仰らなかつたではございませんか。」

「然う、言はなかつたです。言ふのは惡いですかな。」

「殿方は餘り那樣事を有仰らない方が宜しうございますわ。」

「葉山君は能く言ふですね。」

お種は呀としたが、柳之助は何の氣も無いので。

「而して種々な事を知つとるには感服して了ふですね。」

「それですから拙夫は口が惡くて可けません。」

「然し、妻は始終葉山君の事を譽めとつたですよ。葉山君を譽めては僕の所を攻撃したです。葉山君の着物を見ると、那いふ着物が好いとか、下駄を見ると、大變粹だとか。それから未だ恁云ふ事が有つたです。妻が來て間も無くでした、葉山君は彼時分髭が無かつたですね、然すると妻は切に僕にも髭を取れといふですから、遂に取つたです。それから一時葉山君が生した事が有つたでせう、然すれば又、依舊有る方が男らしいから生せと言ふから、僕は又生したです。葉山君が又取つたでせう、然すると又取れと言ふです。僕はもう那様に……否だと言つたでさ、然すると妻は非常に不平で、葉山君が來た時其話をしたですね、けれども葉山君は僕は髭の有る方が似合ふと言つたものだから、其で自分も承知して了つたですけれど……。」

と柳之助は今も生してゐる髭を搔撫でゝ、

「他の客などは來たつて極冷淡でしたけれど、其は實に、葉山君が來る

と妻は喜むで、御馳走する〳〵といつて騒いだです。だから葉山君も妻を所好でした。けれども葉山君は口が惡いですから、それは妻に向つて隨分酷い事を言つたですね、實際僕が傍で聞いとつても氣の毒のやうな惡口を平氣で言つても、妻は更に慍りはせんのです、而して葉山君は淡泊しとつて好いと言つとるのですものね。」

最愛の妻と最愛の葉山の事を最愛の人に聞かせるのであるから、柳之助も心面白く話をした。お種は氣の毒のやうな、嬉しいやうな、又極も惡いやうな、變な思をして、

「それでは、何卒貴方も澤山惡口を仰有つて下さい。」

柳之助は慌て忙いて、

「いや、然云ふ意で言つたと想はれては僕は困るです。僕は貴方に對して惡口を言ふべき理由が無いです。」

「でも私が亂次のない風をしてゐると有仰らないばかりに、藝者のやう

だなんぞと…………………………。」

「それは決して惡口ぢやないです。藝者と言つたのは失敬でしたけれど………………然う、粹に見えたのです。」

「それが猶且お人が惡いのです。」

此時空は墨の入染むやうに見る〳〵一面に暗くなつて、細い雨が音も無く降ちて來る。

「おや、降つて來たやうです。」とお種は硝子越に見透した。

「然うですか。」と柳之助は起つて障子を啓けて、空模樣を眺めながら、

「あゝ、是は降るですな。」と言ふ間もあらず雲は低く垂れて、小糠雨は益降注ぐ。

「ほう、降つて來た、降つて來た。最少し貴方遲いと遣られる所でした、善かつたです。」

一向答が無いので振返れば、お種は何時か起つて了つたので、座敷の方て聲がしてゐる。

火鉢の一角を見ると、黄金の線卷の指環が脱いで遺いてある。柳之助は座に復つて唯一人の所在無さに其を取つて視てゐたが、不知左の藥指に貫めて了つた。さて脱かうと爲れば、中の節が障へて、牽いても、推しても、捩つても、廻しても、いかな上へは動ぎもせぬので、大きに憤れて曳々と力を籠めれば、皮膚は赤く腫上つて、ひり／＼と疼出すばかりで、指環は益如何にもならぬ。

「是は可かん。可かんぞ、可かんぞ。」と散々に惋いて居る所へ、お種は下斷着になつて入つて來て、

「あら、如何なすつたのです。」

柳之助は呼吸を過ませながら、

「這麼になつて了つたです。」

指の根本は赤蛙の腹のやうに轉腫れて、處々擦傷した痕が細に血入染むでゐる。

「お〻、まあ是は！」　とお種は其の手を執つて昵と視ながら、眉を皺めて、

「お痛いでせう。」

「苦しいくらゐです。」

お種は急いで水油を持つて來て、彼の指に塗付けた。

「さあ、これで騙し〳〵拔いて御覽なさい。」

「自分では痛くて可かんですから、貴方構はず吽と遣つて下さい。」

彼は再び柳之助の手を執つて、頻に指環を動がして見たが、勝手が惡いので、彼地此地と持更へてゐる間に、下知四合と小腋に抱いて了つた。

（九）の一

柳之助は夜も宵の内は茶の間に居て、十時を打つと二階へ引取るのであるが、居間に還れば直に寐床に入つて了ふのであるから、謂はゞ寐に來るまでなのである。

彼は此二階の空氣に觸れると、忽ち體を緊付けられて、異しく胸が逼つて來る。冷なラムプの光、薄暗い座敷の四隅、幻の如きお類の肖像、物寂しい夜具の様子、右を見ても左を見ても、其獨身の侘しさを悲まれるやうに感ずる。一々其思を打破して、自ら慰める勇氣は無いので、葡萄酒を呷つて、纔に醉を假りて、漸く枕に就くことを得るので、何日とは無しに寐際には必ず二三盃づゝ飲むのが習慣となつたのである。

床に入ると腹匐になつて、手酌をする度に思はぬことは無い、

（唉、此にお種さんが居つて、何ぞ話をしながら酌をして、自分の寐付く

まで枕頭に附いてゐてくれるならば、それこそ定めて滿足であらう。自分が寧ろ病人でゝもあるならば隨分それほどの我儘も言はれやうけれど、病人ではなし、お種さんは他の妻君でもあれば、那樣失敬なことは到底言はれぬ。又最一つの事が愜ふならば、酌も伽も要らぬ。其は下の座敷に寢るのである。下の座敷であれば、這麼に寂しく感じる事は決して無い。晝さへ寂しくて居られぬ所に夜は猶更居られる理が無い。寢て了へば其迄であるやうなものゝ、然う容易に寢付かれぬではないが、寢付かれぬから酒の力を假りも爲る、ついては種々の所望も起るのである。下座敷に寢ると云ふ事は如何あらうか。間を隔てるとした所で、謂はば妻君の傍に寢るのである。葉山の不在中であつて見れば、憚らなければならぬ事であらうし、お種さんも否むであらう。葉山は自分を信じてをる、妻君も能く自分を知つてをる、況むや自分は自分を信じてをる、けれども怎云ふ事は憚るが道であらう。近頃は妻君は實に自分をば弟のやうに

して、何かに就けて一時よりは一層懇切に盡てくれる。自分も亦彼人に言はれる事は喜むで用ゐる。けれども恁云ふ事は實際何でも無い事でありながら他の事と違ふやうに衆は考へてゐるから、衆に從はねばならぬ。葉山の歸るまでは苦しくとも之で忍むで、歸つたらば話して何とか工夫をしてもらはう。夜になつて此二階に昇つて來る其不愉快！　床に入つてから寐付くまでの其の又不愉快！　實に何とも譬へやうが無い。若し此不愉快が拭ふやうに除かれたらば、自分は蘇生するのである！　不自由ぐらゐは何としても怺へる、是ばかりは迚も長く忍ぶことは出來ぬ。是が一日の生活中の最も大なる苦痛で、而も其に堪へたからとて何の効も無いものを、唯苦痛を受けるばかりなのは愚の極である。

葉山に話したとて、此苦痛の如何に苦痛であるかは決して解るまい。妻君には能く話すけれども、獨且然ほどには解らぬらしい。到底解るまい、誰にも解るまい！　可愛い、可愛い妻を喪つた人でなければ、而して片

時も忘れず思ひに思つてゐるのでなければ。）

日暮からの春雨は蕭索に降頻つて、屋根に沿せる音は谷川の瀬ぐやうに、簷を繞る玉水の貧しげな響は媚々と呟く如く聞ゆる。何處と無く濕つた家の内は、我居間ながら心細さに居付かれぬほど陰に沈むで、人の住むとも思はれず、世間は全く物の音を止めて、悄然と雨に降られてゐる。但取着も無く時々風が出ては梢を鳴して、此侘しい單調に騷しい合手を入れて、益暗くに堪へざる踈暴の奏樂を逞くする。

柳之助は之を下物に手酌の葡萄酒を飲むのである。鬱陶しい雨の爲に腦は痛む、氣は閉ぢて、酒を口に入れるよりは大息を吐くのに忙しい。

「吁、・耐らん、耐らん、何といふ心地だらう？」

無理に一盃飲むで、顏を皺めて、

「うむ、不美い！　藥を飲むやうだ。」

飲むで早く醉はなければ、醉つて早く寐て了はなければ、不愉快は益募

つて來る。又直に一盃注いでは見たが、氣が進まぬので其處に置いたまま横枕になつて、見るとも無くお類の肖像を見据ゑてゐた。

はた〳〵と椽側の隅に物音がするので、屹と頭を擧げて聞澄せば、雫の滴る音らしい。

「やあ、雨が漏つたかな。」

起回つて次手に其一盃を片附けて了ふと、旋て少しく醉を催したやうに覺えたが、頭は尚重くなつて、三盃とは飲む氣も出ぬので、ラムプを細めて、今は觀念した躰で夜衣を引被いだ。

雨漏の音は極めて遲緩に時を限つて、はたり〳〵と響くのが、外の雨より風より耳に附いて、氣に懸けまいとするほど氣に懸る、氣に懸るほど可忌しい音が怪しげに鈍い拍手を取つて、人を眠らせぬやうに故と遣るらしく續けてゐるので、姑くは忍むで居たが、到頭怺へかねて、

「えゝ、煩悩い！」　と起きて、燈を持つて行つて見たが、承ける物

が無いので、ハンカチイフを丸めて敷くと、忽ち音を斂めて了ふ。それて始めて念が霽れて、床に入れば依舊睡られぬ。是非無く飲まうとすれば、起きる時に蹴付けたコップは遙の距離に轉げてゐる。柳之助は其を視ながら壜を引寄せて、栓を拔くと直に口に當支つて、呷々と喇叭で飲むで、慌忙しく大息を吹いて、又引被いだ。

頭の上の谷川の流と亞鉛樋の貧しい獨語は絶間無く響いて、此水の底に葬られる世間は刻々に朽ちて行くかと思ふばかり靜さを凝して、内を守る燈も今は唯獨りは便無げに點つてゐる。朦朧として壁に佇むお類の姿は、宛然執着の一念に牽されて、夫の枕上に顯れたかと見ゆる。其傍に裾模様の縮緬の夜衣を被けて、幾と枕を外した頭を半分出して、柳之助は鼾を立てゝゐる。此侘しい夜を此侘しい座敷に、此侘しい人が恁う寐鎮つてゐる其侘しさの、更に如何ばかりかは知るものも無く、――唯雨が降つて、夜の更行くばかりである。

此夜に限つて柳之助は時ならぬ寐覺をして、始は現心に雨を聽きながら、それなり寐付かうと沈としてゐる間に、煙などの消え行くやうに睡氣は次第に醒めて、何時と無しに目も冴えれば、心も確になつて來る。是ではならぬと思へば、轉側をしたり、夜衣を絡ひ付けたり、足を縈めたり、手を組むでも見たり、何でも彼でも寐付かうと、種々に身を揉むだ末が、全く覺されて了つて、被つた顏も出さずには居られず、洞然と目を開いた。

朦朧として枕頭に佇むお類の姿は、寄つて來たいにも動くことはならず、物を言ひたいにも克はぬので、せめては餘所ながら形なりとも顯したものゝ、それさへ生死の隔に遮られて、幽の影を浮べるばかりを、然も恨めしげに打萎れて、その味氣無い身の上でありながら、女心の忘られまいと、生前に可憐がられた、最も美しいと見られた姿を變へずにゐるか、と柳之助には考へられる。耐りかねて彼は目を閉ぢた。それでも紛れぬ

ので、轉側をした上に猶固く目を閉ぢた。轉側つたのは彼の體、閉ぢたのは彼の目で、一度思出した彼の心は千々に碎くるまでも忘れ得ぬのである。

侘しい雨は益降つて、侘しい夜は益更ける。然も無くてさへ獨り居るには堪へぬ此座敷に、生憎も今寐覺めた柳之助の侘しさは、寧ろ苦められるのであつた、彼は目覺めてから一分經てば一分だけ、五分經てば五分だけ、愈深く、愈急に、彼の心は其の常に忘れ得ぬ事を思ひに思ふので、お類の亡い後の何彼に就けて在りし時よりは猶可懷い現在、其病中の種種可哀であつたり、三年が間樂しく睦じく暮したりした越方は、繰返繰返胸の中を往來する勢に逼られて、彼は行末をも想はずには居られなかつた。

此獨身の後來は如何にあるべきと考へた時、今夜のやうに苦まねばならぬ事は幾度も有らう。是が病で倒れてゐる身であつたらば――葉山にも

お種にも遠かつて、不親切の世の中に寄邊も無く獨り疾つて、藥も此酒の如くに誰が世話をしてくれるでもなく、晝も此雨の夜の如くに寂しく閉籠られて、獨り苦むで、獨り死なねばならぬやうであつたらば、自分は何と爲るであらう？　何と爲なければならぬであらう！

可懷い過去と悲しい現在と、恐るべき未來とを思聚める胸の中は、一種の奇毒を服したやうに、消入る如き苦悶を覺えて、柳之助は在るにもあられず夜着を排却けて、寢床を出るや否や、油畫に取縋つて、お類の顏を意味ありげに見入つてゐたが、忽ち其顏に頰を摺付けると、其冷さは彼の全身を射る如く走つた。其冷さ！　彼は其冷さを決して忘れぬのである。十一月の東雲の枕に蒼白く病羸けたお類の頰は此冷さに彼を驚したのである。其時彼は其處に倒れた。柳之助は今又其時に會つたやうに、其處に倒れた時のやうに、立ちながら途方にくれてゐた。

其時の事を憶出すと、今更のやうに得堪へぬ心地になる。　我命ほども大

事であつて、樂みであつて、便であつて、可愛いものであつたお類が、回復もならず事切れて、石のやうに冷い遺骸となつて了つた。是に死なれて自分は何の生効があらう、無用の命の半を割いて、もう一度生かしたい、と愚痴とは知りながら愚痴になる。唉、愚痴だ！　爲方が無い！　爲方が無い、と思ふほど胸は張裂けるばかりで、其時は息も絶えたながら、せめては死顔も見られたのに、今となつては如何に死ぬほど可懷くても、谷中の土になつて了つて、お類といふ名のみは此世に殘つて居ても、其人は全く亡いものである。其時は淺ましく思つた死顏さへ、影も形も消えた今では見ることも克はぬ。幾許戀しくても其人は亡いものである、亡いと思へば猶戀しい。

其戀しさと儚さとに責めらるゝ心の内！　彼は其思に打勝つことが出來ぬのみか、暫く支へも爲得ず、同くは火水の中へ飛入つても此苦を免れたいとまでに考へる。居ても立つても凌ぎかねて、柳之助は座敷の内を

頻に歩いた。夜更の雨の音は十重廿重に家を包むで、聲を限に凄じく悲しい歌を謳ふやう、憂身に其を聞かされながら、歩いても〳〵可忘しい一間の外に行所の無い切なさは、或は悶死に死にはせぬか、と遽に可恐くなつて二階を降りたのである。

下は一面の闇で、唯僅にお種の寐間から隙洩る燈が夢の如く射してゐる。柳之助は茶の間へ行かうとしたが、其處も眞暗黑。ランプも燐枝も置いてある筈と、足捜に漸く行着いて、燈を點けた。明くはなつたが、火鉢に火も無ければ、其傍に人も居らぬ、侘しい雨の音は此にも聞える。坐りもせずに次の間へ出て、蜘手十文字に唯歩いて居たが、胸の内は容易に鎭らうともせぬ、けれども彼は一歩毎に其思を蹂躙らうとしたのである。次第々々に心弱く苦められて、終には我力で我胸の亂れるのを防ぎかねて、獨り居るには堪へられぬまでになつた。燈の洩れる襖の内には、病氣などの折は實意を盡してくれやうと、唯一人の賴む人が寐て居ると

思へば、矢も楯も耐らず其傍へ行きたいのであるが、有繫に其もと怺へに怺へて、左にも右にも座敷の內を廻つてゐたが、突然襲はれたやうに彼の心は劇しく惱まされると與に、幾と前後不覺に襖を啓けて、柳之助はお種の寐間に入つた。

(九)の二

覆を被けた有明行燈を枕頭の壁に寄せて、手近に三四箇の玩具を置いて、藍鼠地の更紗紬の夜着の襟から木地塗の船底枕をまた銀杏返を眞向に見せて、お種は闃然と寐鎭つたまゝ、襖の啓く音に身轉も爲なかつた。却つて保が現ながら驚かされて、遽に放してゐた乳を思出して慌忙しく吮始める。

柳之助は漫然と入りはきたものゝ、其寐姿を見ると與に、是はと思つた。如何に夜深であらうとも、其人が起きてさへ居るならば、憚る事も無いが、許されもせぬ寐込へ踏込むのは、無躾である、狼藉である、後護くもあると思へば、見まじきものを偷見たやうに空可恐く心尤がきて、入つた足で直に襖の外に出て了つた。

忽ち目に着いたのは茶の間の燈、彼は身を翻して其影を心當に進寄つた

が、行着いて見れば何の効も無くて、僅の間を紛れた胸の内は又劇しく不穩を感じて、迚も一處には居付かれぬので、假初にも運動を絶さぬやうにしてゐた。彼は其腦に縈る苦悶を振放さむとする如く、懊惱げに頭を掉つては、胸に蟠る惡氣を吐かうとして續樣に大息を吐きながら、道を急ぐ勢で歩いたが、悲しい雨の歌と物凄い夜陰の氣色とが、執念く耳と目とを侵す力は、益彼の思を其最も惡む方へ曳入れ、曳入れて已まぬ。彼は再び其力と爭つた。爭ひつゝ體さへ引摺られるやうに、座敷の内を幾度と無く廻つてゐたのである。

何故然ほどに苦められるのか、柳之助は自分にも解らぬので、如何に戀しくとも、如何に儚くとも、昨日今日の事ではなし、既に諦め果てゝゐる今日、這麼思をすべきではないと十分に心得て居た。然う心得て居ながら、何故に其諦めた事を遽に恁う諦めかねる爲に惱されるのであるやら、自分で自分が解らなかつた。我心であつて我物でないやうに、我任

意にならぬのを疑つたのである。餘りの可疑しさに、彼は遂に自分は發狂するのではあるまいかと想つた、と未だ考得る今の所は發狂したのではないが、此有樣で續いて次第に烈しくなつたらば必ず發狂せずば成るまい。今の此心地は發狂の境に進みつゝあるのではあるまいか。然も無くては何の故に今更這麽に急に戀しく、取迫めて儚いのであらう。

「不思議だ、不思議だ！」　と呟いては歩き、歩いては考直した。

如何に考へても發狂するとよりは思はれぬので、愈耐りかねては無躾も後護さも何も無い、又お種の寐間へ駈入つて、

「奧さん、奧さん、奧さん！」　と夜着の袖の側にばつたりと坐れば

その聲に睡を覺してお種は顏を振向けると、夢心地に男が一人身近に坐つてゐるので、慄然して正氣付く途端に、柳之助は尋常ならぬ聲音で、

「奧さん、僕ですよ。」

一人の男であつたよりは其が柳之助であるのを、お種は寧ろ驚いたので

ある。

「まあ、貴方で…………。」　と徐に床の上に起直つて、柳之助の氣色を睨と視ながら、

「如何なすたのでございます。」

何時か知らねど家内の寐鎮つた此夜深に、男の身として女の寐間に忍むで來たは？　とお種は漫に胸を騒がせたが、餘人は知らず柳之助に那樣了簡が有らうとは思はれぬ。何ぞ是には樣子が有るのであらう、と直に又考直したやうなもの丶、何と言出すやら其を聞くまでは、左も右も氣が釋されなかつた。

此人に限つては然した不心得は有るまい、確に無いとは思ふけれども、萬が一にも有るやうな事であつたら、如何したものであらう。強く言へば、恥を掻かせねばならぬ。柔に言ふくらゐては、男も覺悟して來たのであらう。由無い事になつてくれなければ可いが、とお種は身の危を汗

に絞られる想を爲て、故と仡となつて、睨むばかりに男の顔を見据ゑてゐれば、柳之助は頭を低れて、眉を顰めながら、頻に呼吸の過むのを推怺へてゐる。

夜深けて燈も暗く、蕭索に雨の降る閨の内に、自分は寢亂れた態を爲て、其傍に男が坐つて物思はしげに爲てゐる。自分は夫の留守中の體、男は同居してゐる朋友、此を他が見たらば何と言ふであらう！　自分が設し他の恁云ふ所を見たらば、何と思ふであらう！　他の言ふ所も、自分の思ふ所も、可忌しい邪推の外は無いと考へると、お種は忽ち炙らるゝ如く身内が熱して、實に此場を消えも入りたいのである。

旋て柳之助は何やら言ひさうに爲て、忙しく四邊を眗すので、お種は片唾を嚥みながら益仡と居直つた。

「薄暗くて、如何も心地が惡い、もつと燈を明くして可いですか。」

お種が寄らうとするのを、柳之助は早くも起つて有明行燈の覆を取つた

が、座に復ると舊の處より猶身近に坐られたので、お種は呀と思つた。
「僕は弱つたです。」と太息を吐いて、お種の顏を見入る眼色は常よりも銳く、面上も其に應じた不穩の色を帶びてゐる。
「如何なすつたので？」
屹と言つた意の聲も稍顫へる。
「今晩は如何したのですか、目が覺めると急に不快な心地になつて、苦くて耐らんのです。而して獨り居るのが可恐いやうに寂しくて、それを幾許怺へやうとしても怺へられんので、自分でも氣が變になりはせんかと思はれるですが、僕は如何したのでせう。」
左右の答を待つたが、お種は何とも言ひかねてゐれば、
「唉！　あの雨の音が非常に不愉快なのですよ。あの音を聞くと耐らんほど寂しくなつて來て…………。」
柳之助は肩を窄めて、其の得も謂はれぬ苦悶を面に顯した。それでお種

の疑も大方釋けて、決して惡い了簡などの有る人ではないと思ふほど、見る通り惱ましげにしてゐるのが一入氣の毒で、何とか助けたいにも手の着けやうが無さに當惑して、

「甚麼お心地です。」

「氣が低う變になりさうです。」

「此雨で腦がお惡いのでせう。生暖くて莇蘊する晩ですから、其所爲ですよ。いつそ御酒でも上つては如何でございます。」

「酒ですか、酒はもう欲くないのです。え丶、惡く降るですな！　天氣でさへあれば戸外へ出て、其邊を駈廻るですけれど。唉、どうも不愉快だ！」

居るに居られず、起つには起たれぬ躰で、柳之助は熟と目を瞑つて、大息交りに呻いてゐる。

「まあ御酒を上つて御覧なさいまし。醉ふと發しますから、幾分か可う

ございますよ。頭痛でもなさるのですか。」

「いや、頭痛は爲んですけれど、胸が變なのです。胸の中が熱くなつて沸えるやうな具合で、それは耐らんのです。」

益〻悶えるのを見て、如何なる事かとお種は氣も氣でなく、醫者へでも駈着けるやうに、二階の葡萄酒を取りに行つたが、彼が起つと柳之助も起つて、中の間を無二無三に歩き散した。お種はコップと壜とを持つて來て、

「さあ、一盃まあ吃つて御覽なさい。」

注ぐとコップに半分も無くて、壜はそれで全虛。

「おや！」

「もう無かつたですか。」

柳之助よりはお種が途方に昧れた。頼にまた酒は一思に無いより蚊の涙ほど有るだけに腹が立つ。外に酒の類と謂つては、臺所に美淋のあるば

かりて、有合せたものは何も無いので。醉へば氣も霽れやうし、眠られもするのにと、如何あつても欲しさに、戸棚の隅々まで想回せば、在る時には麥酒が半打も、其上にブランデエも、其上に葡萄酒もなど〻意地惡く在る。無いとなれば又意地惡く、要りもせぬカステラの折や、ビスケットの罐や、呉服の切手まで貰つてある。

「窮りましたねえ、何ぞ有ると好いのですけれど、生憎…………。」

「可いです、もう可いです。貴方が起きて居つて下さるから、可いです。もう少し此に置いて下さい。」

何ぞ藥か、酒のやうなものは、とお種は未だ考へてゐたが、

「では火を熾して、お茶でも淹れませう。」

「いや、一寸戸外へ行つて來ませう。」

「此雨に？」と呆れて言へば、有繋に柳之助も躊躇して見える。

「而して何處へ行つしやるのです。」

「唯其邊を歩くのです。」
「唯歩いたつて爲やうが無いぢやございませんか。」
「爲やうが無いですけれど、外に爲やうが無いですもの。」
氣が變になりさうと、自身の口から言つたのも思合されて、其人をば此夜更の雨の中へ出すのは、お種も大きに氣遣しいので、既に出ると言ふさへ、異しいと思へば多少異しいと考へたから、是非に止めた。其は容易に止つたが、さて內に居たからとて、お種の別に爲やうの無いことは、彼の出ても爲やうが無いのと、餘り相違は無いのである。
如何にも耐へかねた氣色で柳之助は唐突に言出す、
「貴方、何か話をして下さいな。唯恁して居ると、噫、胸が塞がつて來るやうで。」
「成丈氣を鎭めるやうになさいまし。然う苛々なさるから猶可けません。彼方へ行つてお茶でも淹れませう、而して少し落着くと屹と好うござい

ますよ。」

否應無しに柳之助を連れてお種は茶の間へ徙つた、恰も三時である。火種の一粒も無いのを、手を盡して漸く火を拵へる間に、雨は次第に小降になつて、微に鷄の音が聞える。柳之助は重荷でも下したやうに㖸と息を吐いて、

「雨が歇みますよ。あゝ、もう夜も明けるですな。」

此一間はランプも思切つて明く、湯の沸音も賑かに、傍にはお種も居る、彼は始めて甦る如く覺えて、

「奥樣！　大分心地が快くなりましたよ。」

「おや、其はまあ好うございますね。」

「全く貴方のお蔭で。然し御迷惑でしたな、實に濟まんですな。」

「何の、貴方。」

「濟まんですよ、這麼に世話をまて戴いては。這麼に貴方のお世話になる

理は無いのです。這麼にお世話になつては僕は葉山君にも濟まんです。」
餘り遽に今更らしく言立てるのをお種は可笑しかつた。
「那樣事が有るものでございますか。さあお茶が淹りました。」
「はあ。菓子が有りますな、ワップル。噫。心地が霽々して來たです。」
「それは結構でございます。」
「考へて見ると、僕は近頃は非常に貴方のお世話になつとるですね。今晩の如きは實に…………遠慮も無く、お寢つとる所を、餘り失禮でした。それを貴方が可厭な顏もなさらずに、恁して僕の爲に起きて下すつて、種々心配して下さる。實に此御深切は他人のやうには思はれんですな。然し、貴方は然ぞ僕を我儘な、無躾な人間だと思つて居られるでせうな、而して迷惑に思つて居られるでせうな。」
「決して那樣事はございませんよ。」
「然うですか。然うなれば僕は嬉しいのですけれど。一躰僕は人好の爲

ん質だといふ事を妻は能く言つたです。僕も亦餘り人を好かんですな、實際葉山君一人です。近頃貴方と御心易くなつてから、僕は貴方を好くやうになつたです。」

お種は眩しさうに目を逸す。

「ですから貴方のお世話になるのを非常に喜むで居るのです。それから又貴方を葉山君と同じやうに親友だと思つとるのですから、貴方も何卒僕のやうなものでも親友だと思つて下さい。是でも或時には貴方の爲に盡す事が有らうと信じて居るです。又盡さんければならんと考へて居るですから。」

お種は其言の何と無けれど身に沁むやうに感じた。

「實は甚だ失禮ですけれど、貴方に何か進呈せうと此間から思つとるですが、何が好いのか僕には解らんですから、貴方の好い物を言つて下さい、買つて來ますから。」

「何で私に？」
「お禮の意です。」
「お禮などを戴く理は有りません。」
油に水を注いだやうに、お種は全然取合ひさうにも爲ぬ。
「それぢや可いです。貴方は何が所好です、欲いもの？　衣類ですか。」
「衣類は惡いながら一通り御座います。」
「帶？」
「帶も御座いますもの。」
「髪の具は？」
「欲くもございませんね。」
「指環？」
「然ういふものは欲くはございません。」
「それぢや何ですか、何か有りませう。」

お種は少し考へて、蕾が開かうとするやうに笑ひかける。
「何ですか。」
「有ります。」
「有りますか。」
「貴方にお嫁が欲いのです。」
「怪しからん！　と柳之助は苦笑をしたが、お種の嬉しさうに笑ふのを見れば、自分も嬉しくなつて一處に笑つて了ふ。

（十）の一

翌日も雨は猶收らず、然しては降るでもなしに津濕と、一日通して染垂れた天氣。柳之助は（可厭な日だ）と言ひ〳〵出て行つたが、歸つて來ても（可厭な日だ）と言續けに暮して、何の思出も無く夜になつた。お種は昨夜の件で怺へられぬほど睡い、柳之助は一向平氣で、例の如く十時までは居る氣組で、敵手欲さうに火鉢の傍を離れぬのである。獨り居るのを可恐がるほどに寂しがる人と思へば、萬更置去にして起つて了ふのも酷いやうなり、他の事を思へば自分が辛し、現責に遭される氣で漸く九時まで怺へたが、寢間で保が啼出したので、乳を付けに横になると、自分の睡るのを目に見るやうに承知しながら、ぐつすりと寐込むで了つたのである。耳近く犇めく音が爲るので、不圖目を覺せば、誰やらが來て、自分の隣に精々と床を延べてゐる。お種は大きに驚いたが、餘り有得

べき事でないから、是は夢であらうと考直した。猶考直して見れば、自分は確に目を覺してゐるに疑無い。昨夜は枕頭に男が坐つてゐた、今夜は男が床を敷いてゐる！　昨夜は驚されたが、今夜は呆れ果てたので。呆れたも呆れたし、可恐さも可恐し、目は覺したが息を凝して、起きも爲ずに姑く熟と見澄してゐたが、

「おや、御父樣ですか！」

「あゝ、私だよ。今晩は此へ泊めてもらはうと思つての。」

お種は早くも起きて、手代をしながら、

「些も存じませんでした。」

「私は若い時分夜這をしつけたから、忍ぶのは得手さ。はつはつはつ。」

「那麼事を有仰つて。本當に如何なすつたのでございます。」

「彼方は今晩は馬鹿に鼠が暴れての、天井裏で、や、もう騷々しい事、寐られる所ではない。それで爲方無しに引越して來た。」

「おや、然うでございますか。私はつい寐忘れて了ひましたが、何時でございます。」

「今し方十時を打つたよ。」

置去にした柳之助は如何したであらうと、お種は舅の介抱をして、それから茶の間へ行つて見ると、机も片附けて、誰も居らぬのである。婢を呼むで四下の始末を爲せて、臺所も寐るやうに吩咐げて、寢間に還れば、舅が、

「鷲見さんはもう御寢かい。」

「然うでございませう。」

旋てお種は床に入ると、寐物語が始つたが、始ると程無く其挨拶が途切途切になつて、

「齒が脫けては樂は無いのさ。」

「…………。」

「お前さんの所の御父様は私よりは確三歳下だつけかの、のう？」

「……………………………………。」

男は徐ら轉側をして、咳嗽を咳いて、退屈さうに大息を吐いて、有間は寐付かれぬ様子。雨の音は全く絶えて、ごつとりと風も凪いで、保の鼾が可愛らしくすや〳〵と聞える。

前には自分の立てた音で他の目を覺した男は、更に物音の爲に眠を驚された。次の間に跫音がして、彼地此地と絶えず徘徊する氣勢である。其音を聞着けると、首を擡げて窃とお種の様子を窺つた。彼は此方向に前後も知らず熟睡してゐる、男は其顏を視ながら、隣の跫音を聞きながら

（唉、解らないものよ。）と胸に浮べる、

（萬々那様事は無からうと思ふけれど、其處は若い同士、如何魔が魅して間違ふまいものでもないのだ。誠哉が留守になつてから、鷲見さんの様子が違つて來た。それを臺所のものが噂をしてゐる、此奴が極惡い。夜

寐る時二階へ昇るばかりで、餘は初中終茶の間に來てゐる、それを亦何の彼のと婢等が陰言だ。疑ふ譯でもないが、其邊の所は御互に氣を着けてくれなければ困るのさ。些と言はうとも思つたけれど、彼氣だからお種も心配するだらうし、誠哉も直にもう歸る事だからと、言はずに居たのが此方の不念と謂ふものだ。然う謂へば成程鷲見さんの樣子は變つたな、一時から見ると飜然と變つた。）

お種は身轉さへ爲ずに能く眠てゐる。次の間の跫音は猶聞える、遠くなつたり、襖の際まで來たりして。

（すると昨夜の始末、彼は何だ！ よしむば惡い事が無いにもしろ、二時三時といふ眞夜中に、亭主の留守の女の寢間へ男が入込むで話をして居る、それぢや濟むまい！ 世間が濟まさない。甚麼に言はれたからつて爲方があるまい。よもや間違は無からう、無からうけれど、有ると言はれたつて動が取れるものか。賢いお種にも似合ない爲方よ。彼が臺所の

奴の目にでも掛つて見るが可い、如何する意だ。よもや間違は無からう、無からうけれど、仕草が善くない。這麼事が有つてはならない、とおれは初手から思つたのだ。誠哉があの氣だから何とも容喙は爲なかつたし、女房を取られるやうな間拔な誠哉でもないから、話を聞いた時も默つては居たのだけれど、猶且恁云ふ面倒があるのだ。誠哉は留守の事だ、平生寄が傍に附いてゐて何事だらう！　間違は無からうけれど、那樣噂でも立てられたら回復が付くものか。で、まあ、二人に意見だ、何の道言はなければなるまい。言ふのも實は是し非しよ。いつそ何も言はずに恁して張番をしてゐて、誠哉が歸つて來たら全然引渡すと爲うか知らぬ――其と無くお種にだけは言つた方が可いか知らぬ。それとも此で先生に打付つて、窃と…………いや、其奴は可かない。はて、なあ、今の所では間違は無いとしても、言はずに措いたらば其間に…………、早く誠哉が歸つて來てくれゝば、其が一番可いのだけれど。昨夜來て、又今夜彼通り來

るのだ。如何も是は、はてな……はてな。)

途端に襖が啓いたので、勇は思はず起返つて、故と不知不識しく

「誰だ！」

柳之助は眞二つと斫りかけられたやうに動顛して、

「はあ、」　とばかりで二の句の出ぬ所を、

「誰だ！」

「ぼ……僕です。」

「誰だ！」

「つい、是は失禮を。」　と言ふより早く襖を閉然、次いで階子を駈昇る音がした。

「はて、困つた。」　と勇は身を倒して、枕を付けるとごほ〳〵と咳入る。お種は漸く目を覺して、

「何でございます。」

「あゝ、何、鼠が出たのよ。」

（十）の二

其翌日である、柳之助は學校から歸つて見ると、曾て然うした事の無いお種の顏色が何と無く勝れぬ。お類が嚏一つしても案じて訊ねるほどであつたから、ポオトフオリオを抱へたまゝ立寄つて其顏を覗込むやうにして、

「貴方如何か爲すつたか。」と答を聞くまでは落着かれぬ躰で坐りも爲ぬのである。

「いゝえ、別に…………。」といふ聲は彼の僻耳でもなく萎れてゐた。

「那樣事は無いでせう。鬱いでゐられるぢやありませんか、如何爲すつたです、えゝ、顏色が惡いですよ。」

「然うでございますかね、何とも無いのですけれど。」

「本當に如何も無いのですか。」

柳之助は始めて火鉢の傍に坐つたが、未だ胡亂さうに彼の顔を眺めては獨り考へてゐたが、良有つて、

「貴方。」　と改まつて言出した。

「はい。」　とお種も改まつて答へたやう。爾時弗と目と目と見合せれば、何故とも知らず互に胸の内を憐み、憐まれるやうな想を誘はれた。

「僕は實に濟まん事を爲ました。」　と投首を志て、後は言はずに考へてゐる。

「何をてございます。」

「貴方に濟まん事を爲たのです。」

「私に？」　とお種も後は言はずに考へてゐる。

「御老人が貴方に何かお言ひなさりはせんでしたか、今日。」

「いゝえ、何も。」

柳之助は首を傾けたが、お種は別に仔細を問反すでもなかつた。

「然うですか。」　と彌訝しさうにしても、お種は猶且何とも言はぬ。
「實に僕は昨夜も貴方の所へ行かうとしたのです、二時少し前に。」
然ぞ驚くであらうと彼が思設けたほどのお種の氣色ではなかつた。
「それが、昨夜も目が覺めると、一昨夜と同じやうに耐らん心地になつて、又下に來たです。然し、貴方に御迷惑を懸けてはならんと思つたですから、酒も飲むだです、けれども少しも醉はんです。それから寢つて下に來たですけれど、貴方を起すまいと怺へて見たですが、一昨夜と少しも違はん心地なのです、それで到頭怺へられんで彼唐紙を啓けたです、然うすると、實に驚いたですな、貴方の側に御老人が寐とつて、誰だと聲を懸けられたので、如何爲うかと思つたです。て、僕ですと言つて直に二階へ昇つて了つたですけれど、後で考へて見ると、御老人は或は邊に思ひは爲さらんかと思つて、それが心配で、實に是は外の事とは違ふですからな。」

「まあ、然うでございましたか、些とも知りませんでした。然し那樣御心配をなさいますなよ、御父樣も那樣方ではございませんし、又私からも能く事情をお話申して置きますから。」

柳之助は漸く其て力を得て、

「はあ、何卒、はあ、何卒能く其事情を。」

「ですが貴方も自今は夜更けて下りて入來しやるのはお止しなさいまし若も臺所のものにでも見られますと、…………。」

「はあ、然うですとも、止しますとも！　然し、何で御老人は昨夜彼處に寐られたのですかな。」

「隱居所の方は鼠が騷いで寐られないと有仰つて。」

「はゝあ。それでは今夜は隱居所へ？」

「如何なさるか知りませんけれど、まあ貴方は入來しつては可けません。」

「無論行きは爲んです！」

彼は此話の間も始終氣に注て居たが、お種は唯見た目に顏色の勝れぬのみではない、口を利くのも懈げに、瑣末の擧止にさへ力が脱けて、左右に物思はしげに注てゐる。是で如何も無い理は無いと柳之助は考へた。

「貴方眞に氣分でもお不快のではないですか。」

「いゝえ、那樣事は有りは致しません。」

「それでは何か御心配でも有るのでせう。」

「いゝえ。何故でございます。」とお種は片笑を注たが、其笑も其聲も強ひて力付けるやうであつた。

「然うでもないですか。妄です、それは妄です。」

「幾何妄だと有仰つても、然うでないものは……………。」

「其が既に妄です。貴方は前から鬱いで在れる、僕は瞭然と見とるです。貴方が然して不愉快さうな顏を注て在れると、僕は何だか心細いのです。氣分でもお不快のなら何も秘される理は無い、御心配が有るのでせう。

て僕が聞いて悪い事なら、それを強ひて聞かうと云ふのではないです。唯心配が有るのだと言つて下されば、それで可いのです。貴方が鬱いで在れると、僕も心配なのですから。」

「然して御深切に有仰つて下さるのですから、有れば有ると申しますけれど。」

柳之助も今は意を取直した氣色で、

「はあ、僕が是まで言ふのに𡧃を有仰る貴方でない事は知つとるです。心配などが有るのではない、而して病氣でもない、ですね？　それなら安心したですけれど、如何も無いのに如何して貴方の様子が然う違つて見えるでせう。」

彼の問詰めるほどお種は思惱むやうに見えたのである。柳之助は其顔を眤と視て、

「然し、若し……………ですね、貴方、御心配でも有つた時には、僕にも話

して下さいよ、何卒ね、可いですか。僕は恁云ふ男ですから、何の役にも立たんでせうけれど、是でも一箇の男子です。貴方には非常にお世話になつとることは、能く記憶して居るです、忘れは爲んです。葉山君の外に僕は誰も親友は無いですから、妻の亡くなつた後は心細くて、一層葉山君を頼にしとるです。そこへ貴方が又深切にして下さるので、僕は熟く思ふです、葉山君と貴方が無かつたら屹度病氣になつたですよ。今でも葉山君と貴方に別れるやうな事があつたら、猶且僕は病氣を爲るだらうと想ふです。」

尋常に聽いてゐるらしく擬しながら、其實お種は胸に徹へた躰である。

「恁して葉山君や貴方と一所に居るのが僕は樂みなので、宛然自分の家内のやうに思つとるです。その貴方が病氣であるとか、心配でも有るとか謂へば、僕は妻が然であるやうに心配でならんです。然云ふ場合には平生お世話になる代に僕は一生懸命で盡す精神ですから、貴方も僕を然る

う信じて居つて下さい。信じて下さるか、あゝ、信じて下さる？　それで僕も滿足しました。」

お種は益々勢が挫けて、愁然と非ぬ方を瞶めてゐるので、

「何だか妙に心細いやうですな。」

「貴方が餘り身に沁みるやうな事をお話なさるからです。」

お鈴が來て、

「奥さん、御隱居樣が一寸。」

柳之助は惕息。

「貴方能く事情を言つて下さいよ。」

「可うございますよ。」

お種の行つた後に柳之助は一方ならず腦を痛めて、今か〳〵と歸來を待つてども、暇取ること夥しいので、

「是は可かん、仕舞つたぞ！　仕舞つた、仕舞つた。」

と窄袴の衣兜に両手を挿込むで、座敷の内を搖るゝ如く歩いてゐた。

良有つてお種の出て來るのを見れば、柳之助は猶更心許無くて、茶の間へ入るも待たずに、

「如何でした。大變長かつたではありませんか。」

「少しお風邪の氣味で、腰が痛むから按いてくれと有仰るので。」

「あゝ、それで別に那話は無かつたですか。」

「御座いませんでしたとも。」

「それは可い、それは可かつたです。而して貴方用はもう濟になつたですか。」

「いゝえ、未だ參つて居らなければなりません。床に入つて在つしやるものですから、附いて居てあげませんと……。」

お種は其を陳謝に來たらしく、立話を爲て直に勝手へ行つて、何やら防附けて、又隱居所へ入つた。

「あゝ、心配した！」と柳之助は小机の前に坐つて、姑く苦めた呼吸を寛緩に嘘いて居た。

爾後日の暮までお種は一度も來ずに、お鈴が折々用を聞きに見えたが、彼は一件もお鈴に頼む用は無かつたのである。

夜食といふ頃に漸く還つて來たので、柳之助は顔を見るなり、

「彼方はもう可いのですか。」

「いゝえ、又晩に來て居てくれと有仰るのです。」

「又晩に？　餘程お不快ですか。」

「いゝえ、唯寐て在つしやるのは御退屈なものですから、それでゞすよ。」

「それは僕も退屈ですな。」

「ですから、貴方は早く奥様をお有ちなさいましよ。御獨身では何かに就けて不自由な思をなさらなければなりません。惡い事は申しませんから、貴方も能くお考へなさいましな。」

思逼つたやうにお種は附端も無い事を言出した。
「貴方は突然妙な事を……如何いふのですか。」
お種はいとゞ思入つて、
「私は始終其事を考へて居りますよ。」
「那樣事は考へて下さらん方が可いです。」
「いゝえ、然うではございません。」
先からの浮かぬ顔は、若や此事を案じて居るのではあるまいかと想はれるほど、彼の氣色は此時益々崩折れる。
「貴方眞に如何したのですか、えゝ。那樣事を心配して在つしやるのですか。然うでは無いでせう、然うだと僕は困りますよ。ねえ、如何云ふのですか。」
心配せぬ事は無いとばかりて、詳い事を話す間は無くお種は又隱居所へ行かねばならぬのであつた。

迹に柳之助は左や右と凡そ考得られる限考へたが、お種が彼程に心配するのと自分の身の上と、如何なる關繫が有るのか、無いとよりは考へられぬ。今に見えたらば恁言つて聞かうとまで心算をして、待つたが、待つたが、一向出て來ぬ。其内に婢等が遽に犇き散すのを、何かと想へば隱居所へ夜具を運ぶのである。如何いふ事になるのかと柳之助は其と無く樣子を見に起てば、今夜はお種が隱居所に泊るのと知れた。

翌日もお種は隱居所に詰切つて居るので、柳之助は歸ると直に見舞に行つた。老人は床の上で新聞を見て居たが、彼の咳拂を聞着けると、急に目鏡を脫して、搔卷を引被けて、彼方向に横になつて居た、柳之助が入つた來て語を懸ける迄は。

「何爲、大した事は無いので、唯時々腰が痛むでなりません。」

と云ふ挨拶であつたが、如何樣病人といふ血色でもなければ、大した事は無いのであらうと柳之助は思つた。さて傍にお種は居る、茶の間へ還

つた所で面白くも無いのであるから、暫く此で話さうともしたが、老人が睜然と目を開いて、始終自分を視てゐる、其顔が目前に陰顯いて何と無く氣に障つて、甚しく居心が好くない、のみならず、お種も相對のやうではなくて、人目を兼ねるらしく語遣さへ餘所々々しくして居る。返す返すも老人の瞠つてゐる眼色が無氣味に感じられると與に、彼は暗黒から誰だと咎められた可恐さを想出さずには居られぬ。其時の眼色も定めて恁うであつたらうと考へると、もう居耐らずに、此を出て了つたのである。

此日から引續いて三日と云ふもの、舅の腰の疼痛は去らぬであつた。即ちお種は其看病の爲に、晝間は謂ふにも及ばず、夜は夜で枕頭に附添つて、寐るさへ其傍を離れられぬので。

日に一度づゝ柳之助は見舞に行くのであるが、病人は容體にも血色にも少しも變は無くて、訊ねれば毎も同じ事を同じ調子で繰返すばかり。

「どうも時々腰が痛むでなりません。」

而して不相變の眼色で孔の穿くほど視てゐられる。其はなか〳〵或言を云はれるよりも彼の胸には徹へるのである。

寂しいながらも、不足ながらも、柳之助は是非無く茶の間に獨り勉強して居た、偶に用があつて出て來る次手にはお種の一寸でも寄るのを心遣にして。それも乙鳥の飛ぶやうに、來るかとすれば直に行くので、二言三言よりは語を交す間も無い。而して其二言三言の餘所々々しさは、何の爲に故々來たのかと或時は疑はれるほどであつた。病人と名乘る老人の容躰は何處が不快さうに見えるでもなくて、看護を爲る人こそ却つて可惱しげに羸れて居るのが、心に懸るから訊ねれば、寐が足りぬ所爲とばかりで、他の思ふほどは當人の苦にもして居らぬ樣子。

其後は此始末で浸々話す折も無くて、彼が午後の四時から夜の十時まで獨で寂しく送つた日も四日になつたのである。幸ひに其間は夜中の寐覺

も無く、雨の夕暮も無くて、彼の自身は極めて平穏に過ぎたが、氣になるのは老人の眼色、案じられるのは、お種の顔色、茶の間も今は頼む木蔭に雨の漏るやうで。

(十二)の一

或日の午前葉山は唐突に歸宅した。今日とは思ひも寄らず無事な顏を見たのであるから、お種は何とも謂はれぬ欣喜てあつたが、先觸も無く歸つて來たのが、塲合が塲合ゆゑ氣懸で、早く何かの樣子が聞きたいと思へば、一寸隱居所へ機嫌伺に行つたのが、急には出て來ぬので、行つて見ると、暫く外すやうに吩咐けられた。さてはと思へば情無い、けれども覺悟の上の事であれば、一先茶の間へ引取つて、保を遊ばせながら如何に成行く事かと、夫の了簡一つを案じてゐたのである。凡そ一時間半も引住められて、舅から委細話の有つた樣子。お種は其間白刃の上を渡るやうな想を爲たが、旋て入つて來る夫の姿を見ると、忽ち冷い汗が入染むで、身が窄まるかと覺える。

「異變も無かつたか。」と例の元氣な調子で、

「坊主如何した、如何した。やあ、綺麗に剃髮が剃れてゐるな。」
と保を引抱いて、其頰へ口も鼻も一所に推込むやうに吸付く。
「電報を打つと有仰つたから、毎日御便を待つて居りましたのに、餘り
不意なので吃驚ましました。貴方も御變はございませんでしたか。」
保を抱いたまゝ葉山は其處に坐つて、
「異變は無かつたが、不美い飯ばかり吃されるのには弱つたよ。時に鷲
見先生は如何した。」
言ふ方は何の氣も無かつたのであるが、先生と附けられたゞけにお種は
辛かつた。
「此頃は大相御氣分も快いやうです。」
「何だかお前顏色が惡いぢやないか、如何した。」
「心配な事がありまして…………貴方御父樣からお聞でございませう。」
大事に成るか、事無く濟むか、夫の爰の一言で善惡ともに定ると思へば、

息も苦しくお種の胸は波立つ。
「はい、承はりましたよ。」　と笑つてゐる。
「笑い事ではございませんよ。」
「どうも飛だ事でしたな。」
お種は獨り途方に昧れて、
「貴方、笑談ではございませんよ。」
「然し、御樂だつたね。」
「何と有仰る？」　と餘は力一杯に夫の顏を瞶めた。葉山は手を持添へて慌忙しく保に顏を隱させながら、
「おゝ可恐い、おゝ可恐い。鷲見さんとこの姨さん可恐い〳〵。」
餘りの惡洒落にお種は腹立てゝ、
「貴方、子供に那樣事を！　坊やは此へ御出、御母樣の所へ御出。」
手招をすれば保の起たうと爲るのを、

「行くのぢやないよ、お前なんぞが行くとお邪魔になるから。」

衝と寄つてお種は物をも言はず保を引離す。

「これ、手暴な事をしてくれるな、俺の子だよ。」

「もう那樣事は可うございますから、御父樣は何と有仰つたのです。」

「種々〱有仰つた上に御立腹と來て居る。御父樣の御立腹は大變なものだっ

夫の言ふ事は一々茶にしてゐるので、他の心も知らず餘りに情無いと思へば、お種は有繫に觖然として、それなり口を閉ぢて了つた。

暢氣で居るやうには見えながら、葉山の肚の中はなか〱然うではない。窮つたのは柳之助の始末、年寄は捨二無二柳之助を出して了へと迫る。彼とても飽くまで二人の間を疑ふてはないが、又全然と疑はぬでも無く、左右は若い同士であるから、間違の無い内にと云ふので、年寄の事とて其には其で種々〱取越苦勞をしてゐる。段々〱聽いて見れば一應有理て、自分は決して那樣馬鹿げた事のあらうとは思ひも付かぬのであるが、其思

ひも付かぬのが則ち間違の因ではないか、と嚴しく極付けられたのである。

今更柳之助を出す？　誰が連れて來たのかと謂へば、元來自分が男氣で、當人の進みもせぬものを引張つて來て置いて、今になつて都合が悪いからとて出されもせぬ。其都合の悪いも、他の事と違つて、（家内と怪しいから）は前の男氣に對しても餘り意氣地が無さ過ぎる。其も事實に相違無いとならば是非にも及ばぬけれど、と葉山は彼の無言の内散々思案を爲たのである。

「それで笑談は舍いてだ、御父様は如何しても鷲見を出して了へと言ふのだ。」

「それでは御父様は猶且疑つて在つしやるのでせうか。」

「それは、萬更疑はないのでも無からうよ。」

「…………………………。」

お種は脣を咬むて熟と俯いてゐる。
「一遍は聞いたが、一躰まあ如何いふ經緯になつてゐるのだか、お前からも樣子を聞いて見なければ解らない。如何いふのだ、そも馴初の始はよ。」
「又那樣事を有仰る。」と苦い顏を爲るのを、葉山は尻目に挂けて、
「這麼事を言つてゐる內は確なので。俺の洒落の息の根が止るやうぢや大變だ。」
言はれて見れば成程と思つたらしく、お種は返す語も無かつたが、旋で彼は其後の柳之助の樣子から、舅に見付けられた迄の留守中の有躰を精細に話したのである。其一々は總て年寄の見た所と差は無い、志て見れば、二人の關係も、二人を知つてゐれば然も有りさうで、聊も疑ふ所は無いが、知らぬ年寄の其を見ては疑ふのも無理は無い。右も左も有理で葉山は益々處置に窮した。

若し長く彼人を内に置くやうでは、俺が不安心で夜の目も寢られぬ、と年寄は言ふ。然うかとて、柳之助に無き名を負せて出されやうか。

「何とか巧い工夫は有るまいかなあ。」

可惱しげに思凝してゐる夫の顏を見れば、お種はなか〳〵茶にして相手に爲れぬよりも辛い。

「お歸り早々誠に如何も濟みませんです。私も御父樣には面目なし、鷲見樣には又お氣毒で。」

「而して鷲見は些とも知らないのか。」

「私は全でお話をしませんのです。」

「けれども大概樣子で氣取つてゐるだらう。」

「とは思ひますが、御父樣の御病氣が長いもので、それは毎日氣にして御訪ねなさるから、實にお氣毒でなりません。」

「いや、其調子ぢや間男は覺束ない。」

「貴方、那様可厭な言を仰有るな、私は悚然とします。」

「いや、那様度胸ぢやお前も猶且…………………。」

「あゝ、もう貴方……………………。」

（十二）の二

事の無實を知りながら捨置いて、老父には柳之助を疑はせ、柳之助には老父を恨ませるのも不本意の至、成らうなら圓く納めたい葉山の了簡で、再び父親に向つて、柳之助の爲人から悉しく説始めて、有つた事の怪むべきも、彼としては決して怪むべきでない理を、段々と咬むで哺めるやうに聞かせたのであるが、老父は金輪際不承知で、幸ひに間違は無かつたにせよ、今後の安心がならぬから、是が非でも彼人は謝絶つて了ふやうに、と恐らく動かし難い老の一徹。葉山も今は爲方無さに、柳之助に打明けたのである。之を打明けるには葉山は隨分工夫をして、加減をして、他を傷けぬやうに、氣にも障へさせぬやうに、即かず、離れず、柔かに義理を責めるのであつた。言はれゝば柳之助も其疑を受けて是非無い覺は胸に在る。尚彼は常に老人の疑を陰に懼れてもゐたのであるが、斷然

然う打出されて見れば、身に取つての大侮辱である。

「怪しからん！　それは僕が老人に會つて辯解する――辯解すれば釋る事だ。」

柳之助は一圖に赫として、色目も變へて、上聲になつてゐる。葉山は故と綽然構へて、

「老人が敵手になるものか。それだから私が愬るやうに情實を言つてゐるのぢやないか。」

「君の云ふ事は解つとる、老人の言ふ事が解らんのだ。怪しからんぢやないか、考へて見てくれ給へ、僕が那樣馬鹿な事を爲る人間であるか、ないか。僕の名譽を如何してくれる！　餘り情無い事を言ふ、――餘り怪しからん事を言ふ。疑？　疑でもさ、疑でも餘り怪しからんぢやないか。此に置かれんと云ふなら出る。僕は出ます、出ますとも！　今直にでも出るけれど、此疑を霽してもらはん内は僕は殺されるとも…………。

「誰が殺すと言つたよ、それこそ怪しからんだ。さあ、誰が殺すと言つたか、それから聞かう。」
「それは喩ぢやないか。」
「あゝ、喩かい。それほどの決心だと云ふ喩だね。然すると、愚父に會つて辯解しても、疑を霽さなかつたら如何するい。私の親父を刺殺して、返す刀で君も死ぬかい。」
「如何に疑でも餘り情無い、名譽に關ずる事を……………。」
「それは解つてゐるよ。愚父を殺して君も死ぬ氣か、如何するのだ。」
「僕は何も那樣氣は。」
「無けゝや會ふのは無駄だよ。愚父だつて其を疑つてゐるのぢやない、間違でもあつては成らないと、那云ふ事が有つたものだから、但取越苦勞をしてゐるのさ。」
「いや、未だ疑つとるに違無い。僕は殘念だ。」

「那様解らない奴が有るものか。もう疑ひませんと、爰に歴とした證人が居るのに、好き好むで疑はれたがらなくても可さゝうなものぢやないか。うむ、疑つてゐるから辯解に行かうと云ふのだね。」

「然う。」

「で、疑を霽さなかつたら如何する。」

「僕は屹度霽して見せる。」

「幾許此方で力むだつて、天氣と疑ばかりは先方から霽れるのだ。」

「如何あつても霽れんけりや其迄で爲方が無いけれど、那様疑を受けとつて僕は一言も言はずには居られんから、一言言はしてくれ給へ、ねえ、一寸會してくれ給へ。」

行かうとする、遣るまいとする。物音に雜つて高聲の聞えるのを、さてはと茶の間に居たお種は心も心ならず、急いで階子の口に來ると、立聞をしてゐたのと覺しく、婢等の慌てゝ臺所へ迯込む後影を見付けた。

柳之助は止められるのを振捥つても降りやうとするのを、葉山が語忙しく宥める――肯かぬの悶着の那裏へお種は駈着ける。一目見るより柳之助は、

「あゝ、奥さん！」　と言つた限で潸々と涙を零す。

「貴方まあ如何なすつたのでございます。」

とお種は氣遣はしさうに進寄れば、今の今まで激してゐたのが、忽ち火の消えたやうに萎々と、柳之助も進寄つて、

「貴方には濟まんですな。僕の疑はれるのは爲方は無いですけれど。貴方にまで御迷惑を懸けては、僕は實に申譯が有りません。」

彼は犇と目を抑へて、急來る涙に咽ばされる。

「いゝえ、私は。」　と口には言つても、曩の日舅に言はれた一言の無念さを憶出して、其時は怺へた涙が今となつて不覺に睫毛を濕したが、夫の前を兼ねて熟と辛抱してゐれば、怪しくも少時語が途切れる。葉山

は其躰を流眄に見て、
「お前が何で泣くのだ。」
「はい。」　とお種は忍びやかに眶を拭く。
「妻君だつて猶且殘念だね。殘念さ、殘念でなくて、之が殘念でなくて如何するものか。」
と柳之助は二の腕に顏を推附けて歔欷をしてゐる。其を見ればお種は猶更誘はれて、何と無く悲が亢進る。泣くまいと爲れば物が言はれず、言はずには此場が濟まず、せめては涙を飲むで、氣の取直されるまでと俯いて居た。此間に介まれては、葉山も有繫に手を束ねて茫然するより外は無かつたが、
「然う殘念がるほどの事は無いのだよ。誰が甚麼に疑はうとも、私といふものが信じてゐたら、是程確な事は無いぢやないか。君にしても、お種にしてもだ、無い肚を捜られるのは、それは殘念だらう、當然だ。然

し、又愚父の身にもなつて見給へ、私の留守中と云ひ、夜間夜中お種の寐所へ男が遣つて來るのを心配せずに居られるものか。內の愚父ばかりぢやない、誰が聞いたつて、此奴は變だと思ひます。謂はゞ君の落度だもの、本來なら私が先立になつて爰は言分の有る所だ。その御本尊が如何だらう、恁して悄り入つて情實を話してゐるのに、未だ殘念だの悔しいのと、君も泣けば、お種も泣くなら、如何とも兩人の勝手に爲るが可い、其方が然云ふ解らない了簡なら、此方も沒分曉漢になつて、精々兩人を疑はうし、君のお宿も拒絕れば、お種も一所に叩出して了ふから、然う思ひたまへ。」

柳之助は駭き、お種は懼れて、一齊に語を出したので、何方が何と言ふのやら、混じて更に解らぬのであつた。葉山は其を打消して、

「愚父の疑ふのは有理だと私は思ふのだ。然し、其は愚父としては有理だが、私としては有理でないから、能く解るやうに愚父には話をして、

それて愚父も全然疑は霽れたのだ。疑は霽れたが取越苦勞だ。萬一の事が有りでもしたら回復が附かないから、有りはしまいが――其處が年寄の愚痴と云ふ奴で致方が無い。俺の氣を安める、生先の無い俺を喜ばせると思つて、何よりの孝行だと思つて、今度の事は俺の言分を通さしてくれと云ふ愚父の賴なのさ。考へて見ると隨分念入に家暮な賴だけれど、何しろ親だ。此を能く聞分けてくれないぢや情無いよ。愚父の心にもなりさ、又私の身にもなつて、一番考へてもらひたい所だ。這麼に言つても解らないなら、如何も爲方が無いから、少し古風か知れないけれど、二十四孝と行くのだ。親には換へられないから、友達と女房を棄てる覺悟だ。さあ、如何だい。」

爰で確に急所を抑へて、葉山は悠然と銀煙管を九十度に啣へて、もう此方の物さと云ふ態。

濡衣とは謂ひながら、罪は全く己に在るものを、假初にも累を恩人に遂

ぼすやうでは、道が立たぬのみか、第一に心が濟まぬ。剩さへ彼は四五日の前お種に向つて、貴方の身に事のある場合には、平生お世話になる代に一生懸命で盡す精神であると言つたのである。今お種の身に事のある場合、而も其事と云ふのは、自分から起つたのであれば、甘むじて汚名をも受けねばならず、無念などは勿論忍むねばならぬ。又一方には、事を分けた葉山に對しても、爰は己の立てられぬ所と、終に柳之助も觀念して、日頃自分の爲に惡かれとは思はぬ葉山の計畫に任せて、穩便に片付くやうに賴む旨を答へた。

夫の理に責められて、始の暴い氣色も無く、何も言はずに一切を打委せるとは、然ぞ口惜しからうに能くも可憐くと、お種は彼の性質を識つてゐるだけに、其胸の切なるは幾許かと思遣つては、我ながら怺情無く涙を誘はれて居た。

傍でお種に泣かるれば、いとゞ增すばかりの涙の中で柳之助は、

「それでは僕はもう此家には居られんのだね。」
是が昨日まで生涯此二階で暮すとて喜むで居た人の言である。之を繰返しては屡喜ばれたお種の悲さは胸を衝いて、力限にハンカチイフを顔に押當てながら、
「私ゆゑに、誠に濟みません。」
「貴方に然云ふ事を言はれては、僕は何と言つて可いのか、實に――實に――實に…………。」
「いゝえ、私も心着かなかつたからでございます。」
「何爲、考へて見ると、僕が惡かつたのです。」
「私が致らなかつたので。」
「全く僕が不注意でした。」
「いゝえ、私も…………。」
「それは無論僕が…………。」

二人は一所に又潸々と泣く。

「何方でも可いよ、今更那様事は。お種はもう下へ行きな。あゝ見つともない其顔で、窓へでも行つて干すが可い、何なら池へ行くと龜の子の伴がある。鷲見も好加減に爲ないかよ。何だな、何時までも不景氣な顔を爲て。

おい、乾いたかね、其方の人は。宜しければ下へ行つて御酒の支度だ。愁嘆場は是で幕の、後は陽氣さ。

さあ／＼一盃飲みながら、話もあるのだ。」

葉山は例の可笑く其場を紛らして了つて、酒の間に段々語を盡して言慰めたのである。他事なき彼の心底と、毎に變らぬ實意と、久ぶりの酒落とを聞けば、柳之助も彼の前には無念も悲も無い。折から鷲見へ郵便とて、婢が持つて來る一通。

「あゝ何だらう、類の姻家からだ。」

「はてな…………あゝ解つた。色男め！」

「何だ！」

「何だぢやないよ、お島さんが寄來したのさ。色男、色男！」

「止したまへ。」と狀袋の横端を邪慳に引切つて、早速披いて見る

「はあ、お島が結婚すると。其を知らせて來たんだ。」

「然うかい、それはお目出たい。如何いふ所へ適くのだね。」

「何處とも云てないが、那麼者を娶ふ奴が有るかなあ。」

（をはり）

葉山の住居から一町許り隔てゝ小奇麗にしてゐる上等下宿がある。柳之助は一先其に引移ることに取極めた。近廻を擇むだのは、一つ家にこそ居ずとも、今迄通り世話にもなりたければ、二階と下ほどの往來もしたいので。

事の起るまでは然も無かつたお種も、いよ〳〵彼が出るとなつてから、遽に離れ難い心地の爲るやうでもあつた。其と云ふのが、日頃柳之助は自分を姉のやうに慕つて、一も貴方、二も奥樣と事毎に相談をしては、殆ど自分の言ふ言に用ゐぬは無い程であつたに就けて、那樣にも可憐い心立の人に、今更別れるのも情無く、且は出て行く身をも察して見れば、其も可哀やら何やらで、如何成るか解らぬ内は心配をし、事が極れば、次いて物思はしい日を送つたが、葉山が歸つて五日目に柳之助は終に疑

の門を出たのである。

大方婢等の仂ない口から洩れたのであらうが、近所では兩人の間に惡い事でもあつたやうに噂を爲る者もあつた。

轉居した其夕方から柳之助は遊びに來たが、次の日からは降つても照つても毎日一度づゝ訪ねて來ぬことは無い。お種も自から心待に爲て、好きな物でもあれば、必ず取つて置くやうに爲るのである。

下宿の床の間には正面にお類の肖像畫を飾つて、胡麻竹の井字の寫眞掛に保を連れたお種の立姿が床柱の花入の釘に掛けてあるばかりで、幅も無ければ花も無しに。

(三十年七月)

安知歇貌林（新小説第二年第一巻）（はじめ）

月下の頭巾

水色縮緬の頭巾目深にアリザリンオレンヂの中形のシオールを絡へる女と靠合ひつゝ推並びて、稍長高く鼠縮緬の頭巾冠りたるは、大御條の焦茶のシオールに小肥の身を裹み、吾妻下駄を鳴し連れて、冬の夜寒く、風は梢を吹きて、燈火疎なる横町の寂しさを語ひつゝ行けり。

水色縮緬は其伴に向ひて、狎ゆるが如く、訴ふるが如く、

「ねえお勝さん、逢へるかねえ、馬鹿に慍らしちまつたんだから、本當に私は如何せうかと思つて、昨夜は夜一夜寐やしない。」

鼠縮緬は然も呆れたる相して、

「おや、御馳走様だよ。」

「あら、然云ふ譯ぢやないんだけれど、私は本當に心配でならないんだもの、それは隨分從來には度々惱られたり、怨言を言はれたりしたけれど、此間のやうな事は何日にもありはしないんだよ。もしや是で切れるやうな事にでも成つたら、如何せうねえ！　私はお勝さん死んで了ふよ、生きてる効も何も有りはしない。嗟乎滿らない〳〵！」

恁く言ひつゝ身を顫しぬ。鼠色は此血迷へる心を安めむには憖ひ思遣の有らむよりはと、

「大概にお爲なね、此人は。自分が勝手に面白盡で惱らして置いてさ、他に憤れる奴があるものか。謡けられたり、仲直を頼まれたり、其途中で憤れられたりさ、何ぼ何でも（それぢや私の身が立たぬ）だ。」

彼は素氣無く面を背けて、唯有る土塀の内に高き鴨脚樹の絶頂に懸れる五日月を仰げり。

水色は其肩をお勝に撞付けて、

「あれさ、私は何も慣れたつてお前さんに抵つた譯ぢやないんだから、氣に障つたら堪忍しておくれよ。賴に思ふのは今はお前さんばかりなんだから、那樣事を言はれると私は心細いよ。」

「染井樣と仲さへ直りや賴に爲ないと謂はないばかりだ。不實なものさ。」

「あれ、もう此人は……………！」

と撲たむとせし手を遽にショールの内に引入れて、

「どうせ舌頭ぢや敵はない。」

「其代り手腕で來いかい。よう、よう！」

「知らないよう！」

水色は拗ねたる風情にて、お勝を措きて獨り道を急げば、二間ばかり後より、

「お大さん、左樣なら。氣を着けてお出なさいよ。」

彼は慌てゝ振返れば、お勝は其處より別れて還らむとするなり。固より

其戯なるを知れども、勢餘所に見るべくもあらず、小走に取つて返して、背後より抱着かむとする機に、藤色天鵞絨の横鼻緒は弗と斷れて、雪の如き白足袋の地を踏むよと見る間に、體は流れて横倒に片膝を支きたり。

「あゝ痛、た、た、あゝ、痛い。」

「如何お爲だい――何處を打つたい――怪我しやしないかい。」

惶々く問慰めつゝお勝は其手を執りて、曳起さむとしたれども、お大は疵を傷みて腰を擧げざるに、彼は益狼狽へつ。

「如何お爲だよ。起きられないのかい。さあ、私の肩へお摑まり。」

「何爲、起きるから、一寸此手を引張つておくれな。あゝ、痛い、足を引挫いたよ、お前さんが餘り虐るもんだから。」

「贅澤をお言ひでないよ。然云ふ了簡だから罰が當つたのさ。さあ、よう、早く下駄をお陷きなね。」

何をか爲ると思ひて、彼はお大の脚下を窺へば、陷覆せし下駄を姑く爪

頭にて弄ひたりしが、
「あら、如何せう！」
其聲の氣立ましさに驚けるお勝は、彼の平生驚氣を振へる（紙屋の重さん）より、未だ一つ大嫌の物ありと謂へる蛙を蹈付けたるにはあらざるかと想ひしなり。
「一件物でも蹈んだのかい。」
「一件物とは？」
「蛙さ。」
「あゝ可厭だ！」
懼れて飛退くお大は痛き足をも忘れたり。
「あれさ、此人は、那個物でも蹈んだのかと聞いたんだね。然うぢやないの？　如何したのさ。」
お大は忽ち打萎れて、

「お勝さん、切れちやったよ。」

「然うかい、多度血でも出るのかい。」

おのれも痛を覺ゆる如くお勝は面を皺めて、不取敢懷紙を抽かむとすれば、

「あれ、血が出るんぢやないよ、切れちやったんだよう、情無いねえ。」

彼は身悶して且悔み、且嘆きぬ。

「何が切れたのさ。」

「緣が……………鼻緒がさ。」

「何だつて？」

「横鼻緒が切れちまつてさ。可厭な辻占ぢやないか。折も折、時も時だ氣になるねえ。」

「何だい、舊弊な事をお言ひでないよ。鼻緒が切れて辻占になるのは芝居ばかりさ。鼻緒なんざ切れたつて、何も不思議は無いぢやないか、躓

いた時に無理を爲たからだあね。」

「幾多無理を爲たつて、此間買つたばかりだのに。」

「だから安物は御爲にならないと言ふんだよ。」

「可哀さうに安いものかね、是だつて臺が七十錢ばかりに…………。」

「卑しいね、何故平民は然うだらう。」

お大は連りに脫げむとする下駄を辛くも操りては歩みつゝ、

「餘りお虐めでないよ、病人をさ。」

「病人？　結構！　それこそ好い辻占だ。」

お勝は三度ばかり鼠鳴せり。

「常談ぢやないよ、お勝さん。他が鼻緒が切れたのを惡い辻占だと謂つて氣を揉んでれば、舊弊だなどと貶して置きながら、病人が好い辻占とは何の事だよ。多度不祥をお付けな、可いよ。」

其怨に堪へずして彼の聲は曇りぬ。

「おや、病人と言つたのがお氣に障つたの？　御免なさいましよ。お前の好い人の染井さんの御商賣は何だつけね。」

お大は其間の取つても付かぬを怪める氣色にて、

「改まつた御訊ね。」

「是非承りたい。」

「誠に可厭な家業で、醫者でございますが。」

「成程、そこで以つて、醫者のお客は何てせう。」

彼は鼠縮緬の頭巾の內を差覗きて、

「洒落かい、お勝さん。」

「那樣人の惡いのぢやないよ。まあ可いから、お客は何だと言ふのに。」

「そりや種々有らあね。」

「甘いよ、本當に。男なら與太郎だ、女だからお與太さん、甘い筈だ、飴の中から與太さんが飛んで出たよ。」

我と洒落て我と笑へり。

「氣樂だよ。那樣事ばかり言つて。少しは私の身にも成つておくんな。」

「だから喜ばせやうと思つて、醫者のお客は何だと聞くのに。」

「醫者のお客と……………。」

「あれさ、考へる事は無いぢやないか。」

「病人かい。」

「知れた事さ。」

「はい〳〵御免なさい。」

「醫者のお客は病人だらう。」

「何ぼ與太さんでもゝう解つてらね。」

「まあ、お聞きつてばさ、病人は醫者に診てもらふんだらう。」

「餘り下らないね。」

「まあ可いからさ。そこでお前の逢ひたい人が醫者だらう。」

「お勝さんお言葉の中だけれど、是非お醫者さまと言つて貰ひたいんですね。」

「あつ、それぢや先の騷でさまは振落しちやつたのかも知れない。取つといでよ、お前に上げるから。」

「何だつて？」

「わざとおとしさまさ。」

「馬鹿にしないね。」

折しも一陣の風は砂を捲いて絕に面を撲ちぬ。

「えゝ寒い！　さあ、もう道草を食はずに早く行かうよ。未だ餘程あるのかい、馬鹿に歩かしたぢやないか。」

「もう其橫町だよ。私は足が痛いのに鼻緒が切れてると來て居るから、然うは歩けやしない。」

「常談ぢやない、淸洟が出るよ、何ぼ夜だつて色氣が無さ過ぎらあね。」

「堪忍しておくれよ、飛んだ苦勞を爲して私は濟まないね。」
「その優しい口前だから女房子が有つても迷ふんだっさ。」
「もう詠さずに、好い辻占だと謂ふんなら、今の病人の後を聞かしておくれな。」
「猶且氣にしてゐる內が可笑い。染井さんがお醫者さまで、お前が病人だらう。可いかい、病人がお醫者樣の所へ行くのだから、こりや逢へるに極つてるぢやないか。病人でなかつたら逢へないかも知れないけれど、鼻緒が切れて病人になつたのは、お醫者樣に逢ふと云ふ前表だらうぢやないか。ねえ、好い辻占だらう。それ恁う祝直したら、鼻緒の切れたのも憎かあるまい。」
「少し附會だけれど、然ういへば然うだね。」
「占斷だの、人相だのと謂ふものは皆附會さ。」
「其氣で祝直されたんぢや、何だか利が惡さうだね。」

「利の善いのは染井様のお薬ばかりだっさ。」

「宿も宜しく申しました。」

「撲つよ！」

爰は蕭索なる片側町の仕舞た屋續きの角に、表を左右北面墻に圍ひて、痩せたる二本の赤松を見越に、敷松葉したる猫の額ばかりの門内に高野槇を植込み、根笹を配へる置石の陰に霜除藁を被げるが筍の如くつ四つ立てり。門より緩く鍵の手になれる入口に二枚の千本格子を立てて、磨硝子の軒燈籠に御待合鶴菱と記したる一構あり。お大は進寄りて、

「此だよ。」と小聲に誨ふるを、お勝は頷きつゝ外搆を眗して、

「一寸外見が好いね。」

「うむ。」

二人の姿は格子の内に入りて、凡そ四半時間の後裏口より走出でたる十四約の少婢は、鶴菱の紋を大きく附けたる浮浪提灯の火影に引詰鬢のお

茶ぴい面を暴して、口三味線を弾きかけながら大路を指して急遽行けり。

夜中の代診

彼は旋て出でし大路の賑しきを横截りて、漬物屋と錢湯との間なる狹き闇黑に入りぬ。此を出でゝ右に折るれば、稍其二倍の道幅なる一條の長き裏町に出でたり。

角より五軒目に著しく筆太に染井と書きたる街燈を點せる門に走着きて、少婢は逐はるゝやうに慌忙しく耳門を入れば、玄關の障子の内に燈影ありて、讀書の聲の聞えたりしがはたと息みぬ。殆ど同時に彼は息急き、

「あの、御免なさい。あの鶴菱から參りましたが、先生に、あの、あの、先生に…………。」

句切りたるは洟を啜れるなり。爾時内なる書生は猛然としてランプを翳しつゝ、半身を顯はせり。少婢は頻に鼻を啜りて物の匂を嗅ぎぬ。餅の焦げたるが芬々として玄關より香るなりけり。

「何處から?」　と太く訛れる聲して、書生は無愛相に問反せり。
「鶴菱てすよう。」
「鶴…………菱…………?」
彼は團栗眼を瞪りて奇怪を極めたる少婢の面構を目戍りつ。
「鶴菱ってば解りますよ。急病人が有るんてすから、先生に、あの、早く、大急ぎで、あの、直にお出なすつて下さいって。」
書生は急病人と聞くより今は己の知らざる鶴菱を研究するの遑も無く、再び猛然と奧の方へ入らむとするを、
「あの、一寸待つて下さいな。」
「何ぢやい。」　と立戻りて、式臺の片隅に腰懸けたる少婢をば、羅生門の鬼の如く瞰下せり。
「あのね、是非先生にお出下さいましって。忘れちや可けませんよ。」
書生の行くを見澄して、

「餘程七月の御槍だよ。田舍者、書生坊！」

提灯に蹙附きて、待つ間を可悶しげに貧乏搖して、戞々と下駄の齒に敷石を踏鳴して居たり。

書生は行きて診察所の後なる奥の間の襖を啓けば、内には眞晝の如くラムプを耀して、鷄を煮る匂と、葱の香と、熱燗の酒氣とは、沸々として迸りぬ。少婢が玄關の餅の香に鼻を蠢かせしよりも、彼はいとゞ堪へ難く其胃を緊縮せらるゝなるべし。

今は先生が晩酌の際なり。火鉢の鋤燒鍋より立騰る蒸發氣の霞隱れに櫻色の醉を催せる先生は齡三十四五と見えて、溫乎たる其風采、色白く髭濃に、眉目好く齊ひて、小造に肥えたり。黄八丈の巳の時ばかりなる長羽織を着て、實印を刻みたる黄金の指環の晃ける左手に猪口を把りて、紅竹の三脚の小テエブルには海栗の罐詰、香物の鉢、轉礑味噌の蓋物、燒海苔の皿、何やらの瓶詰など所狹く列べたるを控へて、メレンス更紗

の大座蒲團に艶天の蔽膝の十分に古りたるを四つに疊みて重ねたるに、思ふまゝ裕に胡座を組みたり。
火鉢に相對へるは二十五六の內君なり。其面は枯骨に一層の肉を敷きたるやうに瘦せて、色蒼白く、眉極めて太く、眼尖りて、頽れかゝれる束髮は急雨の將に來らむずる雲の如く蟠れり。藍納戸紬の羽織に、着物は絹擬の瓦斯絲の類なるべし。肩は有るか無きかに瘦纖りて、始終胸の痛など絕ゆまじき面色なり。今しも內君は診察所に掛れる骨格の圖の垂れたる手にも似たる指に杉箸を把りて、鍋の內の整理に餘念無かりしが、書生の入來るに會ひて、割らんとせし玉子を控ふれば、先生は飲まむとせし盃を停めて、齊しく其方に面を向けたり。
彼は先づ閾際に低頭して、さて言へり。
「えゝ、鶴菱とか何とか申す所から…………。」
「何と云ふ…………？」

先生は故と問へるなり。

「たしか鶴菱とか、然う云へば解ると申しまして。」

嚢より口の端の蠢々に堪へざりし内君は此時怺へかねて、

「あゝ、解りました。鶴菱でせう。」

と其答へるは書生にして、其見る方は先生なりき。實にも！　先生の額の邊は、内君が視線を藉りて以て心火の熱を傳ふる爲に、夥しく奇痒を覺ゆるなりけり。然れども故に平氣を裝ひて、

「鶴菱――解つた、解つた。」

「急病人がございますで、直に先生にお出を願ひますと申して。」

「うむ、然うか。唯今直にと。」

やをら起たむとして、内君の意如何と問はまほしげに其萎びたる面を見遣りつ。彼は早くも推して非ぬ方を見たり。先生は間拔けて、起ちかけし腰を崩るゝ如く倒せり。

玄關に擾々と跫音するは、代診生と藥局生と風呂より歸來れるなり。

「おゝ、目黒が歸つて來た。私は風邪で寐て居るから、代診を上げると言うてくれ。」

書生は起てり。

「夜は代診の事だ。」

且は聞かせがましく、且は辨疏がましく先生の獨語つを、内君は空嘯きて、闇の夜に啼かぬ鴉の聲聞く如き顏してゐたり。

先生は手酌に三四盃を呷りつけて、古の柘榴を火炎と吐きしにも劣るまじき勢にて、其熱き息をば側の壁に噴きかけたり。益素知らぬ顏の内君は皿に割りたる玉子を示して。

「是へ入れますか。」　と鍋の上に傾けむとすれば、

「要らん、要らん。何を爲る！」

音吐遽に烈々として、物其平を得ざれば鳴る。金石の聲無きも之に觸る

れば鏗然鏘然と、振拂はれし玉子の皿は內君の手を辷りて、鍋の上に覆りぬ。

「あれ、貴方、まあ。」と急に趣きて獨り騷ぐを、見も遣らぬ先生は玄關の方に向ひて、

「目黑君、目黑君。」

呼れたる代診生は浴後の髮を麗しく梳り、額を赤光にして、藪睨なる小さき目をば可笑しげに見据ゑて、座敷の外に命を待てり。

「君な、氣の毒だけれど、彼所の、あの、鶴菱な……………………。」

「鶴菱？　はあ、あの裏町の待合ですな。」

「然う。彼所まで行つてくれ給へ、何だか、急病人だといふから。」

「は、承知しました。」

麁相の玉子の始末せる內君は忽ち顧て、

「目黑さん、藝者の急病人ですよ。」

「へえ、藝者ですか。」
「迷つちや可けませんよ、氣をお着けなさいまし。」
「馬鹿な言をいふな。君、嘘だ、嘘だ、早く行つてくれ給へ。」
「でも待合ですから藝者かも知れませんよ。」
目黑は仍私に幾分の望を抱きて、足早におのれの部屋に趣けり。
先生は可忌しげに苦笑して、
―馬鹿な！ 待合で藝者の病人なら、寺からぢや誰が病人だ。馬鹿な!!―

（三十一年一月）

千箱の玉章

(二)

(世界之日本一第十號)(櫨匂)

「はい、然したが如何しましたか。然したのが惡いんですか。惡けりや何為早く姉さんが然なさらないんですよ。」

汽笛の鳴るやうに女の聲して喚けり。忽ち之に應ふるは、十分に沈みたれども、十分に嗔を帶びたる、同じく女の聲なり。

「何もね、然したから、それが惡いと云ふんぢやないよ。見ともない大きな聲をお為でないよ。一軒屋ぢやありません、此は。」

高飛車に極付くると覺しき調子なり。汽笛の聲は益甲走りぬ。

「はい、知つてをりますよ。大きな聲は私の地聲でさあね。何ですつて？ 然したのが惡いんでなけりや、それぢや何も言はれる所は無いぢや

ありませんか。何だい、馬鹿々々しい、又心火だ……」

此終の一言は、極めて小聲に、寧ろ獨語ちしに過ぎざりしも、刺の膚を刺して痛の堪へざらむ如く、最ど敵手の心を刺戟せるなり。

「何だとえ、お瀧。お前今何と言つたのだえ。」

其息は燃ゆるかと覺しきまでに彼の聲は震ひぬ。

「二度言ふと風を引きますとさ。」

憾くて有間は音もあらざりしが、先に震ひし聲は頻に濕を帶びて、

「私はお前の姉だよ。旦那は私の配耦ぢやないか。………………。」

「知つてますさね。」

「いゝえ、お前は知つてゐない、知つてゐないに違無い。」

「何ぼ私が馬鹿だつて、それくらゐの事は知つてをりますよ。」

「知つてゐる？　知つてゐる者が他を踏付にするものか。私はどうせ此通の意氣地無だから、お前のやうに手腕のある人とは違ふから、………

「…………。」

「多度お言ひなさいよ。私は意氣地無し、貴方は手腕の有…………ぢやなかつた、私は手腕がございますよ。手腕が有るから、どうせ人の家に厄介になつて居りますよ。私は厄介物の居候でございます。はい、はい、御免なさい。」

砂煙をも蹴立てむずばかりにお瀧は言捲りぬ。

姉の調子は悠々として笻を曳くが如く、

「噫、どうせ恁云ふ馬鹿な姉だと思つて、多度まあ踏付にお爲な。どうせ私は愚鈍だもの、幾多踏付にされたつて、腹は立たないのさ、些とも知りはしないのさ。」

「何日私が姉さんを踏付にして？」

「何日もないもんだ。」

流の石に遭へるが如く、彼の聲は遽に疎暴になりぬ。

「這麼事はね、世間へ知れたら恥曝だよ。お互の恥ばかりか、第一旦那の恥ぢやないか、恥だと思ふから、私は胸を塗つて我慢をしてゐるのだよ。言ひたい事は山ほど有ります、無くつて何爲るものか。何ぼ私が愚鈍でもね、お心善でもね、現在自分の妹に亭主を寐取られて、それで好い心持はしやしないよ。世間へ恥を曝すまい、近所へ聞かせまいと思やこそ、悔しいのも、腹の立つのも私は怺へて、切ない思をして口を噤つてゐるのだよ。他が氣を善くしてゐれば可いかと思つて、増長し切つてゐる、巫山戲切つてゐる、他を馬鹿にするのも大概程度が有つたものだ。餘り目に餘るから時々言へば、始の内こそ、心得違だから勘辨してくれの、惡かつたから免してくれの、以來は屹度愼むの、やあ、相濟まないの、恐入つたの、と可憐い事を言つてゐたのが、段々と増長して、今では妾にでも來た氣でゐるのだ。二言目には燒餅だの、心火だのと、餘り公然な言をお吐きでないよ。」

（二）

お瀧は力めて此愚痴を聞かじとすれども、生憎耳に入るを煩はしげに忍びつゝ、せめては非ぬ方を見向いてゐたり。姉は猶も續けつ。

「お前、今の仕打は那は何だい、他を搔除けて旦那に羽織を着せたりさ、袴の紐の結んであるものを、わざ／＼解いて緊直したり、それに彼足袋は何だよ。旦那が足を出してゐると、お前が行つて穿かして、鞐まで懸けるのだ。旦那は今年三十六になるのだよ。足袋を穿かしてもらふのはね、三四歳の時の事だよ。旦那は内務省の屬官だよ。御部屋樣にね、袴の紐を結めさせるほどの御身分ぢやありませんよ。

それも未だ可い。髮と云ふと、此頃はお前が行つて撫付けるのだ。掃除をしてゐやうが、何であらうが、箒でも灰篩でも打放出して、駈出してつて、可厭らしい！背後から取着いて、梳いてくれの、分けてあげま

せうのと。而して鏡へ顔を照合つて、くすり〳〵と巫山戯散してゐるのだ。お前はね、姉さんにお膳立をさして、朝から御愉快なのだ。結構な御身分ですね、無給金の御部屋様は違つたものさ。

未だ其ばかりぢやない。今朝旦那が今日の御辨當は何だと聞くから、鞘隱元に半片だと言へば、誰が煮たのだと言ふぢやないか。誰が煮やうと那樣事は如何だつて可いぢやないか、それを旦那は異に聞くのだ。而するとお前が自慢らしく、私でございますつさ。而すると旦那は目を繊くして、うむ、お前の煮たのなら格別旨からうだつさ。それほど萬事に就けてお前が御意に入つてゐるなら、大きな御辨當箱を拵へて、其中へお前を入れて、鼻の下へ縛付けて、お役所へでも臺灣へでも、好きな所へ行けば可いのだ。お前もお前なら、內の旦那も旦那だ。內の旦那も旦那なら、お前もお前だよ。

未だお前も廿一や二で這麼御邸に一生奉公をする心算ぢやなからう。好

い所があつたら、一日も早く形附いて、身を固めなけりやならないのだらう。それに、這麼噂が世間へ知れたら、求婚者はありませんよ。大方お前の方でも適く氣はないのだらう。姉を踏付にして氣樂に巫山戯散してゐたいのだらう。

本當にお父さんやお母さんが在れば、お前は唯委く人ぢやないのだ。姉のお蔭で露にも打たれずに恁して居られるのを、難有いとも思はないばかりか、その姉の夫を瞞着して、有らうことか、有るまい事か、お前は全で畜生だよ。あゝ畜生だとも、畜生も畜生も立派な畜生さ。」

次いで洩るゝは嗚噎の聲なり。遉の妹も此罵詈には堪へざりけむ、障子の破に風の入る如く身を震はして、

「何も畜……畜……生と言は……言はなくつても…………。」

「人間でなければ畜生さ。」

「悔……………悔……………悔……………しい！」

「悔しいのは、私の方が餘程悔しいよ。泣くのなら私が泣くよ。這麼事て泣くやうな度胸で、姉さんの旦那が奪れるものか。空涙！　空涙だよ。女郎見たやうだ。女郎よりは甚い。」

妹は益泣きぬ。その泣くは、悲きのみにもあらねば、口惜きのみにもあらず、幾分か泣いて威さんと爲るなりけり。

姉は罵疲れて、漸く舌萎え、息迫りて、竟に罷みけれども、平生抑へに抑へたりし鬱勃肚は、未だ其半をも快うせしにあらざれば、姑く小憩して、再び徐に打出せり。

「それでもお前は何だらうね、旦那と悪い事を志てゐるのは、濟まない事だぐらゐは知つてお在だらうね。」

冒頭に置きし(それでも)が癪に障りたる妹は、答もせずに直泣に泣けり。

「濟まないとは、それぢや思はないのかい。」

袖に埋めたる彼の面は此時やう〳〵左右に動けり。

「うむ、思つてるのだね。それぢや今日限心を悛めて、ふっつりと旦那の事は思切るかい、改心をするかい。如何だよ。」

（三）

折しも此垣の外に佇むは差配の吉兵衛なり。彼は此家の滌槽の朽れたりとの小言を聞くこと再三に及び、昨夜は特に手嚴しき談判を受けしより、今は棄ても措かれずして實地の撿分に來りけるが、此諍ふ聲を聞付けて、尋常ならずと耳を欹つれば、又例の燒餅喧嘩なるに、次手惡しと姑く騷擾の鎭るを待つなりけり。

やう〳〵彼等の聲は寢みぬ。さては浪風も收りけるかと、吉兵衛は耳を放して、やをら眼を垣の隙より差向けたり。

簾の陰に半身を顯して、淺黄の段染模樣の浴衣に柳條繻子と唐縮緬の袂紗帶を引掛に結びたるが、椽に近く鳶足に坐りて、輪の大いなる天神の髮を傾けつゝ、薄化粧したる顏を庭の方に向けて、媚ある眼角に露を帶びて、其處としも無く打目戍れるは、問詰められて辭の塞りたる妹のお

瀧なり。
之に相對ひたりと謂ふべくもあらず掛離れて、座敷の隅なる簞笥の前に坐して、彼若し此方を向かば唯一睨にせむと待構へたるやうに意氣込むは、其姉なる此家の女房なり。未だ三十には程遠く、圖外の大圓髷は今日を結日と覺しきまでに亂れて、鰹柳條の綿縮羅の浴衣に觀光繻子と唐縮緬の晝夜帶して、長煙管を片手に嚴しく膝を正したり。

妹よりは眉目好く、色も白けれど、彼の如く磨かざれば、世帶染みたる生地のいとゞ見劣はせらるゝなり。前後不覺に内の樣子を窺ふ家主の後より、

「又始りましたな。」

と呼くものあり。彼は慌てゝ振返りつ。

其人は此一軒隣に住める寫字筆耕の鈴森某なり。彼は長き髭を撚りて微笑みつゝ、同じく垣の内を窺へり。

「いやもう外聞の惡い話、他事とは思はれません。」
「店子の恥は則ち大屋さんの恥ですてな。」
「然よ、然よ、この燒餅喧嘩と云ふものは誠に仲裁に入り難いもので。第一諸木樣が了簡違ですわな。」
「然し先生も顏に似合はん色男ですよ。兩手に花は可恐い勢です。やあやあ、お瀧樣は酷く嬌粧こんでゐるぢやありませんか。神樂坂の藝者が待合へ遊びに來たと云ふ恰好だ。彼風は堅氣でないね、惡い事だ。何處でも色町の近所と云ふと、堅氣の娘や、然るべき妻君までが、見やう見眞似で、藝者風の自墮落を意氣と心得て遣るですな。彼も此頃は緋天鵞絨の雪駄…………雪駄ぢやない、あの、それ、安物の、模擬の、上草履が賽錢箱を踏付けたやうな、何とか云ひましたつけ、氣障な、物欲しさうな、改良雪駄さ、あれを引摺りながら、無理に音をさせて、運動に出掛ける姿はありませんな。湯に行けば、毛筋立を鬢の支棒にして、

尻の横手へ帯を垂下げて、赭い額を光らかして、今日は！と挨拶する具合は如何です。あゝ云ふ了簡ですもの、陸な事を爲るものですか。可哀さうに姉さんは好い苦勞をするです。」
恁く言ひつゝ再び内を窺ひて、
「然し何處か男好のする、婀娜ぽい所がありますてなあ。」
「それでも姉樣の方が餘程容色は好うごすになあ。」
「旨味が無い。目鼻立は揃つてますが、唯其だけで、風致が無い。」
「それでも那云ふのは所帶持が良うごすよ。家内は所帶持の良いのでなければ、大分の損と云ふものですわ。」
「所帶持の良いのと來ると、男は餘り好きませんからな。」
「此のは良い妻君ですがな。那云ふのを棄てゝ、蓮葉な那麽ものに手を出すとは、諸木樣も如何いふ了簡ですかさ。」
「そりや浮氣も可いです。可いけれども、現在自己の女房の妹、それを

姉の鼻前で摘むのは、諸木樣も酷い。鼻前でなくても、嚊の妹は酷い。能く妻君がそれでも默つて居るですな。性が善いからね。」

「何爲、默つてばかり居るのでもなからうけれど、諸木さんが出さない氣、彼が出ない氣と云ふのだから、可哀さうに妻君も爲方が無いので、それだから時々恁云ふことが始ります。」

「諸木樣が又可恐い顏をして、馬鹿に然つべらしくして居ながら、何と言つて彼を口說いたかと想ふと可笑くなるぢやありませんか。難しい顏をしてゐるものほど、心は軟だと云ふが、なるほど那樣ものかも知れんですね。」

家主は額を皺めて、

「あの女が錢を費ひます、此家には誠に不爲な奴です。」

「へえゝ、那樣に費ひますかな。なるほど妻君よりは奇麗にして居ますな。」

「一寸積つた所で、湯は毎日、髪結錢、紅白粉から、食雜用は申すに及ばず、やあ髪の物だ、着る物だ、何だ彼だと、妙齡の娘です、いとゞ掛かる所へ持つて來て、あの風でせうが、目に見えずに幾程入る事だか知れません。そりや極つて身錢の筈は無いから、諸木樣の懷が皆痛むでせう。」

「こりや理窟ですな。」

「其所ですて。恁云つちや何だけれど、今迄は諸木樣もお樂でした。諸拂も奇麗に、御夫婦約しく、晩に一合ぐらゐの事で、それ、何の、歌にもある、樂しさは夕顏棚の此方より……………ですか。」

「成程。」

「此方より…………此方にて…………はて、何とか言ひましたつけ、つい下の句は覺えませんが、何でも夫婦裸になつて睦しく涼むといふ歌でした。」

「それは怪しからん歌ですな。」

吉兵衛は眞顔になりて、

「何の、怪しからん事があるものですか、夫婦貧しいながら睦しく夕顔棚の下で暮すと云ふのですな。」

「成程。」

「まづ然云ふ譯のものでせう。それに貴方な、…………忘れて了つた、何のお話をましたつけな。」

「然やうさね、私も一寸忘れました。」

「あゝ、家賃の滯つたお話！」

鈴森は礑と額を拊ちて、

「こりや耳が痛い！」

「何爲、貴方の事ぢやありませんが、然う、然う、誠に約しく…………。」

「然う、然う、諸拂も奇麗に。」

「睦しく、躰裁好く暮して御在なすつたのだ。それが、如何でせう。あ

の女が來てから、四月……………もう五月にもなりませうか、彼奴が入込んでからは、諸拂も惡いやうです。第一家賃が滯ります。無かつた事、今迄はね。もう二月滯つて居ます。」

何ぞ知らむ鈴森は之に加ふるに二箇月を以てせるものなれば、有繋に赧然として汗顏の至に堪へざりけむ、正しく家主を見るに忍びずして、

「然うですかな。」と言ひつゝ時ならぬに又垣の內を覗きつ。

吉兵衞は然りとも心着かざれば、仍其言はむと思ふ所を無遠慮に陳べたり。

「一月だとて滯つた事の無い家、それが二月も滯らして、段々と厚皮しくなつて、辨疏が上手になつて、何も恬もなりはしません。それが何だと云ふと、本は皆那の女から起つた事。私に取つても彼奴は仇敵だ。同居人であつて見れば、店立を吃はせる譯にも行かず、然うかと云つて打遣つて措けば、段々滯るばかり、本當にもう憎い奴だつちやありません。

而して、寄來す物も寄來さないで、滌槽が朽つたの、塀が壞れたのと、馬鹿々々しい何の事だ。見には來たのだけれど、見るがものは無い、陸な陸家賃も拂ひもしないで…………。えゝ、見ずに還ると爲やう。然ようなら、又。」

吉兵衞は色を作して遽に立去りぬ。呆れたる鈴森は彼の癖なる步風の浮きつ沈みつするが如き後影を見送りて、

「實に變物だよ！」

旋て彼も此を立離れんとする時、聲は忽ち起りぬ。

「諦められませんよ！」

凜然として言放つは妹の聲音なり。姉のは細く銳く、然れど極めて低きは、四隣に憚るなるべし。

「何とお言ひだ、もう一遍言つて御覽！」

彼は慌忙しく垣間見つ。然れども姉は一膝進めしばかりにて、敢て煙管

の筈の揚りしにもあらざるなり。

「私ばかりが惡いんぢやありません、兄樣だつて…………。」

「あゝ兄樣が如何したえ。」

「もう可くつてよ。」

「可かないよ、些も可かないよ。もう〳〵今までは怺へてゐたけれど、今日と云ふ今日は私は棄てちや措かれないから、さあ、出て行つておくれ。出ておいで、お出、お出、お前のやうな不貞腐れた者は家には舍かれないから、出ておくれ。何だえ、泣いたつて可恐いものか。何とお言ひだ――此は兄樣の家だ？ 可厭らしい！ 好い加減にしておくれよ。二言目には兄樣、兄樣、兄樣！ 飛だ兄樣が有つたものだ。一層の事に旦那とお言ひな。誰の家であらうとも、お前は私の妹だよ、旦那のお妾ぢやないよ。私の妹なら私が舍いたのだ。私が舍いたのだから、不都合があるから私が出すのには仔細はないぢやないか。何も兄樣の家も旦那に聞くも

要つたものか。さあ、出ておくれ、お前のやうなものは姉さんの家には舎けないと言ふのに。」

お瀧は曾て今日のやうに激しく姉さんの怒に遭ひしことあらざりければ、毎は氣丈に言爭ひて負けざれども、尋常ならぬ姉の險相に恐怖をなして、身も竦むやうに物の凄さに堪へかねつゝ、衝と身を起すと見えたりしが、忽ち玄關へ駈出てゝ、倉皇と格子を引啓け、例の雪駄を鳴して、外方に飛出てたり。

迹に姉は長烟管を取直して、簞笥の上なるお瀧の針箱を力任せに發矢と擲てり。羅宇は脆くも二斷に折れしが、鴈首の方は遙に飛びて、承塵なる墨書の山水の額を衝破りぬ。

若しや思逼りて、入水などするにや、と鈴森は我を忘れて井戸在る方へ走り行けば、お瀧は無難に其所を過ぎて、長屋門の方へ走れり。さては心安しと見送る間に、彼は稍步を緩めつゝ門を出てぬ。何處へ行くにや

あらむ。

（三十一年一月）

寒牡丹

（一）　雪中の狼藉

冬の日は既に暮れて、嚴寒膚を劈く華氏の十九度、街燈の光は黯く狹霧立罩めて、仰げば落々たる星影冱えたり。地は大雪に蔽はれ、雪は敷石の如く蹈固められて、唯時にトロイカと稱ふる乘合橇の往來を見る片側町の簷下に、客待の馭者が兩箇して胴顫をしながら、

甲「えゝ、かう、滅法寒いぢやねえか。是ぢや全く方返しが付かねえや。」

乙「ところが、這麼寒い晩には懷合の煖けえ手合が飲みに出掛けたがる奴よ、そこが此方輩の着目なんだ。樂をして居ちや錢は取れねえとよ。」

甲「へん、死んだ親父か宜く申しますだらう。」

乙「違無え。」

と絶えず足蹈をして幾分の寒さを凌いで居ると、忽ち、

「馭者！」　と呼ぶ聲。

「おゝ、お客だ。」　と彼等は勇を作して、トロイカの馭者臺に飛乘るまゝ聲せし方に馬を追へば、客は毛皮の外套に同じ帽子を冠つた三人連の紳士、之を載せて箭の如く奔去つた迹は、寂々寥々たる白妙の砂漠を見るばかり。

抑も此町たるや、露西亞の都聖彼得堡市の場末、一面には古色蒼然たる人家立續き、對面は六尺許の塀圍をした野廣い畑になつて、家々の道に臨む小窓は防寒の爲二重造にして、其の間に盆栽などを並べ、内には白い窓帷を引いてある。いづれも仕舞屋で、如何なる種類の者が住へるかと謂へば、小金持、後家、恩給を受る者等が寄合つて、質素に暮して居るのであるから、極めて陰氣な町通。けれども道路は廣く、空氣の流通は好し、日映は好し、前は畑て、遠く木立の空に接する眺望も好し、閑

人達の事なれば食後には窓帷を掲げて外を眺めて樂むのを常とする。例に因つて今が彼等の眺むる時刻、吹くともなしに寂しい夜風は窓に訪れて、トロイカの馬鈴が何とも謂れぬ哀切の遠音を送つて、胸の遥るやうな感が有る時、響は次第に近いて、旋て橇の雪を軋る響が聞ゆれば、二臺三臺と續いて窓下を馳せて行く。中に六人乘と謂ふのには、男女の笑聲がして、唱ふ、騒ぐ、大陽氣に飛して行くのは、陸軍士官が敵娼を伴れて飮みに行くので。其が通り過ぐれば、窓に倚つて居た者は、

「あゝ、又（紅茶屋）か。」

と咳きながら内に入つて了つた。

扨其の（紅茶屋）と謂ふのは、此の町盡頭に在つて元來は居酒屋、都へ通ふ車力、人足などの立場であつたのが、段々と爲出す中に何時面目を改めて、當今では天晴流行の料理屋に成つたのである。其の繁昌を來したのは、此の近傍に一時決闘の行はれた事が有つた爲に、おのづと土地

の名が揚つた所から、伴れて（紅茶屋）なる者も知らるゝやうに成つたとの說が有る。

其昔は見る影も無き居酒屋であつたのが、今日の（紅茶屋）は儼然たる老舖となつて、割烹は勿論座敷から給仕に至る迄萬端達いたものであるから、聖彼得堡の紳士社會は此を二無き者にして贔負にする。從つて客種は中以上上流に限られて居る有樣、之に反して此に出入る婦人と謂へば娼妓のみである。

扨此夜の寒氣は格別で、然云ふ晩には例のトロイカを飛して飲みに來る紳士が多い、座敷は皆塞つて、燈影衣香の間に笑語の聲は湧くが如く、興酣に、樂を極めざる處も無かつたが、十時過より寒威の俄に募つた爲に各宴を撤して、十二時頃には客は大方起つた了つた。

然るに、此時非常の速力を以て、人跡絕えたる雪の沙漠の中を眞一文字に飛し來る一臺のトロイカがある。年若き陸軍士官が三人乘合つて居る

が、いづれも泥醉の體。
甲「こら、馭者。馬が疲れたやうぢやから、少し休ませい。而して其から壯に（紅茶屋）へ、突貫するのじや、可いか。」
橇は暫く其處に駐る。
甲「あゝ、愉快、愉快、大いに愉快じや。」
乙「愉快な事は無い。彼奴等は何爲吾輩と一緒に來んのだらう。失敬ではないか。平生の愛顧に酬ゆる道を知らんと云ふのは、實に怪しからん話だ。惡むべき者だ。」
此人は呉城中尉と云ふ。
丙「毎も來るのに、今夜に限つて來んと謂ふのは何云ふ譯か。」
甲「鞠江の曰くじや、僕と呉城が大醉して居るから、それが可厭ぢやから來ん、と言うたぞ。」
乙「何！　吾輩が大醉して居る？　大いに飲めば大いに醉ふのは當然だ。

醉ふ爲に飲んだのではないか。大醉して居るのが奈何したのだ。大醉して居るのが彼等に奈何あるのだ。利いた風な事を言ふ奴、吳城中尉たる者が自ら好んで醉うたのだ、匹婦の分在として譫語を吐くな、おのれ！」

甲「まあ可いさ。それで僕は彼に然う言うて遣つた。貴樣達が來んなら來んでも、（紅茶屋）の酒は旨いのじや。」

吳「勿論！」

甲「貴樣達ばかりが女と思ふな。」

吳「勿論！」

甲「と云うた語が識を成して、今來る途で彼奴等より數等美なる婦人に會うたぞ。」

吳「うむ、そりや妙だ。其婦人を拉して行かう。」

丙「もう十二時ではないか、今頃此の寂しい處を女が通るものか。早く行くさ。」

甲「いんや、通る、通る。僕の先に見た美人は此方へ來るのぢやから、最少し待つて居る内に必ず來る。」

乙「面白い。是非其を招待して（紅茶屋）へ行かう。」

此中に醉の最も少いのは丙なる靈象府中尉、試に席を起つて舊來し道を窺へば、果せる哉、白妙の中に一點黑き人影。

丙「おゝ、那か。成程、女のやうじやのう。」

甲「來たか。おゝ、那じや〳〵。」

乙「來た？　天の賜だ。」

良有つて間近に顯れたる婦人の姿は、次第に此方を指して來る。待構へたる呉城中尉は橇を飛出て、踉きながら婦人の傍に走り寄つた。微黯い街燈の光であるから、すつぽり防寒具を着込んだ人の顏容は判然せぬが、容易に年若き婦人とは知られた。

乙「いや　途中甚だ失禮でありますが、此のお寒いに夜中何方へお越で。

お手間は取せません、是非何か煖い物でも差上げたいと存じて、那ヘトロイカを用意致まして置きました、些と其處までお出を願ひたい。」

婦人の驚愕は一方ならぬ。此分では如何なる狼藉に遭はうも知れぬが、四邊を見れば人影は無し、家々の窓は皆閉ぢて一點の燈の洩るゝ處も無い。こりや奈何したら可からう、と迯身になつて戰々顫ひながら、

「御常談を有仰つては困ります。」

と言ふも苦しき絕體絕命。此の樣子を見て駈來つたのは大醉の澤毛野中尉、

「いや、御遠慮無くどうぞ那へ。さあ、まあ〳〵那へ。」

と手を取らんとする。

其處へ又立顯れたのは靈象府である。是とても二人ほどは醉うて居らぬが、十分に酒氣は帶びて居る。大の男が三人而も各蹌踉に吃醉つて居て、怪しからぬ振舞にも及ばんと爲るのであるから、婦人は毒蛇の腮にも臨

む心地。

「皆さん、此をお通し下さいまし。然も無いと私は大聲を立てますが、宜うございますか。」

淨「那樣家暮を云ふものではありません。奈何じや、諸君、早うお伴れ申さうではないか。」

梟「其が可からう。」

と言ふより早く、誰が眞先に手出を爲たとも無く、矢庭に婦人の雨脚を抄つて、體の浮く所を一度に扛擧げた三人は、恰も蒼鷹の鳩を搏ちたる勢、難無く手籠にしてトロイカの中に推込み、頭から熊の敷皮を打被けると云ふ始末。婦人は始終命限に抵抗したのであるが、男三人の力盡、聲限に叫びもしたが、寂しき町の氷る眞夜中。

「馭者、遣れ。」　と云ふ聲の下に三頭の馬は足搔を揃へて、疾風の如く奔つた。

二分間許にして（紅茶屋）の前に着けば、三人は婦人を中に取籠めて、身動も爲せず、聲をも出させぬやうにして、奧まりたる一室に引擦り込んで了つた。女と云へば娼妓などよりは來ぬ家の事であるから、客が醉つて恁云ふ惡作劇をして、女が泣き騒ぐなどゝ云ふ事は往々有るから、給仕も目慣れて居て別に怪むのでもない、苦笑をしながら室の入口に控へて居ると、

澤「こら、一時間ほど經つたら何か見繕うて持て來い。」

「畏りました。」と給仕は閾を立てる、ぴんと內から錠を下して、澤毛野は鍵をポケットに入れた。

婦人は外套を着たまゝ長椅子の隅に身を竦めて、顏色を眞蒼にして顫へて居る。三人は面を見合せた。

（二）　不幸の盃

此夜は滿月で、九時頃より晝を欺くばかりの月色、狹霧は霽渡りて夢の覺めたる如く、道の雪は玲瓏と耀いて、麗しき夜は唯寒く靜に更け行くのみ。時に此の町盡頭の只有る家の戶が啓いて顯れたのは一箇の老人。幾世經ぬらんと見ゆる毛皮の外套を絡ひ、帽子を目深に冠りて、戶口を出ると、其處に佇んで、頻に往來を眺め、或は耳を欹てゝ、何やら心を配る體であつたが、

「奈何したと云ふのぢやらう、もう還りさうなものぢやに、此の樣に晚いとは、吁、氣懸な事じや。」

と溜息吐きながら又内に入つたが、其室の煖爐の傍には見るも可傷く病勞れた妻が椅子に懸つて居る。此婦人は十數年來のリウマチズムで全身不隨、骨と皮ばかりに瘦衰へた體を椅子に結付けてある。夫の悄然と入

つて來るのを見て、

婆「未だ見えませんか。那の子に限つては何が日にも這麼に晩くまで還らない事は有りませんのに、途中で間違でも有つたのでは御座いませんかねえ。」

老人は含默で室内を歩きながら頻に考へて居る。

婆「不如誰かを倉府の奥樣の所へ見せにお遣りなさいましな。」

老「うむ、然うだのう。」

と急いで臺所へ行くと、庖人と給仕も晩餐の支度を爲たまゝて、令孃の歸來を待侘びて居る處。直に一人を倉府夫人の許へ走らせて、老人は居間に復つて來たが、益す不安心の樣子で瞿々して居る。

婆「貴方、まあ然う氣を揉まずに、何ぞ其處に在る物でも召上りましな。」

と病人に慰められる始末。疾に晩餐の膳立が出來て、兩親は先から娘の歸來を待つのである。

老「いや、俺は何も欲うないが、お前奈何じや。」
母親は猶更欲くはない。話は是で切れて、互に無言の中に心を傷めて居ると、程無く臺所に聞ゆる話聲、使が返つたな、と老人は慌てゝ行かうとする出會頭、直と入つて來た給仕の顔を見るより、
老「奈何じや〳〵、娘は居たか。」
給「いゝえ、奥様の有仰いますには、今日はお孃様はお見えなさいません。」
「何、娘は倉府さんへは行かん?! それぢや何處へ行つたのじや。」
と老人は顔色を變へて、病人の傍に寄つたが、何と言出づる語も無く、唯其手を把つて途方に昧れて居た。病人は故と笑顔作つて、然も心安げに、
「貴方、まあ那様に心配なさる事は御座いませんよ。屹度ピアノのお師匠さんへ行つたのだらうと思ひます。然すれば、もう還りませうから、御酒でも一盞上つて被在いまし。」

室の正面に掛れる時計は此時十時を打つ。

老「もう十時じや。這麼に晩うまでピヤノの師匠の處に居る筈は無い。こりや何か間違が有つたのじや。」

と情無さうに妻の顔を眺むれば、然らぬだに心弱き病人は脫然氣を落して、

「蕾叉や！」　と娘の名を呼んで泣俯した。

「貴方、奈何したのでせう、蕾叉は死にでも爲だのぢやありませんか。若も那樣事でも有つたら、私は奈何しませう。丹精に丹精して育て上げた大事の〳〵獨子、吁、然う念ふほど胸が張裂けるやうで…………。」

と母は涙を搾つて悲歎に沈む。

「いや、まさか那樣事も有るまいけれど、今時分まで還らんと云ふは、何分氣懸な事じや。」

と父親も口には言はねど心中には、千萬無量の取越苦勞

「いゝえ、今迄還らない所を見ると、他の身に凶事が有つたに違有りませ ん。貴方、早く聖像の前に御燈を供げて下さいまし。私達が婚禮に用ゐた那の蠟燭は、病氣災難等の有る時神に御救を願ふには、那を點して祈禱を爲るが何よりと云ひますから、然う致しませう。もう、此上は神の御救を願ふより外は有りません。早く御蠟を、」

と言ふので、老人は次の間から聖像と件の蠟燭とを持來りて、テエブルの上に押直し、火を點して、恭しく之に向ひ、手を以て胸に十字を畫きつゝ三度禮拜して後、妻の傍に來て、互に手を執つて一向專念に祈禱をした。

折から聞ゆるチヤアチの鐘は十時半。益冴ゆる月の光は窓帷を洩れて差入る處、煖爐の火は衰へて碎然と、石炭の燃え落つる音、蠟燭の火影は陰陰として老夫婦の愁深き面を照す。

父は突然顔を擧げて、

「はて、足音がするやうぢやが。」

「何、足音が。」と母は伸上つて耳を澄したが、何も聞えぬ。

母「然うぢや御座いませんよ。」

父「いや、少し待て、よ。」と、猶聞澄して居れば、歴々響く人の足音、次第に近くと思ふ間に、ばた／＼と來て門口に止つた。母親は吾を忘れて、

「もし、那の子のやうです。」

「然じや／＼。」と父は飛出して戸を開けば、疑も無く娘の蕾叉。

父「蕾叉か！」

蕾「父様！」

父「おう、蕾叉が還つたぞ！」

と居間の方へ聲を掛ける隙に、蕾叉は直と通つて、母の顔を見ると等しく其膝に取付いて、わつと泣出した。

母「おゝ、蕾叉！　お前、まあ奈何お爲だ。

蕾「母樣！」　と更に泣頽れて居る所に入つて來た父親は、無事に還つた娘の姿を見れば、又有繫に家を忘れた不貞の疑無き能はずして、

「蕾叉、何處へ行つたのじや。」

と苦い顏をして言放つ。母親は覺えず利かぬ手を動して娘の肩に掛けて泣入る顏を覗きながら、

「お前、今頃まで何處へ行つて居たのだえ。父樣も私も甚麼に心配したか知れはしないよ。」

父「さあ、何處へ行つたのじや、早う言はんか。」

其時蕾叉は容を正して、

「私は何處へ行つたのですか、而して奈何したのですか、實に申しやうも無い不幸に遭ひました。」

と外套を脱ぎ、手袋を拔いて、やをら椅子に掛けたと見ると、顏色は灰

の如く、髪は散々に亂れて、手の甲には幾處も血滲んだ搔傷、中には大く赤痣に成つた處も有る。

蕾「私が今出て來た處は何處だか存じません。又那樣處へ誰に連れられて行つたか、それも存じません。私は、然し、此上も無い名譽を傷けられて、父樣や、母樣に合す顔が御座いません。孱弱い女の身の悔しさに、謂ふに謂はれない無禮を受けました。」

と身を顫して泣立てた。之を聞いた母樣は劇しく心を動して、吽と云ふと絶入した。娘は見るより氣附藥を與へて介抱すると、頓て目を開くや否や蕾又を引寄せて、物をも言はず唯其顔に涙を濺ぐのみ。是まで熟と考へて居た父親は、

「本當の事を言へ。親を詐ると内には置かんぞ。」

蕾「神に誓ひまする。神に誓つて屹と此復讐を爲なければなりません。」

「おゝ、善し。それで善し。さあ、話を爲て聞かせなさい。」

と娘を中に兩親は左右に控へた。蕾叉はやう／＼氣を鎭めて、

「今日はピアノの稽古日で參りました所、先生が他出なすつたものですから、お歸來を待つて居た爲に稽古が晩く四時から始りまして、了つた頃には日が暮れましたので、誰かに送らせやうと有仰つたのでしたけれど、遠方ではなし、慣れた道の事ですから、お斷申して、急いで歸つて參りますと、我家から半町ばかりの處で、通過ぎたトロイカが待つて居まして、私を見ると三人の男が出て來て、一人の者が、一緒に來いなどゝ常談を言ひますから、二言三言應つて居ますと、三人とも可恐く醉つて居るので、理も非も無く、哄と言ふと私を手取り足取り橇の中へ扛込んで、聲を出さうにも熊の皮に裹まれて、行先も判らず載せられて行つたのは、或る立派な家の座敷。其三人の者は近衛士官で、名は知りませんけれど三人が三人とも私は顏は能く見覺えて居ます。死ぬまで忘れられない程見覺えて居ます。憎いのは其の士官達、私の驚いて騷ぐのを面白半分の

玩弄物にして、欲いほどの贈物を爲るから意に從への、貨が好ければ貨を遣らうのと、テエブルの上に紙入の紙幣や銀貨を打覆けて、可厭がるものを引寄せたり、取附いたり、逃げやうと爲れば押へられ、聲を立てても來る者は無し、其時闥を叩く音がして、酒を持つて來たのでしたから、其口から逃げやうとした所が、給仕に突飛されて、猶且出ることは出來ず、持つて來た酒はシャンパンで、其を是非飲めと、三人してもう煩く勸めますから、私は突付けられたコップを取つて其處へ撲き付けて、其の破片を又一人の顏に打付けて遣りました。而すると、其男が起上つて、もう好い加減に爲んと何を爲るか知れんから、早く始末を爲たが可からうと言ふと、皆惣立になつて、隣の眞闇な室へ無理無體に私を推籠めました。

私は其の時死んでも可い氣になつて手向ひを志ましたけれど、到頭室の隅の方へ推付けられて、二人の者は出て行くと、唱ふやら、躍るやら、

非常な騒をして、私が聲を立てるのを聞せないやうに爲るのでした。泣いても叫んでも來る者は無し、逃げやうにも逃げられず、悔しい悲いで取逆上せて、何が何だか夢中でしたが、殘念なのは女の効無さに、其奴の爲に名譽を傷けられて了ひました。體は然して汚されましたけれど、此の精神は、父樣、母樣、些も穢れずに潔白で居ますから、どうぞ勘忍して下さいまし。」

と齒咬を作して涙を流せば、聽居る父は己が身を斫らるゝよりも辛き思、拳を握り、脣を顫せて、

「其奴の顏は覺えて居るの？」

萱「黑暗々の事で判りません、でしたけれど…………。」

父「何、判らん？　見覺は無いのか！」

萱「其奴の顏こそ判りませんが、三人の顏は好く知つて居りますから、私は必ず見出します。」

父は仰いで太息したが、さて聲を和げて、

「而してお前は其處から奈何して出て來たのじや。」

董「外に居た二人の者が急に闥を啓けて、其奴を呼んだものですから………。」

父「名を呼んだか。」

董「いゝえ、早く來い、と二聲ばかり呼びました、それで、其奴は出て行きましたから、直に私も其處を出ますと、三人の者が立談をして居ましたが、外の方で頻に警察官と云ふ聲がして囂々して居ました。私が出て參ると三人の者が傍に寄つて來て、早く此を出て行けと申して、外套を着せたり、手袋を持つて來たりして、一人がポッケットから短銃を出して、若し此で聲を立てたら唯一擊に爲ると脅迫ました。私は默つて戶外の方へ行かうと爲ると、又引扯めて、其處まで送らうと言ふので。其時はもう三人とも醉は醒めて居て、心苦しさうな顏色を爲て居ました。トロイカに乘れと言ひますから、又三人と一緒に乘りますと、始のやうに

熊の皮で何も見えないやうに私を裹んで、五分間ほど驅けさせたかと思ふと馬を駐めて、其處で御しました――丁度那の堀割の際で。父樣、私は自分の不束から身を汚しまして、何とも申譯は御座いませんけれど、自ら犯した罪ではないのですから、どうぞ御勘辨なすつて、娘の蕾叉に生恥を掻せた復讐をなすつて下さいまし。私は此の復讐を爲なければ生きては居りません、又此の復讐を爲ない内は私は決して死にませんから！」

父「おゝ、好う言うた！　此父とても其通じや。其の無禮者を引捉へて肚の癒るほど仕返を爲んぢや、死なうとて死なるゝか。」

「御苦勞を掛けまして、父樣、誠に濟みません。」

と蕾叉は叉もや聲を放つて哭いた。重病の母は始終の物語を聽いて、唯涙に昧れて居たが、此時暴に氣色變りて、容易ならず見えたので、父と娘とは大きに驚き、直樣ベットに移して應急の手宛を施し、醫師を迎へ

て、其夜は寢ずの看護。親としては娘の淑德を傷けられ、夫としては妻の危篤に際すと謂ふ、一夜に降つて湧いたる兩樣の災難。老人の心痛は幾と狂氣に及ばんとするばかり。

十數年來のリウマチズムの爲疲れに疲らされたる母親の體は殆ど朽木と一般で、唯僅に生きてゐると云ふ形を保つに過ぎざるのであつた。其處へ家の寶とも身の樂とも頼み切つた愛娘が不慮の殃、世に出ることも克はぬ疵物に成つたと聞いた失望は、然らぬだに脆かる朽木に手強き斧の一撃を與へて、劇變の容體と成つた。

夫たる老人は三十年間も陸軍の醫官を勤めた人であるから、醫師を招いて駭かさるゝ迄も無く、最早病妻の末期は此夜の内を出でずと曉つたのであるが、果せる哉、東雲の空白く窓に映ずる頃、病人は朽木の碎けて風に散る如く何の苦も無く往生した。

夢とも現とも分らぬ娘の蕾叉は涙も出でず其の枕邊に頽折れて、重なる

不幸に失心の體。老人は昨夜を歎き、今朝を悲む中にも、明日より親子が爲すべき事の樂からざる前途を念ひなどして、得堪へぬ愁に沈んで居た。

扨恁て有るべきにあらざれば、式の如く葬儀を執行ひて、數日の後には親屬朋友等を招いて酒饌を出す。露西亞の風習として士分の家にては一種の苦味を帶びたる氷酒を用ゐるのが此日の禮で、之を（不幸の盃）と稱へる。

老人は右の（不幸の盃）を擧げて、來客に對して一言を述べた。

「今日御來會下されました皆樣に向つて申上げまする、御承知の如く私の家内は十年越の長病、なれども猶若干の餘命を保ち、程無く初孫の顏を見る樂も有つたので御座ります。然るに突然にも此度の不幸、私は愚痴を申すのでは御座りませんが、こりや決して病の爲に斃れたのでもなく、又彼の命數の盡きたのでもないと信ずるので御座りまする。既に

世間へも薄々は知れ亘りました娘蕾叉が身の上の災難、親たるものゝ情として、之を苦に病みました餘に、敢無く命を殞しましたる次第で、其喪に服し居りまする我々親子の者は、尋常一様に妻を失ひ、母を失ひました愁傷の外に、忍ぶ可からざる苦痛を感じまするので御座ります。然しながら今日に於る梶尾家の大不幸も、天に居りまする蕾叉が母の誠と、又其誠を鑒みたまふ上帝の公平なる裁判とを以て、必ず釋さるゝ日が有らうと信じて疑ひませぬ。何卒皆様方にも亡き靈の此世に遺せし念を憫み、又不幸に不幸を重ぬる親子の心を御推察ありまして、一日も早く吾が梶尾家の此の厄運の中より救れまするやう、倶共に御祈願あらんことを冀ひまする。」

此演説の訖るを俟つて、客は同音に悲き讃美歌を三度繰返して謳つた。

老人が自ら言ひし如く、蕾叉の遭難一件は既に洩れて近所の取沙汰と成つたのであるが、其は單風聞と謂ふに止つて、悉い顛末は知れぬのであ

つた。然るに（不幸の盃）の日から二日過ぎて其事情が始めて世間に傳播した、と謂ふのは、當地の警察署が被害者の手から告訴狀を受取つたのである。親戚知人は皆眉を顰めて、事も有らうに係る事を告訴するとは何たる意であらう、闇黑の恥を明白へ出して、娘が彌よ疵物に成るとは氣が着かぬか。然りとは老人の分別とも覺えぬ無謀、と中には訪來て深切に言ふ者も尠からず。

然るに老人は如何にも覺悟の體で、

「私とても決して娘の不名譽を吹聽致したうは御座りませんが、何分にも既に世間に知れ亘つた事實と成つて見れば、甚麼に此方が匿さうとしたとて匿さるゝものではない。又告訴致したのは聊か思ふ子細も有るので、今日の所我儕親子は彼の不名譽に就て恥づると申すよりは、其の以上の事を實は考へて居りまするで。」

と云ふ挨拶、娘の蕾又とても其言の如く、少も恥づる氣色は無くて、平

常のやうに外出をする、而して名譽を傷けられた貌も爲ずに平然として往來するから、通り過る者は謂ふに及ばず、到る處そこらの窓から首が出て「他が然うだ。」と目引袖引好い見物にされる。中には其の鐵面皮を憎んで惡口する者も有る。如何に覺悟は有りと謂ひながら、娘心に其の辛さは一通りでない、後には可成く引籠つて居るやうに爲たが、然し日に一度づゝは其中でも必ず散步に出る。父親と手を携へて、貴族の多く往復する町、近衞士官の聚る公園、と專ら目を着けて徘徊するのである。親子の者が不名譽に不名譽を重ねて告訴したのも、群集の中に忍んで生恥を曝すのも、賴むところは復讐の一事、其の一事の爲には二人ともに身を忘るゝのであつた。

話次分頭爰に皇后陛下の名譽女官として貴婦人社會に隆々の盛名を負ひ、夙に淑德の聞え高き呉城伯爵夫人と云ふは、若年にして殿を失ひしが、志操高く品行端正にして、位に矜らず、富に傲らず、頗る慈善を喜んで、

弱きを助け、貧きを憐むので、上下ともに敬慕して、此夫人の名を聞けば、實に草木も靡くばかり。

切慈善を施すと云ふ中にも、呉城夫人ならでは能はざる事が有る、設へば政府に向つて其身の不幸を歎願して聽れざる者、彼等は其恨を抱いて皆夫人の門に伏して哀を乞ふのである。然る時は訟の筋に因つては直奏して聖斷を仰ぐ。又叡慮を勞すほどの事でなければ、財を吝まずして飽くまで彼等の爲に盡して遣る。

係る次第であるから、夫人の門前は日毎に市を成して、貧き者、病める者、老いたる者、幼き者、憂ふる者、悲む者、八方より集り來て皆濟はるゝ。又一面には上流の交際を控へて居るから、其方の出入も盛なる者で、木曜日を公然の面會日と定めてあるから、此日の如く夫人の邸の賑ふ事は無い。

(三)　背の冷汗

此日は木曜日で、而も呉城邸より遠からぬ佛蘭西大使館に舞踏會の催さるゝと云ふ其夜に相當したのであるから、之に赴く交際社會の花形は皆車を寄せて挨拶をして行く。門前の繁華、客殿の混雜は夥しきもので、伯爵夫人は正面の長椅子に倚つて其の大客を一々引受けて、倦める色も無く八面玲瓏に應答するのである。一時客も減じて、席に在る者約十餘人、其時、

「伯母樣。」と呼掛けたのは夫人の甥なる呉城中尉、當夜醉に乘じて兇行を犯せし其の張本とは誰知る者は無い。

奥「今夜は舞踏會へ御出はないので御座いますか。」

夫「木曜日は私は外出する譯に行かないのですからね、それに今日は非常に勞れて居ますから、何方にしても出られません。」

傍に居た外交官が、

「いや、お察し申しまする、毎日の事で御座いますから定めて御疲勞で御座りませう。然しながら善い事を作つてお勞れ遊ばす、お勞れ遊ばす程善い事を作るので御座りますから、實に這麼お可羨しい事は御座りません。」

之を聞いて夫人は微笑を含み、

「いえ、もう心の中では那も恁もと思ひますけれど、さて實行と申す事は難いもので、自身では十分の力を盡した意でも、其實十分の一の事よりは出來んので御座います。何云ふもので御座いますか、近頃世間が煩くなりましてね、靜な生涯が送つて見たくて成りませんから、暫く此の繁雜な社會から退隱したいと思つて居ります。」

具伯母樣が然云ふ事になつたらば世間の可憐な者は奈何しませうか。此の世の中に拯はるべき者の有らん限は、伯母樣も此の世の中を捨てる事

は出來ません。」

夫人も心には其の如く自ら負ふ所無きにしもあらざるので、有繫に滿足なる面色にて、其事に就いて再び言はずして止んだ。語を次いだのは年紀五十餘の陸軍參謀長。

「此の世の中は捨てたいと觀じたら、實に捨てたい。又捨てられぬと考へたら、到底捨てらるゝもので御座りません。我他ともに力を戮せて之を濟はなければ、滔々相率ゐて社會は日每に退步するやうな有樣が御座いまする。

今朝でありました、私は警視總監の所で怪しからん犯罪の話を聞きました。」

と頗る感じた氣色であるから、如何なる物語を聞せるであらう、と一座固唾を嚥んで居れば、そのまゝ參謀長は默して了つたから、一個の貴婦人は慣れたさうに、

「それは甚麼犯罪なので御座いますか。」
參「さあ、其が些とお話を致し難いのでありますが、文明の今日に於て有得べからざる野蠻、殘刻、鄙劣、…………罪惡中の罪惡とも謂ふべき兇行を肆まにした曲者が有りましたので。」
參「何か盜賊でございまするか。」
と訊ねたのは吳城中尉。
「なか〳〵盜賊如き輕々しいものではありません。」
彼の貴婦人は怺へかねて、
「どうぞ其の御話をお聞せ下さいまし。皆樣も御所望で御座いませう。」
「是非伺ひたいもので。」
「それは面白さうなお話。」 と四方から聲が掛る。參謀長は大きに當惑の體で、
「いや、實は其事件は未だ公にすることは出來んので、警視總監も今朝

始て、私の居りました時、其の報告に接したくらゐでありますから、此でお話を致しては、警察上の秘密を洩す嫌が有りまするて、殘念ながら悉い事は申上げかねる。」

「然やうならば概畧で宜うございますから、どうぞ。」

と彼の貴婦人は飽まで聞かうと爲る。參謀長は益す窮して、

「固より概畧よりは存じませんので、私が其の報告書を讀みまして………………。」

貴「報告書を御覽あそばしたので御座いますか。」

參謀長吽と塞つた。其時一座の客は口を揃へて、警察上の妨害にならざる限の事實を語るやうにと迫りに迫つたので、參謀長も今は遁るゝに路無く、如何にも口は禍の門と頭を搔いて、

「然やうなればお話を致しまするが、幸ひ此席には令孃方の御在が無い……………。」

と座中を見亘す時、呉城伯爵夫人は一言の注意を與へた。
「若しお話が聞苦しいやうで御座いましたら、貴官に御退座を願ひます
から。」
参謀長は之に對して目禮した。一座忽ち粛然として水を打つたるやう。
參「貴婦人方には少く憚るべきお話でありまするが、是は私が面白ずくて
お話を致すのではない、吾が露西亞帝國の體面に關する由々しき一大事、
又社會の風教上忽にならざる事件として、私が大いに心を痛めまする餘、
之を皆様に訴へまするのでありまするから、其の御積でお聽取下さるや
うに。」
と沈痛の語氣を以て說出したので、聽衆は覺えず容を正して、座中益す
鳴を鎮める。
參「三四日前の事、處は場末ではありまするが、此の聖彼得堡の市内、陛
下の御膝下で御座りまするぞ、而も夜の七時頃一人の若き娘が通行の際

トロイカに乘つた三名の陸軍士官に勾引されたのでありまする。」

戞然と墮ちて物の碎ける音に參謀長は物語を中止した。人々も眼を轉じて響せし方を見ると、其處の飾棚に在つた支那製の小形の花瓶が墮ちて粉微塵に壞れたので。奈何して墮ちたのであるか、吳城中尉が墮した。奈何して墮したのであるか、話を聞くと愕然として吾を忘るゝ拍子に、彼の肱が觸れて突落したのである。

「伯母樣、私は大變な粗相を致しました。御大事の品を這麼に致して、何とも相濟みません。」

と中尉は耻入つて詫びる。伯爵夫人は目も掛けずして、

「那樣物は拘ひませんよ。而して其娘は爾後奈何いたしました。」

參謀長は更に打咳いて、

「其娘は其處から彼の（紅茶屋）へ伴れられて、終に謂ふべからざる恥辱を受けたと申す事で、其士官達は甚しく醉つて居りましたさうで、いづ

れ酒の上の事でございませう。呉城中尉、貴方は非常に感動された御様子であるが、是はお互に聞捨にならん事でありまする。吾が名譽ある軍隊の正目を蹂躙し、猶其身は三軍の模範たるべき士官の分として、禽獸に等しき振舞、唯々驚入るの外は無い。箇樣なる不埒者が一人でも吾が軍隊に居ると云ふ事を貴方は相像なさいますか、私には相像することが出來ん。然しながら其の兇行者の堂々たる陸軍士官なることは事實として顯れたのでありまする。」

彼の貴婦人は又々怺へかねて、参謀長の語を遮り、

「爾後其の娘は奈何致しました。」

「其の娘は再び三人の士官が家の近處まで送つて來たさうであります。家では兩親が非常の心配、そこへ娘が還つて來たのは可かつたが、泣く泣く其話を爲ると、病身の母親は甚しく精神を激動させた爲に忽ち容體が變つて、其夜の内に死亡したのでありまする。」

談じて此に到れば滿座驚嘆の聲を發して、誰一人大使館の舞踏を思ふ者も無い。參謀長は自ら語りながら今更に不快の色を作して、茫々然として手を拱いて居た。

「話が餘り小說的で、少しく信じられんやうですね。」

と言ふのは外交官。然思ふ人達は顏を見合せる。

參謀長は威丈高になつて、

「いんや、小說的ではあるが事實でありますよ。現に娘の親が告訴を致ゐました。其のみならず、證人まで出たさうでありまする。」

「證人が出ましたか！」

と訊ぬるのは呉城中尉であつた。

參「それに（紅茶屋）の主人が拘引されたさうでありまする。」

「これは然うで御座いませう。而して彼は悉皆白狀いたしゐましたですか。」

と問ふ者が有つた。

參「彼は其の三名の士官の姓名を知らんと言ふのですが、是は實際知らんらしいので、唯三人の士官が一人の婦人を無理遣に連込んで來たと云ふ事を言つて居る。然しながら、那樣事は能く有るので、別に意にも留めんかつたと言ので。」

伯爵夫人は徐に口を開いて、其の被害者の身分、姓名を訊ねたのである。

參「非職軍醫の娘でありまして、姓は幌尾、蕾叉と申しまする。十八歳に成りまする。」

吳城中尉は胸の中で蕾叉、幌尾と繰返して居た。時に一箇の貴婦人、

「それから奈何なりましたので御座います。」

「さあ、其先は犯罪者を見出す一段でありまするが、是が餘程の一大事に成りませう。」

と參謀長は愁然として容を改めた。屹と其顏を視たる伯爵夫人は稍聲を勵して、

「實に怪しからん話では御座りませんか。早々其の大罪人を逮捕いたさなければ國家の威信に關ります。第一其者は何處の聯隊の制服を着けて居つたので御座います。」

參「甚だ申難いのでありまするが、聞く所に據りますれば、此に呉城伯の着けて居らるゝのと同じであつたさうに御座りまする。」

之を聞くと與に聽衆の眼は矢を射る如く呉城中尉の一身に注いだのであるから、啻に其服の同じきのみならず、其人までも同じき呉城伯は、幾ど目眩きて仆れんとしたのである。冷汗背に瀧を作して、胸も破れぬべき鼓動の未だ鎮らざる時、突然、

「お前さんぢやあるまいの。」

と聲を掛けた者が有る。中尉は戰慄して蒼くなつた。それとも知らず一同は哄然と笑つたので、覺えず息を啣いて、何奴なれば奇怪なる仇口。と其方を見れば、毎に常談を言ふ緣家の老伯爵、はたと顔を見合せたの

て、爲う事無しに苦笑をして、

吳「どうか判りませんよ。」

伯爵夫人は痛く感動したる氣色で、

「其は決して等閑にならん事件で御座います。其の蕾又とか云ふ娘が娼妓同樣の者でなかつたならば、實に此上も無い不幸で、其の胸の內は甚麼であらうか、思遣らるゝては御座いませんか。同じ女の身の私達は之を傍觀して居つては奈何も濟まん事と考へます。」

「然し、或は娼妓同樣の者であるかも知れんて御座いますな。」

と彼の外交官は喙を容れた。

伯「然やうで御座いますから、若し良家の娘であつたならと申すので。」

外「如何にも。」

伯「それで是は大問題で御座います。犯罪者が捕はれた曉に、當局者は何と處置を致すか知れませんが、加害者が貴族である、近衞士官であるふ

らとて、毫釐でも斟酌するやうな迹が有りましたら、其こそ國家に取つて由々しい事に相成りまする。で、此事件に就いては大いに意を用ゐて最も公明正大の處置を望まなければなりませぬ………。」

と伯爵夫人は口を極めて勢の爲に法の枉ぐべからざる旨を主張した。座客は皆耳を傾けて、心々に娘の身の上を憫むと與に、貴族たる近衛士官の如何なる嚴刑に處せらるゝ事ならん、と罪は憎みながらも、又有繫に其の運命を悲むのであつた。

旋て舞踏會の閉かるべき時刻も近けば、客は一人二人と漸く散ずる。呉城中尉も長居は後目痛く、機を見計つて席を起つたが、門外に出て利刀の如き寒風に吹捲らるゝまで、如何にして彼の長き廻階子を下りたのやら、誰が外套を着せてくれたのやら、吾と歩み、吾と着ながら、心痛の餘に其の吾を覺えぬのであつた。發熱したる頭腦の外氣に觸れて冷さるる快さは、恰も醉後の水の如く、中尉は待せし轎にも乘らず家路を辿つ

た。

さて彼は途上思ふやう、

(既に告訴して、警視總監へ報告が廻つたと云ふからには、入相等も書上げられたに違無し。それに近衛士官と云ふ事が始に判つて居るのであるから、或は最早嫌疑者と目指れて居るかも知れぬ。今夜歸ると手が廻つて居つて、直に引立てられるやうな事が有りは爲ぬか。

身は伯爵たり、近衛中尉たる己に對する法律の裁判は如何なる者であらう。又社會の制裁は如何なる者であらう。酒興の上とは謂ひながら立派に罪惡を犯したのであるから、其に對する處刑は辭する所でない、又社會の制裁を受くるのも覺悟の前。唯死しても愧づべきは、身苟くも堂々たる伯爵の顯榮を荷ひ、剰へ至尊の守護たる軍隊の尉官ともありながら己を己とも思へぬ人非人の破廉耻、實に那夜の事は天魔が見入つたと謂ふより外は無い。噫、情無い、淺間しい事を爲た。

決して此罪を免れんと爲るのではない、處刑を懼るゝのではないが、伯爵たり、近衛中尉たるの故を以て、此身を法律の手に瀆させたくない、唯其のみが願だ。然し、今日となつては如何にとも遁るゝ路は無い――！無からう――恐くは有るまい！

若し彼の娘が其實娼妓のやうな者であるなら、之より大なる幸は無い。千萬金を積んでも此の告訴を買つて了ふ、其は容易だ。

先に聞けば、非職軍醫の娘ださうだが、餘り裕でないと見えて、服裝は善くなかつたが、容貌はなか〳〵優れて居つたやうに覺ゆる。靈象府や澤毛野は娼妓とも見做して居つたやうであつたけれど、自分は始から良家の娘と信じて居つた。大聲に叫んだり、涙を流したりして哀を乞ふのも、能く知つて居つたのだ。然るに泥醉して居つたことゝて全く前後の思慮も無く、ちよつ、思へば淺間しいと謂ふよりは無殘な事を爲た！然ほどに泥醉して居つたは居つたが、自分は彼の娘の汚すべからざる若

である事を識らんではなかつたのだ。而して又、彼の娘が自分の無禮を怒つて、力を盡して反抗した險脈は、若し刄物でも持つて居つたならば、必ず自分を刺したらうし、又爲損じたらば自ら刺して、寧ろ潔く死なうと云ふ決心であつた――確に然う見えた。であるから、其の無禮、其の侮辱、其の暴行に對して彼の娘が飽くまで復讐せうと謂ふのは當然、復讐せずんば止まぬのであらう。さて見れば、縱や金力を用ゐらるゝ娘の身分であつても、那の復讐の念は賣るまい。

噫、到底免れられん！　己は今夜で滅びて了ふのだ。もう伯爵でもなければ、近衛中尉でもない。一箇の愧づべき犯罪者！　然う覺悟せんければなるまい。然し、彼の娘は此方の顏を識つて居るであらうか。己を辱しめたのは此の呉城であることを認めて居るのであらうか。當の敵を此方と知つて、此方一人を告訴したのか。それとも、三人の内誰とも知らずに一同を敵手取つたのか。此方と知つて居つても三人とも告訴したで

あらう。」

後から橇を曳いて跟いて來る馭者は時々咳拂をして、己の在るを忘れざらしめんと企つるのであつたが、何處まで來ても殿は召るゝ氣色は無い。寒風の夜道を橇で徒行の御供は大分辛いから、馭者は耐りかねて、今度は大聲に馬を叱り始めた。それで曉つた吳城中尉は直樣橇に乘つて、二人の共犯者を訪はんと爲たが、時計を見ると其の時刻でないから、眞直に自宅へ走らせた。

歸邸して居間に入ると、一通の書狀が來て居る。早速披見すれば、唯一行の文言

（即刻御出ありたし。靈象府より。）　とある。

吳城は其の文を持つたまゝ暫く考へて居たが、從々と出て二階を下りると、急いで玄關へ行くから、家從は驚いて追懸けながら、

「御前には何方へ。」

吳「些と其處まで。」
家「唯今御乘物を。」
吳「いや、步いて行つて來る。」
家「然やうで。」　と云ふ間に飛出して、門を出ると、辻待の橇に乘つて靈象府の邸へ驅着けた。

書齋の內には主の靈象府一人でない、彼の澤毛野中尉も來て居る。二人とも甚だ心配の體で、主は窄袴の衣兜に兩手を差込んで、熟と首を俛れたまゝ室內を彼方此方と頻に步いて居る。澤毛野は煖爐の前の樂椅子に頰杖を拄いて身轉も爲ず思に沈んで居ると云ふ始末。吳城中尉の入つて來たのを見ながら誰も言を掛けぬ。

吳「何で今時分呼びに寄越したのかね。」
靈「大變な事に成つたのじや。」
澤毛野は面を捻向けて、

澤「君は未だ知らんのかい。」

吳「知つて居るさ。」

靈「知つて居るぢやらう。那の娘の親が告訴したと云ふ話ぢやが…………

…………。」

吳「話どころではない、確に告訴した。」

澤「確に告訴した迄知つて居りながら、君は酷く落着いて居るでないか。」

吳「些も落着いては居らんけれど、實は唯今伯母の處で人から聞いたばかりなのだ。」

靈「で、奈何する積なのか。」

吳「何とか工夫して法律の制裁だけは免れたいと考へて居るのだが、計は有るまいか。」

靈「さあ、其じや。」

と靈象府は又首を俛れて彼方此方と歩くばかり。澤毛野に到つては絕望

して顏色無いのである。

吳「告訴したと云ふのだが、三人とも遣られたのか、或は一人だらうか。」

澤「一人と云ふ事はない、無論三人さ。又事實三人が合體して引舁いだのだから、三人とも遣らるゝのは當然であらうでないか。」

吳「そりや當然ぢやない。眞の犯罪者と謂ふのは、手を下した所の僕だ。僕が一切引受けたから、君達は決して心配したまふな。」

靈「何を言ふのかい、罪を貴樣一人に嫁けて、それで恬然として居る我々と思うて居るのか。」

と靈象府が寂しげに苦笑すれば、

澤「僕等の蒼う成つて騷ぐのは、己の罪を免れんが爲でないのだ。貴族の面目と近衞聯隊の名譽とを思うて、一人の傷く者も無くて事を納めたいと願ふのみなのだ。吳城、僕等を見損はんやうに爲い。」

靈「固より死なば諸共じや！　のう、近衞の三人兄弟と謂うたら知らん者

の無い我々じや、貴様が一人名乗つて出たら、法律は或は我々を赦すかも知れん、社會が赦さんじや、社會が！」

澤「社會が赦さん先に僕等の友誼が許さんから、のう。」

と二人は手を拍つて笑つたのである。

呉「いや、然うでない。然うでないよ。君達二人が傷かずに居てくれゝば、又自ら僕が御蔭を蒙る道も有るのだ。」

澤「那様事は有るものかい。」

呉城は大息して、

「此分ぢや事の發覺するのは目前だ。手を束ねて捕れる位なら、潔く自首して出た方が器量が好いな？　これは自首かな。」

澤「自首すると云ふか。」

呉「…………。」

澤「奈何か、澤毛野。」

澤「自首するなら惣出だ。」

嚴「そりや勿論然うじや。」

少頃は三人とも無言であつた。テエブルに片臂置いて、皺めた額を抑へた呉城中尉は、漸く頷きつゝ面を擧げて、

呉「是は奈何だらうか。聞けば那の娘は生活も裕でないさうだから、十分に持参金でも遣る事に志たら、奈何か納るだらうと考へる。で、罪は實際僕が重いのだから、其の方の始末は萬端僕が引承ける。然して贖罪金を出しさへ爲たら、餘は大した刑を受ける事も無からうから、まあ〳〵君達は知らん貌で居てくれ給へ。」

嚴「いや、隊長はのう、嚴刑に行はなければ成らんと言うて居るのじや。」

呉「隊長が?!　ふゝ、餘り他の事は言はれん隊長だ。左に右酒興の上の戯だ、戯だが人の娘を傷けたのだから、其處は大に惡い、惡いから其傷を

癒すに足るべき金を出して罪を謝すのだ。夫で事は濟んで居る、隊長如きが嚴刑も糸瓜も有るものか。」

澤「此で那樣事を言うたつて爲方が無い。左に右に罪を受くるなら三人で受くる、と云ふ事を誓はうてないか。」

靈「そりや善し。」

と起上つた澤毛野、靈象府の二人は、切に辭む吳城中尉に逼つて、遂に誓の握手を行つたのである。席に着くと又暫く無言、良有つて礑と小膝を拍つて吳城中尉、

吳「好い智慧が有る！　靈象府、君に姉上が有る。」

靈「そりや有るわの。」

吳「あの姉上の勢力を用ゐて警視總監を説いてもらふのだ。是は實に名案だ、事が表沙汰に成つて了つては面倒だが、今の內手を廻せば未然に防ぐ事は出來る。それには警視總監を俘にして了ふのだが、彼を俘に爲る

のは君の姉上の力より外は無い。君の姉上なれば縱橫自在なものだ。」
鷲「そりや然うかも知れん。」
澤「うむ、そりや確だ。」
吳「で、奈何も是は事を未然に防ぐに越した策は無いのだ。若し是が表沙汰の騷にても成ると、他の賣色輩が好い事にして、今後甚麼事を言出すか知れんやうになる。然う成つた日には、吾人の名譽などゝ云ふ者は馬前の塵に等きもので、何日何時何處で奈何吹飛されて了ふか知れん。」
鷲「大きに然うじや。」
吳「であるから未然に防ぐ、又未然に防げば輙く防がれるのだ。君は姉上の處へ行つて、警視總監の一件を賴む。それから、澤毛野、君の伯父上は大臣ぢやないか、早く行つて保護を請ひ給へ。君の一身の浮沈に拘る大事だ、延ては大臣の名義にも及ぼす事だから、大臣も必ず棄てゝは措かんに極つて居る。然して一方からは大臣が運動し、一方には警視總監

が手を斂めてくれゝば、此の一件は首尾好く秘密の中に葬られて了ふのだ。」

と呉城中尉は九死の境に一生の血路を開き得たる滿面の喜色。

渾「それから君は又君で呉城伯爵夫人の拯を求め給へ。」

呉「いや、其が可かんのだ。伯母は大の反對な事は既に解つて居る。先之伯母の邸で此話が出た時、非常に激して我々の罪を鳴して居つたから、是は到底手が出せん、からして、僕は贖罪金の方を擔當する。」

渾「然うか。それぢや各手分をして直に運動せんけりや成らん。翌の朝僕は早う姉の處へ行て來う。」

渾「僕も然う爲るわ。」

呉「僕は娘の方の動靜を搜る。」

爰に三人は再び誓の握手を爲て、翌日又聯隊にて會はんと約して立別れた。

（四）掌上の人形

其夜靈象府は幾と寐ずに明して、翌朝姉なる公爵夫人の家を訪れたのである。此の夫人は當時聖彼得堡の上流社會に並ぶ者無き美人で、十年前に阿茅淳公爵と云へる式部官と結婚したのであるが、其の公爵家が又有名の金滿であるから、交際社會に於ける夫人の勢力は目覺しいもので、然るをや飛ぶ鳥も落つるとは謂ふならんと覺えた。

弟の例ならず早朝の來訪に、公爵夫人は何事の起つたのか、と大に驚いて、早速居間に通した。靈象府は心痛の餘夜一夜眠らぬので、顏色憔悴として、元氣沮喪して居る。其と看たる夫人は心中に一層驚いたのである。然りとは知らぬ靈象府は、有繫に何と言出したものかと遲つて居ると、

夫「お前さん那の事件で來たのではありませんか。」

と突如に水破抜れたので、靈象府は覺えず顫ひ上つて、

靈「奈何して其を。」

夫「奈何してゞはありませんよ。それではお前さんが那麼惡戲を爲たのですか、まあ實に怪しからんではありませんか。貴族全體の名譽に關する亂行………、呆れますね、お前さんは！」

と熟と顏を視らるゝ辛さに、靈象府は身を縮めて穴にも入りたき想。

夫「而して他の二人は誰です。」

靈「それは申されませんが、聯隊の名譽にも關する事で、」

夫「知れた事ですとも。」

靈「どうも此儘に爲て置れんのです。就ては我々三人の事は扨置き、貴族の名譽、又聯隊の名譽を思召して、何とか此事が內分に濟みますやう、貴方からお言を警視總監に…………。」

夫「私から警視總監に？　警視總監。」

と思ふ所有り氣に呟いたが
圭「では私の言ふ事なら警視總監は聽くとお思ひなのだね。」
靈象府は姉の顏を見て首肯した。
夫「然すると私から內々に賴むのは、三人の者を見免してくれと言ふのですか。」
靈「いや、然ではないのです。究竟貴方の御考で、箇樣な事が世間に知れては、貴族の面目を汚すから、然る可く斟酌してくれ、と何處までも貴方が有仰る體でお話し下さるやうに願ひたいのですが。」
夫「はあ、解りました。」
と徐に頷いた公爵夫人は、貴族の面目を汚すの一言に尠からず心を動されたのである。
夫「而して其娘と云ふのは何者だね、町人ですか。」
靈「非職軍爵の娘ださうで。」

夫「那様者の娘が奈何して又お前さんの目に着いたのです。餘程の別品ででも在つたのかね。」

靈象府は頭を撫て、

靈「那様事を有仰つては困るです。」

夫「困るなら始から馬鹿な事は爲んが可いのです。」

靈「つい大酔の餘……………、非常に後悔して居るのです。」

夫「知れた事です。而して隊長から何云ふ罰を受けるのか、知つてお在かい。」

靈「噂では爵位を褫奪されるとか申します。」

夫「高が町人の娘一人の爲に、三人の貴族が爵位を褫奪されるのかい、那様無法な事が有りますものか！」

と公爵夫人は冷笑した。

夫「それぢや直に警視總監の所へ行きますから、他の二人の事も聞いて置

なければ成りません。」

靈「其は困るてす、如何なる事が有つても互に名は出さんと云ふ契約を爲たのですから。」

夫「其人達の名ぐらゐは私に判つて居なくては、先方へ行つて話が出來ないぢやありませんか。然し、お前さんが言はなくても、警視總監から言ふでせう。」

靈「總監も我々の名は知らんのです。」

夫「それではお前さんの名も總監は知つては居ないのですか。」

靈「無論知る譯は有りません。」

之を聞くと公爵夫人は長椅子の上に横仆になつて笑ひ立てた。

夫「然すると、私が出掛けて行つてお前さんを告訴するやうなものね。」

靈「謂はゞ那樣ものです。」

夫「まあ何に爲よ、私は是から行つて話して見ませうから、三時頃に又來

て下さい。首尾好く行くやら、行かぬやら、判らないけれど、十中の八九は…………。」

靈「何分宜く願ひます。」

夫「そんなら又後程、三時頃に。」

と夫人は輕く會釋して化粧の間へ入つた。靈象府も直に此を引取つて、契り置きし今日の三時の吉凶をば心の中に書きつゝ家路を辿つた。

程無く阿茅渟公爵夫人の馬車は警視廳の門前に見えた。警視總監緑布將軍は人を退けて、おのれの事務室に夫人を請じて、

總「好うこそ御越下されました。」

と謹んで貴婦人の手に接吻する。

夫「突然で御座いますが、今日出ましたのは、貴方の御力を拜借いたしたい事が御座いまして。」

總「はい、何御用で御座りまするか、品物でも御紛失遊ばさいしたか。」

夫「いえ、然やうな事では御座いません　是非貴方御自身の御力を拝借いたさなければなりません事が御座いますので、十五分間ほど御話が願ひたいので御座いますが、」

總「私で御役に立ちまするならば、甚だ満足で御座りまする。」

夫「それは早速難有う存じます。」

總「して、御用と仰せ遊ばすのは？」

夫人は微に笑を含みて、

夫「何用だと御考へ遊ばします。」

總「どうも其は解りかねますで御座りまする。」

夫「御了解になりますまいでせうか。」

總「解りかねまする。」

夫「實は、此頃噂の高い陸軍士官の勾引一件で御座いますね、」

總「はあ、成程。」

夫「那事に就いてはもう說が區々で、何が事實であるやら少しも解らんので御座いますが、私の聞きました所では、皆話が妄らしくて一つも信じられんので御座います。で、どうか貴方から直々に那の事件の顚末を伺ひたく存じますので御座いますが、」

と徐に說起す公爵夫人、其の脣の丹花に風有りて動くが如く、宛轉たる嬌喉は鳥の初音を弄するに異らず。夙て此の妖艷の容を寤寐に忘れぬ繰布將軍の眼に、何かは耐るべき、今日を心して粧へる公爵夫人の美形、唯恍々惚々として彼有るを見れども、吾有るを覺えず、身は一場の香しき夢に掩れたる心地。

總「それは最易い事で、委細お話を致しますで御座りまする。」

夫「少しも遺漏無くお話し下さいませうか。」

總「報告書に記し在りまする通申上げませう。」

夫「報告書？　何ならば其の報告書を拜見致したう御座いますが、」

總「公文書類は御覧に入れかねまする。」
高笑をしたる公爵夫人は手に持てる柄眼鏡にて總監の腕を輕く拊つて、
夫「其の報告書を讀んだと申す者は大勢居るでは御座いませんか。私にはお見せ下さいません譯が有るので御座いますか。」
總「いや、決して那樣事は、」
夫「無ければ些と內見をお許し下さいまし。」
總「其の事實さへ細密にお話を致しましたらばお宜いでは御座りませんか。それで御免を願ひまする。」
夫「細密にお話し下さいますなら、報告書をお見せ下さいましても、同じ事では御座いませんか。報告書には其の顚末が悉く記してあるので御座いませう。然う致せば私が其を拜見致して居る間に、貴方は御多忙の處、彼方で御遠慮無く御用を遊ばして下さいまし。一擧兩得では御座いませんか。」

と打笑みながらテエブルを拊つて論じ詰める。繰布将軍は其理に服した譯でも何でもないが、唯偏に御意を損ねんことを懼れて、直に報告書を持て來たのである。すると夫人は總監の手を把つて室の外に連出す、連出された總監は難有く夫人の手に接吻して立去つた。彼と云ひ、此と云ひ、其の一擧一動、掌上に人形を弄するにも異らぬ。夫人は獨り嫣然一笑して彼の報告書を手にしたが、旋て一遍讀了ると、

夫「最少し面白からうと想つたら、此の、まあ下らない事。是でも他見を禁ずる秘密書類だらうか、ふゝふゝふゝ。」

其處に在る呼鈴を鳴せば、静に靴の音がして、總監は入つて來た。

總「御覧になりましたか。」

夫「拜見致しました。」

總「如何で御座りまするか。」

夫「充らんものでは御座いませんか。」

と言ひながら持つて居た報告書をテエブルの上に投出した。其處へ吹入る窓の風、三十枚ばかりの書類は鷺の舞立つたるやうに室内に散亂する。慌て悼く總監は、此處に三枚、彼處に五枚、飛さじ、遣らじと犬踞に這廻り、テエブルの下まで撈して、一心不亂に拾ひ聚むる不體裁。額の汗を拭つて漸く座に着けば、夫人は頗る不興の體にて、

夫「這麼話が有るものでせうか？　常談も大概が可いでは御座いませんか。」

總「はあ？　何云ふ譯で御座りまするか。」

と繰布將軍は拾ひ聚めたる書類を一枚々々揃へて居た手を停めて、目を瞪つた。

夫「今日の世の中に這麼事が有るものですか、考へても知れた話では御座いませんか。」

總「然し……………。」

夫「いゝえ。」

總「然し、此の報告書…………。」

夫「いゝえ。」

總「被害者の告訴…………。」

夫「いゝえ。」

總「告訴狀と、それから其の管内の警察署に於て…………。」

夫「いゝえ、いゝえ。」

と夫人は一圖に頭を掉つた。

夫「其の犯罪者と目指れて居るのは誰かと思へば、貴族の花とも謂れる人達…………。」

總「いや、其は未だ花とも蕾とも判らんので御座りまする。」

夫「いえ、花では御座いませんか、近衛の士官と申すからには、實に立派な花で御座いますよ。爵位有り、名譽有り、教育有る人達が何で那樣暴行を働きませう。設へば如何に醉つて居りましたからと謂つて、田舍育

の兵卒ならば卒知らず、到底有るまじき事では御座いませんか。」

と己までも誣ひられたやうに阿茅渟公爵夫人は爰ぞと故と色を作す。

總「いや、其點は私も大きに考へたので御座りまする。仰せの如く有るまじき事、又信ずべからざる事で御座りまするけれども、如何にせん、被害者より告訴も致した事でありまするに因つて…………。」

夫「でありますから、萬一にも其の嫌疑者として、苟くも貴族たる者が法廷に引出されるやうな事が有りましては、犯罪の眞僞は扨置き、貴族の體面を汚すことは非常なので御座いますよ。而も對手と云ふは、取るにも足らん下等な女…………。」

總「いや、然やうでは御座りまするが、其娘の事に就いては十分に取調を致しましたる處、家系は可なり正いので御座りまする。」

夫「家系は奈何ありませうとも、高の知れた非職軍醫か何かの娘では御座いませんか。其等風情が皇室の藩屏たる貴族に對して犯罪呼りを致すと

は、實に沙汰の限であらうと私は考へます。是が不幸にも貴族の敗訴にても成つて御覽遊ばせ、然う先假定致すので御座いますよ、其が例と成つて起りまする弊害は甚麽でございませうか。奴婢のやうな者までが見様見眞似に主人を對手取つて、上を上とも思はんやうな風が行はれましたら、貴族の前途が想遣られます。」

警視總監は打笑つた。

總「そりや餘にお話が進み過ぎまする。」

夫「決して然で御座いません。平生我々貴族社會とは格別御懇親の貴方が、其の貴族の名を嫌疑者の名簿にお記し遊ばすと云ふのは、餘り交誼の無いお話で、又其が社會の風紀に大いなる影響を及ぼすことも御考へ無いやうに存じますが、」

總「段々御心配では御座りまするが、目下取調中で嫌疑者の姓名さへ判らん始末で御座りまするからして…………。」

夫「其處て御座いますの。幸に嫌疑者の名さへ判らんので御座いますから、其內に貴方の御了簡で此の事件が物に成らんやうに何とか爲て戴きたいので御座います。」

總監は頻に髭を拈つて、

總「成程。」

夫「如何で御座いませう。」

總「さあ……。」

夫「どうぞ御盡力を願ひます。」

總「さあ……私も職務上……甚だ……迷惑……致しまするで…………。」

夫「では御承知下さいませんので？」

總「どうも甚だ……實に私も職務上……。」

繰布將軍も義理と職務と人情の重圍の中に陷つて、いづれ自害の絕體絕

命。

夫「若し此の事件が世間に暴露致しますれば、取も直さず貴方の御手で暴露されたので御座いますから、我々貴族社會は擧つて貴方に反抗致します。」

公爵夫人は作聲を顫せて、

夫「で、既に其の模樣が有るので御座いますから、私は一方には同族の代表者として、それは表向で、一方には貴方の親友として、今日はお話に上つたので御座います。貴方が飽くまで職務にお盡し遊ばす御精神は私感服いたしました。けれども、其が爲に貴方は今後私共の交際社會へ出入あそばす事は御斷り致さなければ成りません。私とても不本意ながら今日限御交際を絶ちますで御座います。」

此の一言は警視總監の肝膽を破る鐵鎚の大打擊であつた。

總「貴方も絶交あそばすと有仰るので?!」

夫「無論の事で御座います。嫌疑者は近衛士官と申しますからには貴族の花で御座います。其花を散すやうな事が有りましては、貴族は薪も同じ枯木と成つて了ふので御座いますから、私も貴族の一人として其の名譽を保護致さなければ成ません。其が又私の職務で御座います。」

總「然やうなれば、被害者の其の娘の名譽は何と遊ばしまする御考へで。」

總監は堅く拱いたる腕を崩るゝ如く釋いて、

總監の顔を尻目に挂けたる公爵夫人、

夫「那樣娘の名譽も何も有るもので御座いませうか！　金さへ與れて遣つたら、其を持參に奈何なと形付くのです。欲いほど金を取せて遣ります。」

總「さて、其の金の出所は？」

夫「義捐金を募るので御座います、貴族から。其は私が十分周旋致します。其の率先の義捐者は誰であると御考へ遊ばします。」

又總監は考へさせらるゝのであつた。

總「何方で御座いませうか。」
夫「御考へが付きませんかね。」
總「奈何も解りかねるで御座います。」
夫「では申しませうか。」
總「どうぞ。」
夫「其人は此に居るので御座います。」
總「はゝあ、公爵夫人で御座りますか。」
夫「いゝえ。」
總「はあ？」
夫「最一人の御方で。」
總「はあ？」
夫「此には貴方と私と二人よりは居りません。」
總「はあ。」

夫「其の二人の内私で御座いませんければ…………。」
總「私で？」
夫「貴方で！」
總「私が一番に義捐を致すので？」
夫「然やうで。」
總「はあ。」
と言つた限總監は二の句が出ない。夫人は威儀を正して、
夫「社會の秩序を監督遊ばしまする警視總監として、又御交際ある貴族の名譽を保護する親友として、お手許から百ルウブル（百二十圓弱）お出し遊ばされまして、」
惚れた弱身の是非無さは、
總「外ならぬ貴方の御言で御座りまするから、何程なりとも差出しまする。」
然し、どうぞ匿名に願ひまする。」

夫「御無理を御聞濟下さいまして、此樣な嬉い事は御座いません、いづれ此の御禮は、」

と意有り氣に總監を見遣つて、公爵夫人は暇を告げた。然しも警察部内の一大問題たる（紅茶屋事件）の取調は此日の内に俄然中止されたのである。

（五）一萬五千ルウブル

話次分頭被害者なる蕾叉と父とは衷寂しくも喪に籠り居る今日此頃、食堂の窓には懸聯ねたる籠の禽歌ひ、テエブルには種々の鉢の花咲けど、在りても戀しかりし人の亡き迹とて、差向ふ親子兩箇の顔見合せては、徒に思の種となるばかり。可懐き形見とて仍其處に大椅子を据ゑ、正面の壁には老夫人の肖像を掛けて、娘の讐、母の仇と束の間も忘るゝ事無く、唯悲と恨とに日を送るのであつた。

扨中食を了れば、親子は手を携へて例の如く散歩に出る。今日は讐に廻合ふか、明日は肖たる面影を見るか、と蕾叉は行交ふ人に目を着けて、群集の中を徘徊するのであつたが、逢ふほどの士官に其ぞと思はるゝのも無い。特に喪中であるから黒の面紗を被けて居るので、見る目が朦朧として、人を物色するには誠に不便を感ずる。一順散歩して來ると隨分

疲勞するのであるが、蕾叉は寧ろ之を樂む如く、父親が還ると言ふまでは決して還るを思はぬので、此日は常より人出が有つた所から、散步時間も長く定刻を過して、歸宅したのは點燈頃、はや(紅茶屋)へ急ぐと覺しきトロイカが三四臺も門前を通る。其を見た蕾叉は一層愁に沈んで、內に入つても物をも言はず、窓帷を挑げて悄然と往來を眺めて居る。折しも門口の呼鈴が鳴るので、庖人が出て行つた。蕾叉は窓を離れて、

蕾「父樣、希しいぢやありませんか、誰か來たのですよ。」

父「然じや、のう、此の一週間は誰も訪ねて來んに、誰ぢやらうか、知らんて。」

と老人は席を起つて居間の口に待つて居れば、庖人が急脚に復つて來て、

庖「お孃樣に些とお目に掛りたいと有仰つて、御婦人の御客で御座います。」

蕾「お名前は?」

庖「有仰いません。唯些とで宜いから、是非お目に掛りたいと有仰るので

す。」

父「誰ぢやらう。」

蕾「誰ですか、生面の人でせう。それぢや此方へお通し申しておくれ。」

と急に蠟燭を點け足して座敷を明くし、取散した物を片付け、椅子を正して待つて居る處へ、直と入つて來たのは、黑の衣服に質素なる肩掛を絡ひ、飾の無い帽子を冠つた五十前後の婦人。

蕾「どうぞ之へお掛け下さいまし。」

と言ふのに會釋して客は、窕に座に着き、小さき手提を膝の上に置いて、極沈んだ調子、

客「お初にお目に掛りますが、私は或貴婦人方の名代で出ましたので御座いますが、其の夫人方は貴方の御身の上に就いて格別同情を寄せられて御在なので御座います。」

蕾又は窃に傍なる父の顔を見た。幌尾老人は屹として、如何にも容を正

して居る。

客「伺ひますれば、此度御母樣が御逝去あそばしましたさうで、何とも申上げやうも無い段々の御不幸で、其の貴婦人方にもお可憐う思召さるゝ餘、お見舞申して來るやうに、と私へのお頼で、それゆゑ今夜出ましたので御座います。」

幌尾老人は聲嚴に、

父「誰方樣からの御頼で有りまするか。」

客「聖彼得堡の有名なる貴婦人方が組織されました慈善事業の團體を代表致しまして、」

一國者の幌尾老人之を聞くと怫然として、

老「手前どもは決して他樣の慈惠に與るやうな者では御座りません。」

客「其は些と御言が違ひは致しませんでせうか。慈善事業と申すと、強ち金錢を惠むばかりでは御座いません、精神上の慰藉なども隨分其の主な

る者で御座います。私の總代として上りましたのも究竟其なので御座いますが、噂では其筋へ告訴あそばしたとやら、事實で御座いますか。」

老「如何にも事實で御座りまする。」

客「事實で？　然やう致しますと、對手は國民の上流たる貴族、それを告訴なさいますに就いては、十分御熟考あそばしましたので御座いますか。」

蕾叉は之に答へんと爲ると、父が目授をしたので、默つて了つた。

客「此事は何に致せ、貴族全體の體面に關るので御座いますから、上流社會は一同令孃を敵にして居らるゝので御座います。」

老「貴方のわざ〳〵御出下さりましたのは、手前どもの利益になる事と信じて居ります事で御座りまするが。」

客「無論然やうで御座いますとも。」

老「貴族社會は一統手前どもを敵にして居らるゝと云ふに、何故貴婦人方は同情を表して下さるので御座りませう。」

客「其で御座います。其に就きまして內々御意見が伺ひたく、今夜出ましたので御座います。」

親子は彼何事を言ふやらん、と偷に目と目を見合せた。

客「若し御訴へあそばす時分に私が御懇意で御座いましたら………。」

と然も口惜しさうに言半して二人の顏を見たのである。

老「それは何爲で御座りまするか。」

客「私が御懇意でありましたら、這麼に事を大く爲ずに濟みましたので御座いますもの。第一告訴などを遊ばすには及ばないので御座います。」

幌尾老人は覺へず苦笑した。

客「恁云ふ評判が世間へ弘るのは、令孃の爲にも決して喜ぶべき事ではないので御座います、然やうで御座いませう。て、又其の犯罪者が捕はれて處刑されました所で、極僅少の損害賠償か何かで事濟に成つて了つて、令孃の方には何の利益も無いので御座います。然やうでは御座いません

か。」

此言は親子の者に尠からざる惡感情を與へたのである。なれども二人は猶默して客の言ふ所を聞かんとした。

客「お見受申しますれば、失禮ながら御財産も多からんやうに考へられますが…………。」

老「御覽の如く、一向何も持ちません。」

客「然やうなれば猶更の事、令孃の行末も御考へ遊ばさなければ成りません。箇樣な噂が立ちましては、第一御緣邊の邪魔に成ります事は一樣ては御座いません。まて見ますれば…………。」

と客は今百尺竿頭に一歩を進めむとする時、幌尾老人は肩を聳かして、

老「いや、是は夫を有ちまする儀は斷念致し居りまする。」

客「あゝ、然やうなれば是非御聽に入れたいお話が有るので御座います。唯今申上げました貴婦人方も其邊を御考へ遊ばまして、此儘都に御永

住遊ばすよりは田舎へ御引移に成つた方が、却つて御宜からうから、然う申上げるやうに、と諄々有仰つてゞ御座いました。」

老「御深切は難有う存じまするが、手前どもは別荘を持つて居るではなし……………。」

客「いゝえ、それは唯今丁度ヲォルガ河の傍に好い家が賣物に出て居りますので、御存の通那處は閑靜で、而して誠に眺望が宜いので御座います。那の邊へ御移になりましては如何で御座います、御望で御座いますれば、貴婦人方が御周旋申上げたいと有仰るので御座いますが。」

老「いや、なか〳〵以て然やうな力は御座りませんて。」

客は手を抗げて其言を遮り、

客「それは貴婦人方から御見舞として貴下方へ差上げますので御座います。」

幌尾老人は有繫意外の言に驚いて、何と答へたものであらうと、言はず語らず娘の顔を視た。端然と手を拱いた娘の蕾叉はそろりと父の顔を見

たばかりで、何とも言はぬ。さては不承さうなと見て取つた客の婦人は噴らず疊みかけて、

客「若又田舍へ行つしやるが御否ならば、依樣此に御在あそばして、而して差支無いやうに御取計申しても宜いので御座いますが、」

暫く考へた父親は再び蕾叉に向つて、

老「お前奈何か。」

蕾叉は敢て口を開かぬ。

客「御老人樣の御考は如何で御座いますか。」

老「さあ、手前は親の情として一人の娘の事で有りますから、是の爲行末善かれと願ふで御座りまする。」

客「御尤で御座います。貴婦人方に於れましても、そりや御本人の事は申すには及びません、貴方と云ふ御歳を召した親御樣の御心中を十分御察し遊ばして被在るので御座います。で、どうぞ其の御志をお受け遊ばし

て下さいまし。」

老「はい。」

客は膝に置いたる手提の中から幾個ともなく取出す紙幣の把を、テエブルの眞中に積重ねた。

客「一萬五千ルウブル（一萬七千圓弱）御座います。失禮ながら御二人の御活計の料として、貴婦人方から差上げまする御見舞で、どうぞ御受取下さいますやうに。」

目前に堆き一萬五千ルウブル！　是程有れば親子二人が安樂は更なり、好き夫をも求めらるゝのであるから、父親の心は大に鈍つたのである。

老「蕾叉、奈何か。」

今は蕾叉も口を閉ぢては居られぬ。

蕾「一萬五千ルウブルの御金？」

老「然ぢや、一萬五千ルウブル！」

蕾「お父様、其の一萬五千ルウブルは誰が何の爲に下さるので御座います

老「慈善會の貴婦人方からして、」

客「御二人の御災難に格別の同情を表せられまして。」

蕾又は客の顏を熟と視て居たが、

蕾「貴族は私の讐、讐の同情を受ける覺は御座いません。—

凛として言放つた彼の聲は甚しく震へて居た。

蕾「お父様、百萬ルウブルでも私は那の恨は賣りません！」

蕾又は汚はしと謂はんやうに衝と席を起つた。此の一言に勵されたる父親、

老「折角では有りまするが、娘が那申ますするから、是は御持返り下さるやうに？」

客「然やう有仰らずに御受け遊ばしたら如何で御座います。是が千ルウブルとか二千ルウブルとか申すのなら知らん事、一萬五千ルウブルと云ふ

額では御座いませんか。」
老「いや、どうぞ御持返りを。」
客「貴婦人方にも殊に御心を籠められて、箇樣に總代まで立てゝお見舞を遣はされたので御座いますから…………。」
老「いや、然し、左に右是は御持返りを。」
客「然やう遊ばしては、却つて貴下方の御爲に成りませんで御座いますよ」
老「いや、左に右御持返りを。」
客「貴方も一旦受けると有仰つたものを、今更然やうな事では私も迷惑致しますから、」
と猶樣々に言を盡す。斷れば斷るほど無理推付に推付けるので、氣早の老人赫となりて、
老「えゝ冗い！　匆々と持つてお歸りなさい。」
客「では箇樣に申上げましても…………。」

老「冗い！」　と言ひながら椅子を起つた老人は客の顔を屹と睨め着けた。

客「然やうなら是非も御座いません。然し、後悔あそばしますな。」

老「早うお歸りなさい！」

客「早く歸りたくても、此の金を仕舞はなければ歸られんでは御座いませんか。」

と手提の口を擴げて、彼の積上げし紙幣を形付け始めた。

傍に立つて居る老人は足踏をして、

老「早う爲さい。」

客「五十や百の金ではありませんから、然う早くは參りません。」

老「何ぢや、失敬な！」

と言ひながら老人は矢庭に其の紙幣の一把を取つて、客の胸頭に撲着けたので、辯舌達者の婦人も之には懼を作して、忽ち引抱へた一萬五千ル

ウブルの手提、後をも見ずして廊下へ出たが、又倉皇と引返して來るのて　老人は大喝した。

老「何ぢや、又入つて來たな。」

客「肩掛を忘れたのです。」

老「那樣物早う持て行け！」

と今にも摑み懸らん險脈に、怖氣を震つた客の婦人は、其處に置いたる肩掛を取るより早く這々の體で歸り去つた。

老「蕾叉、蕾叉。」　と父の呼ぶ聲に娘は應接間に入つて來たが、彼の一萬五千ルウブルの使の爲に痛く激したる心の色は面に顯れて、恨を含める目元より溢るゝ涙は漣々として蒼白き頰に濕ふのである。

老「蕾叉や、お前の名譽は金では買れん、能う解つた。必ず讐を復つて遣る、安心せい、のう、安心せい。」

衝と寄つて父の手に縋り着いた蕾叉は、一聲揚げて泣くと見れば、忽ち

吽と悶絶して仆れた。

（六八）　老の歎願

呉城中尉は陰に一萬五千ルウブルの額を以て其罪を償はんと爲たのであるが、使の婦人は逐返されて、事は成らずして止んだ。然れども、阿茅淳公爵婦人對警視總監の策は見事に成効して、其後警視廳の刑事掛は全く此の事件を放擲して了つて、一時は火山の破裂せんずる勢を作して四方に噂されし大問題も、今は殆ど世間の記憶に存せざる有樣と成つた。幌尾親子は神も正理も無き世か、と一旦は落膽したものゝ、上には聰明なる皇帝陛下の在すあり、到頭死を以てしても聖斷を仰ぎ奉らんと思定めて、讐の手懸を得んには、なか〳〵懸る時こそ好けれと、彼等は益す搜索に油斷無かつた。とは謂ふものゝ、一私人の手を以て此の犯罪者を狩出さんは、筏に棹して大海を横截らんと爲るに等しき者、親子は終に其力の及ばざるを悟つたので、此上は何日までか遲々して、徒に無念の

月日を過すべき、唯頼み奉る皇帝陛下の慈仁なる大御心に訴へん、と闕に九重の空を仰いだが、悲い哉、一個の私民たる者が闕に伏して直訴する事は法の禁ずる所である。若し聖聞に達し得べき道を求むるならば然るべき手續を經るの外は無い、が、其も公に計ふことは克はぬから誰にてもあれ、陛下に咫尺し奉る御方を頼みて、密に叡慮を驚し奉らんと、乃ち宮中に出入する貴人の名簿を繰披げて、適當の人物を擇んだのである。

親子の倶に指したのは、當時皇后陛下の最も優渥なる殊遇を蒙りて、而も其の人爲るや世間を擧げて一視同仁の慈愛深き吳城伯爵夫人であつた。因て老人は直に意を決して、貴賤老若の常に聚れる夫人の門を指して急いだ。恰も好し、彼の着する時、夫人は是より朋友を訪はんとて、馬車を門外に牽出したので。窓の內より何心無く見ると、帽も冠らざる白髮の老人が物言ひた氣に佇んで居るから。直に車を駐めて聲を掛けた。

夫「貴方、何ぞ御用が有るのですか。」

老「はい。」　と老人は忙々しく進み寄つたが、遽に心着いたやうに乾と一揖して、

老「手前は先頃彼の(紅茶屋)に於まして、御聞及も御座りませうが、災難に遭ひましたる娘の父で御座りまして。」

夫「あゝ、然やうですか。其後さつぱり那話を聞きませんやうですが、何ぞ那事に就いてゞも御用が有るので御座いますか。」

老「はい。彼の事件に就きましては、手前どもは法律の保護を受くる事が出來ませぬので御座ります。」

夫「法律が貴下方を保護せんのですと？」

と夫人は始て驚いた。

老「然やうで御座ります。其故伯爵夫人に嘆願の筋が御座りまして、實は今日罷出ましたので御座りまするが、」

夫人は先より彼の風采容貌等に注目して居たのであるが、此時心窃に頷いて、
夫「然やうですか、それでは伺ひませう。」
と言置いて馭者を呼び、
夫「出掛けるのは見合せるから、馬を取外して宜い。貴方、それでは此方へ入しつて下さい。」
快く邀へられたる老人の喜は何に比へんやうもあらず、彼は其の應接室に溫厚玉の如き夫人と相對して、事の始末を語ること一時間餘、夫人は聞く毎に驚くより外は無かつた。
夫「一萬五千ルウブル？　まあ、那樣事が御座いましたか、而してお娘御は何と有仰つてゞした。」
老「百萬ルウブルでも、此恨ばかりは賣らんと申して、取迫めて氣絕致しましたやうな始末で御座ります。」

夫「はあ、御尤で御座います。それで、お娘御は蕾叉さんと有仰いましたね、蕾叉さんは然ぞお美しいので御座いませうね」

老「親の口から申上げまするも如何で御座りまするが、決して醜い方ではないので御座りまして。」

夫人は少く打案じて、

夫「では、誰かに思を懸けられたと云ふやうな事實は是迄に御座いませんでしたか。」

老「然やうな事は斷じて御座りませぬ。母の手元でのみ育ちましたので、それは男の影も蹈みました事は無いで御座りまする。」

夫「段々何ひますれば實に重大な事件で、猶篤とお話を致さなければなりません。どうぞ又明日御出を願ひます、其節は是非蕾叉さんも御同道下さいまし。」

老「難有う存じまする。然やうなれば、猶又御面會を願ひまするて。」

老人は椅子を起つたが、又小腰を屈めて、

老「えゝ、些と御含置を願ひまするのは、今日手前が箇樣な儀を嘆願に罷出ました事は、極々秘密に、何方へも御話の御座りませんやうに、」

夫「それは何云ふ譯で。」

老「御承知の如く、此の事件は上流社會の人達を敵に致しまするので、既に警視廳が突然探偵を中止して、犯人の罪跡を蔽はんと致す有樣で御座りまするのも、全く貴族の權力の爲す業で。然やうな次第で御座りまするから、若し手前が飽くまで復讐を企つると云ふ事が知れましたらば今度は金錢で奈何致す事も出來んので有りまするゆゑ、必ず娘か、手前か、或は又親子共に命を取られまするやうな事が無いとは限らんと考へられまする。」

伯爵夫人は聞くだに可恐しと謂はんやうに眉を動した。

老「尤も然やうな事は手前の取越苦勞でも御座りませうけれど、何に致せ

段々不幸に不幸を累ねまして、自然心の弱りから樣々の事が氣懸に成りまする所から、老人の愚痴まで御耳に入れまして、何とも恥入つた儀で御座ります。」

夫「いえ、御無理も無い事で御座います。それでは、今後私へ御出の節には貴方の御名を有仰らんが宜うございます。又明日お二人で入しつても、直に此方へお通し申すやうに好く申付けて置きますから。」

是で幌尾老人は感謝して立歸る。迹に伯爵夫人は暫く居殘つて、或は輕率に老人の言を信じ過ぎは爲なんだかと云ふ事を考へたのである。けれども、事實は事實で、人も知つたる紅茶屋事件、吾手にて密に其の眞相を搜り見んと、直樣馬車を命じて、一二の朋友を尋ねたが、格別得る所も無い。其の弟が近衞士官なる事を思出したので、試に阿茅淳公爵夫人の邸を訪うた。

先衣服の流行から慈善會、舞踏會などの雜話を試みて、さて善しと思ふ

頓て吳城伯爵夫人は太息して、

「吳、どうも露西亞の警察は未だ一向不完全な者で、實に信用が出來ませんては御座いませんか。那の先達而の（紅茶屋事件）などはもう一月餘にも成りますのに、何の沙汰も無いとは、奈何いたしたと申すので御座いませう。」

と探を入れたる言の端々、公爵夫人は唯頷くのみであつた。

吳「警視總監の緜布樣も、那の事件では然ぞかし御骨折で御座いませうが、今だに何の手掛も無いとは、些と警察の不面目では御座いませんかね。」

阿「然やうで御座いますとも、三人の內せめて、一人ぐらゐは上げられさうな者で御座いますのに、何云ふもので御座いませうかねえ。」

是が現在加害者の一人たる靈象府中尉を弟と爲る阿茅淳公爵夫人の言である。

吳「然し、噂に據りますると、警視總監は何故か急に探偵を弛めたとか申

すては御座いませんか。」

阿「那樣事は決して御座いますまい、非常に御心配のやうにお見受申しましたよ。」

吳「然やうなれば心强う御座いますが、那の事件に就いては、何で御座いますか、面白からぬ噂が立つて居りますから。」

阿「何方で那樣噂をお聞き遊ばしました。」

吳「東宮御殿で然云ふ話を爲て御在のお方が御座いました。」

阿「本に那の事件と申すと、一時は到處評判で御座いましたが、私には如何にも事實とは考へられんので御座いますよ。何か是には女の方に譯が有つて騷立てた仕事ではあるまいかと思ひますので。」

吳「いゝえ、然やうでも御座いますまい、私は事實であらうと寧ろ考へます。」

阿「私は飽まで信じませむのです。瘦せても枯れても貴族では御座いませ

んか、而も近衛の士官とも有るべき者が、如何に何でも那云ふ罪を犯さう道理が無いでは御座いませんか。是は屹度貴族攻撃の狂言に使はれた人形に相違有るまい、と私は考へます。其故に警視總監も迂濶と手を下し得ぬので御座いませうよ。」

呉「繰布將軍から然やうなお話が有りましたので御座いますか。」

阿「いゝえ、それは唯私の考量で。」

呉「で、警視總監は何云ふお見込なので御座います。」

阿「總監の見込などは私存じません。」

呉「御存じ無い筈は御座いますまい。」

阿「何爲で御座います。」

呉「大相御懇意で御在遊しますから、無論悉い御話が御座いましたらうと存じたので御座います。」

阿「いゝえ、一向。」

此に談を收めて呉城伯爵夫人は辭し去つたのであるが、公爵夫人は此人を甚だ無氣味に思つた。

（七）門前の一瞥

約の如く其の翌日幌尾老人は娘蕾又を伴ひて再び呉城伯爵夫人を訪問したのであるが、老人の一擧一動は昨日に増したる心の不穩を顯した、と謂ふのは、此の會見に於て親子の運命は善惡定るので、見放さるゝか、助けらるゝか、浮沈の關する大事の一時と念ふのである。之に反して蕾又は神色自若として、況へば深淵の澄めるが如く、又自ら犯すべからざる威嚴も見ゆるのであつた。父が目にも著しく感ぜらるゝのは、彼が遭難の前までは、生得沈着の質ではあるが、有繫に子めかしい仇無い處の有つたのが、今日では俄然と樣子が變つて了つて、宛然花無き梢の霜を帶びたる風情、美しと雖も色無く、色無しと雖も淸く、吾子ながらも其の氣品の高きに驚かるゝばかり。さては今應接間に出來れる伯爵夫人も一見して此娘の爲人を會得したのである。

夫「孃さん、まあ其へお掛けなさいまし。」

と椅子を指して、旋て主客の座の定つて後、

夫「貴方はお幾歳にお成です。」

薰「十九歳に成りまする。」

夫「誰方から御教育を御受けなさいました。」

薰「主に母親からで御座います。」

夫「而して何處ぞ學校へお入學でしたか。」

薰「いゝえ、先生には宅に來て戴きまして、學問以外の事は皆母が教へてくれましたので御座います。」

夫「あゝ、然やうですか。外國語はお話しなさいますか。」

薰「佛蘭西語に獨逸語は奈何やら話せますで御座います。」

夫「音樂は如何です。」

薰「はい、音樂だけは左に右人に教へます位練習致しましたので。」

夫「今でも續いて御勉強なすつて御在ですか。」
蕾「はい、始終心掛けて居りますで御座います。」
會談の冒頭は此に訖つて、伯爵夫人は本文に入るの口を開いた。
夫「昨日はお父樣の御出で、お話は殘らず伺ひましたが、那の事件の處置に就て貴方の御望は何云ふので御座いますか。」
蕾「裁判を受けたいと存じます。」
夫「無論然うでは御座いませうが、裁判と云つても、何云ふ意味の？」
蕾「兇行者を罰しますやうに。」
と蕾又は靜に答へた。
夫「然やうなれば、外に何も貴方の身に就ての御望は無いので御座いますか。何か御考が御座いませう。」
蕾「損害賠償と申すやうな事で御座いますか。」
夫「然やう。」

菫「然云ふ事は一向御座いません。」

此答を聞く時、伯爵夫人は蕾叉の顔を瞶めて、殊に耳を傾けたのである。然るに、一身に就ては何等の要求も無いとは、若や己の聞違ではあるまいかと疑ふまでに考へた。

夫「それでは、損害賠償のやうなものは欲くないと有仰るので御座いますね。」

菫「はい。」

夫「失禮ながらお父様から段々お話を伺ひまして、御家内の事情も畧承知いたして居るのですが、近頃では音樂の御弟子も斷つて御了ひなすつたと云ふお話、さて見れば自今御生計向に差支が出來は致しませんか。」

菫「いよ／＼裁判でも決さましたらば、私共は此の彼得堡を立退きまする考量て、皇帝陛下に於いても私共の姓名を變へまする勅許は下し置るゝてあらうと信じますゆゑ、然して田舍へ引籠りましたらば、其日を暮す

だけの道は奈何にか付くて御座いませうと考へます。」

夫「では田舎へ往しつて、何方へか奉公でも作らうと云ふ御積ですか。」

蕾「いゝえ。私のやうな汚れた體を以ちましては、なか〳〵良家などに奉公が出來るものでは御座いません。奈何にか致して、父の傍に居つて世話が致したいと存じます。實は少々でも父に恩給が下りますので御座いますから、」

老人は始終固唾を嚥んで耳を傾けて居たが、吾も及ばぬ天晴なる娘の口上に頗る滿足の體。伯爵夫人も心陰に感服した。

夫「然し、孃さん、貴方は從來生活の事に就て苦勞などは全で作らんのでしたらう、又、御緣組をなさると云つても御自由であつたので御座いますよ。けれども、今日となつては其も是も御心任には參りません。其中にお立ちなさる困難と云ふものは、自今一日毎に增して行くばかり、目に見えて居ります。然やうですから、私は御忠告を致します、其の損害

に對する賠償をお受けなさるが宜いでは御座いませんか。」

蕾「私は何處までも然やうな物は望みません。既に先頃も斷然辭りましたので御座います。」

と稍聲も勵しく、有繋に蕾叉は激したのである。

夫「些とお待ち下さい、秘密に受取る金と損害賠償とは別で御座いますよ。」

蕾「いづれに致しましても、金錢などは欲くは御座いませんので。唯私の名譽を傷け、私の將來を害した者を罰して下さいますれば、それで十分なので御座います。」

蕾叉の面上に動すべからざる決心を讀みたる伯爵夫人は、

夫「其の樣にまで有仰る事ならば、何とか盡力いたしませうて御座います。」

之を聞いたる老人の歡喜は、滴々涙の流るゝを拭ひも敢へず椅子を起ち、伯爵夫人の手を取つて接吻した。

夫「孃さん、貴方は御承知でもありませうが、法廷では然云ふ犯罪の罰と

云ふと至つて輕いもので御座います。然し、私が此事を上奏いたしまして、勅裁を仰ぎまする段に成りまずると、此罰は尋常ならん嚴重の者に成りまする、で陛下の御聖斷に對しては何人も喙を容れる事は出來ません。犯罪者は勳位を褫奪され、財産を沒收されまするかも知れません。其邊は御承知で御座いませうね。」

蕾叉は面色忽ち蒼く、四肢皆震ふまでに怒つて、蹶然と座を起つた。

蕾「勳位の褫奪、財産の沒收は、私の身に享けました不幸より不幸なので御座いませうか！　私の家は貧いのでは御座いますが、親子三人が睦しく、互に便に致し合つて、平和の生活を樂んで居りましたので御座います。其處へ計らずも彼の災難に遭ひました爲に、私の一家は甚麽に成つたと思召すので御座いませう。」

蕾叉は此に到つて涙を浮べた。

楚「私は無禮を受け、名譽を傷けられました上に、再び得られませぬ女子

たるの徳をも失つて了つたので御座います。其が爲世間へ顏向も出來ませず、音樂の弟子も謝りまするやうな始末で、忽ち活計に差支を生じまして、年寄つた親にも憂目を見せますので御座います。で又私の身に致しますると、實に生効も御座いませんので、結婚いたしまする事は出來ず、人の母たる事は出來ず、父の御座いません後には、便も無い孤身で此世を送らなければなりません。特に無念なのは、亡りました母の事で御座います。病身の母は私の災難に遭ひました事を聞きまするとゝ其を苦に致して、卒に歿去ました。是は取も直さず彼の人達が殺したので御座います。箇樣な次第で御座いまして、那の遭難の結果と申すものは、私一身の不幸に止らずして、母を殺し、父を苦め、而して私の家庭を滅したので御座います。此の樣に罪惡を逞くした者に對して、伯爵夫人には仍慈悲の御心をお持ち遊ばすので御座いますか。若し私共親子の者に十分の御同情がお有りあそばしません事ならば、私共は強て貴婦人を

勞しますることを望みませんので御座います。」
と言訖つたる蕾叉は仍伯爵夫人の前に立つて身轉も爲ぬのであつたが、目は血走り、唇は顫へて、顏の色は大理石の月を帶びたるやうに凄く薄蒼んで、亂れた呼吸が忙しく聞える。夫人は感動して、物をも言はず蕾叉の手を把つて引寄せ、其の玉の如き左の額に接吻した。
夫「能く解りました。何人でも唯今のお話を伺ひましたらば、貴方をお助け申さん者は御座いますまい。私は屹度御力に成りまして、陛下の御聖斷を仰ぎませう。」
親子の者は齊く起つて容を正して、伯爵夫人の前に敬禮を行つた。
夫「私の及ぶ事ならば何なりと致しますから、御用が有らば遠慮無く有仰つて下さい、御金の御入用が御座いませう、何ほどでも御用達申しますから、」
老人は恭しく之に答へた。

老「何から何まで御懇切に仰せ下さりまして、御禮の申上げやうも御座りません。手前共は毫釐ながら自分の所持致し居りまする分で、何なり恬なり凌いで參られますで御座りまするゆゑ、其の御心だけを難有く頂戴いたしまする。」

程無く親子は暇を告げて退出せんと爲る時、夫人は遽に彼等を呼留めた。

老「何ぞ御用で。」

夫「孃さんは其の士官達の顔に御見覺がお有なさいますか。」

菫「確に見覺えて居りまする。」

老「實は、其故、毎日同道致しまして、探索に出まするので御座りますが、未だ一向手掛を得ませんので。」

夫「然やうならば猶一層御穿鑿なさるのが肝要で御座います。又いづれ近日お目に掛りまして、御話を致しませう。」

と夫人は起つて内へ、親子は別れて外へ、と各應接間を出たのである。

彼等の玄關を出て、石段を降りんと爲る時、鼻の前に一臺の雪車が今駐つた所で、其から下立つた紳士は毛皮の外套の襟を立てゝ、帽子を目深に冠りたれば、面部は幾と裹れて居るのであるが、是も來訪者と見えて、石段を昇らんとゑつゝ、親子の者に屹と目を附けた。瞥然と見たる蕾叉は忽ち足を駐めて、頭を回したが、其時遲く、紳士の後姿は旣に閾の前に在つた。

老「こりや蕾叉、何を見て居るのじや。」

蕾「お父樣、那の男は三人の中の一人で御座いますよ。」

老「何ぢやと！」

蕾「顏を裹んで居ましたから、能くは見えませんでしたけれど、確に其の一人です。」

老「然うか。成程士官ぢやつたな。待て〳〵、一つ撿べて來う。」

と門番所に到りて其の姓名を訊ぬれば、

吳「唯今お在の御方かな、他は先殿樣の甥子樣の吳城中尉殿であります。」

急ぎ立復つたる老人は、

老「蕾又、今のはの、伯爵夫人の甥子樣ぢやさうじや。お前、人違ではあるまいのう。」

蕾「決して違ひません。」

と後少時打案じて居たが、

蕾「違ひは有りませんけれど、今此で事を暴立てるのは却つて可う御座いませんから、今日は抛つて置きませう。もう恁う知れましたからは、何時でも那の人は、」

老「おゝ、嚢の鼠じや！」

相見て竊に笑つた親子は手を携へて伯爵家の門を出た。

之に反して謂知らず胸を轟かしたる吳城中尉、彼は吾が敵の伯母の家に出入せんとは餘に思設けざるのであつた。

(こりや危いぞ。)と念ひながら、伯母の居間に通ると直に其事を訊ねた。

以「唯今當家から出て行きました、喪服を着けた二人の者は、他は何者ですか。」

夫「他はね、大相可憫な身の上の者で、私が拯つて遣りませうと思つて居るのです。」

伯爵夫人は此の甥が彼の加害者と軍籍を同うせる近衛聯隊附なれば、話るも可けれど、事の洩るゝは好ましからずと思ふから、如何なる身の上とも打明けぬ。中尉も亦其を推して訊ぬる勇は無かつたのである。

縦し問はずとも知れたる三人が身の大事、此の訴狀が伯母の手に握られては、是非分明、彼の直、我の曲、鏡に影の映るが如し。晏然として居るべき所にあらず、と好き程に此を辭して、直に靈象府の邸を訪うて此の次第を話したのである。

靈「然し、其娘は那の者に相違無いのか。」

呉「相違無い。」

靈「斷じて相違無いか。」

呉「斷じて相違無い。」

靈「それぢや證據が有るか。斷じて相違無いと見極めた所の證據は無いのぢやらう。或は疑心暗鬼かも知れんぞ。」

呉城中尉は嚴に頭を掉つて、

呉「證據の有無を僕に問ふ事は無い。君等よりは多く彼に就て識らなけりやならん筈の僕だ。罪を犯した本人の僕が見たのではないか。」

靈「そりや大に然うじや。實は僕は醉うても居たし、彼が始終顔を背るやうにして居つたから、能う覺えんのじや、迚も戸外で會うたぐらゐでは何が然うじやか判りはせん。一體甚麼女かね、少は好い女か。」

呉城中尉は苦り切つて、

呉「那様事は僕は知らん。」

靈「知らんと云うて、貴様今曩に逢うたのでないか、晝間見た所は奈何かと言ふんじや。」

呉「何も恁も那様事を撿べて居る暇が有るものか。僕は彼に一目見られた時には、唯慄然として了つて何も覺えんかつた。彼は確に僕の顏を識つて居るのだ。」

靈「そりや又識らんでか。」

呉「而して其の夜の僕と云ふ事を彼は曩時認めたらしいんだ。靈象府、もう是はお互に覺悟せんけりや成らんぞ。」

靈象府は頻に髭を拈つて居たが、竟に溜息を吶くより外は無かつた。

呉「縱し、然うでなくても、伯母が彼等を保護する事になつたら、もう休矣だぞ、必ず近い内に發覺する。で、恁して居れば、徒に刑の宣告を待つやうなものだから、左に右此を遠かつて、何處かへ旅行しやうではな

いか。而して其の旅行中に何とか…………。」

靈「可かんさ！　五月の大演習の前に那樣事が出來るものかい、隊長が許可を與へるものか。」

吳「うむ、五月の大演習か。」

と之には當惑した吳城中尉、續く二の句も無いのである。

靈「まあ、然う鬱いで居つた所が爲方無い。今夜姉の屋敷に茶話會が有る、警視總監も來るぢやらうから、是から行て見やう、而して密に樣子を探るのは奈何じや。」

吳「其も可からう。可からうけれど、もう事が恁なつては、警視總監の力には及ばんぞ。阿茅渟公爵夫人の力にも及ばんぞ。」

靈象府も其の所以を知るかして、空く緘默して居る。

吳「今日では此の事件は警視總監の手を離れて、伯母の手に渡つて了つたのだ。」

靈「呉城伯爵夫人か。」

と靈象府は力無げに呟いて、頭を低れた。

呉「僕の伯母ぢやあるが、知る通の大義親を滅する側の人だ。」

靈「もう言ふな！」

呉「言はん！　言はんから、もう覺悟したまへ。」

靈「おゝ、覺悟した。」

呉「僕も既に覺悟して居る。」

靈「覺悟したからは女々しく考へて居る事は無い、是から茶話會へ行て大に勢を張らうでないか。」

呉「可からう。」

靈「ぢや出掛けるか。」

呉「善し。　時に澤毛野は奈何したかな。」

靈「然う、些と誘つて見やうか。　他も事件が沙汰罷に成つたで、頗る得意

で居つたけれども、此話を聞いたら落膽するぢやらうよ。」

呉城中尉は椅子を起たんとして、靈象府と面を合せ、

呉「どうも君達には實に濟まんよ、なあ。」

靈「えゝ、もう言ふな！」

（八）　驚天動地

其の翌夜の事、吳城伯爵夫人は皇后陛下の御召に應じて參內した。一週に一兩度づゝは必ず伯爵夫人を召されて四方山の御物語が有る。此夜も外に四人ほどの貴婦人が伺候して居るのであつたが、少も御前と云ふ氣色は無くて、誠に打寛ぎたる團欒。談も暫く途切れて一同無言の折から、陛下は伯爵夫人に向ひ給ひて、何ぞ興有る話を聞せよとの御意であつた。

「別に是と申して御聞に達しまするほどの話も御座りませんので。」

と申上ぐると、更に御言が有つて、慈善事業に就いて何ぞ聞くべき事は無いかと仰せらるゝ。蕾叉の事を奏上するは此時と、伯爵夫人は心中斜ならず喜びて、

「然やう御座りますれば、慈善に關した御話として、申上げまする程の事では御座りませぬが、世にも哀なる親子の身の上に就いて御物語を致

しませうで御座りまする。

是は一月ほど前に起りましたる事件で、其の親子の者には私も會ひまして、能う存じて居りまする。」

と云ふのを發端として、幌尾の家内の有樣から娘蕾叉の容貌、性質、其の教育、と具に說來つて、さて遭難の顚末に入り、彼の娘が家に歸らんとする途に、一臺のトロイカが忽ち顯れて、中より出でたる三人の男はいづれも泥醉して居たと云ふ條に及ぶ時、室の外に重き跫音が聞えたのである。すると闥が啓いたから、陛下を始一同其方に注目して伯爵夫人も談を輟めたのである。入來られたのは皇帝陛下である。陛下は手を以て話を續けよと命じ給ひて、伯爵夫人の前に立たれた。

夫人に於ては今宵は如何なる吉日なるか、願うてもなき兩陛下の御前に此事を聞ゆる喜ばしさ、と益す力を得て、感に堪ふるまで巧に蕾叉が不幸の一遍を述べたのである。然るに主上は、

「それでは未だ話は濟まんではないか。結局は何云ふのであるか。」

「はい。私の心得て居りまする所では、未だ結局は付きませんやうに御座りまする。」

「結局は付いて居らん？　而して那樣事が何日何處に有りました。」

此時席を起つたる伯爵夫人は、陛下の前に敬禮して、

「恐多くも處は此の聖彼得堡の町盡頭で御座りまして、今より凡そ一月ほど前の事で御座りまする。」

御前に侍る貴婦人達は密に目と目を見合せて、各心に駭いたのは、固より此の事件たるや、誰知らぬ者も無いのであるが、終に之が叡聞に達したる事と、陛下に於て如何なる聖斷を下さるゝかと云ふ事の二件である。

主上は森嚴なる口氣にて、

「伯爵夫人、次の間まで參るやうに。」

皇后陛下にも同行あるべき旨を仰せられて、此間を起たせられた。便ち

伯爵夫人は兩陛下の御前に於て十分に上奏する所有つたので、其が平生信用あらせらるゝ伯爵夫人より、熱誠を以て具陳せられたのであるから兩陛下には大に驚かせ給ひて、棄置くべき事ならずとの思召。

「早速其の三人の者を捕へんければ成らぬ。伯爵夫人の言ふ所では近衞士官であるとの事。其の報告書は警視總監の手許に在らうのう。」

との被仰であるから、伯爵夫人は謹んで默答した。主上には直に侍從を召して、報告書を取寄するやうに仰せ出されたが、さて皇后陛下に向ひ給ひて、此の犯罪者に就て如何に思さるゝかとの御訊が有つた。近衞聯隊より罪人を出すは心苦しき事ながら、罪は罪として十分に糺さねばならぬとの御答。主上にも御同意の旨を仰せられて、更に伯爵夫人に對して、

「好い事を聞せてくれまして、甚だ可喜しく思ふ。箇樣な地位に居つては世間の事は全く知らずに過す、又二三の知る事が有つても、違うた報

告を受けて居やうも知れぬ。然るに夫人が居つて箇樣な事を敎へらるゝと云ふは、實に得難き幸福で、叉皇帝たる者の名譽と思ふ。」

との御挨拶で、聖德の厚きに感じたる吳城伯爵夫人は旁望外の面目を施して退出したのであるが、果せる哉、翌日の新聞は號外を發して、驚天動地の事實を急報した。其の一は、警視總監の懲戒免官、其の二は、近衞士官の營內禁足。(紅茶屋事件)の再燃は聖彼得堡を擾亂して、到處人心恟々として唯其の噂。全市の説は二つに分れて、聖斷を非とする者と蕾叉を憐れむ者と、囂呼紛爭して相遜らぬのであつた。

前夜晚く寐たりし阿芽淳公爵夫人は午頃に起出でると、喧々擾々の最中、非常の新聞が有る、と夫から此の次第を聞された。固より犯罪者に次いで驚かざる可からざるのは此人であるが、如何にも其通り驚いた。

夫「何云ふ譯で警視總監が懲戒されるので御座いませう！　而して誰が後に直りますので御座いませう。」

公爵は聞いたばかりで笑つて居たが、

公「樣子を搜つて來やうかの。」

夫「然やうで御座いますね。」

公「行つて見やう。」　と云ふなり外出したが、迹に夫人は居ても起つても居らるゝのではない、一び活路を得せしめたる舍弟は今叉網裏の魚と成つて、既に或處に俎板は据られて在るので。差當つて何とも之を拯ふ術が無い。家扶を呼んで段々問合せて見ると、近衞士官は一人も餘さず徵集されたまゝ營內に拘禁されたとの事。之を聞くと夫人は直に馬車を命じて、試に舍弟靈象府中尉の邸を訪れたが、其の言に差はず、今朝隊長よりの親展書で召れたと云ふ。其の樣子では兵營へ尋ねても面會は許されまい、と悄々引返して、心も心ならず內に居て結局の如何を待つのみであつた。

勅を奉じて部下の尉官を徵集したる近衞聯隊長は、彼等の整列の前に立

つて、嚴に左の宣告を與へた。

曰「諸君。吾が最も榮譽有る近衞聯隊は、最も恥づべき汚名を蒙つたのでありまするぞ。聞く所に據れば、諸君の中に其罪を負ふ者が三名有る。實は本官も此事は可成く暴立てずに處分志たい考量であつたなれど、もはや今日と成つて見れば、其の手段を取ることも克はず、公然と罪を案じて罰を行はんければ成らぬ。本官も相當の處分を爲んければ成らぬと知りつゝ、今日まで放擲して措いたのは、己の罪として深く悔いる所でありまする。然のみならず、三名の犯罪者に對して嚴罰を加ふるの已むを得ざる地位に立つ所の本官は、私情に於て實に忍びざる苦痛を感ずるのでありまする。

して、其の犯罪の事跡と云ふのは、諸君も知らるゝでありませうが、凡そ一箇月前に起つた彼の(紅茶屋事件)で、三名の近衞士官が大醉の上不名譽なる罪惡を行つたと云ふ噂。其噂が恐多くも皇帝陛下の叡聞に達し

たのでありまするぞ。陛下に於ては軍隊の名譽を重んぜらるゝが故に、其罪を假し給はず、今日中に屹度右三名の兇行者を逮捕せよ。然らざる時は、此の聯隊の尉官の勳位は總て褫奪すべしとの勅令を下されたので。本官は謹んで命を奉じて、之を諸君に傳ふるのであります。就ては諸君の意見は如何でありまするか、本官も此度は諸君と進退を共に致す決心でありまする。で、十分に御協議有りたい。」

聯隊長は一禮して席を退けば、二三の士官は早くも彼の前後を擁して、其の意見を叩かんとした。聯隊長は冷然として、

長「自分は己の行ふべき事だけを知つて居るので、諸君も自身に決心なさるが宜い。」

と言捨てゝ此を立去つた。迹に一同は愕然として爲ん術を知らず、彼方此方に喁く聲の聞ゆるのみで、誰出でゝ主として謀る者も無く、皆心々に如何に成行くらんと氣遣ふのであつた。其時忽ち顯れて衆の前に立つ

た者が有る。場内の視線盡く之に注げば、其人は吳城伯爵である。續いて又二人顯れて、彼の傍に副うて立つのを見れば、靈象府、澤毛野の二伯であるから、一同目を瞪つて、覺えず手に汗を握つた。

吳「諸君、吾が近衞聯隊の神聖なる面目を汚せしのみならず、其の嫌疑の爲に諸君の名譽をも傷けたる罪人は此方でありまする。」

彼の二人も容を正して、

靈「我々も同じく罪人なる事を、」

澤「諸君の前に自白いたしまする。」

之を聞いて駭かぬ者は無い。さては彼の兇行者は此の三人であつたかと、或は嘆じ、或は陋み、呆るゝ者有り、憤る者有り、樣々であつたが、聯隊中に彼等を憎める者とては無かつたので、誰の心も偏に其の無罪を願つたのである。

（九）結婚の刑

蕾叉親子は此朝呉城伯爵夫人から至急に招かれて參邸した。彼等も號外附錄の報道に因つて大畧模樣は知つたのであるが、夫人に面會して聞けば聞くほど由々しき大事と成つたのは、夢にはあらずやと疑はるゝばかり。蕾叉も恁くまでに晴々しき復讐を爲んものとは思寄らぬのであつた。老人は叉是が餘に表沙汰と成つて、上流社會の面目を傷くることの太甚しきに過るのを、陰に面白からず思ふやうでもあつた。

夫人は親子と晝餐を共にして後、聖旨を伺はんが爲に、少時と二人を留め置いて參内した。が、程無く急ぎ歸つて來るのを見ると、待ちかねたる親子はかしこき邊の消息を洩聞んと爲たのである。伯爵夫人は其には答へずして、

夫「孃さん、貴方は加害者の顏を御存じで御座いませうね。」

蕾「はい。」

夫「それでは、其の人達を御覧になれば直に判りませうね。」

蕾「判りますで御座います。」

夫「宜う御座います。然やうなら是から私と一緒に被入て下さい。」

蕾「何方へ参りますので御座います。」

夫「陛下から直々に御聖断を仰聞けらるゝので御座います。」

蕾「はい。」　と言つたまゝ蕾叉は顫へたのである。

夫「さあ、参りませう。」

蕾「父は如何いたしたもので御座いませう。」

夫「然やう、御老人の事に就いては何とも御沙汰は御座いませんでしたから、…………。」

老「甚だ恐入りまするが、どうぞ私も御召連下さいまするやう願ひまする。」

夫「はい。何とか御執成を致しませうから、御一緒に御出なさいまし。」

親子は伯爵夫人の馬車に陪乘して近衞聯隊の門前に着いた。夫人は二人を率て營内の廣間を通ると、內に並居る尉官は皆武裝を解いて、鬼拉ぐ手も胸に置くより外は無く、顏色憔悴として心惱める體は、見るもなかなか可哀であつた。上座に椅子を並べて控ふるのは、聯隊長と新任の警視總監。萬綠叢中の紅一點と見るべき蕾叉の入來る姿は、乍ち衆目の燒點と成つて、噂に高き（紅茶屋事件）の女主人公は是かと飽かず眺むるのであつたが、蕾叉は色蒼白めて、其容雨に惱める薔薇の覺束なげに見えながら、驚き懼れたる氣色は更に無くて、閑に場內を一遍眴した。時に聯隊附の僧官は其の傍に進み寄つて、

僧「神明に誓ひ、誠意を以て、御身は今己を辱めたる者を過たず指示すのでありまするぞ。」

蕾「神に誓ひまする。」

其聲は低いのであつたが、隈無く響き度るばかり場內は肅然として、物

凄き沈默を凝した。

僧「此方へ來て其者をお指しなさい。」

僧官は彼を導いて尉官の列の前に進んだ。日脚は既に傾きつゝ、雪に映ふ夕榮は的皪として、丈餘の白き窓帷を射る處に、尉官の面は一齊に向けられたのである。此に立つた蕾叉は有繋に忸怩として、胸のみ躍る女氣の如何に爲んとも分きかねて居た耳元に、一聲高く、

僧「陛下の勅命でありますぞ、速かに罪人を指點なさい。」

蕾叉は屹と心を取直し、尉官の面貌を一々熟視して、甲を歷、乙を過ぎて、澤毛野の前に行くと、痛恨の氣憶は忽ち爭起された。

蕾「此人でございます。」

又進んで靈象府の前に到れば。

蕾「此人でございます。」

今一人なる異域伯爵は早く既に蕾叉に認められて居たのである。けれど

も彼には其人を指點する勇が無かつた、寧ろ指點せざらんと爲た。其人は惡むべき加害者の一人ではあるなれど、現に大恩を蒙れる伯爵夫人の甥と知つては、義として罪を負するに忍びぬ。左にも右にも看過すより外は無いと胸を定めたが、又思へば、然にあらず、若も三人の中にて此人が無禮を加へし當の敵で有つたならば、彼等二人を罰するも益無き事。伯爵夫人に大恩を蒙るも、畢竟此の復讐をせんが爲なるに、何とて今更怨の刃を鈍すべき。然は云へ、此人にして其敵ならざらんには、夫人の恩を如何に爲んと、雷又は姑く思亂れて、二人を指點たまゝで立竦んで了つた。聯隊長は聲を勵まして、

長「今一人は何の人でありますか。」

雷又は辛うじて面を擧げると、傍より僧官が又促す。

僧「お判りになりませんか。」

雷又は是までと覺悟して、吳城伯爵を指したが、極めて小聲に、

董「那の方で。」

「何の方で御座います！」

と云ふなり走り寄つたる伯爵夫人、

夫「是でございますか。貴方お見違てはありませんか、氣を落付けて能く御覽なさいまし。」

娘は面無げに差俯いて、

董「決して違御座いません。」

夫「是に違御座いませんか。」

董「はい。」

衝と中尉の傍に寄つた伯爵夫人は、涙聲を顫はせて、

夫「お前さんは何と謂ふ事で御座います！　其が貴族たる者の行でせうか、實に見下げ果てた人非人。呉城の家名を奈何なさるのです。伯爵の勳位は奈何なさるのです。不心得とも、不埒とも…………。」

と其處に泣倒れたのである。聯隊長は一同に向つて、

長「是にて諸君に被る嫌疑は霽れましたに因つて、いづれもお引取になつて宜しい。三人は直に陛下の御前へ出まするやう、罪の判決は陛下御自身に下さるゝのでありまする。」

三人の中尉は謹んで旨を領して退出した。踵いで蕾又親子は馬車に打乗つて宮中へ導るゝ。伯爵夫人は此の不面目なる列席を堪へ難きものに思煩ひつゝも、勅なれば辭し難く同伴したのである。三名の犯罪者と蕾又親子と伯爵夫人とは打揃つて御前に召出された。陛下には先蕾又に御目を留められて、其の容儀の雅なるを心陰に御感ありて、さて加害者に向はせ給ひ、

「こりや、其の三名の中にて誰が最も重き罪を犯したのであるか。申せ。」

呉城中尉は低れたる頭を擡げて、

「恐入りまして御座りまする。」
「其方であるか。」
時に傍より靈象府は慌忙しく奏聞した。
靈「申上げまする。三名の者は何も同じく重き罪を犯しまして御座りまする。」
洋「恐れながら、誰彼と申して、輕重の差別は無いので御座りまする。」
各罪を爭つて決する所が無い。陛下も有繫に其志を心中には滿足に思召されたのであるが、三人同罪と謂ふ譯の者ではないから、更に蕾叉に御訊が有る。
「是は重大の事件であるから、其方も有の儘を裹まず言はんければならん。眞僞とも其方の申條に因つて、彼等の罪が定るのであるから、誓つて實の事を申せ。」
蕾「はい。」

「此の三人の中で其方を辱めたのは誰か。」
蕾又の蒼白き頬は始て薄紅を帶びたるのみで、敢て言はぬのである。
「奈何じや。」
蕾「何の方で御座いましたか、存じませぬで御座います。」
「判らんと申すか。乾と然やうか。」
蕾「はい、見覺えませぬで御座います。」
陛下は良久く打案じ給ひて、
「然らば朕が旨を以て裁斷するより外は無い。先づ三人の中の年長者は誰か。」
呉城中尉は一揖して、
呉「私に御座りまする。」
陛下は重ねて、
「最も家の富んで居るのは誰か。」

之に答へまつるのも亦呉城中尉であつた。陛下は御聲高く、

「其方此娘と結婚を致せ。」

此の意外なる宣告を受けた呉城中尉は自失するばかりに呆れ惑うたのである。

「今宵直に聯隊の會堂に於て結婚式を擧ぐるのであるぞ。其方に屬する一切の財産は總て新婦たる蕾叉に讓るやうに。他の二人の財産も同樣の處分を申付くる。又三人の者は今夜式の濟次第西比利亞へ追放致すに因つて然やう心得るやう。」

蕾叉は吾を忘れて傾伏さんと爲るばかりに拜謝した。父は軍醫の格を以て嚴正に敬禮を表するのであつた。

旋て眼を轉じて伯爵夫人を御覽じたる皇帝陛下は、其の愁然として顏色無く、今は此世に望も絕え果てたる體なるを可憫に思召されて、

「伯爵夫人の愁傷は實に察し入る。人の爲に計つて忠なる其事は、不幸

にも却つて身の仇と成つた。然し、此の慈善に對する眞の報酬は、必ず天帝の御手より受けらるゝのである。卿が正理に與する心は、今後一層貴夫人を敬うて毫畧は無い、と云ふ事を能う記憶して欲い。」と御挨拶有つて座を起せられたが、又三人を顧み給ひて、

「其罪、因つて追放は命じたなれど、其方達が友誼の厚きに愛でゝ、爵位幷に官職等は其儘に差許すぞ。」

此に一同は御前を退出した。

即夜奇怪なる結婚式が擧げられて、其場から西比利亞へ追放と云ふのであるから、加害者も被害者も唯夢に夢る心地。彼方でも此方でも支度の忙しさは、秒時をも爭ふ間に、日ははや暮れて、聯隊の會堂には一面に紅氈を敷塡め、數千の蠟燭を耀し、近衛の將校は一同大禮服着用で列席して居る。皇帝陛下の御名代として侍從武官長、皇后陛下の御名代としては一名の女官が臨場して、威儀堂々と盛典の擧げらるゝに反して、既

の前には罪人を載する馬車が既に準備せらるゝのであつた。
偖此式の名譽立會人に選ばれたのが、靈象府と澤毛野とで。阿茅淳公爵夫人も澤毛野の母も列席したのは、此の盛典を觀んが爲と謂ふよりも、其の子、其弟に盡きせぬ名殘を惜まんが爲であつた。呉城中尉は伯母なる伯爵夫人に伴はれて式場に入來ると齊く、琅々として讃美歌の聲が起つた。聖斷の名の下に結婚の暴刑に處せらるゝ彼が心中の悲憤は其の面上に溢れ、歩々に怨を帶びて來賓席の前を横截り、やをら己の座に着いた。此に歌は止んで、場内暫く靜肅になつて後、劉喨たる樂の音の起ると與に、耀しく禮裝またる侍從武官長に導かれて入來る新婦の蕾又は悄然として、滿身に紗を被いだる頭には橙の花ならで薔薇を插み、純白の上衣を透いて下襲の黑の見ゆるなど、總て再婚者の服飾を用ゐたのである、其意は彼は妻にもあらず、寡婦にもあらず、又娘にもあらずと謂に在るので。

呉城中尉は新婦の來るを見て座を起ち、一歩進めば、蕾叉は新郎に手を與へた。式は之より始るので、讃美歌は再び湧いた。僧正は夫婦の前に立つて一場の演說有りし後、呉城に問ふ、

「御身は斯人と結婚することを望まるゝか。」

尤も望まぬのであるが、處刑と有れば是非無くも、

呉「仰せの通り。」

僧正は又蕾叉に向つて、同樣に問ふのである、是とても意ならねど、式の如く答へた。次で齎された黃金の盃には神酒を湛へて、先に夫が唇を着けて、次に婦が甞むる、之を三度廻して納めれば、名譽立會人が中に立つて指環の取替が有る。然る後夫婦は僧正に伴はれて神前に拜する。露西亞の習として此に僧正が、

「接吻せよ。」

と命ずるのであるが、蕾叉は此時始て呉城と面を合せたのである。固よ

り双方不得心の此の結婚。男は女を我等に憂目を見する七生の敵と惡み、女は男を其夜の人か、あらずかと疑ふのであるから、互に睨合ふばかりであつた。

「接吻せよ。」

と僧正は再び命じたが、未だ躊躇して決せぬので、

「疑ふことは成りませぬ、神の命ずる所でありますぞ。」

と聲高く勵した。呉城中尉は是までなりと覺悟して、其の高き身材を少しく屈めて、新婦の頰に接吻した。

式は之を以て全く了つたのである。参列者は一同夫婦の前に集つて各祝儀を述べる。伯爵夫人は新しき姪として蕾又へ挨拶がある。恁る間にも幌尾老人の氣遣と云ふものは一樣でない。今親子の者は聖斷を仰ぎし一件に就て貴族社會の憎惡を負うて居る際、其の敵の群る中に立交ふのであるから、如何なる危難の身に及ばんも知るべからずと、手に汗を握り

つゝ、驚破と言はゞ爲んやうありと、些も蕾叉の傍を離れず、用心堅固に身構へて居るのであつた。

吳城中尉は先づ新婦に挨拶を作し、僧正には感謝の意を表し、扨朋友親族に連られて休憩室に行き、即刻旅裝を整へねばならぬのである。蕾叉親子は誰一人管ふ者も無く、空漠たる會堂の中に取殘されて、眞晝を欺くばかりなりし蠟燭は皆消されたる微黯に立つて居ると、士官の妻などが二三人傍に寄つて來て、物珍しげに兩箇を看ては呀合ふのであつた。此の冷遇、侮蔑に堪へかねたる蕾叉は、

蕾「お父樣、殘念ですね。這麽目に遭ふくらゐならば、私は死んだ方が勝だと思ひます。」

父「何有、讐は首尾好う討つたのじや。讐さへ討つたら、それで可いと思はんけりやならん。」

蕾叉の傍に來て一禮する者が有る、見ると宮中の用人、

田「伯爵夫人の御車は御用意が出來まして御座いまする。」
伯爵夫人とは誰の事、己の事であつたから蕾又は驚いた。己は今夜から伯爵夫人に成つたのである。又其が爲に三名の貴族は同時に西比利亞へ流さるゝのであると心着いた。
蕾「少し待せて置いて下さいまし。而して是非私がお話を致したいと伯爵にお通じ下さい。」
父「お前何云ふ話を爲るのか。」
蕾「いゝえ、些と申したい事が有るのですから。」
旋て呉城中尉は服を更めて、毛皮の帽子を片手に入つて來た。今や彼は憤を忍び、恨を呑んで流竄の途に上るのであるから、一種謂ふべからざる悲慘の顏色を作して居る。
呉「何ぞ御用ですか。」
蕾「些と申上げたい事が御座いまするので、少々御出立の御猶豫を願ひま

す。」

呉「婚禮の濟次第出發せよと云ふ勅命でありますから、」

董「此度は陛下の思召を以ちまして、過分の御沙汰に預りましたので御座いまするが、私は決して箇樣な結果を望みましたのでは御座いません、何も彼も實に意外で、…………。」

呉「然し、御滿足で御座いませう。」

董「いゝえ、決して是迄に貴方をお困め申す心は無かつたので御座います。今と成りましては恐れながら陛下の御聖斷が酷に過ぎまするやうに私は考へますので。」

呉「御聖斷に對して彼此申上げるのは不敬であります。其は左に右、貴方は何故に今と成つて私を然やうに不便に思召して下さるのですか。」

董「それは、若も貴下が御三方の中の重罪者でなくて、其の罰をお受けあそばしたと致したならば、實に私は何と申上げやうも無く、御氣毒に存

じますので御座います。」

之を聞いて呉城中尉は、苦笑をゑた。

呉「いや、私共は三名ともに重罪者であります。」

雷「いゝえ、お覺も御座いませうが、私の名譽は是非とも御三方の中の一方に回復して戴かなければ成りませんので御座います。其の一方は誰方で御座いますか、陛下の御前でも仰が無いので御座いましたが、其ばかりを私は殘念に存じます。箇樣な事をお話いたしまするのは、私もお可懲いので御座いますが、」

と雷叉は兩手に顏を掩つて了つた。

呉「今更那樣事を有仰る必要は無いでせう。伯爵の位も、伯爵の財產も貴方の御手に入つたら、それて貴方の名譽は十分回復されて居るのです。もう其上を御望みなさらんでも宜いでせう。」

雷叉は此雜言を胸に据ゑかねて屹と面を正した。聲は少しく顫つて、

蕾「何と有仰います！私の軀は汚れて居るか存じませんが、心は些とでも汚れて居るのでは御座いません。伯爵の位、伯爵の財産、那様物は少しも欲くは御座いません、私の滿足は其人の姓名を明して戴くので御座います。然ぞかし御不承で被在いませうけれど、名義だけなりとも蕾叉は貴方の妻、其の妻にお裹み遊ばす必要は無からうと存じます、どうぞ有仰つて下さいまし。」

吳「好い加減になさらんか。貴方も自分を辱めた者を御存無いと云ふ筈が無い。私も決して包み隱すではありません、お明し申す必要が無いのです。」

今は蕾叉も爲方無く、基督の聖像を指して、言ふことの詐ならざるを誓つたのである。其姿の畵も及ばざる麗しさに、吳城は覺えず恍然と見入つて居た。忽ち彼の心頭に浮んだのは、過ぎし夜の紅茶屋の光景で、蕾叉の叫聲は再び耳を貫いて響くが如く感じらるゝのである。さては蕾叉

は己を辱めし者の顔を見識る能はざるまでに恐怖して居たのであらう。思へば無道な事を爲た、不便の者であると、有繋に彼を憐む情も起つて、其人こそはと既に打明けんと爲る刹那、轣轆として轟く車輪の音は、己等を西比利亞へ送らんとする檻前の門前に來るのであつた。彼の優しき心は之が爲に挫かれて、復讐の一念は又激した。

「我儕三人が是程の嚴刑を科せられたらば、罪は既に償はれて居るのです。其の罪さへ償はれたらば、貴方は何も申分は無いではありませんか。これで御暇を致します。貴方は隨分樂く御暮しなさいまし。」

と言ふなり踵を回して、足音暴く獄は出て行つた。其の後影を見送りたりし蕾又は、旋て聖像の前に跪いて、

「尊き神よ、願くは罪人をして彼ならしめよ。妾は彼を愛するなり。」

馬車の鈴の音は喧しく起つた。はや彼等は出發するのである。蕾又は此を走り出で丶、戸外に近き窓際に立寄つた。雪は繽紛として今降初めた

氣色、三人の囚徒は僧正の前に並んで最終の祈禱を受けて居る。何の程にか雲霞の如く集りたる市民は、此の憐むべき罪人に同情を表せんとて、來りて告別の涙を灑ぐのである。門内に整列したる兵士は、其の敬愛せる隊長の遠行を送らんと、手に〳〵松明を擎げて、悲む色も顯なり。涙の顏を得擧げぬのは澤毛野老夫人、弟に接吻して、切に其の健康を祈るは阿茅渟公爵夫人、互に犇と手を把つて、飽かずも顏打目戍るは呉城伯爵夫人と其甥とである。

三人は終に檻車に乘移れば、騎馬の憲兵が手綱を搔繰ると與に車は徐に軋り初めた。市民は情に堪へずして一度に聲を揚げる、降頻る雪を衝いて車は門を出た。雷叉は其の響の次第に遠く、迢に霞みて、漸く聞えずなるまで石の如く立盡して居たが、父に驚かされて始て夢の覺めたる如く、

萬「お父樣　參りませう。」

連立つて入口に出れば、美々しき二頭立の馬車が其處に控へて居て、馭者が聲を掛けた。

「伯爵夫人の御車は此に居りまする。」

（十）　財産目録

親子は此車に乘つて、伯爵夫人の生家と云ふには餘に相應しからぬ吾家に歸つた。實に此の一夕にして雲泥の地を易へたる蕾叉が身上の大變化は、他の驚くよりは彼が自ら多く驚いたのである。蕾叉は之が爲に夜すがら睡られぬのであつた。晨ともなれば、夙に雪を踏んで父と倶に亡母の墓に詣でゝ、泉下の靈も如何ばかり喜ぶ事ならん、と父は感涙を流して此上無き滿足の體であつたが、それから還つて來ると、張充めし氣の弛から、遽に心身疲勞の狀を呈して、一時に十年も齡を取つたやうに頽然と衰へて了つた。

蕾叉は己の居間に入つて見ると、驚く可し、テエブルの上には朋友親屬其他識る限の方から贈つた祝儀の花は、色を競ひ、香を爭つて山の如く積んで在る。彼等は多く蕾叉の母の物故を悲まざりし人、中には幾と此

の親子を見棄てた者の名さへ有る。蕾又は此の贈花を見て寂しげに苦笑するのみであつた。
程無く來訪者は入替り立替り推寄せて、賀を述べる、世辭を抒べる、詫びる、佞ふ、何處を推せば那樣音が出るかと思ふやうな事を言散す、聞くのも煩くて蕾又は耳を潰して應接して居る。漸く客の絶間を見て、親子は呉城家に赴いたが、其の家人共の爲に又々侮り輕んぜらるゝ事ならん、と二人は覺悟の前であつた所、案に相違して、一同謹んで伯爵夫人の命を待つのみで、縮まぬばかりに戰々して居る。彼等は斯人の陰身には皇帝陛下が添はせ給ひて、手を觸るれば立どころに罰ある事、吾殿に鑑みても知るべし、恐るべし、と一圖に念つて居るのである。
蕾又は先づ夫の居間に案内させた。闥を啓けると父親は鼻の下を延して、
父「噫、立派なものじや！」
と覺えず口走つたのも理で、呉城家は貴族中第一位とも聞ゆる富を擁す

るので、室内の裝飾は臻らざる無きまでに善美を盡せるが上に、尤も由緒有る名門であるから、他に見る可からざる珍器奇品の數を藏して、僅に其の一二に過ぎざる者が飾つて在るさへ、既に目を驚かすに足るのである。家從は室の床に敷いてある熊の皮を指して、

從「是は殿樣が兩三年前に獵に御出ましに相成りまして、御自身に御仕留あそばしましたので御座りまする。」

父「あゝ、然やうですか。」

と父親は見る物毎に片端から感服ばかり爲て居た。蕾又は別に思ふ所有り氣に、冷然として唯一遍目を配るのであつた。

從「伺ひまするが、奥方樣には此の御居間を御住に遊ばしますで御座りまするか。」

蕾「いゝえ、私共は此方には居住を致しません。」

從「はつ、では御別莊の方にでも？」

蕾「いゝえ。」

從「はっ、然やうなれば何方に？」

蕾「依樣今までの宅に居ります。」

從「はっ、では當御殿へ御引移は御座りませんので？」

蕾「はい、自分の宅が有りますから、其に居ります。」

當家に嫁ぎながら自宅に居る、其の自宅と云ふのは長屋で、長屋に吳城伯爵夫人が住ふ、家從は呆れて了つた。

蕾又は壁に掛れる肖像畫を見て、

蕾「是は誰方樣です。」

從「其は殿樣の御令妹で被居れます。」

蕾「次のは？」

從「是が殿樣の御母公樣で。實は此の御肖像は彼地へ御持に相成りまするので御座りましたが、御取急で御失念あそばさましたので御座りまする。」

蕾「それでは早速お送り申上げなければ成りますまい。」

從「御意に御座りまして。」

蕾又は家從の顏を眺めつゝ姑く考へて居た。

旋て屹と心を決した體で言出した。

蕾「貴方は殿樣の御着先の居所は御存じですか。」

從「承知いたして居ります。」

蕾「それでは直に御送り申上げるのですから、何ぞ大な箱を持つて來て下さい。」

委細心得て家從は出て行つた。長椅子に倚懸つて居る老人は膝の上に兩手を置いて、然も委頓した態をして惘然と娘の方を見て居るのみて、進んで話を爲る元氣も無いやう。家從は手丈夫に出來た大箱を持たせて來た。蕾又は彼に指圖をしながら自ら手を下して、室内に在るほどの貴重品から書類など迄一切其中に納めて、彼の二面の肖像畫をばテエブル掛

に包んで、是も倶に籠めて、

萱「早速此箱をお送り下さい。」

從「畏りまして御座ります。えゝ、殿様も然ぞかし御喜び遊ばします事で御座りませう。」

萱「貴方は何と云ふ御名ですか。」

從「手前は不破瀬と申しまする。」

萱「あゝ、然うですか。自今は始終此邸の事に就いて萬事報告をしてお貰ひ申したいのですが、何事も殿様の御在の時と少しも變らんやうに致したいのですから、どうか其の積で。それから、別して注意してお貰ひ申したいのは、殿様の御不在中には一品たりとも物の紛失しませんやうに、殿様が御還になつたらば、此儘些も變らない所を御覧に入れたいのですから。」

從「はつ、然やうなれば殿様には再び御還り遊ばしますで御座りませうか。

と彼は潸々涙を落した。

蕾「直に御還になられる事と思ひます。」

從「はっ、然やうで御座りましたか。何卒一日も早く御還り遊ばしまするやう、又其までは隨分御健勝に被居れまするやう、只唯々御案じ申上げまするで御座りまする。」

蕾又も打萎れて立つて居る其の姿を、家從は頻に眺めて居たが、何思ひけん進み寄つて、恐る〳〵其の手に接吻するのであつた。

蕾「申して置きますが、貴方は一週に一度づゝ私の宅まで出向いて下さい。然して種々御話を聞く事に致しませう。今日はもう是で歸りますから。」

と父を見返れば、長椅子に倚つたまゝ首を垂れて、何時かすや〳〵と睡つて居る。冬の薄日を承けた其の顔は、此世の人と想はれぬまでに、蒼白く痩衰へたるのを見て、蕾又は心の中に痛く驚いた。

從「只今御馬車を申付けまする。」

と行かんとするを呼留めて、

薫「それには及びません、あの、其處へ行つて、辻車を頼んで來て下さい。」

從「然やうな物に召しませずとも、御邸に御用の御馬車が御座りまするのですから、唯今直に支度を致させまする。」

薫「いゝえ、私は少し考量が有るのですから、どうぞ管はんで置いて下さい。」

從「はつ、然やうなれば強ては申上げませんで御座りまするが、では、那の辻馬車を？」

薫「どうぞ然して下さい。」

辻馬車に召れて長屋へ御歸館あらせらるゝ伯爵夫人、不破瀨は愈よ呆れたのである。

幌尾老人は馬車の内も始終昏々として居たが、家に着くなり寢床に入つて、正體も無く睡つて了つた。扨其夢は覺めても、彼は蓐を離れ得ぬ身

となつた。疾と云ふのは、精神の過勞が因て、急劇なる衰弱を來したのである。

病勢は日に〱募るばかりで、醫藥の驗も無く、枕に伏して僅に十日と保たずして、老軍醫は孝女の優しき手に抱かれて永眠した。

彼の遺言は、第一に、堅く今日の志操を守つで、惑はず、上は皇帝陛下の盛德に負かず、下は幌尾の家名を瀆さゞらんやう、必ず其の終を全うせよと謂ふ事。第二には、母の忌すら明けぬ間に又父の喪に籠らんは、年若き身の餘に可傷ければ、我が忌服は畧すべしと謂ふ事。

世間では皆謂つた、彼は非職の一軍醫として死んだのではなくて、實に吳城伯爵の岳父として逝去せられたのであるから、身後の榮ある盛大の葬儀が營まるゝ事であらう、と陰に刮目して居たるに、其妻のと寸分差はず質素千萬なるには、誰も一驚を吃せぬ者は無かつた。

蕾又は是等の費用を辨じて後、金匣を探つて僅に拾ルウブル（拾壹圓强）

を得た。此の拾ルウプルなる者は豫算の殘額ではなくて、彼の身上の有丈であつた。之を僕に渡して、

薔「今月は是限しか無いのだから、是で好い樣に遣つておくれ。」

僕「是は拾ルウプル！」

薔「然うだよ。」

僕「拾ルウプルでは如何な事にも、」

と僕は頭を掻いて退避いだ。

薔「死にさへ爲なければ可いのだから。」

僕「へい、死んぢや耐りません。」

と云ふやうな、見る影は無い内面の都合、此へ伯爵家の不破瀨が弔問に來合せて、此の爲體を見、又之に處する夫人の度量を見て、頗る畏敬の念を起したのである。彼は呉城家の家人總代として哀悼の口上を述べ了つて、

不「扨何ひまするが、私共は御喪中の所は如何致しまして宜いので御座りませうか、何分御指圖を願ひますで御座りまする。」

菫「いえ〳〵、決して然云ふ御念には及びません。歿りましたのは、伯爵夫人の父ではない、或る一個の軍醫で、伯爵家とは何の縁も無いので、家來衆が忌服するには當りませんから、其のやうに心得て下さい。」

不「はつ、心得まして御座りまする。それに、實は、御取込中を甚だ恐入りました儀で御座りまするが、本日御別莊の方から致して麥の賣上代を送越しました譯で、右の金は如何取計ひませうか。」

菫「其の別莊と云ふのは何地です。」

不「御別莊の在りまする處は小鞠野と申まして、御領分中では此が一番大いので、夏場には例年其へ御越に相成りました。然る處、此度殿樣の御出立や何や彼やで、御別莊の召使共に給料が未だ渡りませんで居りまするが、是も何とか致しませんではと存じまして。」

菫「あゝ、可うございます、其は私が取扱ひます。而して麥の賣上と云ふのは何程迄つて參つたのです。」

丕「えゝ、二萬三千ルウブルに御座ります。其外家政上の事に就きまして未だ色々と申上げたい儀も御座りまするが、今日の事で御座りますゆゑ御遠慮を申上げまする。」

菫「それは急の用ですか。」

丕「はつ、可成は至急に取計ひたく心得まするで。」

菫「然やうなれば、明日私が出まして善く伺ひませう。」

丕「何時頃御越に相成御都合で御座りませうか。」

菫「三時には參ります。」

丕「御食事の御支度は如何致しませう。」

菫「支度には及びません、些と行く丈ですから。」

丕「二時過には御馬車を差出しますで御座りまする。貴方樣が御召に相成

りませぬと、馬は全で罷休て、病氣が出ますするゆゑ、どうか節々お召あそばしますするやうに。」

蕾叉は塵一筋と雖も伯爵家の物をば私するを屑しと爲ぬのであるから。之を聞いて少く遲つたが、

「然うですか、では迎に寄越して貰ひませう。」

不破瀨は是で立去つた。蕾叉は父の永眠した其の室に入つて、熟く身の行末の振方を考へたのである。實に不思議なるは彼が今の身の上で、家には倶に棲むべき母も亡ければ父も亡く、嫁いだ夫は遠い西比利亞に謫せられて、其の留守を爲ねばならぬやうなもの丶、伯爵夫人は名義のみで、呉城の家族として振舞ふべくもあらぬのである。然れば幌尾の娘にもあらず、呉城伯爵夫人にもあらず、何方就かずの蕾叉をば如何に處置すべき乎、思廻すほど當惑するのであつた。

翌日の午後二時ともなれば、伯爵家の馬車は長屋の礎を轟かして夫人を

迎に來た。蕾又は之に乘つて吳城家に導かれると、玄關には不破瀨が出迎へて居て、直に伯爵の書齋に案內する。煖爐の前の安樂椅子に請じて、彼は小さき鍵を夫人に渡した。

「此の隅の御簞笥に御別莊から達きました金が納めて御座りますから、どうぞ御撿を願ひまする。それに御當家の御財產目錄も之に入つて居りまする。」

起つて其の簞笥を啓けて見れば、二萬三千ルウブルの銀行券が紙包にして横つて居る。蕾又も之に對して有繫に考へたのである、此には二萬三千ルウブルと云ふ大金が無雜作に轉してある、己の財囊には單の十ルウブル、其も昨夜から今日へ掛けて若干か減つて居る。それで左にも右にも今月を支へねばならぬと云ふのに、此の莫大なる金子は誰の物であるの乎、皇帝陛下より下し置れたる己の物である。己の物は二萬三千ルウブルの銀行券には止まらぬ、當家重代の珍寶奇品を始として、金銀珠玉、

服飾器財、此の邸まで、總て己の所有に屬するのである。とは謂ふものの、義として其富貴に處るべからざる蕾叉は、飽く迄老軍醫の孤兒の名の下に十ルウブルの貧に堪へねばならぬ。我必ず之に堪へんと彼は私に頷いた。

蕾「それで昨夜お話の有つた給料と云ふのは何程ですか。」

と彼の銀行劵の包を解いて、不破瀨が示す計算表の額を支拂つて、其を明細に己の手扣に記した後で、頻に殘額を算へて居た。傍に不破瀨は、其金を夫人は如何に始末をするであらうかと、胸轟して見て居るのであつた。彼は此際一言述べたいのは山々でありながら、越權の不敬を憚つて言ふには言はれず、言はで已むも心苦しく、取つ舍つ思案するのは幽囚中の主の身の上。

殿には立際に持て行れた金子も多分ならねば、直に費ひ果さるゝ事であらう。西比利亞の如き邊土にては物價などは非常に高いと聞く、其處に

在して不自由なる御身は物一つ調へんにも、看守の、警護のと彼方此方に心附の要る事なれは、求むる所少くて、費ゆる所多く、其が爲に一層苦艱を增さるゝのであるものを、せめては那の金を請受けて御手許へ差上げたらば、殿の御喜は如何ばかりならんと、彼は漫涙に曇る目を睜つて、夫人の劵を數ふる手頭を凝々然と打目戍つた。

夫人は勘定を了ると、一萬五千ルウブルを別封に𠕋て、其を狀袋に入れたが、日ははや傾いて手元は黯い。

薰「蠟燭を。」

不破瀨は直に蠟燭を點して來て、デスクの端に置くと、夫人は筆を採つて、さら〳〵と上書を𠕋て、

薰「明日の一番の便で之を出して下さい。」

不破瀨は之を受取つて見ると、西比利亞の殿へ宛てゝ在るのであるから、餘の歡喜に滂々と淚を流した。胸が逼つて物が言れぬので、矢庭に跪い

て、夫人の手に接吻したのである。然ほどに喜ばるゝ蕾又の心の内は又謂はうやう無く樂いのであつたから、麗しい目をして熟と家從の顔を眺めて居た。彼は軈て起上つて件の封金を推戴き、

丕「難有う存じまする。手前は實に嬉うて〱、何とお禮を申上げましたらば、此の感情を表すことが出來るので御座いませうか、手前が此金を頂戴致しましたよりも、實際嬉いので御座りまする。殿樣には然ぞかし、まあ西比利亞の雪の中で今迄に御存知の無い御難儀を遊ばしまする事で御座りませう。寒さは寒し、寂さは寂し、右も左も御不自由ばかりて、所好な御貴も召上られず、明暮戀しう思召るゝのは都の空、不破瀨のやうな這麼親仁の身の上でも、都居住を致して居れば、可羨しいと御考へ遊ばす折も御座りませう。而して何事も御不足の上にお管ひ申上げる者とても無いので御座りまするゆゑ、目も當てられぬ情無い御姿にお成り遊ばして、生効も無いやうに思召されながら御暮しなさるゝ事と考へま

すると、手前は夜の間も寐る空は御座りませぬ。手前は殿様には其方此方二十年も御附申して居りまして、恐多い申分ではは御座りまするが、我子も同様にお怜しう存じまするので。此の金子を御受取あそばしましたらば、箇程までに奥方様が御注意下さる事を、殿様にも嘸ぞかし御満足に思召さるゝで御座りませう。手前は此齢に相成りましても、箇様な嬉い事はついに覺えませぬで御座りまする。」

不破瀬は殆ど神に隨喜するが如く、此の夫人の德を感じて極る所を知らざるのであつた。彼の伯を思ひ、己を恩と爲るの恪くばかり篤きを見て、蕾又は却つて身を祈らるゝやうに覺えた。

「那樣に貴方が喜んで下さると、私も甚麼にか嬉いのです。此後とも殿様の御身に就いては十分に御注意申上げる積ではありますが、到らん所はどうぞ遠慮無く心着けて下さい。」

「えゝ、もう奈何仕りまして、手前風情が企及も無い事で御座りまする

唯手前より何分とも殿様の事に就きましては、末長く宜うお世話下されますするやう懇願いたしますで御座りまする。」

篤「それは、もう、及ばずながら御盡し申す積。で、もう用は有りませぬから、貴方は隨意に那方へ。」

不「はっ。伺ひまするが、之には貴方樣の御名がお記し御座りませんが、無論御差出人は奥方樣で？」

篤「いゝえ、それは貴方の名にして下さい。」

彼は一禮して退出した。迹に蕾叉は伯が在りし頃常に憩へりし其の安樂椅子に身を委せて、稍半時間許と云ふもの、睡れる如く靜に沈吟して居るのであつたが、何を思へるにやあらん、閉ぢたる眼より流るゝ涙は玉の頰に輝いた。

(十一) 文中の秘密

其後蕾又は屢ば伯爵家を見舞つて、夫の手澤ある器具を眺めたり、藏書を取出したり、又折節は老實なる不破瀨を召して昔語を爲せなどして、當時の身上では其を消遣と爲るのであつた。

誠に此の尊敬すべき新夫人、彼は一意に吳城家の好運に向ふ事をのみ計つて、孜々として倦むを知らぬ。現に同家は從來鰥生活であつたから、何と無く家內の秩序が立たず、經濟なども頗る亂れて居たのを、蕾又が出入してからは、尤も此邊に意を用ゐて、家人の監督を嚴にし、冗員は別莊へ廻して用に中てる、濫費を十分に節すると云ふ始末であるから、收入は遽に裕となつて、目に見えて富は益す累るばかり。不破瀨は心の底から敬服して、吳城家の守本尊と推戴くのであつた。

或日蕾又は簞笥の中を形付けて居ると、古手紙の一纏にしたのが出たの

て、何氣無く一通を取つて披き見ると、讀むに堪へざる色文であるから直に煖爐の中へ投込んで了つた。所が、未だ女筆のが有るから、是も火中すべき者かと展べて見ると、女は女であるが、伯爵の實の妹の、豫て名を聞いた繪蓮と云ふのゝ文。此の婦人の事に就ては不破瀨から話も有つたが、彼は決して人の短を說かぬ性で、唯褒めるばかりで更に要領を得ぬのであるが、伯爵との間に何か不和の事が在つて、音信不通で居るらしい、と常に蕾叉は疑つて居たる處、今ゆくりなくも其の秘密を文中に發見した。

繪蓮なる伯の妹は今より十二年前に夫に死別れたと察せらるゝが、其の死狀が一件の問題で、世間の沙汰にも乘つた程の者らしい。即ち變死である。其の變死に就ては繪蓮も嫌疑者の一人と傳へらるゝらしい。因て文面は、身の潔白を縷々と述べて、其寃を雪がん爲に兄の助力を乞ふのであるが、伯は之を顧も爲なんだものと見えて、追掛けて三通ほど反復

哀願した末に、痛か兄の薄情を怨んだのが有る。蕾叉は殘らず見了つて、熟と考へて居たが、旋て其文は舊の處に收めて、直に不破瀨を呼寄せた。

蕾「不破瀨さん、曩日那の殿樣のお妹御の事を些と貴方から聞きましたが、私少し考が有るのですから、貴方の知つて居る丈の事を話してお貰ひ申したいのです。」

不「はつ。」

蕾「何云ふ御方ですね。」

不「誠に溫厚な、結構な奧樣で被居れまする。」

蕾「で、當時は後家でお在あそばすのでしたね。」

不「御意に御座ります。」

蕾「お子樣方は？」

不「お七歲にお成なされまする若樣がお一方お有あそばしまする。」

蕾「而して旦那樣は何で御歿りあそばしたのですか。」

不「はっ、御歿りあそばされましたので御座りまする。」

萱「御病氣でゞすか。」

不「多分然やうかと存じまするが…………。」

萱「貴君は二十年も當家に勤めて御在のではありませんか、それで姫樣の御配耦が奈何なすつたか、悉い事を知らんと云ふのは、些と受取りかねるではありませんか。」

不「はっ。實は……………猶且其の……………御病死で。」

萱「何御病氣でした。」

不「はっ。御病氣は……………猶且……………其の……………究竟頓死で。」

萱「不破瀨さんはまあ何を言つてお在なのでせう、病氣に頓死と云ふがあるものですか。」

不破瀨老人は慌て惶いた。

不「はっ、はっ。然やう、卒中と申すので御座りませうか。」

蕾「不破瀨さん、聢と然うですか。」

不「はつ、確か然やうで御座りました、はつ。」

と禿顱から烟を立てゝ窘縮の體であつた。蕾叉は到底此口を開かせる事は難いと見たから、強て追窮は爲ずして、はや時刻も遲しと席を起つて、直に歸らんとした。

不破瀨は其體を見ると、言遺したことを思出したと言ふ風で、

不「えゝ、奥方樣には些と御別莊の方へもお遊旁お出向に相成ましては如何で御座りませうか。追々時候も宜う相成つて參りまするし、餘程閑靜な、風景も好い處に御座りまする。それに、此方から御高臨が御座りませんと、段々管理が不行屆に相成りまして、何彼に就けて御爲に成りませんで御座りまする。」

蕾「然し、差當つて出向かなければならんやうな事も無いのでせう。」

不「はつ。別に態と申す次第も無いので御座りまするが、繪蓮樣からの御

文で御座りまして、殿樣の御出發に就きましては那方も大混雜で、其以來規律が立ちませんで、奉公人共が天平吾平に遣つて居りまする樣子に御座りまするで。」

蕾「然云ふ譯なら直にも見廻に行かなければなりませんね。」

不「御意に御座りまする、可成お早いが宜しいかと存じまする。」

蕾又は再び席に着いて、有間熟と考へて居たが、

蕾「一週間ほど經つたら參る事にして、而して當分私は那方に住んで見ませう。」

不破瀬は此の果斷に驚いたが、又頗る喜んだ。夫人が一たび手を着れば、快刀の技倆は忽ち家政の亂麻を斷ち來るは疑を容れざるのである。

蕾又は翌日早々發足の支度に掛つたが、第一に幌尾の世帶を一先疊まねばならぬ。長年召使ふ料理人だけ供に伴れる事にして、給仕には暇を出し、家財は知邊の方に預け、萬端始末して、いよ〳〵出立の前晩吳城家

に出向いた所が、最早留守の用意をして、室内の裝飾品等には一切白布の覆が掛つて、見るから裏寂しく感ぜらるゝ。蕾又は此中を徘徊しつゝ、物思はし氣に爲て居たが、卒然不破瀨に訊ねた。

蕾「殿樣は先日お送り申した箱をもうお受取になつたのでせうね。」

不「はつ、確にお受取あそばしました。」

蕾「お喜び遊ばしたでせうか。」

不「はつ、それは非常な御喜で御座りまして、何一つ心を慰める者も無い中に、箇樣な物を心着けて送りくれた深切は、身に浸みて忝い、と懇な御書面で御座りました。」

蕾「それから金子は達きましたらうか。」

不「無論到着致しましたで御座りませうが、未だ其の御便は御座りません。」

蕾又は此の夜吳城伯爵夫人の邸に暇乞の訪問をして、證に名刺のみを差

置いて、別に面會は申入れぬのであつた。後より不破瀨を以て、小鞠野の別莊に移轉する旨を通じ、絹蓮に用事は無きやと問はしめた。然る處伯爵夫人は不破瀨に向つて、

夫「別にお賴み申す程の用事も有りませんから、宜う傳へて下さるやうに。時に、不破瀨、お前は今度御出の奧方を奈何考へますか。」

不「手前は那云ふお希しい御方には今までお目に懸りました事が御座りません、誠に御家の御名譽と心得まする。」

夫「然やうかね…………。」

と伯爵夫人は何故か深く嘆息した。

（十二）勤儉貞淑

呉城伯爵夫人は甥の結婚一條に就て、小鞠野の繪蓮の許へ委細の通知を爲たのであるが、其の大要は、呉城が若氣の至から不慮の禍を招いて、今度の始末に及んだは、悔いて復へらぬ事ながら、同族の爲、一門の爲慨きても猶餘有る次第にて、己も圖らず此の事件の渦の中に巻込れて、謂知らず心を惱した事である。然りながら、新夫人蕾叉と云ふは、財産とては無けれど十分の敎育有りて、而も性質温和に、其の德高きことは、當今の女流に見るも希なる所。あはれ、呉城家の爲には好き夫人を得たり、と己は心私に喜ぶのである。いづれ其地へも行かるゝであらうから、其節は宜く觀察して、思ふ所を通じ給へ、と云ふのであつた。此の新夫人蕾叉の事は當地に於ても非常の取沙汰と成つて、誰も情として主家を念ひ、殿の身上を悲まぬ者は無いから、一村擧つて蕾叉を忌み嫌ふこと

蛇蝎の如く、他は毒婦よ、美人局よと陰ながら指彈をして居る際に、此の別荘へ來ると云ふ事が聞えたから、村中は鼎の沸くやうに噂を立てゝ、寄ると接ると蕾叉の評判であつた。殊に別荘附近の者は彼を憎む餘、新夫人が見えても決して交際は爲るな、爲まいと云ふ契約をして、今にも其得意の面の皮を引剝きくれん、來れ、遲しと待ちかけるのであつた。

蕾叉は不波瀨と料理人とを率て此に着したのは、五月の半、長き日も傾いて、若葉の綠涼しく夕榮ゆる比。牧場の羊は盡く影を斂めて、路には滿目の野花露を帶びたり、薄霧に罩められたる遠方より陰々と響く鐘の音、又面白き山里の夕暮である。

一行を載せたる馬車は往還に臨める門を深く入りて、幾重の木立の陰に聳ゆる石造の二階の前庭に引込んで、先づ下りたる不波瀨は蕾叉を介抱して、樓下の一室に導いた。誠に伯爵家の別荘ほど有りて、係る邊鄙には相應しからず美麗を盡せる座敷の模樣。テエブルの上に二挺の蠟燭を

點して、壁に掛けたる一面の油畫は伯爵の母の肖像である。

蕾叉は之を見ると乍ちシォウルを脱捨て、蠟燭を把つて其額の前に進み、暫が間目も放たず打眺めた。畫かれたる故伯爵夫人は大禮服を着て、眞珠の首飾を懸け、赤き寶石の簪を戴き、微笑を含める容、呉城中尉とは瓜二つとも謂ふべく酷しく肖て居る。彼は手にせし灯を其處に置いて、我が爲には相見ぬ姑なる人の畫像の前に跪いて默禱した。

「妾が親愛なる夫の母君よ。其靈の天に在すからは、妾が心をも明かに知り給ふならん。願くは、妾が斯の心の誠に愛でゝ、速に吾夫をして、其惜惡を去りて、妾を憐れましめ給へ。」

實に蕾叉は其の心の底に如此く夫を思ふのであつた。彼は廉潔自ら持ちて、苟も伯爵の勳位を戀はず、伯爵の財産を念はぬのではあるが、呉城伯爵其人をば忘るゝ能はざるので、彼の三名の中の誰と異き緣を結んだか、其は未だに知られぬのであるが、彼は自ら何故とも覺えずして、他

の二人は今に到る迄も憎きに、獨り吳城中尉のみは吾夫と定められざりし先より既に娩しらしいのであつた。

蕾叉は最初に所有地の撿分を爲ねばならぬのであるが、夥しい坪數であるから、優に一週間を之のみに費さねばならぬ。次では此の領内に山も有る、河も有る、森も有る、牧場が有る、菓園が有る　逐一之を見物するには猶一週間の日子を要する。其の心算を爲たのみで、蕾叉は到着後三日の休息を取つた最後の日の午過、裏庭の花寮を看やうと思立つて、二階の居間を出て來る途端に、來客の取次が有つた。

取「諸座の御新造が見えまして御座ります。」

蕾「諸座？　それは何云ふ人なのでせう。」

取「繪蓮樣の御家來の妻君で御座ります。」

蕾「直に會ひませう。」

旋て應接間に行くと、其の婦人が控へて居て、初對面の挨拶が有つたが、

如何にも世辭澤山のお饒舌て、優しい聲は爲るが、陰險の相をして居る。

菅「何ぞ御用てすか。」

請「いえ、別に何で御座いまするけれども、奥方様の御着の御祝に伺ひましたので、本にもう何日此方へ御越の事かと存じまして、數ならぬ私共まで、此間中から申暮して御待受を致して居りましたので御座います。」

菅「其は好くね。」

請「奥方様、どうぞ箇様な不束者では御座いまするが、此後ともお見識り置れまして、御家來同樣に御用を仰せ聞けられまするやうにお願ひ申上げまするで御座います。」

菅「はい、難有う、又お世話になります。」

請「奥方様、あの、何で御座いまするか、殿樣は今度天子様からの御申附で西比利亞の方へ御越し遊ばしたと云ふ事を承はりましたので御座いまするが、然やうで被在るので御座いますか。」

之を聞くと蕾叉は謂はう様無き不快を感じた。今日まで誰一人面と向つて此事を言出した者は無いのである。

蕾「其の通ですが、此村の人達は其を奈何思つて居ますね。」

諸「はい、私共は然う思つて居りますで御座いますよ、天子様は私共の御主人様の御主人様で、神様も同然で被在るので御座いますから、天子様の遊ばしまする事に點の打ちやうは無いので御座います。如何な事でも天子様の御申付を背いては相濟みませんので御座います。」

蕾「村の人も皆然う思つて居ますか。」

諸「思つて居ります段では御座いません、それは貴方様。」

蕾「けれども私を憎んで居る者が多いと云ふことを聞きました。」

諸「此村でと御意遊ばすので御座いますか。然やうな事が、貴方様、嘘にも御座いまして可いもので御座いませうか。」

と言つたが俄に聲を低めて、

諸「但、貴方様、私共の奥様――箇様な事を申上げまするのも如何で御座いまするけれども――奥様だけは實の處、貴方様が御嫌で被在いますで御座います。」

董「未だ一度もお目に掛つた事は無いのに……………。」

諸「いづれ奥方様は御面會にお越し遊ばしますで御座いますか。」

董「私がお訪ね申して、お會ひなすつて下さる事なら、今日にでも上りたいのだが、お前さんが今度其を伺つて置いて下さいな。」

諸「それは、あの、奥様も貴方様にお會ひ申したがつて御在ので御座いますから。」

董「でも、今お前さんは繪蓮様は私を嫌つて御在だとお言ひではないかね。」

諸「然やうで御座いますよ、お嫌ひ遊ばして御在おや御座いますけれども、又お目にはお掛り遊ばしたいので御座います。餘程變な御方で御座います。」

彼は猶も言を續けて、

諧「私は本に然う思ひますで御座います、奥様は貴方様とは御兄弟に御當り遊ばすので御座いませう、然やうなれば、貴方様と御仲を善く遊ばした方が、甚麼に御身の御爲に成るか知れは致しませんで御座います。貴方様には天子様がお附き遊ばして被在るのでは御座いませんか。其が、貴方様、奥様には千人力なので御座います。何爲と有仰りませ、奥様には誠に可厭なお噂が立つて居りますので御座いますから、貴方様の御力をお假り遊ばして名譽とやらの恢復とやらを遊ばしますがお宜いので御座います。」

蕾「可厭なお噂と云ふのは何云ふ事なのです。」

諧「奥方様は成程御存無いのも御尤で被在いますが、もう此の土地では誰一人知りません者は御座いません。奥様の旦那様の御歿あそばしましたのは、奈何も尋常事ではないので御座います。其も是も奥様は皆御承知

で御在あそばしながら、別に御訴へあそばすでもなく、ぐづ〳〵に泣寝入にまでお了ひあそばしたので御座います。で御座いますから、世間では何の彼のと悪いお噂も立てるで御座います。」

稍口早に善く舌が廻つて、立續に辯ずるのである。蕾又は呆れて、

蕾「お前さんも、まあ如何な事でも、御主人の事を然う言下すものでは御座いませんよ。些とお慎みなさい。」

諸座の妻も有繁に口數の多かつたのを悔いた氣色で、爲に話の腰が折れて了つたので、匆々に暇を告げて出て行つた。迹に蕾又は庭内を散歩しつゝ思案を凝せる體であつたが、有間あると書齋に入つて不破瀨を呼寄せた。

蕾「私は少し考が有るのだから、綸蓮樣の旦那の——圓磯生樣の御歿になつた事に就て、貴方の知つて居るだけの事實を包まず話して下さいな。」

例の如く先(はつ)と應へた不破瀨は實際事件の眞相は知らぬのであつた

から、依様世上の取沙汰に成つて居る一部始終を語つたのであるが、呉城伯爵と同一の考を有つて居るので、則ち此の老實なる不破瀬さへ彼に就いては疑を抱いて居る。

「那の事件は私も御訴に成つて、十分に御取調あそばしたが宜かつたらう、と考へまするので御座ります。」

「世間で言つて居るやうな始末ならば、どうも然う爲なければならんのですけれど、綸蓮樣は屹度自殺を作つたと信じて御在なのでせう。」

とは言ふものゝ心中では、彼の綸蓮が或は毒殺などを行つたのではあるまいかと疑ふのでもあつた。然しながら、伯爵の妹である以上は、其人の惡名は猶且呉城家の不名譽であつて見れば、若も其が無實の罪であるならば、飽くまで寃を雪いで上げたい、左にも右にも之を曖昧に附して置くべきではないと考へたのである。因て、其後は絶えず心掛けて、彼の事實を探らんと爲た。

村中から蛇蝎視せらるゝ蕾叉は此に來て、唯一人の諸座の妻なる、或は繪蓮の間諜にはあらずやと疑はるゝ其客に訪れし外には、誰交る者も無く、三週間ばかりを過したのである。然るに、或日思寄らずも四頭の白馬に曳せたる美々しき馬車を驅つて、別莊の新夫人に面會を求むる貴婦人が有つた。

其人は當地に於て最も大いなる資産を有し、最も高き敎育を受けて、村民の輿望を負へるほどの人物であつたから、人々が徒に雷同附和して蕾叉を鄙厭するにも拘らず、己の信ずる所を以て、此の新來の珍客と握手せんが爲に駕を枉げたのである。

蕾叉も此の婦人の事は豫て不破瀨から聞いて居るのであるから、禮を厚うして之を迎へ、茶菓を出して歘待したる所、客も蕾叉と會談して、其の尋常の女子にあらざるを知るや、好き朋を得たる可喜さに、深く滿足の意を表して還つた。爾後は逢ふ人每に蕾叉の事を語つて、盛に稱揚す

るのであつたから、平生信ずる波斯野夫人の言を誰疑ふ者も無く、却つて迷夢の覺めたる想の村人は、一人訪ひ、二人訪ひ、三人四人と歩を運びて、桃李の下は自ら蹊を成すてふ蕾叉が門前。彼の不義の人と交らざらんと契約したる連中も追々に旗を捲いて、三箇月許の後には、尠くも波斯野夫人と同等の敬すべき人物を以て蕾叉に許すほどの勢となつたのである。

此に於て蕾叉は益す心を用ゐて領內の住民を愛み、病人には藥を施し、貧民には衣食を給し、專ら慈善を志したので、到る處吳城家の德に霑はざるは無く、餘澤は竟に領外にまで溢れて、新夫人の美名は四方に謳はるゝのであつた。

吾兄を流竄せしめ、吾家を押領したる可憎き仇よと絶えず心の底に刃を磨いだ繪蓮も、萬事に就けて痒き處に手の達く蕾叉の所計、陰になり、陽になつて己を扶くる、叉は親く目に睹る毎日の善行は、牙を藏して羊

を裝ふ者の爲し能はざる所、と漸く我折つて感激の餘、西伯利亞なる兄の許へ故々文して彼の德を彰した。

之を手にした吳城は、彼の爲に伯爵家が散々に蹂躙せられて、其橫暴は愈よ募ると聞くにも劣らず彼の僞善を痛憤した。前週には不破瀨から送金が有つて、其の添狀にも、夫人の勤儉、慈善、貞淑、人望の、御家の爲の、何の、彼のと、蕾又から賴まれても爲たやうに、徹頭徹尾褒めちぎつて在るのを見て、心頗る不平の處に、又々如此き頌德表を突付けられたので、赫と成つて引裂いた文を、又咬潰して、火の中に打込んで、不和なれども骨肉の妹、他人なれども累代相恩の不破瀨まで、我が七生の怨敵たる匹婦に心を飜し、言を揃へて吾前に其の讃辭を呈する無面目、餘と謂へば難情き人情かなと、彼を念ひ、此を思ひ、吳城は足摺を爲て口惜しがるのであつた。

靈象府、澤毛野の兩名も勅命に由つて各々其の財產を蕾又の手に致したの

てありながら、圖らずも曩に呉城伯の新夫人より其の歳入の金額を送らるゝのであつたから、兩名相談の上簡單なる謝狀を發して之に答へた。如此き有樣で、彼が爲に罪を得て極寒窮陬の境に恨を呑む身は、誰有つてなか〳〵彼の厚意を恩として感ずるのではなかつた。謂ふべくんば、彼等の倚む辛苦に對して、彼の施せる恩の力の、恐くは猶薄いのであつたらう。

然れども、都に在つて親く蕾叉の行を見聞せる家族親戚は何も彼を德として、昨日の仇は今日の友、洵に天の呉城家に賜へる夫人であると噂した。

程無く不破瀨は西伯利亞からの返書を受取つたが、其中には亡母の事、親友の事、愛馬の事、獵犬の事等に就いて縷々と書いてあつたなれど、一言も夫人の事には說及ばなかつた。不破瀨は無情なる此の文を夫人に示すに忍びざるのであつたが、然もならぬので、彼の前に差出したので

ある。蕾又は之を見ると思はず胸逼つた。其身は伯爵夫人の榮を享けながら、志は之に處らず、己の爲には一錢の資産をも費す事無く、日夜伯爵家の爲に經營して、其收入の全額とも謂ふべき者を擧げて夫の手許に送るのである。又姑たる人の墓參から法事まで隨分心に懸けて怠らず、却つて伯爵の居て營みし昔よりも手厚いくらゐ、夫の誕辰には禮を守つて宴を張り、陰ながら其の健康を祝するなど、家を念ひ、夫を思ふより外はあらぬに、尚此心が通ぜぬのかと、讀訖つた文をいつまでも打目戍つて、儚く思續けて居た。不破瀨は傍に見て居るも可傷く、

「殿樣にも何ぞ一言奧方樣へ仰せが有るべきに、奈何も怪しからん事で御座ります。」

蕾又は纔に目を以て之に應へた。

「手前よりは御書面を差出しまする度に、奧方樣の御家の爲に御盡力あそばしまする事、又始終殿樣の御身上をお案じ遊ばして、手前まで段々

御心着に相成る事。内外の者からは尊敬あそばされて、今日では御同族の方々も皆御満足の趣を、悉う申上げまするので御座りまする。奥方様の御心底は神明の御照覧ある所で御座りますれば、其内には必ず殿様の御心も解けらるゝ事で御座りませうと考へまする。」

今に始めぬ不破瀬の同情を蕾又は限無く喜んで、

蕾「好く言つて下すつた。私の此の心を知る者は、天に在す吾等が神と、不破瀬さん、貴方とだけです。」

不「はっ。」

蕾「お察し下さい。」

不「はっ。」

蕾「私は熟く伯爵夫人が可厭に成りました。」

不「取でも無い事を御意あそばしまする。」

蕾「いゝえ、猶且住慣れた長屋に両親満足で居てくれました昔が、私は締

しいのです。身の不運とは謂ひながら、恁云ふ處に來て恁云ふ苦勞を爲て居るのを、草葉の陰の親達は然ぞや案じて居りませう。」

不「…………。」

董「是も勅命です！」

とやをら夫の文を收めて、彼は黒き喪服に霑ずる涙の露を拂つた。

（十三）恐怖と寒さと

早くも秋去り冬來りて、雪降り初めし夜の十時頃、蕾又は獨り煖爐の前に越方行末の事など思續けつゝ、今の身の上の在るに効無き儚さを、つくづく胸に置餘して、前後も知らで在りける處に、部屋の闥の窃と啓く音が耳に入つたので、何心無く見返れば、頭からショオルを被つて、外套を着た一箇の婦人が、半身を差入れて內を窺ふのであつた。蕾又は慄然として、

「誰ですか。」と聲を掛けた。

時に廊下に足音がして、直と入つて來たのが不破瀨である。

不「繪蓮樣が御越に成りました。」

蕾「何、繪蓮樣が？」

此の見知らぬ婦人こそ圓磯生の後家の繪蓮あつてた。彼は手早くショオ

ルを取り、外套を脱いで、額に亂れ懸る髮を推遣りながら蕾叉の前に身を進めたが、這は抑も什麼、目には溢るゝばかりの涙を含み、面は燃ゆらんやうに熱しながら、又自から慘怛の氣を帶びて、頓には言も出でず、哮々と忙しく片息を吐いて居る。蕾叉は火の傍の椅子を指して、

蕾「まあ、どうぞ是へお出あそばせまして。」

繪「はい。お初にお目に掛りますが、私は圓磯生繪蓮で御座います。今日まで貴方には御無禮ばかり致して居りました。早速で御座いますが、折入つて貴方に御願が御座いまして、箇樣な時分に上つたので御座います。宅の子供が只今死にさうに成つて居るので御座います、恐入りましたが、どうぞお出下すつて、那の命をお助け下さいまし。御恩は決して忘れません、又甚麼事を致しても此御恩返しは致しますから、どうぞ些とお出下すつて、助けて戴きたいので御座います。」

此の村には醫者と云ふ者が一人も無い。因で蕾叉は此に來てから、貧民

の爲に自ら往いて病を問ひ、或は需に應じて藥を投じ、數多く人の命を活したのである。彼は父が軍醫である所から、其の膝下に在りし間、唯假初の科外講義として道を聞き、術を學んだのが、所好こそ物の上手にて、後には醫學普通の智識を得て、良や診察調劑の應用を知るのであつた。此故に蕾叉は啻に金錢衣食を以て貧弱を拯ふのみならず、更に仁術の手を下して尙多くの慈惠を施すのである。然れば吳城伯爵夫人は慈善家として敬愛せらるゝ傍、又醫者として最も尊重せらるゝので、今繪蓮が子ゆゑに闇の雪を踏んで、半年叩かざりし人の門に哀を乞ふも之が爲であつた。

說了つた繪蓮は恐怖と寒さとの爲に身を顫せつゝ蕾叉の顏を打目戍る。蕾叉は此人の始に太甚しく己を憎み厭ひし事を知つて居る、後には漸く心釋けて、西伯利亞なる吾夫の許へ此身の善を揚るまでになりし事も知つて居る、けれども領內の目と鼻の間に住みながら、何故か曾て一たび

も訪來ず、又我よりも訪はせず、千里をも隔つる如く六個月餘を面も見せず過しつるは、禮を知らずと謂はんよりは、仍我を敵視するか、但は此身を鄙み輕んずるか、孰かでなければならぬ。今宵の彼は洵に憐むべきも、若し然る心の人ならんには、必ず如何なる恩をも酬ゆるに仇を以てすべく、左や爲まじ、右や爲まじ、と蕾叉も日頃の惡感情に牽れて直に應とは言ひかねて居た。

繪蓮は此體を見るより心益す慌て丶、

蓮「お出下さる事は出來ますまいか。」

蕾叉は未だ答へぬ。繪蓮はわつと泣出した。

蓮「然ぞ私を憎い奴と思召しませう。其の憎い私の爲に力をお假し下さるのは、貴方も御不承で御座いませう、御不承なのは御尤で御座います。ですから、是は私がお願申すのではない、一箇の子供が急病に罹つて、生死も知れず苦んで居りますのに、誰有つて藥を遣る者も無く、獨り踠

死に死ぬのを待つて居るものと思召して、其の罪も無い子供の命を助けてお遣り遊ばして下さいまし。私からお願ひ申すのではない、但然云ふ可憐な子供の居るのを見て來て、御通知を致すのと、まあ然う思召して、どうぞ御出を願ひます。恁う致して居ります内も、子供の事が案じられるので御座います。」

之を聞き居る蕾又の目に映つたのは壁に懸れる故伯爵夫人の肖像、其の畫ける温顏は彼に向つて何事をか語つたのである。

蕾「それでは直に參りませう。」

蓮「あの、お出下さいますので?!」

蕾「これからお供を致しませう。」

蓮「難有う存じます。お蔭樣で子供の命が助ります。」

と繪蓮は歡涙を拂ひつゝ勇を作して身繕を爲る。

蕾「お車で御出で御座いましたか。」

蓮「いゝえ、此のまゝで駈けて參りました。」

菫「然やうなら私も御一緒に參りませう。不破瀬さん、貴方御苦勞でも那の藥鞄を持つて一緒に來て下さい。」

恁く言置いて兩箇の婦人は直に戸外へ出ると、雪を蹴立てゝ走つた。一足遲れて不破瀬は追掛けたが、兩箇の速さは驚くばかり、男なれども老體の事なれば、彼は途の半にして殆と息も絶えなんとしたのである。

繪蓮は吾家の玄關に入るや否やショオルを投棄て、蕾叉の手を取つて二階へ昇つた。大ランプを點せる一室の壁際に、亡父の畫像の前なる寢臺に横つて居るのが幼兒の利喜三であるが、或は低く或は高く悲鳴を揚げて、泡を噴き、涎を流し、時々手足に痙攣を起して、急性の病苦に堪へざる有様。

菫「奈何あそばしたのですか。」

と蕾叉は床の傍に寄つて、病兒の手を把りながら其母に訊ねた。

蓮「奈何いたしたので御座いますか、二時間ほど前から急に這麽容體になりましたので、一體是はまあ何病氣なので御座いませう。」

唯嗷々と立騷ぐ僕婢を制して、蕾又は心靜に診察しつゝ、按じて胃部に到れば、患者は忽ち苦しき聲を發して嘔吐するのであつた。

蕾「何か毒にお中りに成りましたのですね。召上り物がお惡かつたので御座いませう。」

不破瀨の持來りし藥鞄を取寄せ、解毒劑を調合して、蕾又躬ら之を服さしめ、さて一時間計附切に看護して、十分に手を盡したのである。其が爲病勢は漸次に減退して、然しも苦み呻きし利喜三も今は疲勞を感じてすや〳〵と睡り始めた。

繪蓮の喜は何に況へんやうも無い。

蓮「私は何爲て此の御禮を致したら宜いので御座いませう。此の御恩ばかりは死んでも忘れは致しません。若も此子が那の儘息を引取るやうな事

が御座いましたら、私は迚も後に殘つて生きては居られませんので、申さば、貴方の御蔭で親子の命が助りましたので御座います。」

此の感謝に對して蕾又は答ふる所を知らざるのであつたが、話頭を轉じて幼兒の事に及した。

蕾「何時ごろから此のお子樣は御發病なすつたので御座います。」

蓮「丁度食事を致して間も無くで御座います。」

蕾「何を召上りました。」

蓮「例の通の物で、別に異つた物は食べさせませんので御座いました。」

蕾「鼠殺と云つたやうな物でもお口へお入れ遊ばしは致しませんか。」

蓮「決して然やうな事に御座いません。是が生れましてからと申すものは、然云ふ危險な物は一切内に置せませんやうに致して居りますので。」

蕾「然やうなら、何ぞ蜜の入つたお菓子でも。」

蓮「いゝえ、然云ふ物も。」

蕾「女中衆か誰か、貴方に內證で上げた者が有らうと思ひます。」

或は那樣事も有らうと考へたので、繪蓮は直に起つて其の取調に出て行つた。

迹に蕾叉は意を留めて室內の模樣を觀察したのである。住へる人の如何なる性質を有つかは、其の裝飾乃至整理等に因つて粗頗知らるゝのである。室內は自から快豁にして簡潔に、强て飾らざる裏に優美の處が有るなど、寧ろ此人に對する取沙汰を疑はしむるのであつたから、蕾叉は頗る滿足の體で居た。旋て返し來れる主婦は、

蓮「今日は誰も物を食べさせは致しませんさうで御座いますが、」

蕾「いゝえ、然云ふ筈は御座いません。では餘所から誰ぞ參つた者は御座いませんか。」

蓮「諸座の家內、御承知で御座いませう、他が用事を聞きに參つたさうで御座います。」

と何氣無く言出した綸蓮も、之を聞いた蕾叉も、彼此一齊に或る同じ事を胸に浮べて、懼るゝ如き目と目を見合せた。爾時蕾叉は聲を低めて、

蕾「那の者はお宅の家來衆の家内ださうで御座いますが、何云ふ人物で御座いますか。」

蓮「他は貴方へも一度伺ひましたさうで御座いますが、餘り胸の宜くない女で御座いますから、隨分御注意を遊ばしまして。」

之に答ふる蕾叉の聲は愈よ低くて、綸蓮に何事をか語るのであつたが、其の卓子の外には洩れぬほどで、綸蓮のは、手狀を爲る影が壁の上に跳るのみであつた。

良有つて纔に聞ゆる蕾叉の聲は、

蕾「此の御子樣を奈何か爲やうと云ふには、其に就て彼等の利益に成る事か何か無ければならんので御座いませう。お心當が御座いますか。」

蓮「村の者は兼て私を憎んで居りまする、で、若し是が歿りでも致せば、

乾度其咎を私に着せやうと云ふので御座います。それに又宅の財産を目掛けて居る者も御座いますので、其や是やを考へますと、實に一日でも安い心は御座いません。未だ〳〵那樣事よりは言ふに言はれぬ無念な事が一件有るので御座います。」

と聲曇らせて、餘は差含む涙に拭ふのである。蕾又は早くも其事と曉つたが、故と聞流して、

蕾「お子樣が歿つたとて、附たる貴方に其咎を着せるなど、那樣無法な事が有るもので御座いませうか。」

蓮「いゝえ、其には譯が御座いますので。二三日内には乾度今夜の事も尾に尾が附いて貴方のお耳へ入りなすから、どうぞお試しなすつて御覽下さいまし。」

之を語れる繪蓮が面上には謂ふべからざる悲惨の色が微見えたのである。

蕾「怪しからん事では御座いませんか。外の事とは違つて然云ふ事は、貴

方も飽くまで證明をお立て遊ばさなければ成りません。而して此後とも十分御用心遊ばしませよ。」

蓮「はい、其はもう承知いたしては居りますが、何を申すにも大勢の敵で、味方と云つては一人も無いので御座いまして、頼に思ひます兄までが、猶且世間の人のやうに私を信じてくれませんので御座いますから、私は何より其が無念でなりません。然し、神は必ず善をお守り下さる事と信じて、行末花の咲く春を樂に、苦い今の身上を忍んで居りまする。又家の寶とも、私の命とも念ひまする此子は、甚麼事を致しても屹度保護致しますで御座います。」

萱「その御覺悟でければ成りません。有仰る通、世間から疎まれても、神の慈愛を受ければ、其が眞の人と申すので御座います。」

蓮「然う有仰つて下さると、私は實に嬉しいので御座います。」

兩箇は暫く無言であつた。時に萱叉は席を進めて、

萱「綸蓮樣、圓儀生樣は奈何して御歿り遊ばしたので御座います。」

此間に斯る綸蓮は、闇中に刃の閃くを見たる恁、彼は其の意外なるに驚かされたのである。

蓮「實は其に就きまして段々お話が有るので御座います。」

萱「失禮ながら、御病死を遊ばしたのでは御座いますまい。」

綸蓮は唯空しく目を睜るのみであつた。彼が村民に憎まれ、骨肉に疎んぜらるゝのも、一に此間の疑問に存するので、病死にあらざれば横死か。横死にあらずば變死か。變死ならんには誰が手を下せしと爲すや。彼の闇中の刃は躍つて今正に己の吭に薄るのである。

萱「人手にお掛り遊ばしたのでは御座いませんか。」

蓮「まあ、貴方が何爲て其を——」

と吾を忘れて飛起つばかりの胸の內。

萱「知つた譯では御座いませんが、然やうではなからうか、と妾は考へま

したので御座います、が、如何で御座います。」
蓮「貴方は好うこそ然うお考へ遊ばして下さいました！　難有………有……
………難有う存じます。」
涙は急雨の如く下つる。
蓮「此村に人も多く居りながら、而して私の平生をも好く知りながら、貴方の其の半分も考へてくれる者は無いので御座います。是は貴方が有仰るのではなくて、天に在す神様がお告げ下さるので御座いませう。實はお言の通人手に掛つて果てましたに相違御座いません。」
蓮「さあ、其に就ては此に證據が欲いので御座います、何ぞ證據に成る物は御座いませんか。」
蓮「確な證據に成ります物が一箇御座いましたのを、殘念な事には私が失して了ひましたので御座います。」
蕾又は手を拱いて熟と考へて居た。

蕾「然し、私は未だ其事を十分に信じては居りませんので。それはもう世間でお噂を致すやうな事は萬々無いと承知致しては居りますが、一方の事も確に恁と突止めた譯では御座いませんのですから。」

繪蓮は又目を瞬つて、痛く失望した。

蕾「で、どうか其の事實を撿べまして、貴方の汚名を雪いで上げたいと存じて居ります。」

蓮「御深切の程難有う存じまする。當人の私は申すには及びません、兄上も然ぞかし喜びます事で御座いませう。」

蕾「いゝえ、伯爵は如何な事でも私の致します事は、決して御意には入らんので御座います。」

繪蓮は之に答へて何をか言はんと爲るのを、蕾又は忽ち打消して、

蕾「もう大分遲いやうで御座いますから、私は是でお暇を致しまする。」

蓮「然やうなれば、只今馬車の支度を致させますから。」

萱「もう其には及びません。不破瀬が居りますから、他と一緒に還ります
る。」
餘り速急に起たれたので、繪蓮は蹉跎して殆ど爲す所を知らざるのであつた。蕾又は一禮して戸口を出やうと爲たが、卒に立復つて、利善三の寐て居る額に接吻した。
萱「あれ、まあお可愛らしいぢや御座いませんか。又御樣子がお惡いやうて御座いましたら、御遠慮は要りませんから、何時でもお迎を下さいまし、私は直に參ります。」
蓮「何から何まで御深切に難有う存じます。本に今夜の御恩は…………。」
萱「然やうなら御機嫌宜う。」
蕾又は階子の口まで來ると、送出んとて後に踵く繪蓮を制して、
萱「お子樣には十分御注意を遊ばしまして――些とも御油斷はなりませんて御座いますよ。少の間も貴方がお傍を離れるのは宜う御座いません。

どうぞもう其でお構無く。」

蓮「はい、然やうなら是で御免を蒙ります。」

雷又は階子を下り行く、繪蓮は子の寢臺の傍に返つたが、旋て門外に出た主從の話聲が聞ゆるので、窗の戸を推啓けて見送れば、降積む雪を衝ついて、眞先に進む不破瀨の跡を蹈みつゝ、劾々しくも雷又は歸り行くのである。

蓮「噫、何と謂ふ善い人であらう！　噂には聞いて居たが、成程可羨しい心掛、那では人の懷くのも無理は無い。　明日は兄樣の處へ此事を書いて上げなければならない。」

(十四) 村の記錄

此の雪中の往診後七週間約過ぎての事であつた、夕暮の六時頃蕾叉は近き邊を散步して居ると、十歲ほどの貧しい姿の娘が來て、慇懃に彼の前に一禮して、

娘「奧樣、內のお祖父さんが大病で難澁して居りますから、どうぞ御光來をお願ひ申したいもので御座います。」

蕾叉は直に娘と同道して其家を見舞つた。一目して每日の麵包にも事缺くと見ゆる生活の狀態。唯一間の家の隅に瘠讒ひたる老人が病苦に惱んで居るのであつたが、蕾叉の入來るのを見て、纔に目禮した。

老「奧方樣、どうぞ御免あそばされて下さいまし、體が痛みまして御挨拶を致しまする事も出來ませんので御座りまするから。」

蕾「あゝ、可うございますよ、大分切ないやうだが、何處がお惡いのです

ね。」

玄「はい、私は近年リツマチズムが持病で御座りまして　時々其處此處が痛みますので御座りまするが、格別臥りますやうな事は從來とんと無いので御座りましたが、今年の寒氣で遣られましたものと見えまして、はい、御覽の通身動も出來ません始末で難澁いたして居ります。近所の方が色々御深切にお世話を作つて下さいまして、恁云ふ大病はお醫者樣に診て戴いてお藥を飮まなければ可けない、それには御別莊の奧方樣にお頼み申上げれば、甚麼病氣でも癒るから、早速お願ひ申したが可からう、と箇樣に申されまするので、誠に失禮とも何とも申上げやうも御座りませんが、如何にも惱みまして〳〵、はい、我慢が致しきれませんので、恐入りまして御座りまするが、お迎を上げまして御座りまする。早速御出下さいまして難有う存じまする。」

蕾「又は此の手も觸れられぬほど汚れたる病人を丁寧に診察して、

萱「どうも此の病氣は長引くもので、半月や一月で舊の體に成ると云ふ譯には行きませんがね、決して案じる事は無いので、唯氣を長く療治をさなければ成りませんよ。」

老「もう私も六十七で御座りますで、今度は是でお暇で御座いませうと存じまする。」

萱「何の、不斷が達者だから、那樣氣遣は些も有りません。藥は私が何日までゞも上げますから、氣長に辛抱してお在なさい。」

老「はい、はい、それは御難有う御座りまする。もう此齡で御座りまするて、命の惜い事は御座りませんが、唯一人の孫めが未だ年弱の十一では、私も死ぬに死なれませんで御座りまする。はい、お蔭樣を以ちまして孫め迄助りまする。これ、奧方樣に能う御禮を申上げないか、お祖父さんの分まで申上げるのだぞ。」

老人は涙を流して喜んだ。

扨此の老人は村の記錄と謂るゝほど、土地に有つた事は一から十まで知つて居るのである。蕾叉は心中に、圓磯生の一件も此の老人は必ず知悉するであらうから、追つては之を調べるならば、如何なる活證據を得んも知れず、と大きに喜んで家に還つた。

玄關を入ると驅出て來たのが不破瀨である。

不「何處へお越で御座りましたか、方々へお迎を出ましたので御座ります。」

蕾「何ぞ急用ですか。」

不「是非御覽に入れまする物が御座りまするので、一刻も早くと存じまして。」

蕾「何ですか。」

不「先づ御居間へお出遊ばしまして。」

何事とも知らねど、不破瀨の切に勇んで居るのを見れば、蕾叉も決して

悪い心地の爲るのではなかつた。彼と共に居間に入れば、燈の下に一通の書狀が置いて在る。

丕「那の御書面で御座りまする。」

蕾「はあ、何處から。」

と言ひながら手に取上ぐれば、希しくも西伯利亞から蕾叉に宛てた書信である。彼はなか〱嬉しとよりは、寧ろ可懼きやうにて胸が轟いた。一たび手に爲し文を又置いて、其の表書を熟と眺めて居ると、

丕「私も是でやう〱安心を致しまして御座りまする。後程又御書信の樣樣を伺ひに出まするで。」

不破瀨は獨り欣々として出て行つた。蕾叉は又其の文を取上げたが、進んで開封する勇は無いのである。伯爵は何と思うて今更己に宛てゝ書信を爲たのであるか。若し書信を爲る必要が有ると爲たならば、其事は善か、悪か。彼は己を仇の如く念へる夫の文を受取る事を望まざるのであ

つた。けれども封を切つて、恐る〳〵讀下せば、案じたやうなものではなくて、繪漣の子の急病を救ひくれたる厚意を謝し、次いで、不斷に心着けて金品を送らるゝ爲に、幽囚の苦の幾分を忘るゝ、又不在中の家政整理に就ては一方ならず盡瘁せらるゝ趣、段々忝く存ずる。因つて茲に感謝の誠意を表すと書いたのである。

固より彼を憎み、疎んじ、恨み、罵る文面でもなかつたが、其の感謝の誠意を表すと云ふも只形式的一應の挨拶、心にもあらぬ他人行儀を書聯ねたのである。蕾又は覺えず其文を卓子の上に投出した。

十五箇月間の此苦勞は誰が爲にしたのであるか。尋常一樣ならざる我身の上の十五箇月の苦勞は、實に他の新婦の半生の爲す所にも過るのである。如何に茲に在らぬ夫なれば我が爲す所を目に睹ぬとて、人を恨むにも程こそ有れ、兎毛の露ばかりも眞心の籠らぬ此文は何事ぞや。箇程までに盡せども、蕾又が誠は尙足らざるかと、身を顫はせて忍音の涙を拵

つた。

扨之に返事を遣らねばならぬ、何と書いたものであらう。思ふまゝ此恨を言はうか、可愼く其の獨を守らうか、但は此心の底を明さうか、と取つ舍つ思案に昏るゝ折から不破瀬は入つて來た。

丕「如何で御座りましたか、御文の參りまする所を見ますれば、殿樣の御機嫌もいよ〳〵お直り遊ばしましたので御座りませう。」

菫「いゝえ、未だ御心は解けませんのです。」

丕「はつ。然やうでは如何樣な御文で？」

菫「いえ、何有、それは、私へ御禮を有仰つてお寄越し遊ばしたのでは有りますけれど…………。」

丕「いや、然やうなればもうお疑ひ遊ばしまする所は御座りません、はつ。懲して御文をお遣はしに相成るのは、もう何よりの證據で、殿樣には眞底から其の思召が御座りませんでは、義理にも何か作ると云ふ御性質で

は被居れません。私は存じて居りまするが、全體呉城家には其の御氣風が代々お有り遊ばしまするので、實に先殿樣などは別して其がお劇しい方で御座りましたが、御當主樣も猶且幾分か其の何が御座りまする。で御座りまするから、かう箇樣にお文の參りまする以上は、はつ、私がお請合を致しまする。」

然う聞けば蕾又も嬉しくない事は無いので、

蕾「それでは殿樣はお喜び遊ばして居られるのであらうか。」

丕「勿論の事で御座りまする。未だ先の長い事で御座りまするゆゑ、其内には段々と好い御便も御座りませう。何に致せ、誠に結構な儀で御座りまする。いや結構と申しますれば、近々に皇室に御慶事が御座りまするやうな噂で、然やう致せば、是非特赦令が出ると申す事に御座りまするが、お聞及は御座りませんか。」

蕾「いゝえ、一向聞きませんが、然云ふ噂が有りますか。」

「はっ、專ら噂を致しまする。特赦令さへ出ますれば、殿樣にも定めて其の御沙汰にお預り遊ばす事で御座りませう。えゝ、もう私は今から樂に致して居りまする。」

特赦令と聞いた蕾叉の胸の中は、嬉くもあり、又可忌くもありて、伯爵が放免されて還らるゝのは、固より賀すべき事ではあるが、扨己は如何に成るのであらう。善くも留守せし妻として愛せらるゝであらうか、將た家を奪へる敵として憎まるゝのであらうか。彼は己の飽くまで夫を愛するに引易へて、伯爵の飽くまで己を愛せざるを知るのであつたから、旋て夫の還り來る日は、則ち己が悲劇の場に登る時であると想ふほど、獨り心を傷むるのである。

彼は此夕寐られぬまゝに筆を取つて、西伯利亞への返事を認めた、其の文面は、眞率に意中を披いて、未だ曾て告げざりし所を始て具に言送つたのである。

翌日は此の夫の文の末に（多謝）の二字を書加へて之を繪蓮の許へ送つた。繪蓮からは別紙に、此樣な嬉い事は無いと云ふ旨を簡單に書いて、送還して來たのである。

扨彼の毒害に遭ひし利喜三も何の障無く日に增克復して、蕾叉が前後四回の往診を要せしのみで、然ばかり事の大なりしにも似ず、極めて小く納つた。

十日ほど經つ內に雪は融け、道は固つて、日和は續く。波斯野夫人は例の白馬の車を驅つて蕾叉を訪問した。段々の話の末に、

波「先達而は御妹御樣のお宅では取だ事で御座いましたね。」

蕾「何で御座いますか。」

波「御承知では被在いませんので？　先頃那の利喜三樣が急病で既にお殆かつたので御座いますよ。御存御座いませんでですか。」

蕾「其事は存じて居ります。」

波「何で御座いますか、人の噂では毒を上らせられたとか申すでは御座いませんか。」
萱「然やうで御座いますか。」
波「何か食り物に毒が入れて在つたとかで、本にお可哀さうなのは利喜三様で御座います。」
萱「然やうな事を人が申して居りますので御座いますか。」
波「はい、然云ふ評判で御座います。那の方は誠にお氣の毒で、誰一人御交際を致す者も無く、又御本人も他に御面會をなさらんもので御座いますから、自と色々な噂を立てるので御座います。」
萱「で、誰が那の子供衆に毒などを飲せたと申すので御座いますか。」
波「大方御存でも御座いませうが、お配耦の圓礎生様が御歿になつたに就ても、まあ可厭な噂が有るので御座います。そこへ又今度の事で御座いますから、依様綸違様のやうに、皆申して居りますので。」

黄「然して毒を飲せた子供衆が、奈何致して助つたので御座いませう。」

波「それは子供衆の體が丈夫であつたからで御座いませう。」

黄「然やうなれば私が悉いお話を致しませう。實は繪蓮樣は子供衆が急病だと有仰つて、夜中に私の處へ駈付けてお出になつたので御座います。私は父が陸軍の醫官で御座いましたので、少々は其道を習ひまして、應急の手宛を致すぐらゐの事は心得て居りますので、それから直に繪蓮樣と御一緒に參つて、藥を上げたので御座います。」

波斯野夫人は之を聞いて啞然とした。

波「それでは貴方が、あの、其時御療治を遊ばしたので？」

黄「然やうで御座います。で、繪蓮樣も大相お喜で、其事を西伯利亞の方へお知せになりましたものですから、昨日那方からわざ〳〵禮狀が參りましたやうな譯て、」

波「あの、伯爵樣から貴方へ御文が？」

と夫人は更に〳〵唖然たるのであつた。彼は此の訪問中に計らずも二件の驚くべき新聞を得て、人にも傳へまほしく匆々此を辭し去つた。

蕾叉は此日の夕方に彼の貧きリウマチズム患者を見舞つて、間二日行ずに居たのであるが、三日目の朝彼の孫娘が息迫き迎に來て、老人の容體が急變したと告るので、取る物も取敢へず之に趣いた。患者は僅の間に見違へるばかり衰弱して、既に氣息も奄々たる樣子であつた。枕頭に蕾叉の座するのを見て、孫娘に言付けて、室の戸を閉ぢ、窓を鎖切らせて、

老「お前も少の間那方へ行つてお在、而して人の來ないやうに番を爲て居なよ。」

娘か出て行くと、老人は其の病耄けたる目に熟と蕾叉の顏を眺めて、暫くは苦しき息を嘘いて居たが、

老「奥方樣、私は是非貴方樣に申上げたい事が御座りまするので、是は貴方樣より外には誰にも話されません秘密の事件で御座りまする。然ぞか

しお穢くて御迷惑では御座りませうが、どうぞ最少々此方へお寄り下さいまして。」

人の將に死んとするや、其の言ふこと善し、彼は此の病苦を推して、如何なる秘密を語らんと爲るにやあらん、と蕾叉は幾分か可恐きやうにも覺えつゝ、椅子を進めて患者の身近に寄つた。

「此の事件が秘密に成つて居りまする爲に、無實の罪を被せられて、取だ難儀を遊ばしてお在の方が有るので御座りまする。私は疾から何も彼も樣子は知つて居るので御座りまするが、其を話しました所が村中に誰も取擧げてくれる者は無し、罷り間違へば、隨分命も取られかねませんゆゑ、實は今日まで口を拭つて居りましたが、貴方樣なれば此事を申上げて、村に居ります惡人を滅して戴くのは目前と、はい、箇樣に存じまして、わざ〳〵御運を願ひましたので御座りまする。」

蕾叉は愈よ懼れ、愈よ怪み、覺えず固唾を嚥んで耳欹つるのであつた。

老「定めて御存じでも被在いませうが、貴方様の御妹様に當る圓磯生様の奥様は旦那様を殺害あそばしたと云ふ村中の噂で御座りまするが、あれは全く虚妄で御座ります。はい、繪蓮様はお可哀さうに濡衣を着せられて御座るので、其の下手人は外に在るので御座りまする。」

蕾叉は席を進めた。

老「冬の半の事で御座りましたが、其年は何年にも無い嚴い寒さで、焚物は例年の五層倍も要るやうな譯、其上に又其の寒さが長く續きましたから、貧乏人は甚麼に困りましたか知れません。貯へて置きました焚木は使ひ切つて了ひましたので、或晩此の村端の莫斯科街道の森へ枯枝を拾ひに私が參つたので御座りまする。」

患者は甚しく喘いで、言を繼ぎ得ぬのである。蕾叉は枕頭に在る水を取つて彼に飲ませた。

蕾「少しお休みなさい。」

「はい。宵から參つて吽と云ふほど拾ひ聚めて、其を橇に積みましたが、雪は深し、寒さは烈しゝ、手足は切れて落ちさうなので御座りまするから、えっちら、おっちら引張つて、些の五六間も出たかと思ひまする頃、前面から人の來る樣子、誰か此邊の者が通るのであらうと存じましたが、何と無く樣子が怪う御座りましたから、私は木の陰に隱れて居りますると、段々此方へ寄つて參りまするので、窃と視ますると、あの諸座なので御座ります。

はてな、今頃何爲に諸座が這麼處へ來たのか知らん、而して彷徨と何か搜して居るやうな鹽梅。日頃から性の善くない那奴の事で御座りますから、是は又陸な事を爲るのではなからう、と猶忍んで居りまするとな、旋ての事に車の音が致しまして、森の中へ馬車を引込んで參つた者が御座りました。」

益す出てゝ益す奇なる患者の物語に、雷又は彼と倶に其身を雪の木陰に

潜めて、親く睹るが如く覺ゆる餘、今更に息を凝し、目を瞪つて、如何に如何にと焦心に待つのである。然るに老人は手眞似を爲て又水を求むるので、蕾叉は親切に一口の霑を與へた。

老「然やう致しますると、其の馬車は私の忍んで居りまする鼻の先に駐りましたが、其時の可恐さ——と申すものは、いや、もうお話にも何も成りは致しませぬ。馭者と諸座と二人懸りまして其の馬車から下した物を、何かと思ひましたら、全で死んだ同然に正體の無い大の男。其が貴方樣、見ると繪蓮樣の旦那樣なので御座ります。」

蕾叉は聞くさへに胸跳りて渴を覺え、彼の水を取つて吭を濕したのである。

老「然し、其時は未だ確に呼吸が御座つたので、何ぞ催眠劑でも奴等は使つたので御座りませうか、すう〳〵と鼾を搔いてお在のやうで御座りま

した。其晩は誠に好い月で御座りましたから、何から何まで手に取るやうに見えましたが、其の馭者は鷲利と申して、其頃圓磯生樣に居りました奴で御座りまする。

只今では波斯野夫人の馭者を致して居りまするので。で、兩箇の奴は誰も聞いて居る者は無いと思つて、大聲で話を致しまするで能く聞えました。馬車が着きました時に、諸座の申しまするには、お前に百ルウブルを遣るから手傳を爲ろ。若し否だと言ふなら、お前も一緒に殺して了はにや成らねえが奈何だ。鷲利は駭きまして、馬車の中の圓磯生樣をお起し申ましたので御座りまする。然う致すと、諸座が申すには、旦那の目が覺されるものなら覺して見ろ、那の珈琲を飲んだからには、百年經つたつて目の覺事は無えのだ。然うやつて今鼾は搔いて居るけれど、それで段々と落入るのだ。實はもう死んで居るのだ。お前に手傳へと言ふのは、旦那を殺せと云ふのぢやねえ、もう死んで居

るのだから、片附ける手傳さへ爲れば可いのだ。譯の無い事だから俺の言ふ事を聽け、然う爲りや直に百ルウブルになるのだ、と賺したり、嚇したり致して、到頭まあ納得させましたので御座りまする。それから暫く又話を致して居りましたが、旋て二人して圓磯生樣を擔ぎ出して、他の方へ持つて參りました。」

菫「お前さんは默つて其を見てお在のかい。」

老「默つて見て居たい事は無いので御座りまするが、何を申すも他は兩箇て屈竟の若い者、此方は此の年寄單身で御座りまするし、殊には、今申しまする通り、圓磯生樣は最早死んで御座らしやるので、出るには出られず、實は顫へながら見て居りましたで御座りまする。

直に兩箇は復つて參りましたから、圓磯生樣の御軀を何處に奈何したのであらうと思ひまして、窃と覗いて他の方を見まするると、何でも雪の上へ轉して在るので御座ります。兩箇は馬車の中へ入つて、彼此一時間ほ

ども待つて居りましたらうか、諸座が、もう大概可からうと申しまして、又兩箇が行つて、圓磯生様を擔いで參つて、而して馬車の中へお入れ申したので、其時にはもう鼾の聲もなさらず、全く息は絶えてお在のやうに御座りました。」

蕾「それでは、何ですね、圓磯生様は死んでお歸りに成つたのですね。」

老「はい、もう諸座の家で何ぞ飲されなすつた時に、はや事切れてお在なされたので御座りませう。」

蕾「さて見ると、諸座夫婦の者が毒殺を爲て置いて、而して其罪を繪蓮様に塗付けた譯なのですね。」

老「はい、其に相違は御座りませんとも、那の諸座と云ふ奴は、吾が弟を殺した位の惡黨で御座りまするから、油斷の成る奴では御座りませぬ。」

一部始終を聞訖つた蕾又は稍口氣を嚴にして、

蕾「何爲お前さんは其趣を直に翌日にも告訴を爲なかつたのです。潔白な

繪蓮樣が惡名を負せられて、那して御難儀をなすつてお在のを、高みで見物して居ると云ふのは不埒ではありませんか。其も知らぬなら是非も有りません、現に其場を見て居ながら、今日まで口を拭つて居るとは、其の手傳を爲たも同罪です。何爲直に告訴をなさいませんのでした。」

其の惱める病よりも猶忍ぶに苦しき懺悔の色は、忽ち患者の面に上るのであつた。

老「扨其處で御座りまする、兩個の奴が馬車で歸つて行くのを待つて、私も直に出掛けましたので御座りまするが、長い間雪の中に屈んで居りましたので、悉皆寒さに中りまして、宅に歸りますると、もう其限動く事も奈何する事も出來ません始末で、四日許と申すもの横に成つたまゝで御座りました。究竟其が此の病氣の因なので御座りまして。それで、私も訴へやうか、奈何致さうかと考へましたのは、唯今申上げまする通の病氣で段々日數は經ちまするし、現に其場を見たとは申すもの丶、是ぞ

と云ふ證據が有るではなし、罷り間違つて此の裁判が奴等の勝と成りました日には、何日か私は殺されるに極つて居りまする。圓磯生樣には重重お氣の毒とは存じながら、そのまゝ一月經ち、二月經ち、私は到頭何も知らぬ顏で居りますれば、有らう事か、有るまい事か、あれは繪蓮樣が毒害を成つたのだ、と云ふ途方も無い世間の取沙汰。嗚呼、勿體もない、家來の爲に旦那樣をお殺されなされた上、那樣無實の罪までお被せられなされる繪蓮樣の御心の中は甚麽であらう、と私はお可傷くて〳〵奈何も恬も成りませんで御座りましたが、猶且己の意氣地無から思切つて告訴も致さず、はい、仰せの通、私も謂はゞ奴等の味方を爲たも同然の大罪を犯しましたので御座ります。

私も此の病氣ではもう助りません、私が亡い後には、誰一人諸座や鷲利の惡事を知る者無く、那の善い御方の繪蓮樣が夫殺の惡人に成つてお了ひ遊ばすのが、餘り御不便に存じまして、又私が其を知りつゝ隱して居

りましたばかりに、那して悪人は榮え、善人のお方が御難儀を遊ばすのだと思ひますると、其が障になりまして、奈何も心易く目が瞑られませんので、此の日頃段々の御厚恩を戴きまする、私の爲には難有い智識の貴方樣へ此の懺悔を致しまする。はい、是で氣分も淸々と致し、快く往生が出來ますで御座りまする。」

蕾「好く話して下すつた。お前さんの病氣も決して今死ぬの、何のと云ふ氣遣は無いのですから、私に委せて氣長に療治をなさい。」

蕾叉は藥を與へて、暫く看護して居る間に、患者は穩に眠を催し初めたので、彼の孫娘に後の手宛を懇に言置いて、此家を出たのである。

途を急いで來ると、少く距てゝ繪蓮が利喜三を伴れて遊歩から歸る後姿を見掛けたので、蕾叉は畑を横截つて、跡を追ひながら連に呼んだ。今誰有つて村中に己を見返る者も無きに、白晝大道を憚らず我を呼ぶは何人ならん、と繪蓮は步を住めて、やをら頭を回せば、蕾叉が日傘を差し

て、少女などのやうに然も氣輕に走つて來るのである。

兩箇は手を握つて笑を交した、利喜三は珍しがつて叔母樣々々々々と絡み付く。其子を中間に傘を並ぶる後影は畷道を悠々と行くのであつた。

蓮「何地へお出で御座いました。」

蔦「些と其處まで病人を見舞に。」

蓮「いつもまあ御奇特な事で御座います。」

蔦「今日私は好い事を聞きましたので、遠からず貴方のお體を潔白な者に致して御覽に入れます。」

繪蓮は忽ち色を變へた。

蓮「何と有仰います！　そんなら貴方は那事に就て何ぞお聞き遊ばされましたので御座いますか。」

蔦「はい。貴方も御存じの無い、それはもう悉しい事を聞込みました。犯罪者の名も、犯罪の場處も、又現に其を睹たと申す證人まで。」

紿蓮は開いて、喜ぶと謂ふよりは駭き、驚くと謂ふよりは呆るゝのであつた。

蓮「何處からお聞き遊ばしました。」

其聲は顫つて居た。

蕾「其は何れお話を致しますが、まあ貴方もお喜び遊ばしまし。」

蓮「難有う存じます。然う致して私の嫌疑が解け、夫の讐が討たれましたらば、私は其場で死にましても憾は御座いません。此上とも何分貴方の御力添を願ひまする。」

蕾「屹とお受合ひ申しましたから、御安心なすつて被在いまし。」

蓮「重ね〳〵御恩に預りまして、何とお禮の申上げやうも御座りません。兄も然ぞかし喜びまして、貴方の御心が解りますで御座いませう。」

蕾又は忽ち悄然として頭を垂れたが、利喜三の嬉々として兩箇の前後を走り回り、籠を放れし鳥の如く勇み悦ぶのを見て、

薑「利喜三様は大相御元氣で御座いますこと。お子供衆は何でも是でなくては可けません。」

遊「いゝえ、誠に暴れ者で困り切るので御座いますが、那以來滅多に戸外へ出しませんもので、今日は珍しくてならないので御座います。」

薑「貴方がお伴れ遊ばして、日に一度づゝは御運動にお出掛け遊ばすやうになさいまし。然も御座いませんと、お子供衆の爲に不健康で御座いますよ。」

蓮「私も然う致したいと存じますのですが、外へ出まするのは、敵の中に行くやうなもので御座いますから、好い心持が致しませんので、ついつい億劫に成りまして。あれ、些と御覧あそばせ、那處を通る男が立住つて熟と視て居るて御座いませう、那の通で、私の姿さへ見れば、無遠慮に眺めて、二人なれば囁く、三人なれば惡口を吐くと云ふやうな譯で、私は其が辛さに門の外へも出かねるので御座います。本に情無い身の上

て、貴方お察し下さいまし。」

蕾「其のお辛いのも最少時の事で、旋てお逢ひなさる者が皆帽子を脱るやうに成りまする。」

蓮「然うなりましたらば、甚麼に好い心持で御座いませう。」

打語ひつゝ行くほどに、はや兩箇の別るべき道は間近に逼つたので、蕾又は忙しく話頭を轉じて、

蕾「貴方に、あの、鷲利とか申す馭者が居りましたで御座いますか。」

蓮「はい、居りました。始終良人の馭者を致して居りましたので。」

蕾「私は其者を召使はうと思ふので御座いますが…………。」

言ひも訖らぬに繪蓮は覺えず聲を放つた。

蓮「那の鷲利を?!」

蕾「然やうで。唯今では波斯野夫人の所に居りますさうで御座いますね。」

蓮「何で貴方は那麼者を?」

蕾乂は彼の驚くを見て輕く笑を浮べた。兩箇は今恰も岐路に立つて居るので、

蕾「悉いお話はお近い内に。利喜三樣然やうならば。」

と彼は兒の手を握つて可懷げに振つた。其母は又彼の手を把つて、更に更に可懷げに握り緊むるのであつた。

(十五) 兇險の相

一日呉城伯爵夫人は始て波斯野夫人を其家に訪うたのであるが、彼は夢ではないかと驚き惑ふばかりに喜を極めた。元を糺せば非職軍醫の娘の雷又であるが、今は堂々たる呉城家の伯爵夫人、而も篤行と才識とを以て一郷の輿望を負へる其の貴人の來訪を受るのは、領内にある者の無上の光榮と爲る所である。

「好うこそお越し下さいました。」

と波斯野夫人は履を倒にして邀ふる有樣であつた。

波「何ぞ格別の御款待を致しませんければ相成りませんので御座いますが、何分遽爾の御越で、手前に用意も御座いませんゆゑ、失禮のところは幾重にも御詫を申上げまする。」

萬「いゝえ、決して然やうな御心配を遊ばしませんやうに。今日は少々伺

ひたい事が御座いまして上りました。」

波「何なりとお聞け下さいまし。」

先始は四方山の物語から起して、馬の談に及んだ。波斯野夫人は至つて馬好で、乘馬を多く持つて居るから、早速に伯爵夫人を厩に案内した。彼此と馬を見ながら話して居る間に、蕾叉は其に控へる馭者馬丁の容貌に注目したのであるが、中に一人勝れて兇險の相を帶びたる馭者を見出した。

蕾「那の者は何と申しまする。」

波「他は鷲利と申して、元は圓磯生樣に御奉公致して居りましたので、」

恁く言ひつゝ兩箇は厩の前を去つた。

波「誠に生來が宜う御座いませんので、誰も那男とは仲が悪いので御座います、私なども大きに持餘して居りまする。」

蕾「然やうで御座いますか。實は私の馭者は聖彼得堡から連れて參りまし

たので、土地は不案内なり、それに、齢が少し若過まして、疾から一人適當なのが有らば欲いと存じて居るので御座いますが、那者をお讓り下さる譯には參りませんか。」

波「あれでお役に立ちます事ならば、どうぞ御隨意にお召連下さいまし。其代お斷り申上げて置きますが、性質の宜からん奴で御座いますから、隨分お使ひ難う御座います。」

蕾「其點は含んで居ります。然やうならば私へお遣し下さいまし。」

波「唯今申聞けまする。」

兩箇は奥庭に入つて、其處へ鷲利を呼寄せて、右の旨を言渡した。

蕾「お前が來ておくれなら、月給は二十ルウブル上げませう。」

鷲「はい、御主人樣さへ御承知で御座りますれば、私は如何樣とも。」

此て話は附くと、蕾叉は後とも言はず鷲利を引連れて還つた。波斯野夫人は蕾叉が彼の惡徒たるを知りつゝ傭入れた事に就て、何等の疑をも挿

ないのであつた、全く此地の事情に通じて居ると云ふ彼の特長を多とする故とのみ考へたので。

（十六）窮命の淵

彼のリウマチズム患者の老人は其姓を近小野と云ふのであつたが、殆ど死なんとばかり危篤なりし病勢も幸に日一日と薄らいで、良四週間の後には左にも右にも斯世の者と成つたのである。彼は此の餘命を繼ぐを得て、本復の上は老後の思出に、後世安樂の爲サンセルジの靈場に詣でんことを發願した。因で蕾叉に向つても始終此事を口にして、杖に縋つてなりとも獨り歩まるゝやうに成り次第發足したいと、はや病の癒るのが待遠で堪へられぬのである。蕾叉は或る時彼を慰めて、

「サンセルジ詣ならば私が爲せて上げる。遠方の事ではあるし、病氣擧句の軀で歩いて行くのは無理だから、いよ〳〵行くとならば、車でお詣の出來るやうに爲て上げる。」

近小野親仁は之を聞くと、寢臺から轉げ落ちんばかりに喜んだのである。

而して兩眼に涙を浮べて、

老「はい／＼、お蔭樣を以ちまして危い命を助りました上に、サンセルジ詣まで爲せて遣つて下さりまするとは、はい、冥加に餘りました親仁めで御座ります。氣では何の樣に念ひましても、最早箇樣に老い朽ちましては、何の御役にも立ちますのでは御座りませんが、相當の御用を勤めまして、はい、屹度御恩報じは仕りまする。」

萱「お前さんが良くなつたら、賴みたい事もありますから。」

老「はい／＼、もう其は何なりとも仰せ付りたう存じまする。」

萱「就ては、後來の養生が大事なので、少し體の具合が良くなると、誰も輕卒を遣りたがるもので、それから疾返したら爲方が無い。今が大切の處なのに、此に居ては手宛が達きかねるし、第一、地は濕ける、四邊は不潔で、極養生の爲に成らんから、私の邸に一間空いてゐる部屋が有るから、其へお引越しなさい。」

老人も然までに恩を被るのは理由なしと、再三再四辭退したのであるが、蕾叉が强て勸むるので、遂に其意に從ふ事に成つた。
翌日老人は吳城家の一間に引取れて、手宛萬端殘る方無く、午前に二回、午後に二回、夜中に二回と、怠らず蕾叉が見舞つて、看護に手を盡すのであつた。此に二週間許過す間に老人は益す克復して、漸く起居の自在を得るまでに成つた。
或朝伯爵夫人は來診の次手に、
蕾「お前さんは徃日談の有つた鷲利が邸に來て居るのを知つてお在だらうね。」
老「はい、存じて居りまする。」
蕾「それでは今私が此へ呼ぶから、お前さんは鷲利の前で悉皆那の話を爲て下さい。」
老「はい、何の話で御座りますか。」

菫「森の中でお前さんの睹た話。」
老「那の話を鷲利の前で?!　奥方様、そればかりは奈何ぞ、奈何ぞお免し遊ばして下さいまし。」
老人は恰も活膽などを抜れんと爲るを惶るゝやうに、此を先途と、ひらさら詫びる。
菫「いゝえ、少も氣遣する事は無いので、唯那だけの話をお爲なれば可いのだから、決してお前さんに迷惑の懸るやうな事は爲ません、私が附いて居るから。」
老「では御座りませうが、那の話を致します事だけは、はい、どうぞ御免下さいまするやうに。」
輙く動くまじき老人の氣色、蕾又は不興の體で、姑く脣を結んで居た。
菫「お前さんが言はんなら、それて宜い。サンセルジへ參詣も爲せまいし、以來はお前さんの世話も爲まいから、然うお思ひなさい。第一、此間お

前さんは何とお言ひだ。其時に私が告訴しなかつたばかりに、繪蓮樣のやうな善いお方に那云ふ惡名を負せて、見るもお可傷い憂き目にお遭せ申すのだ。知つて言はないのは彼等と同罪ゆゑ、今日と云ふ今日は懺悔を爲る、と立派にお前さんはお言ひではなかつたか。其の無實の罪を被てお在の繪蓮樣をお助け申したいから、鷲利の前で話をしてくれるやうにと私も賴むので、肝腎のお前さんが證人に成つておくれでなかつたら、奈何して繪蓮樣の明が立つのです。繪蓮樣の明が立たなかつたら、何處にお前さんの懺悔の効が有るのです。

能く考へて御覽なさい、お前さんの一言で繪蓮樣の御難儀が助かるのですよ。其を奈何あつても言はんと云ふのは、自分に痛くも痒くもなければ、他は奈何でも管はん、と云ふお前さんの了簡なのですか。然した心掛ては縱んばサンセルジ詣を爲た所で、迚も天國へ往くことは出來ません。其のサンセルジ詣も爲せてあげる約束では有りましたが、無駄な事

だから止しませう。お前さんも此世で人を助けなかつたから、彼世へ往つて神様に助けられんのは當然の事です。然う覺悟なさい。」

生きて一たびサンセルジの靈場を拜せざる者は、死して必ず地獄に墮つ、と云ふのが彼等の等しく信仰する所であるから、老人は一も二も無く屈服して、蕾叉の命の儘ならん事を誓つたのである。因で、蕾叉は手始として、此の老人と鷲利とが相近くやうにと計つて、稍七日ほど經る間に、鷲利の折節彼の部屋に出入るのを認めたので、はや時分は好しと、或日兩箇の物語り居る所へ入つて、先づ何氣無き體に言を掛けて、扨と思付いたやうに、

蕾「鷲利、お前は以前圓磯生樣に勤めて居たさうだか、それは何日頃の事かね。」

疵有つ脚の鷲利は有繫に色を動したが、

鷲「然やうで御座います、彼是四年許前に相成ります。

萱「然うすると、旦那樣の御存生中だね。」
鷲「はい。」
萱「おゝ、然う〳〵。御不幸の有つた日には聞說お前が御供をして居たのだつたねえ。」
鷲「はい。」
彼は彌よ顏色を變じて、可忌しげに他を顧みるのであつた。
萱「では、旦那樣は何處でお歿り遊ばしたか、知つてお在だらう。」
鷲「何處でと有仰いますと？」
萱「息をお引取になつたのは何處だと聞くのさ。」
鷲「それは何方で御座いましたやら、お宅に還りまして、始て氣が着きましたので御座います。」
萱「途中で何もお話などはなさらなかつたかい、旦那樣は。」
鷲「始終何で御座います、旦那樣はお話などをなさる事は御座いませんで

した。」
蕾「先方を出て還る迄に何位時間が掛つたのかねえ。」
鷲「其は確と覺えませんで御座いました。」
蕾「それでは他を何時頃に出たのだね。」
鷲「彼此晩の六時時分でもあつたらうかと存じます。」
蕾「六時に出たと爲て、家へ着いたのが十時半だと言ふのだね、然すると、僅一里許の路に四時間半も懸つたのかい。」
蕾又は熟と馭者の顏を瞶めた。
鷲「些と諸座の所へお立寄になりました。」
蕾「其外には何處へも寄道は爲なかつたかい。」
段々に問詰めらるゝ鷲利えはや大事露顯の端緒、と毫も安き心は無く、吐く息さへも亂るゝのであつた。傍に聽き居る老人は、我が身の上にあらねど、如何に成行く事ならんと、是も尠からず胸を騒がせて、自から

身の竦むやうに覺えつゝ控へて居た。

鷲「はい、別に何處へも廻りは致しません。」

萬「屹と然うかね。」

鷲「はい。」

萬「お前は其晩此の老人を見掛けなかつたかい。いや、お前の方では知るまいが、此人は森の中でお前達の爲る事を皆悉見て居たのだよ、話も皆悉聽いたのだよ。」

刃を揮ふが如く鷲利の眼は鋭き光を放つて老人を一瞥した。然れども、其は憎しとばかり彼を見たのではなくて、吾を忘れて形相の變るまでに驚き懼れたのでもあつた。

鷲「此の親仁が那樣事を申したので御座いますか。やい、親仁、手前は俺に何の遺恨が有つて、取てもねえ、まあ、那麼事を言やがるのだ。さあ、もう一遍此で言つて見ろ、儞は活しちや置かねえから。」

心弱く怯けて居た老人も、恁う言れては默つて引込んで居らるゝのではない。

老「何だと！　もう一遍言つたら活しちや置かねえ？　長生をすれば可笑な事を聞くものだのう、俺よりはお前の笠の臺が飛ばねえやうに氣を着けなせえよ。」

鷲「何、何、何だと！」

老「俺はの、那晩森へ燃料を拾ひに行つて、お前方の惡事を殘らず見て居たのだ。諸座が待つて居る處へお前が馬車を率いて來て、正體も無い圓磯生の旦那樣を兩箇が舁ぎ下して、雪の中へ放り出して置いたのは、那は何だ。悉く言へなら、未だ幾多でも悉く言つて聞かせやうが、是だけ言つたら澤山だらう。」

其夜の事を知る者は、梢の雪か、空の月、目の有る者は馬の外に、誰も居るのではなかつたに、親仁の之を知るからは、正しく現場を見たので

あらう。」此者が證人と成り、伯爵夫人が表に立つて告訴された日には、其迚も逭るゝ路は無いが……………、と鷲利は窮命の淵に立つのであつた。其時蕾又は言を和げて、
蕾「鷲利、然し、お前は下手人ではない、と云ふ事は判つて居るのだから、罪と謂つても輕い。其を飽くまで隱して居れば、主人を毒殺した大惡人の諸座と同罪に成つて、其の處刑を受けなければならんよ。此ゝに恁云ふ證人が出たからには、甚麽にしても蔽みおほせる事は克はんのだから、潔く白狀して、お前も罪の輕くなつた方が可いではないか、お前の方で明に恁々だと言つて了へば、私の方でも出來る丈盡力して、次第に依つたらば隨分無罪放免にも成らうと考へる。」
鷲利は屹と思案しで、
鷲「然う何も彼も御存じの上は、打覆けて申して了ひます、私は實の處、諸座の孃子が何をお飲せ申したか、那樣事は一向知らないので御座いま

す。那の森の中を抜けて歸らうと致しますと、諸座が先廻をして待つて居りまして、馬車の前へ來まして、旦那樣を下せと言ふので御座います、而して雪の中へ放り出して置けと申しますから、私は那樣事は出來ないと申しますと、突如ピストルを出して、言ふ事を聽かなけりや殺して了ふ、と恁う申します。私も濟まない事とは思ひましたけれど、否だと言へば一擊に遣られるので御座いますから、餘義無く應と申しましたので。それから旦那樣をお出し申しますと、酷く醉つてからにお寐みなすつてお出のやうで御座いましたが、一時間ばかり雪の上へ臥かしてお置き申す內に、身動一つなさらずに、そのまゝ凍死を遊ばしたので御座います。なあ、爺さん、其に相違無えなあ。」

老「まあ、餘り違無いけれど、少し違つて居るやうだのう。」

鷲「何！　何處が違つて居る。」

老「お前は百ルウブル貰つたらう。」

鷲「うむ、然う、あの時那樣約束を爲たつけ。」
老「それぢや約束だけか。」
鷲「後で貰つた事は貰つた。」
老「それぢや同じ事だ。」
鷲「然うだ、同じ事は同じ事だ。」
老「何を言つて居るのだ。」

蕾又は敢て口を開かず、端然として鷲利に打向ふのであつたが、彼は自ら其威に壓るゝ心地して、

鷲「へい、奥樣、恁う白狀致しましたからには、何分お慈悲を願ひまする。全く以ちまして百ルウプルの金なんぞに目が眛れた譯でも何でも御座いませんので、つい、其の、命が惜さに、諸座の手傳を致しましたので、決して那奴と始から共謀に成つて遣つた事ではないので御座いますから、實は、へい、疾から後悔して居たので御座います。」

萬「本來なれば、お主の爲には血を流しても爭はなければ成らんのを、第一命が惜さに惡事に與するばかりでなく、金を貰ふと云ふのは怪しからん事で、お前の罪もなか〳〵赦し難いのであるが、其通り前非を悔いて白狀した廉に免じて、私は何も言ふまい。けれども、お前は是から其筋へ自首して出なければ成りませんよ。」

鷲利は忽ち蒼くなつて顫へた。

鷲「それぢや私は依樣西伯利亞へ送られるので御座いますか。」

萬「いや、それは私が甚麼にしても特赦を願つて上げるから、左に右潔く自首するのです。」

鷲「へい、畏りました。どうぞ、まあ奥樣の宜いやうにお指圖を願ひます。唯今で御座いますから申上げますが、其の以來私は實に可厭な心持で、毎晩陸に寐られませんので御座います。お蔭樣で今日から氣が清々致しまして、へい、壽命が延びましたやうで御座います。」

蕾「神は決して懺悔した者を罰しません、其代圓磯生の奥様の爲にお前は此事に就て十分に働かなければなりませんよ。」

鷲「へい、乾度一生懸命に働きます。」

蕾「はあ、宜い。今日はもう其で用は無いから那方へお出で。」

鷲利の去つた跡に、蕾叉もやをら起たんと爲れば、

老「奥方様、どうぞ、私をサンセルジへお詣にお遣りなすつて下さいまし。」

蕾「遣つてあげるから安心なさい。」

（十七）減水の量

鷲利は其性善を好む者ではなかつたが、又決して殺人の大罪を犯して懼れざるほどの兇漢ではないので、一旦は諸座の脅迫に遭つて、無道の惡事に與したやうなもの丶、彼は百ルウブルの爲に主を害する事を思はぬのであつたから、其惡を悔い、罪を懼る丶も速に、樂まざる日と寐ねざる夜とは、此の幾年の間絶えず彼を苦めたのである。

然るに、計らずも雷叉の糾問する所と爲つて、舊惡終に露顯の其時こそ、彼の森の中にピストルを差付けられし可恐さに、優るとも劣るのではなかつたが、扨白状して了つた後の清爽〳〵とした心地は、世間に况ふべきもの有りとも覺えぬばかり。尚伯爵夫人は特赦を願つて、無罪放免に爲んと云ふのであるから、彼は遽に天地廣く、山も野面も見るものは皆樂く、殆ど夢むる如き想で獨り村端の川縁を彷徨〳〵と行いて居た。

背後から聲を掛ける者が有るので、何心無く振向けば、彼の諸座が荷車を曳いて今村へ歸つて來たのである。鷲利は折も折とて惡い奴に逢つたと思ふから、些と顏で會釋を爲たまゝ、急行に拔けやうと爲るのを、諸座は濁聲揚げて、

諸「おゝ〳〵、待ちねえ、鷲利。えゝ、おい、待ちねえと云ふに。」

鷲「何ぞ用か。」

諸「用かも無えもんだ。こう。異う他人扱に爲るない。お前又何だつて俺を見ると遁げるんだ。えゝ、おい、遁げるやうな譯が有るのか。」

鷲「何も遁げは爲ねえ、用が有るから急ぐんだ。」

諸「嘘を吐け！ お前は何ぢやねえか、此頃呉城の別莊へ行つて居ると云ふぢやねえか。那の夫人は成上り者で、なか〳〵吃へる代物ぢやねえのだから、お前氣を着けなくちや可けねえぜ、えゝ、おい、本當に。」

鷲「何を氣を着けるのよ。」

諧「此奴は唐變木だな。一件よ、それ。」

鷲利は苦笑を爲るのみであつた。

諧「笑ひ事ぢやねえぜ。本當に氣を着けてくんねえよ。」

鷲「心配しなさんなよ、暴露る時分にや暴露るんだ。」

諧「可厭な事を言ふない！　お前様子が變だぜ、えゝ、何だつて那樣に突兀するんだ。俺はお前に然う爲れる譯は無え積だが、それとも有るんなら、異う所置振で爲ねえで、截然と言つて貰はうぢやねえか。」

鷲「何も那樣事は有りはしねえ。」

諧「無えなら、何も然う不景氣な面貌を爲て居るには當るめえ。」

鷲「俺は此の二三日些と加減が惡いんだ。」

諧「然うか、そりや好くねえな。病氣は何でも屈托して居ちや可けねえ。久ぷりで杯一遣らうぢやねえか、丁度此間滅法良い燒酎を買つたのだ。なあ、おい、一緒に來ねえ。」

鷲「折角だが、今日は用が有るから、いづれ又御馳走にならう。」
諸「まあ、可いやな、寄つて行きねえよ。」
切に留むるも聽かず、鷲利は路を轉せて、遂に彼と別れた、諸座は如何にとも合點の行かぬは彼が仕打、倘やと眉を顰めつゝ、曳き行く車の足元重く、家路を指して悄々歸る。門口に出て居た女房は、折から歸り來れる諸座の案じ顏なるを見て、
女「お前さん、奈何ぞ爲たのかい、顏色が惡いぢやないか。」
諸「うむ、今其處で鷲利の野郎に逢つたのだ。」
女「那の畜生が奈何したのさ。」
諸座は其の始末を語り聞せたのである。女房も同じやうに顰蹙をして、
女「そりや困つたね。那麼奴の事だから何を爲やがるか判らないよ。お前さん、こりや氣を着けものだよ。」
諸「然うよ、何とか一工夫しにやなるめえ。」

夫婦は内に入つて、有間は無言であつた。旋て如何なる密談を爲たものか、良一時間ほど有つて、女房は飄然と出て行つた。

裏道傳ひに繪蓮の居宅の横手に出て、勝手口から内の樣子を窺つたが、直に庭口へ廻ると、恰も繪蓮が利喜三を連れて散歩に出るのに會つた。

女「おや、奥樣、御運動で被在いますか。坊樣、今日は。」

蓮「何ぞ、おまへ、用かい。」

女「はい。あの、奥樣、恐入りまして御座いますが、是から御運動にお出で遊ばしますのなら、お次手に些と私の方まで御越を願ひますで御座います。先日も申上ましたて御座いますが、あの、井戸で御座いますね、此の照續きで段々水が減りますばかりで、貴方樣、何にも恁にも爲樣が無いんで御座いましてね、此分で御座いますと來週になりましては、早速牧場の畜に困りますので、もう今から其が胸に支へて居るで御座います。旦那樣のお在の頃もお願ひ申ましまして、今度樋を掛けて川の水を引

くやうに爲て遣らうと云ふ御意で御座いましたが、斷然〳〵然やうな事に爲て戴きませんと、迚も遣り切れませんで御座いますよ、はい。就きましては、どうぞ些と御撿分にお出を願ひますで御座います。」

蓮「あゝ、そんなら歸途に廻つて見ませうよ。」

時は土曜日の夕方で、百姓達は例よりも早く野良を切上げて、皆湯浴せんと町に聚る頃であつた。露西亞の習俗として、到る處入湯と鞦韆とは樂を取る機械の缺く可からざる者に成つて居る。因で、湯屋の混雜は夥しいもので、何處の門口も人波を打つばかりに群集して居る。

散歩から歸途の繪蓮は片手に草花の束を提げ、利喜三の手を牽いて此に來掛つたが、村の者の大勢居るのを見て、得も謂はれず不快を感ずるのであつた。彼等は如何に吾が身を疎み、嫌ふとも、神に對して愧づる事無き吾に於て何か有らんと念じつゝ、此の群集の中を輕く會釋して過ぎた。とは謂ふものゝ、彼は覺えず頰の熱し、胸の轟くを禁じ得ずして、

唯早く此の難關を過ぎんとばかり、傍目も轉らず急ぐのであつた。其子は忽ち足を止めて、
利「母さま、此處に井戸が有りますよ。」
と言ふなり寄つて行くから、繪蓮も後に跟いて、井の中を窺ひ見れば、諸座の妻の言に差はず、驚くべき減水の量である。
蓮「成程、まあ、是では大變だが、何處の井戸も這麼か知らん。」
利「母さま、那地のへも行いて見ませうよ。」
と利喜三は匆々と先へ行く、母も轉じて又其井を試むるに、前のと同斷の有樣であるから、中を窺ひつゝ暫く考へて居た。
其人の影さへ見れば直に呼く村人なれば、此體を見て何かは尤めざらん、早くも一人が口を切つた。
「何爲て居るんだらう、彼地此地の井戸を覗いて何に成るだ。可笑な事する人でないか。」

彼等は目牽き、袖牽き、皆繪蓮の爲す所を怪むのであつた。更に言ふ者が有る、
「何ぞ井戸に禱つて居るだな。惡黨め、又何ぞ巧まうと思つて——今度は誰殺すだ。花持つて井戸の中覗いて、禱つて居るに違無えだ。」
「大方那樣事だらう。何處まで太え匹婦だか知れた者でねえ。」
一同湯浴の事は忘れて、繪蓮にのみ注目して居る處に、湯屋の男が出て來て、
「さあ、皆さんお入りなさい。」

（十八）御神の審判

此夜利喜三は感冒の爲に發熱して甚しく苦んだので、繪蓮は通宵看護した上に、翌朝も其の枕頭を離れずに介抱するのであつた。然う恁うする間に九時半ともなつて、會堂に於る最初の祈禱の鐘が鳴り渡つた。右の始末で繪蓮は參詣が克はぬから、下婢一人を留めて、家内の者一同を出し遣つて、其身は兒の傍に附いて居たのであるが、明方から漸く安眠するを得た利喜三は、此時機嫌好く目を開いて、はや恙無き體であつたから、起して服を更めさせ、膳立の整ふ間窓際の椅子に倚せて、三々五々と絕間無く會堂へ行く人通を見せつ眺めつして居たのである。旋て人は益す出盛つて、恰も隊を成したるやうに絡繹として過る折から、一人の男が立顯れて、何やら叫びながら其の群の中へ入ると見れば、忽ち彼の周邊に堵の如く人立がした。

利「母さま、あれは何でせう。」

蓮「何だか解らないけれど、何か有るのだらうねえ。」

見る／＼群集は彼の男の言に勵されたりと覺しく、遽に打響動むのであつた。繪蓮は何事ならんと、急いで下婢を見せに出した。

利「母さま、行つて見ませう、何か面白い事が有るのですよ。」

蓮「未だお前は風に當ると惡いのだから、外へ出てはなりません。」

利「母さま、それぢや何でせう。」

繪蓮も是は何事とも測りかねたので、遠目ながら具に其の樣子を覗て居ると、怪むべし、群集の眼は次第に此方に向つて、手をもて指すもあれば、何やら罵るも有る。繪蓮は然る覺無しと思へど、例の己を憎む村人の事なれば何を爲んも知れずと、急に窓の扉を鎖てゝ了つた。其時大勢の叫聲は一層高く聞えたのである。

利「母さま、奈何したのですね。」

綸蓮は猶硝子越に外の景況を覗へば、彼の群集は我門近く推寄せる。箇は抑何故なるか。彼の一箇の男有りて群集を煽動せしは、則ち或者に頼まれたる或者である。然らば或者は如何なる事を口に藉いて彼等を煽動せしか。

此朝村人は起出でゝ、怪しからぬ椿事を目撃し、又怪しからぬ損害を蒙つたのである。事は即ち、忽然として一夜の中に彼等の飼犬が斃れ、鶏が斃れ、山羊が斃れ、犢が斃れ、其他の家畜が故無くして多く斃れたのである。人々の疑ひ惑へるに乘じて、是こそ昨日圓礎生夫人の井戸に禱つた修法の致す所である、と彼の男が流言を放つたので。愚直なる村人は然なきだに憎める綸蓮の事とて、右から左に之を信じて、一度に騒ぎ出したのである。

「然うだ〳〵、昨日の夕方草花持つて、子供連れて、村中の井戸を殘らず覗き行いたのは、那時毒藥を入れて廻つたのだ。那奴には毒藥が附物

だ。第一旦那を其で殺し、過日は子供を殺し掛けたでないか。」
「今度は俺達を鏖殺にでも爲る氣だらう。」
「毒藥と來たら那奴の爲業だ。然う思へば、毎晩夜深まで二階の窓に火光が映して居たのは、的然毒藥を調合して居るんだ。」
「今期會堂へも詣らずに內に居るのは、依樣疵有つ脚で出られねえのだ。」
「其と云ひ、此と云ひ、這麼騷擾を持上げたのは圓磯生夫人に違有りませんね。」
「こりや皆さん打遣つては措けませんよ。」
「誰が打遣つて措くものだ。」
氣早の一人が躍り上つて、
「殺して了へ！」　と音頭を取れば、
「殺せ、殺せ！」　と口々に呼はる六七十人の同勢は、揉みに揉んで
繪蓮の門に雜踏した。

此の氣立ましき叫喚と、凄じき物音とに膽を冷したる家内の男女は、命有つての物種と、皆何地へか遁散つて、殘るは繪蓮母子のみ。推寄せたる村人は、割れよとばかり闥を叩き、鬨を揚げて、今にも闖入せんず勢

繪蓮は兒の手を牽いて恐るゝ色も無く戶口に顯れたので、群集は驚破と又一時、

「殺せ！」「殺せ！」　　と盛に絕叫するのであつた。繪蓮は先づ儼に彼等を眴して、

蓮「貴方達は奈何なすつたのです！　お言ひなさる事が有らば聽きますから、靜になさいまし。」

「默りやがれ！」「打殺すぞ！」「磔柱！」「撲き倒せ！」「大惡人！」　と八方より矢を射る如く飛來る雜言。然れど未だ暴れ出でゝ手出しを爲る者は無い。

蓮「私は皆さんに何を致しました。罪が有らば、如何やうとも皆さんの存

分に成りますから、譯を言つて聞せて下さい。」

「おゝ、譯を言へなら、私が言つて聞せませう。」

と正面に立つた五十前後の分別有り顏に構へた男が、屹と繪蓮を上窺に睨んで、

「お前樣はな、昨日村中の井戸へ毒を入れさしやつたらう。いゝや、瞭然と知つて居ますわ。現在那の水を搔吃つた牧場の畜類は何處のでも、今朝皆殪れて居たですわ。お前樣は何で那樣怪しからねえ寇を作さる。さあ、挨拶なせえまし。」

寐耳に水の難題に、繪蓮は幾と辯解に困じたのである。

「何を證據に那樣事を?」

と呆るゝ顏を睨付け〳〵、彼の男は、昨日繪蓮が村中の井を見廻りしは、正しく其が爲なりと固く主張するのであつた。繪蓮は在樣を言聞せたが、彼等はなか〳〵信ずるのではない。

「藥袋も無い事言はしやるな。お前樣が唯見廻つて行かしつたばかりの水を飮んで、それで畜類が死にまするか。何と言つても、毒を入れたのはお前樣に違有りませんわ。」

繪蓮は段々言を盡して其妄を辯じたのであるが、言へば言ふ程彼等を激して、今そはや手の着けやうも無い。此上は如何にとも愚民の欲するままに爲よかし、と身をば抛つ覺悟の繪蓮は、聲張揚げて天を仰ぎ、

蓮「御神は何事をも知し召す、妾は唯御神の昭々なる裁判を冀ふ。」

凜然たる彼の意氣を見て、有繫は我寄つて倒さんと爲る者も無く、仍口口に詈るのみであつた。人數の中に隱れたる諸座は忽ち大聲を出して、

「燒いて了へ、家ぐるみ燒いて了へ！」

「焚殺せ〳〵！」と之に和する聲は、彼の指圖を待ちたる如く四方に起り、見る間に木片、枯枝の類を持集つて、窓下に積上る。群集は荐に閧を揚げて勢を示すのであるが、繪蓮は震ひ慴るゝ利喜三を犇と引寄せ

て、自らは極めて冷然と彼等の惡作劇を蔑視えて居た。時に遥に一輛の馬車有りて、二頭の馬の足掻も空に、此方を指して疾驅し來るは誰、彼は覺えず足を翹げて望み視た。

轔々たる響を揚げて、競ひに競へる車は、此の群集を野草の如く推分けつゝ、無二無三に繪蓮が立てる階段の下に乘着けた。ひらりと内より顯れたるは呉城伯爵夫人である、續いて病後の近小野は疲曳と下立つ、馭者の驚利は護衞として引添ふのであつた。

今や一擧して此家を焚壞さんと悍り切つたる村人も、少頃は目を張り、氣を歛めて、自ら其の何故とも覺えずして、空く此の一行を迎ふるのである。

蕾又は己の前に人々の心を奪れて鳴を鎭めたるに乘じ、淸朗なる聲を勵して、

「皆さんは奈何なすつたと云ふので御座います。圓礎生樣に罪が有らば、

國法が之を罰しまする、決して皆さんの手は藉りません。又皆さんも之に干る權利は御座いませんのですよ。强て然やうな猥藉が爲たくば、何方も西伯利亞へ行く覺悟で作さいまし。」

此の西比利亞の一語は尤も聽く者の膽を寒からしめたのである。其身は賤かる一處女の分を以て、威名ある吳城伯爵閣下の罪を奏し、易き事掌なんどを反すが如く其人を絕域の雪に放ちたる蕾叉の口より出でし西伯利亞なる語は、彼等に取りては、實彈の塡裝せらるゝを睹たりし銃を以て擬せらるゝと一般であつた。

時に一人屈せずして、

「憚りながら、西伯利亞へ行く覺悟なさるが可えのは、私共よりは其の圓磯生の奥樣で御座るてや。昨日の事じや、村中の井戸へ毒を打込んで、有らう事か、有るまい事か、私共を一統鏖殺に爲うと云ふ可恐い事を巧ましやつたは其方じや。放つて置けば私共の命が亡うなるに因つて、皆

か逆寄にして敵の命を取りに來たのに、何の不思議も御座らんてや。」
「然うじや〳〵。」　「其通じやぞ。」
萱「うむ、それでは繪蓮樣がお前さん方の井戸へ毒を入れたから、其の返報に命を取りに來たとお謂ひなさるのですか。」
「知れた事で御座りますわ。」
「それが無理で御座るかよ。」
萱「では、倘し井戸に毒を入れたのは繪蓮樣ではなくて、罪人は外に在ると知れたら、皆さんは其者の命をお取になるで御座いませうね。」
其意を測りかねて、卒に言を出す者は無い。
萱「皆さん、如何です、どうぞ御返事をなすつて下さい。」
「罪人は外に在ると有仰るでがすか。」
「外に在ります。私が唯今指名致しますから、皆さんで直に捕縛をなさいまし。」

一同は潮の湧くが如く響動いたが、彼ならずして村人の中に誰かは然る嫌疑を受くる者あらん、語れ、聞かんと、各顏を見合せて、又一時打鎭つたのである。蕾又は聲高く、

蕾「其の罪人は諸座夫婦であります。」

皆息の根の止るばかりに驚いた。

蕾「それには歷とした證人が此に兩箇まで居ります。さ、お前方は公衆の前で立派に誓を作さい。」

聲に應じて近小野と鷲利とはやをら群集の前に立出でた。

兩箇は言を揃へて、

「我等は御神に誓つて伯爵夫人の唯今の被仰に詐無い事を證明致しまする。」

鷲「諸座は御主人たる圓磯生樣に毒をお進め申した擧句、無慘にも雪の中で凍死をお爲せ申したで御座います。」

近」其は現に此の親仁が見て居りましたので、彼の罪は遁れぬ所で御座います、諸座は右の如く御主人を吾手に掛けて置きながら、其罪を奥様に嫁り付けて了つた、重々の大悪人で御座います。」

鷲村の衆は然云ふ事とも御存無く、何咎も無い奥様に悪名を付けて、主殺の諸座を安々と活けてお置になるで御座いますが、其は皆彼が巧んで致した事で御座います。」

此時阿修羅王の暴れたる如く諸座が躍出ると想の外、彼の妻が血眼に成つて其へ顕れながら、

「嘘も好加減にお吐きなさい！　他に悪名を付けるとはお前さん達の事だ。内の人を罪に陥さうと思つてからに、まざ／＼と證人まで拵へて、那様嘘八百を並べるとは、顔に似合はない可恐い人だ。さあ、何でお前さん達は然う内の人を目の讐にして罪に陥さうと為なさるのだ。大方内の人が居たらお前さん達の邪魔にでも成る事が有るからだらう。滅多な

事を爲て他に難を付けやうとして、各自の襤褸を出さねえやうに用心を爲るが可い、而して昨日井戸の中に毒を入れたのは私達だとは、何處に那樣證據が有りますえ。奥樣こそ用もないのに那邊中の井戸を覗いてお行きなすつたぢや御座いませんか、村の衆は皆さん御存じですよ。

さあ／＼、此の人達を活して置いちや、村中の者の命が殆い、皆さんで早く奈何かして下さいましよう。」

恁ても仍深く繪蓮を疑へる村人は再び哄と鬨を作つて、人も家も焚かんと犇くのである。

あはや繪蓮の氣絕せんと爲るを、蕾叉は碇と弓手に扶けて、

蕾「さあ、焚くなら私も一緒に焚いて御覽なさい！」

斯人の陰身には常に皇帝陛下の添へると信ずる村人は、後の祟を惧れて、敢て卒に手を下す者も無い。蕾叉は大音揚げて、

蕾「皇帝陛下の御名を借りて恐多い儀ではありますが、皆さん一同で此女

と諸座の兩人を速かに捕縛なさい！」
言下に諸座夫婦は大勢の中に押取籠られた。折から息促き駈着けたのは家從の不破瀬である、夫人を見て、那へ〳〵と指す方より、又もや砂煙を蹴立てゝ走り來る馬車が有る。何人ならんと目を側てゝ群集の待つ處へ、曳々と乘込み來りて立顯るゝのを看れば、手藥煉引いたる數名の警察官、即座に夫婦の者を搦取る。
全く氣を失つて家の内に舁入れられた繪蓮は、此時漸く人心地付いて、傍に附添ふ不破瀬の顏を見て、
「奈何なりました。」
「もう、御心配には及びませんで御座います。彼等は拘引されて參りました。」
門前の稍鎭るのを待つて、今内に入來たる蕾叉の姿を見るより、繪蓮は吾を忘れて蹶起きたが、

蓮蕾又様………！」とばかり嬉しさ余つて泣頽れたのである。

（十九）令聞嘖々

其の夏の末に及んで諸座夫婦の罪科は判決せられて、西伯利亞の鑛山に懲役と成つた。之に由つて繪蓮が積年の嫌疑も釋けて、村人は今更に彼等の極惡非道を憎むと與に、此の濡衣を着て干す由も無かりし人の身の上をいとゞ憐みて、又夫の在りし世の如く等閑ならず思はるゝのであつた。此の事件以來蕾叉と繪蓮との間は、影の形に於けるやうに親密となつて、元是一家の兩家と成つたのが、還更に合して兩家の一家と成つた有樣で、互に相倚り、相扶けて、憂を語り、喜を分つて居た。

諸座夫婦の判決の有つた日繪蓮は蕾叉を訪うて、夜に入るまで物語に耽つた。繪蓮こそ青天白日の身と成つて、今は心に懸る雲も無いのであるが、彼等が西伯利亞へ送らるゝと云ふに就けても、蕾叉が胸は潰るゝのである、談は自から其に移つて、

蓮「然う貴方のやうに悒々思つてばかり被在るものぢや御座いませんよ。兄を始彼土に行つてお在の方達も、貴方の御厚意で安樂に暮して居るので御座いませう。貴方のお盡し遊ばす丈の事は、十分盡してお在ので御座いますから、其の御心は必ず先へも通じますで御座います。其が解らんやうな人達では御座いません。先頃の事に就きまして、私は悉く始末を書いて兄の處へ遣りましたので御座いますが、昨日彼土から返事が達きまして、懇々もお禮を申してくれるやうにと、大相喜んで參りました。」

蕾又は夫にして倘し然ほどに喜ばしく思ふならば、何故己に對して一封の書を吝むのであらう、未だ〳〵憤は釋けぬのであると考へた。

蓮「それから聖彼得堡の伯母からも、貴方には段々お禮を申さなければならんと申志て參りましたが、いづれ近い內にお文を上げますで御座いませう。」

蕾叉は頭を低げて之に謝した。
蓮「御承知か存じませんが、聖彼得堡では貴方の御評判の高いことは非常なもので、兩陛下までお噂を遊ばしまして、貴方の事をお褒になつて在せられると申す事で御座います。然やうな譯ですから、今貴方が彼地へお歸り遊ばさうものなら、甚麼に交際社會から尊敬あそばされるか知れませんで御座います。」
蕾「私はもう彼地へは歸りません。」
蓮「あれ、貴方は何をお泣き遊ばすのです。何爲すつたので御座います。」
蕾叉は顏を掩ひつゝ嗚咽して言ふ能はざるのである。實に繪蓮の見て訝る如く、彼は如何なれば今卒に泣くのであるか。曩に彼が聖斷を仰ぎし日、滿都の士女は指彈して、彼を女流の最も賤むべき者と爲ざるは無かつた。蕾叉は意にもあらぬ伯爵夫人の椅子に始て其身を置いた時、寧ろ恨を呑んで死なざりしを悔いに悔いて已まぬのであつた。彼は其の生耻

を都に居て曝すが難忍さに、此の草深き邊鄙に逋れ來て、味氣無き一生を葬らんと企てたのである。然るに今思懸けずも其の汚名は轉じて令聞と成つて嘖々傳へらるゝと聞いたる蕾又は、何事にも先つと謂ふなる涙の紛下つるを禁じ得ぬのであつた。

蕾「世間の人が私の心を知つてくれましたのは、如何にも嬉いので御座いますが、其に就けても殘念のは、今だに私の思が、西伯利亞へ達かんので御座います。世間から幾多褒められませうとも、殿樣に憎まれて居りましたら、其の名譽は有るに効無いもので、私が身を捧げて呉城家の爲に盡しますのは、何も世間に褒められたくて致すのでは御座いません。」

蓮「蕾又樣、貴方は兄の事を然うまで思召して被在るので御座いますか。」

蕾「一たび結婚致しましたからは、私の爲には二人と無い夫では御座いませんか。」

蓮「其夫を貴方は眞實愛してお在るので御座いますか。」

實「私は最も愛して居ります。御神と皇帝とが賜はつた夫で御座いますから、私は何處までも其人に隨ふべき義務が有ると信じます。然し、爰に一件謂ふに謂はれぬ心懸と申すのは、お話を致しますのも實はお可恥いので御座いますが、彼の御三人の中で、私に對する罪の有るのは誰方だやら、其が今に知れませんので御座います。と申すやうな譯で御座いますから、殿樣が少しも私をお思ひ下さらんのは、或は子細の有る事では無いかと、然う考へますほど私は熟く情無いので御座います。」

繪蓮は今日と云ふ今日の今始て此の秘密を聞いたのである。彼は世間と同じく、陛下は正當なる裁判を下されたる者と信じて居たので、深く心に駭いた。

蓮「兄は貴方に何とも申しませんで御座いましたか。」

實「伺ひましたけれど、那樣事を訊ねる必要は無いと有仰つて、何ともお話し下さらんので御座いました。」

蓮「然云ふ片意地の人ではないので御座いますが、何か其は譯が有るので御座いませう。いゝえ、宜う御座います、是からは及ばずながら私が御相談對手に成りまして、乾度貴方の御安心のなるやうに甚麼にも御盡力を致しませうから、どうぞ眞身の妹と思召して、何なりと御遠慮無く私へ有仰つて下さいまし。」

菫「難有う存じます。便無い身に然して御深心に有仰つて下さいますと、私は何程氣強いか知れませぬ。吁、何と申す不幸な軀なので御座いませう！」

繪蓮も之を慰むるには、到底言語や同情の及ぶ所でないと知つたから、別れて歸ると直に筆を取つて、兄に宛てた長文の手紙を認めたのである。然るに是が西伯利亞に着する前に一大椿事が湧起つた。則ち其報を齎したのは、曩に彼の前警視總監繰布將軍を四這に這ゑせたる阿茅淳公爵夫人である。

（二十）賢婦忠僕

或朝蕾叉は繪蓮と俱に食卓に就いて居ると、表の方に劇しく馬蹄の音が聞ゆるので、兩箇は思はず手を住めて耳を澄した。急足で食堂に入來つた不破瀨は、

不「阿茅渟公爵夫人の御越で御座りまする。」

蕾「阿茅渟公爵夫人が？……何爲に此へ、……直に御客間へ御案内を申上げて下さい。」

不「いえ、もう疾に何で、而して嚴いお荷物で御座いまして、其を合沓〱お搬び込に相成つて居られまするが、長く御逗留でも遊ばしまするので？」

蕾「奈何ですか、私は知りませんよ。」

不「はつ。然し、どうか然やうな御樣子で。」

兩夫人は目と目を見合せた。

葉「あゝ解りました。那の方は靈象府家から出られたのですから、何か弟御様の中尉のお身の上に事が起つたのでは御座りますまいか。」

蕾又も然うと考へながら急いで接見した。

公爵夫人は尤も親しげに挨拶して、さて長椅子に倚つて徐々に說出す。

與「掛違ひまして今日までお目もじを致しませんで御座いましたが、お噂は夙て伺つて居りますので、當時彼得堡で貴方を呼捨に申上げる者は有りませんので御座いますよ、氣高い蕾又、又は貞淑の蕾又、と必ず申上げるので。而して又、御器量もお美しう被在ると云ふ事は承はつて居りましたが、失禮ながら私は恁うも御奇麗な奥方とは存じ寄りませんでした。」

蕾「で、今日貴方様のお越に相成りましたのは、何ぞ火急の御用事でも。」

與「はい。西伯利亞からも毎々書面で御座いまして、一方ならぬ御深切の程は、實に私の身にまで沁みまして、何とも難有い事だ、と淚の出るや

うに存じて居りますので御座います。是非お目もじを致した上で、此の御禮は十分に申上げたい、と日頃思ひ通して居りました處、此度圖らず出ましたのは、實は私一己の體では御座いません、伯母御樣並に澤毛野子爵夫人の代理を兼ねまして、貴方へ御頼の筋が御座いますので、其は別儀でも御座いませんが、那の西伯利亞で御座います、彼地では唯今窒扶斯熱が非常に行りまして、弟なども感染致しました樣子で御座います。」

蕾又は悚然として肩を震はせた。

阿「ところが、醫者らしい者も御座いませんやうな始末で、漸く雇婆ぐらゐが看病を致すので御座いますが、其も手が足りませんで、病人同士互に看護を致して凌いで居ると申す事で御座います。」

蕾又の胸は益す跳るのである。

蕾「其に就きまして何ぞ私がお役に立ちますので御座いますか。」

阿「どうぞ貴方へお願ひ申しますのは、此儘に捨置きましては三人の命に

拘ります事で御座いますから、何卒此際特赦の恩典を下し置るゝやう、貴方から陛下へ御上奏を願ひたいので御座いまして、此事は私共の力には逮びませんので。是非貴方でなければと申すので、私が總代に成りまして箇樣に御賴に出ましたので御座います。」

嘗「それは好うこそ御出下さいました。私風情が恐多い事では御座いますが、お指圖に從ひまして、早速陛下へ拜謁を願ひますで御座います。」

画「然やうなら御聽入れ下さいまして…………。」

嘗「はい。此上は一刻も早いがお宜う御座います。是から直に參りませう。」

阿茅渟公爵夫人は驚いた段ではない、今來て今話を爲たばかりであるのに、直に出發せうと謂ふのは何たる熱誠、何たる率直。然るに己を顧みれば、一週間も滯在するやうな支度の荷物に對して、愧づる所無き能はざるのである。

不取敢當又は居間に退つて發足の準備に掛る。入替りに繪蓮は接待に出

て居たが、有間にして蓄叉は服を更へて入つて來た。

蓄「甚だ失禮を致しまして御座います。」

公爵夫人は此の支度の手早いのに呆れたのである。

圓「もうお宜いので御座いますか。私は如何に何でも今日一日ぐらゐお手間は取れる事と存じて居りました。」

蓄「つい氣が促きますもので御座いますから、實は支度どころでは御座いませんので。然し、貴方樣は御遠方をお越て、然ぞお勞れ遊ばしてゞ御座いませう。幸ひ妹も居ります事で御座いますから、どうぞ二三日御逗留遊ばしまして。」

公爵夫人も稍躊躇の體であつたが、

圓「私一人然う致しても居られますまい、御一緒に參る事に致します。」

はや馬車は表に廻されたので、主客は閾の外に顯れた。蓄叉は思ひも寄らず不破瀨が馭者臺に相乘をして居るのを見て、

薑「おや、お前さんお出なのかえ。」

丕「はつ、是非お供を願ひまするで御座いまする。一向お役には立ちますまいで御座いませうが、何卒彼地までお引連を。」

薑「彼地へとは西伯利亜の方へですか。」

丕「はつ。」

薑「お前さんのやうな老人が、それは可けません。」

丕「いゝえ、私は死にましても大事御座りませんので、殿様のお爲には決して厭ひませんので御座りまする。」

老の涙脆くも彼そはや泣いて居るのである。

蕾又は再び言はずして、公爵夫人と共に車に打乘つた。

此の旅行は蕾又に取つて尤も不安不快の者たるに違無かつたが、又其中に益する所も有つたのは、話好の公爵夫人から貴族社會の状況を始として、夫なる呉城伯爵に關する一切を知悉するを得たのである。なれども

還一日千秋の思を爲ざるにもあらずして、入京するや否や伯母なる伯爵夫人の許を訪うた。嘗て一非職軍醫の憐むべき娘として引見せられし蕾叉は、今其人の親き姪として、將令名ある伯爵夫人として優待せらるゝのであつた。彼は蕾叉の手を把つて、

夫「私は誠に貴方には恐入りました。能も陛下の思召を辱めず、天晴女の道を立てゝ下すつた。今更何と申さう言も有りません。苟くも親屬中に貴方のやうな立派な婦人が居らるゝのは、此上も無い呉城家の名譽と考へます。で、萬一甥が不心得から這般の御志に酬いませんやうな始末でありましたら、私は誓つて彼には一生此邸へ足踏は爲せません。」

蕾「過分のお言で…………。」

とばかりに蕾叉は涙に昏れた。彼は當世の賢婦人として聞ゆる伯母なる人の此の一言に感激して、二年の辛苦は終に酬いられざらんも、共に憾無しと爲すのであつた。

然る程に伯母刀自の執奏を經て蕾叉は參內を許され、親しく天顏に咫尺して彼の特赦の儀を哀願に及んだのである。一門の歎、眷屬の悲は然る事ながら、私情を以つて公の大法を亂すべきにあらず、と殊に叡慮を惱されたのであるが、彼が婦道を守れる殊勝の志を憐み思召して、終に其の請願を裁可あらせられ、更に伯母なる伯爵夫人を召させて、右の旨を仰せ聞けられた。

然る處伯爵夫人は又別に、蕾叉自身赦免狀を奉戴して彼地へ罷り下り度趣を願出てたのである。陛下は之を聞し召して、一びは驚き、一びは危まれたのであるが、又陰に男兒も及ばざる豪毅の精神を感じ給ひて、隨分道中心を着けよ、との難有き御言を添へられて、之にも御許が出たのである。伯爵夫人は天恩の優渥を謝して退出し、急ぎ還つて勅裁の赦狀を蕾叉に示せば、彼は餘の忝なさに襟の沾ふを覺えずして感泣した。頃は初冬の夕暮れて、昨夜より降出でし雪は猶霏々として窓を撲つ。冷、

かなる燈火の下に露滋き花の顔を俯せたりし蕾叉は、旋て衝と椅子を起つて、

蕾「私は今晩出發致しまする！」

夫「今晩？　是から？」

伯母は驚いて蕾叉の面を視た。

蕾「一刻も早く參りたう存じますから」

伯母は熟と考へて居たが、

夫「然うですか。それでは直に行つて下さいまし。路は險しゝ、雪は降るのに、長の道中の事でありますから、心配して居たら際限は有りますまい。御神は必ず貴方の身を安全にお護り下さると信じますから、思切つてお立せ申します。」

蕾「然やうなら直に私は、」

夫「隨分お體をお厭ひなすつて下さい。」

夙て用意は萬端整ひたる事なれば、卒と云ふまゝに旅裝して、爰に名を惜む賢婦と死を輕んずる忠僕とは、暗夜を冐し、風雪を衝いて、蕭々たるトロイカに策ち、行方迥き西伯利亞の空を指して打立つた。

夜を籠め、日を暮して行く程に、或時は雪に埋れて路を失ひ、嵐に取籠められて車を覆し、又或時は狼の群に追れて膽を冷じ、飢寒身に逼つて涙も氷る野の末、河の涯、實に一艱を送りて一難を迎へ、一辛去りて一苦來るもの連に幾十日にして、命めでたくも主從は迥か彼方の山陰に雪降積める森に掩はれつゝ、有繋に壞れも遣らぬ二三の小家を望むのであつた。是ぞ即ち流竄の名の下に三中尉が活ける屍を埋むる其の處と知られた。

此の侘しき景色の目に映ずると與に、蕾又の胸に浮ぶのは、其處に住める人々の安否如何であつた。はや病の爲に斃されたであらうか。同じ枕に三人とも命を失つたであらうか。或は幸に九死を出でた人が有るであ

らうか。若し有らば其は誰であらうか。彼の人の身に凶事も有らば、我は今更何と爲んなど、彼は長途の萬艱を凌いで安着したる躬の幸を喜ぶ遑も無いのである。

主從は先づ、所轄の警察署に出頭して其の證明を得、署長の優待を受けて彼の配所の小家に導かれた。

（廿一）特赦の天使

嬉しくも三名は左に右に無事と謂ふべきであつたが、呉城伯は獨り大病の枕も擧らず、唯命が有ると云ふだけの始末。蕾叉は直に其室に通つた。棟の低い粗末なる木造の部屋であるが、亞細亞製の白氈を敷塡めて、凡て送越せし裝飾品は皆此に据付けて在る。其が爲に見る影も無い侘住ながらも自ら中に裕なる處が認めらるゝので、蕾叉は己の志の空からざりしを私に悦んだのである。唯見れば毛皮に蔽れたる寐臺に横つて居るのは、此の五七日來熱の爲に人事不省の呉城伯で、傍に附添へる一人の病疲れ、瘦衰へて陰鬼の如き容またるは、病後の靈象府伯である。蕾叉は一目打見るより目も眩れ、心も消ゆるやうにて、嗟乎、我ゆゑに罪を獲たる人々よと、殆ど其處に僵れんと爲るのであつた。

靈象府は今入來れる貴婦人を見て、其の蕾叉たるを辨ぜぬのである。蕾

の紅茶屋の密室に色を失ひし處女は、恰も其の境遇の一變せると等しく、又其の容貌に、體度に、或は其の思想に變化の著るしき者が有つて、彼が慘憺たる苦心の此の二年は、明かに其の前後の半生を劃する痕を留むるのである。故に彼の蕾又を識りし者も、卒然に此の呉城伯爵夫人を見ては、恐く別人の看を成すであらう。況や善くも識らざる靈象府は、己等が犯罪の原告者の此に來訪はんとは夢にも想ひ掛けぬのであつた。州長の夫人か、旅中の貴族などの慰問を忝まるゝならん、と力無き身を起して、蕾又の前に其姓名を訊ねた。

蕾「お見忘で御座いますか、私は呉城蕾又で御座います。」

靈象府は惘然となりて纔に頭を低げたが、忽ち病後の疲憊に身を支へかねて、蹌々と後樣に仆れんとするを、蕾又は衝と寄つて、椅子に扶け載すれば、彼は其手を取つて敬意を表しつゝ接吻を施した。

靈「貴方は奈何して箇樣な處へお出に成りました。實に意外とも何とも不

思議に堪へませんが。」

「私は好い御便を持つて參つたので御座います。」

「好い便?! 唯今の此の身の上では、(好い便)と云ふ其の語を聞くだけでも肉が躍るやうで御座います。何、何、何云ふ事で。」

蕾又は此に來るなり早既に平生蟠まりたる懸念の一つを解去つた、と謂ふのは、彼の狼藉を己に加へたのは決して此人でないと云ふ事を曉つたのである。

蕾又が答へて言はんとする際、外方に人の氣勢がしたので、少く遲つて居る處に、澤毛野子爵が杖に扶けられながら、是も病羸れた姿をして蹌踉と入つて來た。

彼は窒扶斯熱に罹つた先頭第一の患者であつたが、他の兩箇が健全で居た爲に、看護も屆けば快愈も早い分であつた。然るに吳城伯の僵れる頃には、先に靈象府も僵れ、澤毛野も未だ蓐に就いて居て、誰介抱する者も

無く、自ら病を重らせたので。今彼等は辛くも其熱を除いたので、義の爲に推して看病すると知られた。

澤「これは奥樣、能うお越になりましたのう。此頃は雪で殆ど往來も御座りません處を、御婦人の御身で遥々是へ御出は、御勇氣の程敬服致しました。」

軍「夫人は我們に何か好い便を齎して下すつたと云ふのじや。」

澤「好い便とは何で御座いませうかな、我們は最一度歐羅巴の方へ還られるでありませうか。」

蕾叉は御名の署されたる特赦状を捧げて、之を靈象府に渡せば、然りとも知らで打披き見たる彼は吽と言うたまゝ氣絶して仆れた。

時を移さず兩箇に呼活られて、目を開くなり澤毛野を見て、

軍「貴樣、特赦の恩命が下つたぞ！」

澤「おゝ、我們は特赦を蒙つたのじや。確りせい、確りせい。」

蕾「確り志て居る。貴様喜べ！」
瀬「喜んで居るわ。貴様確りせんけりや可かんぞ。」
蕾「大丈夫じや、確り志て居るわ。」

彼等は天使に向ふが如く蕾叉に向つて拜謝するのであつた。折しも呉城伯は熱に浮されて呫嚅と譫語を言始めたが、後には苦み悶えて大聲に叫ぶので、蕾叉は其傍に差寄つて、はや介抱の手を下す。彼の兩箇は恁く打揃つて主從の附添ふからは、今は心安しと、一先暇乞して、各小屋に立歸つた。

此日から蕾叉と不破瀬とは晝夜を分かず患者の傍に居て、心の用ゐらるる限、力の盡さるゝ限、看護に看護して倦む事を知らざるのであつた。之が爲に然しもの病勢も日に〳〵減退して、昨日今日は彼も稍人心地着いて來た鹽梅。蕾叉は己の此に來て居るのを知せて病人を驚かさん事を恐れたので、然やうな粗相の無いやうに尤も注意志たのである。

或日患者は靈象府と澤毛野とが枕上に居るのを見て、
吳「君達は活きて居つたのか。」
羅「僕等よりは君の方が既に危かつたのぢやが、其分なら、命を拾うて、這麼愛でたい事は無い。」
此晩患者は彼等と共にスウプを啜つた。
澤「此のスウプぢや、僕は此のスウプのお蔭で命を全うしたのぢやから、貴樣も我慢して澤山遣らにや可かんぞ。」
吳「僕は熱の爲に絕えず夢を見て居たから、無論夢ぢや有らうとは思ふけれど、どうも又然うでないやうにも考へるのだ、…………。」
羅「君は何を言つて居るのか！」
吳「いや、內の不破瀨な、何でも他が始終傍に居て介抱して居たやうに想はれるのだが、今朝も居たやうだて。」
澤毛野は覺えず大笑した。

澤「馬鹿な、勿論夢よ――」
呉「夢だらうなあ。」
靈象府も打笑みながら、
靈「夢でなかつたら奈何か。」
呉「奈何かつて、夢ぢや爲方が無い。」
澤「然うよ、夢ぢや爲方が無い、大きに然うじや。けれども事實であつたら奈何か。」
呉「這麼嬉しい事は無からう、なあ。」
彼は悵然として乍ち思に沈んで了つた。壁越に此の物語を聽いて居た不破瀨は、今出やうか、今出やうかと、覗いたり、引込んだりして居る處を、澤毛野が何も言はずに麾いたので、得たりとばかりに入來つて、靜に呉城伯の寢臺に近いた。人の足音に彼は何氣無く目を轉ずれば、不思議とも何とも、其處に夢の中の人が歷々と立つて居るのであるから、唯

呆れて顔には言も出てず、諦視之を久うして仍疑ふのであつた。

呉「や、不破瀬か！」

不「はっ、殿樣！」

呉「おゝ、不破瀬だな！」

寢臺に縋つて老人は咽泣に泣いた。

其肩を片手に引抱いて、呉城伯も少頃は不覺の涙に昏れた。呉城伯は譬へん方も無く不破瀬の訪來たのを悅ぶのであつたが、當座の二三日は其の如何にして來たかと云ふ事を別に訊ねるのでもなくて過ぎた。唯一も不破瀬、二も不破瀬と、此の親仁でなくては夜も日も明けぬやうに、只管彼の介抱を喜んで居た。病は日毎に癒え行くばかりで、氣の捏然となるに就けて、彼には始て身邊から室內の模樣が何と無く向來とは變つて居るのを感じた。又時としては、睡る時と覺めた時と變つて居る事が有る、最も怪まるゝのは、彼の不破瀬が何處へ何爲に行くのであるか、時なら

ぬ時分に倏忽と見えなくなる。第一に食事の善くなつた事は著しいもので、風味と云ひ、氣取と云ひ、恐くは我が彼得堡の邸の料理に優るとも劣らぬと覺ゆる。總て是等は親仁の手際ではない、誰か人が有つて同行したに違無い、と陰に曉つたのである。なれども敢て問はんとも爲ずに打過ぎた。

或朝目を覺ますと、枕上の小卓の上に倚て見慣れぬ女持のハンカテイフが乘つて居るので、怪しげに目を着けて居ると、不破瀨が衝と來て、然り氣無く其を隱して了つた。勿論親仁などの所持すべき物でない、想ふに差はず誰か忍ばせてあるなと考へて居ると、不破瀨が出て行つた。すると隣室で隱々と語ふ聲が聞ゆるのであうた。

午前に靈象府が來たので、呉城は彼に問試みた。

呉「君、不破瀨は何爲て此へ來たのかね。」

靈「依様橇に乘つて來たさうじや。」

吳「那樣事を聞きは爲ん。何云ふ譯で來たか、其を問ふのだ。」
靈「君が大病で難しかつたから、それで來たのじや。」
吳「伯母が寄越したのか。」
靈「然ぢやなからう？」
吳「自分で來たのか。」
靈「然でもないやうだ。」
吳「それぢや奈何したのか！」
吳城は向腹を立てゝ詬つた。
靈「俺も能は知らんのよ。然し、誰か寄越したのぢやらう。」
吳城は弗と煖爐の上に在る花籠に目を着けたが、其の花の盛り方の巧さは、迚も男の手業の及ぶ所でない。
吳「靈象府。」
靈「何かい。」

吳「那の花籠は誰が作つたのだ。」

羅「うゝ、那か！」

吳「不破瀬には出來んよ。君には猶の事、澤毛野は勿論だ。」

羅「おゝ、勿論じや。」

吳「那の籠のまゝ咲いて居たのか。西伯利亞と云ふ處は重寳な處だのう。」

羅「實は近頃俄然重寳に成つたのじや。」

吳「一體誰が來て居るのだ、君等は何も隱さんでも可いぢやないか。」

羅「敢て隱しは爲んけれど……………それぢや言はうか。」

吳「當然さ。」

羅「實は我們の爲に無上の福音を齎した人が來て居らるゝのじや。」

吳「我們に福音？　此世の外に葬られて了つた我們に福音なんぞが有るものか！」

彼は面を背けつゝ可忌げに唾吐いた。

靈「所が有るのじや。君は那の不破瀨ばかりを忠實の者に思うて居るが、何ぞ計らん、最一層君に事へて忠實の人が有るのじや。其人が齎した福音と云ふのは、驚いては可かんぞ、あゝ、可いか、驚く勿れじやぞ。」

吳「何を驚くものか。」

靈「善し。其の福音と云ふのは外でもない、君の病氣が治り次第我們〳〵は何時でも彼得堡へ還る事が出來るのじや。」

吳城は覺えず苦笑した。

吳「下らん事を言ひ給ふな。君は本に氣樂な者だなあ。」

靈「氣樂だ？　豈獨僕のみ氣樂ならんやじや。氣樂で差支無い譯が有るから氣樂なのじや。何も怪むに足らんぢやらう。」

吳「何だか些も解らん」

靈「解らんから言うて聞せるのに、君が聞かんのぢやないか。此度陛下の恩命に因つて、我們〳〵は彼得堡へ召還さるゝのじや。」

呉「おゝ、それぢや特赦を蒙つたのか！」

靈「然ぢやとも。」

歡喜とは謂ひながら、過度の感情に打れたる呉城伯は、あはや其場に氣絶せんと爲る體であつた。靈象府伯は痛か狼狽して、

靈「夫人、些と來て下さい、早く、早く。」

氣立ましい喚聲に蕾叉は何事ならんと、驚き慌てゝ駈入つて來た。呉城伯は漸く自ら氣を鎭めつゝ、眼を開いて夫人の姿を瞶て居たが、

呉「特赦の御使にお出下すつたのは貴下で御座いますか。」

蕾叉は俯きながら聲顫せて、

蕾「はい、然やうで御座います。」

呉「而して此の特赦は何方がお願ひ下すつたのですか。伯母でせうな？」

蕾叉は面色を變へたまゝて何と荅も爲ん方無き體。

見るに見かねし靈象府は、

露「默り給へ。誰のお蔭でもない、此の夫人の力じや。外の事とは違うて容易ならぬ特赦の恩典、他の者から如何に願はうとも、是ばかりは御許有るべき筈が無い。然のみならず、孱弱き婦人の身を以つて、此の雪を冒して遥々と西伯利亜の果まで來られた、其の艱難辛苦は幾許であつたらうか。又其の艱難辛苦を凌いで此まで尋ねて來らるゝ御胸中をお察し申せば、僕は涙が零るゝのじや。君も能う考へて見たまへ。」

吳城伯も蕾叉の操行の伯爵夫人たるを辱めざるは、陰ながら識るのである、又今彼の容儀、態度を見れば、愈よ其の操行の虛からざるを想はぬではないが、仍ほ情として、此の忘れ難き仇敵と對して忍ぶ能はざる者が有るのである。

吳「いや、然やうてしたか、それは御厚意の程何とも難有う存じます。唯恐入つたのは貴方のお手際、實に此度は立派な復讐を作いましたな！然ぞ御滿足で御座いませう。」

其のまゝ彼方向に枕して、呉城伯は再び音も立てず居た。間有つて蕾叉の悄〱立去る氣勢が為て、跡には靈象府が物や思ふらんと覺しく打濕りて居るのであつたが、遽に、

靈「呉城。」　と呼ぶのを聞いたから、彼は空寐の顏を振向けた。

呉「何か。」

靈「君は善くないのう。今の言草は那は何か、傍に聽いても居られんやうな事を、夫人に對して氣の毒なは言ふにも及ばんが、第一に君自身の德を傷くるのじや。夫人の立派な爲方に比べて、君の那の鄙劣な暴言は、大いに耻づべき事ではないか。」

呉「いゝや、僕は鄙劣な暴言などを吐いた覺は無いぞ。彼に向つて言ふべき相當の事を言つたのだ。」

靈「君は怪しからん事を言ふのう。然云ふ了簡で居ては濟まんぞ。君は一圖に夫人を憎んで居る、其が先入主と成つて居る爲に、其人の德を認む

る事が出來ん、而して總て誤解を爲て居るのじや。」僕と澤毛野は全く夫人の德には心服して了つた、實に一言も無い。我們から見れば君は所謂る局に當る者じや、局に當る者の迷ふのは、そりや尤ぢやが、親友の我們が言ふのじや、決して君の爲に不利な事は勸めん、如何にも皇帝陛下より賜つた伯爵夫人たる價値が有ると信ずるから、君は宜く怨を釋いて夫人の志を納れたまへ。是は我們が熱誠を以つて君に推薦するのじや。」

吳「いや、いや、折角だが其事なら言つてくれ給ふな。僕には又僕の了簡が有るのだ。」

靈「其の了簡が惡いのじや。若し夫人に對する怨を謂ふならば、我們三人の間に甲乙は無い、等く彼人の爲に此の嚴刑を受けて…………。」

聞くも煩しと、吳城は又他を向いて了つた。靈象府は稍聲を勵して、

靈「吳城！」

吳「…………。」

靈「おい、吳城、吳城！」

吳「もう寐た、寐た！」

靈「寐ちや可かん。」

吳「可かんでも何でも寐た。」

靈「寐ても何でも起き給へ。」

吳「あゝ、頭痛が爲て來たから、今日は免し給へ。」

靈象府も手を着けかねて、此塲は口を噤むより外無かつた。時に不破瀨が交替に來たので、彼は旋て此を立去つた。吳城は跡に萬感交も胸に滿ちて、轉輾反側を絕たざるのであつたが、其の最も深く思ふ所は、彼の爲に憐むべき千辛萬苦の心を傷むる蕾叉の事ではなくて、今や自由の身の故鄉に還る嬉しさであつた。朧むともなく彼は時の移るを知らずして目覺むれば、はや蠟燭は室内に耀き、卓子には夕餉の準備が爲てある。

見れば、四人前の用意が出來て居る、例なれば三人であるのに、と考へた。直に兩箇の友は入つて來ると、寢臺の傍に衝と來たのは澤毛野子爵。

澤「夫人は、のう、我們と此で會食する事を斷つてお辭りになるのじや。其は畢竟夫人に對する貴樣の待遇が失當して居るからじや。就いては貴樣に話を爲んけりや成らん事も大分有るけれど、今は其の場合でないからして言はんが、左に右相當の挨拶を爲て、早う此へお伴れ申すやうに爲んけりや可かんのう。」

前には靈象府に散々言はれ、今又澤毛野に飭めらるゝ彼の心頭は、怒氣燃ゆるが如く、切齒を作して、

吳「何だ、相當の挨拶とは！　不破瀨、貴樣那裏へ行つて引…………。」

澤「こりや、那樣事言ふぢやない！」

澤毛野は眉を顰め、目を動して彼を制した。

吳城伯は有繋に仂なしと思ひ飜して、

呉夫人に此方で御飯を上るやうに、然う申して。」

不破瀬が此旨を傳へたので、蕾叉は直に來て三人と共に卓に就いた。呉城伯は始終彼の一擧一動に注目したのであるが、蕾叉は食事中大方俯いて、羞づるが如く、懼るゝが如くに唯愼んで居た。靈象府と澤毛野とは極めて鄭重の體度を取つて、此の伯爵夫人を禮遇するのである。然るに夫人は彼等の十言云ふのを二言三言に應けて、究竟夫たる人の不興に對して翼々としてゐる氣色が明かに見ゆる。

快しと思はぬ呉城伯も、此體を見て、決して憎いと云ふ念は出ぬのである。尙憚無く謂はしむるならば、其の愼み守れる姿の况へ方無く怜しらしいのに、彼の心は稍動されたのである。恨も憎も有間は忘れて、花の如く麗しく、露の如く可憐しく、鳥の如く愛らしと見るのみであつた。

旋て食事が了ると、蕾叉は挨拶をして出て行つた。

「奈何か、君。恐入つたものぢやらう。容貌と云ひ、言語と云ひ、那の

體度は奈何じや、なあ、品格と云ひ、實に婦人として完全無缺の者おやないか。君は那でも嫌ふか。我們は君の幸福が可羨しいのじや。」
吳城は沈默して居た。澤毛野は彼の語を繼いで、
澤「成程、のう、我們を恁云ふ身の上に爲たのも、謂うて見りや彼の夫人の業かも知れん、(固より罪は此方に在るが)然しぢや、今日に到つて見ると、僕は善う夫人の精神が解つたから、此の處刑を受けた事に就いて、毫も夫人は恨まんのじや。
此に來て以來月々十分の仕送を受け、又今度の特赦の如き、夫人が我們の爲に盡力されたのは非常なものであつて、沒取された我們の財産は、我們が自身に監督するよりは尙善く監督されて、而して之を我們に全然還さるゝと言はるゝのじや。是でも其人を恨む事が出來るか。」
吳城は仍一言も發せざるのである。
兩箇は交る〳〵說いて、幾と舌を爛すのであつた。けれども、彼は決し

て其の初一念を咄嗟の間に飜すのではない、應とも否とも口を開かぬ心の中は、頑として動かず居たのである。

夜も更けたので、兩個は歸り去つた。呉城も靜に枕に就いて居ると、窃と入つて來た不破瀬は、毎の如く主人の牀の下に寐支度を爲た。

呉「不破瀬。」

不「はつ。殿樣には未だお目覺で。」

呉「まあ其處に居て、些と夫人の事に就いて話してくれい。」

不「はつ、何なりとお話し申上げまする。」

呉「第一に聞きたいのは、繪蓮の一件だが、那の始末は何云ふのかな。」

是に於て彼は說去り說來り、良二時間に渉つて細大洩さず聞えた。

不「て、此の事件と申すものは、首から尾まで奥方樣のお手一つで萬事御處置を遊ばされましたので御座りまして、何かに就けて其の御勇氣の程は、失禮ながら誠にはや驚入りましたもので、殿樣の御覽に入れたう存じま

した。手前は唯今でも目に付いて居りまする。特に是へ御越に成りまして、晝夜殿樣の御看病を遊ばされました御丹精と申す者は、何と申上げやうも御座りませんので、箇樣に今日の御體に御本復遊ばされましたも、全く奥方樣の御介抱のお力か、と憚りながら手前は存じまするで御座ります。其外お留守中の御殿の整理等に就きましては、此で累々しう申上げませんでも、御歸邸に相成りますれば、奥方樣の御配慮の程は直にお了解に成りまする事で、又毎日の御行狀等は手前から申上げまするは恐入りまするで、其邊は繪蓮樣から悉しうお聞取を願ひまするで御座りまする。」

一々聞訖りたる呉城伯は有間無言であつたが、

呉「不破瀨、奈何かして離縁の出來ん事は有るまいのう。」

不「はつ？」

呉「他を離縁したいのだ。」

丕「御離縁?!　殿様、如何に何でも貴方様は取……取……取でも無い事御……御意遊ばされます。」

彼は滂沱々と涙を流して、覺えず殿の顔を睨付けた。

丕「平素の殿様にもお似合ひ遊ばしません事を仰せられます。假初にも那の奥方様を御離縁などゝは、嗟乎、何事で御座りませう。」

彌よ紛下る熱涙は彼の皺面を蔽ふばかり。

吳「何を貴様は那様に泣くのか。」

丕「はっ、手前は泣きまするで御座りまする。殿様が餘り非道な事を御意遊ばしますゆゑ、奥方様の御胸中をお察し申上げまして、はい、泣きましたが如何致しました。」

吳城伯は返す辭も無くて、不與氣に默して了つた。不破瀨は旋て容を正して、

丕「殿様は御大病中の事で何も御存じでは被在られますまいが、唯今も申

上げまする通、殿様のお命をお助り遊ましたのは、奥方様の御看病のお蔭で御座りまする。御發病の六日目に御着に成りまして、其場から御枕上に十五日間と申すものは、唯の一時間御寢なつた事も無く、夜晝の御看病で御座りました。小鞠野に御在の時分から御心配の絶間は無いので、誠にお惨しいほどお羸れ遊ばしてお在の處を、此方へお越匆々其の仕合て、又一層の御疲勞は目に見えて、近頃の那の御血色は宛で御病人の狀で御座りまする。其が殿様の御目には入りませぬで御座りまするか。若し那の奥方様がお在遊しませなんだら、殿様は今頃は此世に被在れるのでは御座りませぬ。」

奥「あゝ、もう可いわ、解つた。」

丕「お了解に成りまして御座りまするか。」

奥「解つた、解つた。あゝ、睡く成つて來た。」

丕「然やうなれば御寢なりまし。」

爲う事無しに殿は夜着を引被つて了つたのである。

(廿二) 燈下の指環

其後蕾叉は毎に夫と對食する事に成つたのであるが、度重なるほどに呉城も左に右顔色を解いて彼に接する迄に馴れた。病は益す快方に赴いて、今では蓐を離れて椅子に掛り得るやうに成つたので、靈象府と澤毛野とは最早氣遣無ければ頻繁く見舞ふ必要も無いと謂ふのを名として、故と足を遠くする。始終附添ふのは、蕾叉と不破瀬で、其も交代であるから、半日と一晩夫婦掛向て居る事も有る。外は雪風烈しく、狼の遠吼が聞ゆると云ふ物凄い夜などは、影幽なる燈火の下に餘念無く縫物をして居る蕾叉の姿は、抑も如何なる感を彼に與へたてあらうか。呉城伯は縱し其人に親まぬまでも、尚ほ飽くまで憎まんとは爲得ぬのであつた。彼の優しさと、可憐さと、麗しさとは日一日と呉城の心を和ぐるのである。

身も氷るばかりの夜を獨り寐も遣らず、看護の爲に蕾叉は室の隅に控へ

て居た。其の侘しげなる容と憂はしき面立とは例ならず呉城の情を動したので。

「貴方、どうか繪蓮の事件に就いて話を爲て下さいませんか。」

と彼も此時始て語らしい語を懸けたので、蕾叉は空谷の跫音を聞くやうに覺えて、尠からず悦んだ。因で逐一其の物語を爲て、尙ほ繪蓮と己との關係から、小鞠野に於ける生活の模樣等まで洩らさず打明けたのである。呉城は之に因つて又稍〻蕾叉の眞相の一面を伺ひ知るを得た、則ち彼の到底憎むべきものではないと云ふ事を敎へられたので。

是から五日ほど經て、呉城伯は少しづゝ散步も出來るやうに成つたので、天氣の好い、暖い日、解け初むる雪を踏んで、兩箇の友を其の小屋に訪ねたが、以前のやうには樂く感ぜられなかつたので、更に步を移して蕾叉の小屋に向つた。彼も有繫に長々の看護に憊れて、少く健康を害したので、二日ばかり引籠つて休養して居るのであつた。

然るに思ひも寄らず殿の入來るのを見るより、蕾叉は慌忙しく寢臺を下りて、先づ慇懃に邀へて、外出の克ふまでの輕快を祝した。呉城伯は身の上に係つた話を爲やう／＼と勗むるのに、蕾叉は每に避けて、專ら然あらぬ事のみを話柄と爲るのであつた。

呉「もう近い內に我們は此を引拂ひたいものですな。」

蕾「然やうで御座います、貴方の御全快遊ばしますのをお待ち申して居りまするので御座いますから、然やうなお鹽梅なれば、徐々支度を致しましても宜いかと存じます。」

呉「時に貴方は御體が惡いやうですが、甚麼具合ですか。」

蕾「はい、難有う存じます。別に然したる事は御座いませんのですから、」

呉「然し、お顏色は良くありませんね。」

蕾「然やうで御座いますか。」

熟と瞶めらるゝのが面羞さに、彼は思はず手を擧げて顏を撫でた。時に

其指に晃いたのは呉城の贈つた結婚の指環である。其が目に入ると齊しく彼は忽ち不穩の色を作して、姑く默したのである。

呉「貴方は今度彼方へお還りに成つた上は、何云ふ御考でお在のですか、伺つて置きたいので御座います。」

恁く有らんとは、蕾又も夙て期したる事ながら、其場に莅んで見れば、決して心持は好くなかつた。けれども、彼は露ばかりも未練の色を見せずして、

蕾「私は還りましたらば、田舍へ引込みまして一生を送りませうと存じて居ります。」

呉城は此の意外の答を得て陰に驚いた體で、

呉「田舍で一生お暮しなさる？」

蕾「然やうで御座いまする。」

殿は俯いて何と無く考へて居る。

蕾「其等の事に就きまして、實は篤とお話を申上げませうと存じて居りましたので御座いますが、御病中の事ゆゑ故と今日迄差扣へて居りました。幸ひお話の次手で御座いますから申上げて置きますが、呉城家の御財産は悉皆お調べ申しまして、明細に一々記して置きまして御座いますから、どうぞ之を御覽あそばしまして。」

持ち來つた計算表を其へ差置いた。

呉「是は何ですか。」

蕾「貴方の御財産のお書付で御座います。」

呉「私の財産？　私には那様物は有りませんよ。」

蕾「然やうなれば貴方のではお有なさいませんか存じません、然し、私が呉城家の物として保管致して居りましたので御座いますが、いづれ私が田舍へ引込みました後は、貴方が御監督遊ばしませんでは成りませんので御座いますから、此の御書付はお手許へお置き遊ばしまして。」

呉「いや、それは猶且お心得違でせう。呉城家の財産と云ふものは、既に貴方に所有權が有るのですから、其の書付を他人の私が覗ひ見るべきでないのです。又其を私が覗ひ見るのは違勅の罪に當ります。」

彼は其物に手さへ觸れぬのである。違勅の一言には蕾叉も差當つて返す辭は無かつた。

蕾「もう一件申上げたい事は…………。」

呉「何ですか。」

見ると、蕾叉はいつか俯目に成つて、得も謂はれぬ胸の思に萎るゝ風情であつたが、其のまゝ餘は言はずして、彼の結納の指環を抽取つて呉城伯の前に差出したのである。彼は唯蕾叉の顏と指環とを迭交に打眺めて、有間は互に無言であつた。

蕾「其は貴方へ御返納いたしますて御座います、どうぞお收め下さいまし。」

呉「之を私へお還付に成ると有仰るか。」

蕾「はい。」
吳「何云ふお意で？」
其時蕾又は極めて冷々に、極めて寂しく、將た極めて慵げに片頬の笑を洩した。
蕾「申上げます迄も御座いません。私よりは善く貴方が御存で被在います。」
吳「…………………………。」
彼は先の財産の還附を言下に却けたるやうに潔く之を却けぬのであつた。然のみならず、其よりは是の彌よ違勅たるべきを、全く曉らざる如く持成えて過した。
姑く有つて彼は我指なる指環に手を掛けた。
吳城伯は此際己の身を思へば大に得意でもあり、又蕾又の切なる心を酌めは憫然の至でもあり、左右は彼の爲に惡からぬやう、今後の處置は慿えて那して、と途上考へながら、日の暮方に小屋に歸つたのである。

燈を點して程も無く澤毛野子爵が訪ねて來た。椅子に着くと、シュムプの下に指環の置いて在るを見付けて、

澤「是は何爲たんじやね。」

奧「奈何も爲んのさ。僕と夫人との關繫が絕れた證なのだ。」

澤毛野は目に稜立て丶彼の顏を視ながら、

澤「ふむ、それぢや是は夫人の指環か。貴樣が夫人の手から奪ふたのか。」

奧「何、僕が奪ふものか、他から返したのだ。」

澤「それで貴樣は受取つたのか。」

奧「受取つたから此に在るのだ。」

澤「今になつて那の夫人を離婚するのか。」

奧「今になつて、と云ふ事が有るものか、始から僕は心を許しては居らんのぢやないか。唯今日公然と證の物を取戻した丈の事だ。」

彼の語氣は殆ど敝履を脱すると一般に此事を輕々しく思つて居るのであ

つた。澤毛野は呆れ果てゝ頓に出づる言も無く、テエブルの端に両臂を載せて沈吟して居たが、旋て太息を吻いて、

澤「嗟乎、無情な者じやのう！　那程の夫人を貴様は何故に棄つるのじや。豕に眞珠を投ずる誚を免れんぞ。」

忽ち色を作したる吳城は、

吳「何、豕とは誰の事か。」

澤「誰の事か、そりや知らん。但然云ふ諺が有るじや。己に與へられた物が過分である爲に、却つて其の直打が解らん奴を豕と云ふ。豕には眞珠などより芋の尻の方が相當なのじや。唯憐むべきは豕の前に投げられた其の眞珠じやのう。」

吳「あゝ、君は其の眞珠が欲いと見えるな。」

澤「何じやと！」

吳「欲くば遣らうよ。いつでも持つて行き給へ。」

澤「欲いと僕が何時言うた。」

呉「言つても言はんでも、己の親友を毛族に比して、一方を眞珠に喩へるほどの女ならば、君は執心なのに違無いさ。口では欲いと言はんでも、欲いと思つて居るのだらう。」

澤「其通の沒分曉漢ぢやから、貴樣は豕じやと言ふのじや。僕は夫人に執心も爲んけりや、決して欲いとも思はん、唯……貴樣、能う聽け、那云ふ婦人と結婚する名譽を有ちたいと云ふのじや。若し僕が其の眞珠を獲らるゝ權利が有りや、身を棄てゝも必ず手に入るゝ、それほど貴く僕は思うて居るのじや。」

蕾叉が彼の口に藉つて揚らるゝほど呉城は勃々の不平を禁じ得ぬのである。

呉「善し、僕は豕なら豕でも可い、豕で滿足して居るから君等は一切管つてくれ給ふな。」

澤「然うでないから、貴樣もう一遍能う考へ直して見い。のう、是は獨り貴樣の爲、又吳城家の爲のみならず、同族の爲に冀ふのじや。」

吳「君も實に解らんな。始が那云ふ譯の關繫の女ぢやないか、其を如何な事にも堂々たる伯爵夫人として、僕が公然と手を把つて世間へ出られると思ふのか。」

澤「那云ふ關繫であるからとは、何の口で言ふのか。畢竟那云ふ……………。」

吳「もう可い！」

と言ふなり彼は座を起つて、怫然と室を出て了つた。

（廿三）配所の雪

蕾叉は指環を返して後は、勗めて其人に面を合せぬやうに爲るのであつたが、呉城伯は其以來俄に不愍が增して、此方からは勗めて會はうと爲る。因で日每に行つて訪ぬるのであるが、然して會つて見れば、思ふやうに話を爲るのでもない。それで又難面く遇ふのかと謂へば、決して然うではないので、堅い裏に優しい處が有り、可愼い裏に婉しらしい處が有つて、なか〳〵棄て難く思はるゝのである。向來段々と世話に成り、苦勞を爲せた擧句否應言せず離婚まで爲て見れば、一生忘れじの憎惡も怨恨も痕無く消え去つて、彼は今蕾叉に對して何等の介然たる者もあらぬ。始て雲を排いて月を看たる呉城伯は、月の麗しさを識つたので、憎む可く、嫌ふ可き蕾叉は、敬す可く、愛す可き蕾叉の誤解なるを漸く曉るのであつた。靈象府は或日彼に戲るゝともなく、

羅「君は近來蓄又孃に對する樣子が大分變つたではないか、何云ふのかな。」

吳「變つたとは奈何變つたのか。」

羅「愛すべく變つたのじや。」

吳「那樣事が有るものか！」

羅「有つても差支無い所ではない、然う無けりや成らんのじや。」

吳「奈何か知らんが、那樣事は無い！」

彼は飽くまで覺の無い體を裝つて、强て言はゞ氣色を損じさうなので、靈象府も其場は口を噤んで了つたが、陰に澤毛野と語合つて、此の結局を見る事を樂んで居た。

扨吳城伯も今は全癒して、平生の健康に復し、猶又蓄又の注意に因つて發送せられた旅費も着したので、いよ〳〵出發の一段と成つた。はや翌の朝こそは、配所の雪に埋れし身も花の都に還ると思ふものゝ、有繫に住馴れし地を棄つる名殘も惜まれて、彼の三人は其處此處と馬車を驅

つて近邊を逍遙したのである。

此日彼等の胸中に漾へたる愉快は誠に言語道斷であつた。靈象府伯は呉城伯を顧みて、

靈「今日は特別に景色が好いやうぢやが、彼得堡ぢや到底恁云ふのは見られんの。」

呉「長い間見たから可いだらう。」

澤「けれども、住めば、のう、此處でも都じや、左に右棄つるに忍びんやうな感が有るではないか。」

靈「有る、有る。いよ〳〵都へ還ると成つて見れば、昔の事は夢よ、仇も恨も何も無い、嗚呼好い心持！」

澤「其通り、靈象府先生の言の如しぢや。」

靈「呉城伯閣下は如何ですかな。」

呉「或は那樣ものかも知れんね。」

澤「或はか？」

吳「或はよ！」

澤「或はそ面白いのう。」

靈「成程或はそ大いに面白い。」

吳「何とでも言ふが可いさ。」

靈「おゝ、それなら言ふが、翌の今頃君は蕾叉孃と相乘て、此の美しき風景を眺めつゝ行くのじやぞ。」

吳「知らん、知らん！」

と吳城伯は乍ら苦り切つて外の方へ目を反せて了ふ。澤毛野はパイプを垂れるやうに喞へたまゝで笑を含んで居た。其顏を見て靈象府も同じく笑を含んだのである。馭者は連に鞭を鳴した。

（大團圓）花の都路

日數積りて一行の馬車は既にウラル山を踰えて、日一日と歐羅巴露西亞に近きつゝ、二三日の内には彼得堡に着くのである。

吳城伯は或朝早く目覺めて見ると、蕾叉は頗る打勞れたと覺しく、車の動搖の激しき中に晏然として酣睡して居る。此方に向けたる寐顏に何氣無く目を留めると、淚を垂れし兩行の痕が歷々と頰の上に殘つて居る。這は必ず前夜泣明したのであらうと思へば、然らぬだに今は既に蕾叉が優しき胸を曉り得たる身には、爭で之を見て目も昏れ、心も消ゆるやうに覺えざらんや、彼は我を忘れて夫人の顏を打目戍りつゝ、衝と擦寄つて其手を握つた。蕾叉は乍ち驚き覺めて身を起さうと爲ると、殿が吾手を把つて居るので、益す駭いて、然り氣無く引放したのである。吳城も其の唐突を慙ぢて頓に辭も出し得ぬ、蕾叉は猶更口を開きかねて、手持

無沙汰に窓の外を眺めた。

「もう程無く旅行も終りますよ。」

蕾又は纔に頷くのみであつた。

「どうも此度は一方ならんお世話に成りまして、お禮の申上げやうも無いのです。貴方は然ぞ私の無情なのをお怨みでありませうが、そりや追而お詫の爲やうも有らうと考へて居ます。」

怺へかねたやうに蕾又は遽に答へた。

「いゝえ、飛んだ事を有仰います。私は決してお怨み申すなどゝ云ふ事は御座いませんのですから、然やうな御心配は御無用に遊ばされまして。却つて私こそ心にも無く針ほどの事を棒に致して、御名譽を傷けましたのみならず、那云ふ憂き目をお見せ申しましたのは、皆私の不束から爲しました業で、今と成りましては何と申上げて宜いのやら、どうぞ御勘辨遊ばして下さいまし。」

彼が餘なる可憐さに呉城は胸逼りて不覺涙を催した。

呉「あゝ、恐入りました！　今まで匿して居つた罪を白狀します。嘗て酒興の上で貴方を苦めたのは私です！」

蕾「そんなら貴方が?!」

呉「赦して下さい！」

彼は情極つて再び蕾叉の手を取つた。

本意ならぬ契を籠めしは、靈象府にあらず、澤毛野にあらずとは、已に業に蕾叉も推し得て居たのである。然りながら。的然其の人の口頭より出づるを聽きては、更に更に謂ふべからざる感に打れて、憎きか、悲きか、可怨しきか、可耻きか、將叉口惜きか、嬉しきか、心は忽ち異しく亂るまゝに、岸破と其處に打伏して了つた。

此の刹那に呉城の心機は一轉したり。彼は忙々しく時計の鏁子を搜つて、其に附けたる蕾叉の返せし指環を放ち去つて、片手に女を抱き起せば、

今更何を爲るならん、と身を振解くを、男の力にぐつと引寄せ、有無を言はせず彼の環を其指に穿した。蕾叉は呆れ惑ひて直に拔取らんとするを、緊と抑へて、

「どうぞ其は改めてお受け下さい、どうぞ、どうぞ。私が前非を悔い、罪を謝し、而して貴方へ恩を返す其が證であります。私は最愛の妻として一生貴方を棄てません。貴方も一生私を忘れずに……………。」

蕾叉は涙に咽んで言ふ所を知らぬのである。馬は忽ち足掻を遏めて駐車場に着いた。靈象府と澤毛野とは聲々に外方より呼はる、

「さあ下りんか。」

「食事じや、食事じや。」

（三十四年二月）

紅葉全集卷之五終

遺弟　泉斜汀　校

明治三十七年九月二十日印刷
明治三十七年九月廿三日發行
明治三十八年四月　再版發行
明治四十二年十月廿五日八版發行

紅葉全集第五卷
定價金壹圓八拾錢

著者　尾崎德太郎

發行者　大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷者　市川七作
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所　博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百〇八番地

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

十千萬堂藏版

紅葉全集　全六冊

第壹卷

二人比丘尼色懺悔　風雅娘　新桃花扇　巴波川
南無阿彌陀佛　拈華微笑　戀の蛻　此ぬし
夏瘦　關東五郎　新色懺悔　文ながし
猿枕　わかれ蚊帳　七十二文命の安賣　二人むく助
二人女房　紅葉山人著作年表

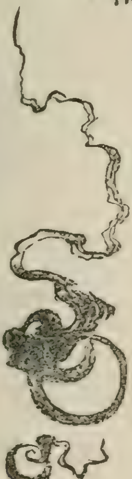
第貳卷

伽羅枕　おぼろ舟　むき玉子
伽羅物語　女の顏　花ぐもり　紅白毒饅頭
戀の病　夏小袖

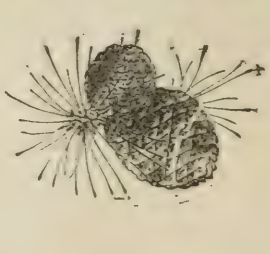
第

三人妻前編

錢の富士……身邊の樂……沈香亭……火上の氷……心配筋……天の邪鬼……濡事師……いつも綺麗……風の柳(上)……風の柳(下)……金と女……雪盡し……佩刀の鐺……煎餠屋の娘……砂糖餠……南無三寶……尺八の稽古……談義所の擧物……櫻の花……御恩がへし……心嬉しき顏……瑠璃の梁……夜半の嵐……火澤咲



參巻



第四巻



第五卷

多情多恨　前編　全　後編

安短歌貌林　月下の頭巾……夜中の代診

千箱の玉章

寒牡丹

雪中の狼藉……不幸の盃……背
の冷汗……掌上の人形……一萬
五千ルーブル……老の嘆願……門前の一瞥……驚天動地……結婚の刑……財産目錄……文中の秘密……
勤儉貞淑……恐怖と寒さと……村の記錄……兇險の相……窮命の淵……減水の量……御神の審判……令
聞嘖々……賢婦忠僕……特赦の天使……燈下の指環……配所の雪……（大團圓）花の都路



第六卷

金色夜叉前編　全　中編　全後編

續金色夜叉　續續金色夜叉

新續金色夜叉　烟霞療養

紅葉山人傳　紅葉山人著作年表追加



△大判紙數每冊九百餘頁　正價一冊金壹圓八十錢＝全部六册金拾圓＝郵税一冊拾五錢宛▽